長野原地区遺跡群

水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第2集

二〇一九年

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

長野原町埋蔵文化財調査報告　第36集

# 長野原地区遺跡群

水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第２集

町遺跡（１次・３次）

2019

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

長野原町埋蔵文化財調査報告　第 36 集

# 長野原地区遺跡群（ながのはらちくいせきぐん）

水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第２集

町遺跡（まちいせき）（１次・３次）

2019

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

# 序　文

長野原町は、群馬県の北西部に位置し、「八ッ場ダムの建設」に伴う生活再建事業の進行とともに、新しいまちづくりを進めています。

長野原町内には、縄文時代中期後半の拠点集落である長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡や天明３年の浅間山の大爆発により発生した泥流被災状況を伝える東宮遺跡・小林家屋敷跡に代表されるように、多数の貴重な遺跡の存在が知られています。

教育委員会では、文化財保護事業の一環として、町の貴重な文化遺産である遺跡を保護するとともに、失われていく遺跡の記録保存に努めています。

今回報告する長野原地区遺跡群は町道長野原向原線道路整備事業に伴い、記録保存を目的として実施されたものです。

本調査地点は江戸時代に長野原宿が形成され、天明泥流による甚大な被害を被ったことが知られていますが、その中心付近にあった旅籠大津屋と考えられる建物の一部とその裏庭を検出することができました。成果の詳細は本編に譲りますが、本書が町民の皆様をはじめより多くの方々に活用され、郷土長野原の歩んできた道のりを知る一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書発刊にあたり、多大なるご指導・ご協力をいただきました関係機関および関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成31年３月

長野原町教育委員会
教育長　市　村　隆　宏

# 例　言

1．本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字長野原に所在する町遺跡Ⅰ・Ⅲの発掘調査報告書である。

2．調査は町道長野原線道路整備事業に伴う事前調査として、長野原町の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。

3．発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は、水源地域対策特別措置法第12条による負担金並びに道路橋梁費補助金が充てられた。

4．調査は発掘調査を平成25年10月７日から平成28年12月14日迄、整理調査及び報告書作成を平成25年11月13日から平成31年３月28日迄の期間実施した。

5．本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。

6．本書は富田孝彦が編集・執筆した。各作業分担は以下の通りである。

　編集・執筆：富田　　遺構・遺物写真撮影：富田　　遺物実測・トレース：柿本・坂井

　図版および写真図版作成：向出・細川

7．本書中の遺跡名は調査が数次にわたっている場合はそれぞれを識別するために遺跡名の最後にローマ数字を表記してある。同一遺跡内の別地点と解釈していただきたい。

　例）町遺跡Ⅲ　（遺跡名）（第３次）

8．調査において以下の項目の一部を委託した。

　表土掘削・埋め戻し：東光建設株式会社

　測量・空中写真撮影：（株）測　研

　炭化材樹種同定：（株）パレオ・ラボ

9．本書における陶磁器は黒澤照弘氏（群馬県教育委員会）に御教示いただいた。

10．発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。（五十音順・敬称略）

　相京建史・麻生敏隆・飯森康広・石田　真・小野和之・小川卓也・川田　強・黒澤照弘・桜岡正信・佐々木由香・篠原正洋・鈴木徳雄・関　俊明・高橋政充・中沢　悟・藤巻幸男・洞口正史・松田　哲・向出博之・山口逸弘・吉田智哉

　群馬県教育委員会・（公益財団法人）群馬県埋蔵文化財調査事業団・（株）測研・（株）歴史の杜

11．調査組織は次の通りである。

　調査主体　長野原町教育委員会

　平成25年４月～平成26年３月

　調査組織　教育長　　黒岩　文夫

　　教育課長　　市村　　敏

　　社会教育GL 白石　光男

　　〃　副GL 富田　孝彦

　　調査参加者　佐藤久美子・柿本六美・坂井春栄・向出治恵

　平成26年４月～５月

　調査組織　教育長　　黒岩　文夫（～平成26年４月29日）

　　教育課長　　市村　　敏（平成26年４月30日～平成26年５月31日　教育長職務代行者兼務）

　　教育課補佐　白石　光男（平成26年４月１日から組織改編で教育課補佐）

　　文化財係長　富田　孝彦（平成26年４月１日から組織改編で文化財係長）

　　調査参加者　柿本六美・坂井春栄・向出治恵

平成26年６月～平成27年３月

| | | |
|---|---|---|
| 調査組織 | 教育課長 | 矢野今朝治（平成26年６月１日～平成27年３月31日　教育長職務代行者兼務） |
| | 教育課補佐 | 白石　光男 |
| | 文化財係長 | 富田　孝彦 |
| | 調査参加者 | 柿本六美・坂井春栄・向出治恵 |

平成27年４月～

| | | |
|---|---|---|
| 調査組織 | 教育長 | 市村　隆宏 |
| | 教育課長 | 矢野今朝治（～平成30年３月31日） |
| | | 佐藤　　忍（平成30年４月１日～） |
| | 教育課補佐 | 富田　孝彦（文化財係長兼務　平成30年４月１日～　文化財保護対策室長） |
| | 文化財係 | 市川　勇気（社会教育係兼務　～平成30年12月31日） |
| | | 細川　剛史（地域おこし協力隊　平成29年４月１日～） |
| | 調査参加者 | 柿本六美・坂井春栄・向出治恵 |

# 凡　例

1．本書で使用した地図は1：2500「長野原都市計画図」（長野原町 1994）、1：25000「長野原」（国土地理院 2009）である。

2．挿図・図版の方位は真北を示す。

3．挿図・図版の縮尺については下記のとおりであり、各挿図中に示してある。

遺構：礎石建物跡・平坦面…1/60　　囲炉裏・竈・炉跡…1/30　　畑跡…1/80
井戸跡・土坑跡・道跡…1/40　　溝跡…1/40・1/50　　遺物分布図…1/100・1/160

遺物：陶磁器・木製部材（杭・竹材）・木製品・石器（火打石・砥石）・金属製品…1/3
木製品（曲物の一部）・石臼・茶釜…1/4
建築部材・木製品（作業台）・その他の木製遺物（燃料材）…1/6
火打金…1/2　　銭貨・人形…1/1

なお、遺物出土状況図に示した遺物実測図の縮尺は、任意である。

4．遺構の略号については以下のとおりである。
S：礎石

5．挿図に示した遺物の詳細は、観察表に記してある。観察表における陶磁器の法量は左側が器高、中央が口径、右側が底径、その他は左側が長さ、中央が幅、右側が厚さを表すことを基本とする。

6．本書における遺構・遺物の計測値について、（　）は現存値、＜　＞は推定値を示す。

7．図版および遺物観察表中における遺物出土位置の略称は以下の通りである。
1号礎石建物跡：1建　　1号井戸跡：1井戸　　1号炉跡：1炉　　1～6号溝跡：1～6溝
サブトレンチ：サブトレ　　表面採集：表採
※なお、図版に記載した出土位置は、調査区・表採・試掘などの一括出土遺物をすべて「遺構外」とし、観察表にて、詳細な位置を記載した。

8．本文並びに土層注記で使用したテフラの略号は以下のとおりである。
As-A：浅間A軽石

9．土層や土器の色調に関しては「新版標準土色帖 2001 年版」（編・著　小山正忠・竹原秀雄、監修　農林水産省農林水産技術会議事務局、色票監修　財団法人日本色彩研究所）の色名を参考にした。土器の色調は観察表において、外面／内面の順で記し、同一の色調の場合は一つで表現した。

10. 挿図中のスクリーントーン・記号は以下のとおりである。
※土器の欠損部に関しては点描で表現しているが、陶磁器などは割れ口を描かないものもある。断面塗りつぶしは陶磁器を示している。

遺構平面図・断面図

焼土範囲　粘土範囲　軽石範囲　灰範囲　泥流範囲
ムシロ範囲　木材痕　土層確認位置

陶磁器　石製品　金属製品
木製品　竹製品　建築部材　その他の部材

遺物実測図

黒漆　赤漆　透漆　曲物タガ跡
火打石使用痕　炭化　釘穴　釘穴（釘残留）

# 目　次

序文
例言・凡例
目次

第１章　調査概要……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　試掘確認調査・立会調査……1
　第３節　調査の方法……5
第２章　遺跡の立地と環境……9
　第１節　遺跡の位置……9
　第２節　周辺の遺跡……9
　第３節　既往の調査……19
　第４節　基本土層……22
　第５節　大津屋について……23
第３章　検出された遺構と遺物……31
　第１節　遺　構……31
　　１）礎石建物跡……31
　　２）井戸跡……32
　　３）屋外炉跡……33
　　４）畑跡・平坦面……34
　　５）土坑跡……36
　　６）溝状遺構……36
　　７）道路状遺構……38
　第２節　遺　物……39
第４章　自然科学分析……43
　第１節　町遺跡出土木材の樹種同定……43
　第２節　町遺跡出土の大型植物遺体……54
　第３節　町遺跡の花粉分析……60
　第４節　町遺跡から得られた貯穀性昆虫について……62
　第５節　町遺跡出土の灰および編組製品の植物珪酸体……71
　第６節　町遺跡出土編組製品等の素材植物種の同定……75
《要　　約》……84
《遺物観察表》……87
《図　　版》
《報告書抄録》

## 挿 図 目 次


第1図　町道長野原向原線整備計画範囲と調査地点位置図（1/5,000）…… 2
第2図　トレンチ配置図（1/500）と土層図（1/20）… 4
第3図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/30,000）…… 10
第4図　遺跡周辺の河岸段丘分布図（1/30,000）…… 11
第5図　調査地点位置図（1/3,000）…… 20
第6図　基本土層図（1/20）…… 22
第7図　「長野原村壬申地券地引絵図」部分 …… 23
第8図　『群馬県商業便覧』（明治37年）…… 24
第9図　大津屋（明治30年代）…… 24
第10図　大津屋（昭和4年）…… 25
第11図　文化劇場（昭和31年）…… 25
第12図　文化ホール（昭和45年）…… 25
第13図　町遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（1）…… 51
第14図　町遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（2）…… 52
第15図　町遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（3）…… 53
第16図　町遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（4）…… 54
第17図　町遺跡1号建物から出土した大型植物遺体 … 58
第18図　町遺跡（1号建物）における花粉分布図 …… 62
第19図　町遺跡（1号建物6層）から産出した花粉化石 …… 63
第20図　町遺跡から産出した昆虫の顕微鏡写真（1）… 68
第21図　町遺跡から産出した昆虫の顕微鏡写真（2）… 69
第22図　町遺跡1号建物囲炉裏から検出された灰の植物珪酸体 …… 73
第23図　町遺跡1号建物出土編組製品の植物珪酸体 … 74
第24図　町遺跡出土の素材植物種の同定を行った編組製品 …… 77
第25図　町遺跡出土繊維製品の試料写真（1）…… 78
第26図　町遺跡出土繊維製品の試料写真（2）…… 79
第27図　町遺跡出土繊維製品の試料写真（3）…… 80
第28図　町遺跡出土繊維製品の顕微鏡写真（1）…… 81
第29図　町遺跡出土繊維製品の顕微鏡写真（2）…… 82
第30図　町遺跡出土繊維製品の顕微鏡写真（3）…… 83


## 挿 表 目 次


第1表　町道長野原向原線道路整備事業に伴う試掘確認調査及び立会調査一覧 …… 1
第2表　周辺の遺跡 …… 13
第3表　町遺跡調査一覧 …… 21
第4表　町遺跡畑・平坦面一覧 …… 35
第5表　町遺跡出土木製品および木材の樹種同定結果 …… 43
第6表　町遺跡出土木製品および木材の器種別樹種 …… 47
第7表　町遺跡出土木製品および木材の樹種同定結果一覧 …… 48
第8表　町遺跡出土の現地取り上げ試料の大型植物遺体 …… 55
第9表　町遺跡出土の水洗試料の大型植物遺体 …… 56
第10表　町遺跡出土モモ核の大きさ…… 59
第11表　産出花粉胞子一覧 …… 61
第12表　町遺跡1号建物出土の現地取り上げ試料の昆虫化石（1） …… 64
第13表　町遺跡1号建物出土の現地取り上げ試料の昆虫化石（2） …… 65
第14表　町遺跡1号建物囲炉裏出土の水洗試料の昆虫化石 …… 66
第15表　町遺跡1号建物出土の昆虫化石 …… 66
第16表　町遺跡1号建物囲炉裏の灰の植物珪酸体…… 72
第17表　町遺跡1号建物出土編組製品の植物珪酸体…… 72
第18表　結果一覧…… 76
第19表　町遺跡出土遺物観察表…… 87


## 図 版 目 次


図版1　遺構全体図
図版2　遺物分布図1（陶磁器類）
図版3　遺物分布図2（建築部材・木製部材）
図版4　遺物分布図3・4（木製品(部材)・金属製品）
図版5　遺物分布図5・6（石製品・植物等遺存体）
図版6　遺物分布図7（浅間A軽石）
図版7　1号礎石建物跡実測図
図版8　1号礎石建物跡囲炉裏実測図・遺物出土状況図

図版 9　1 号礎石建物跡竈実測図
図版 10　1 号礎石建物跡遺物出土状況図 1（陶磁器類）
図版 11　1 号礎石建物跡遺物出土状況図 2（建築部材）
図版 12　1 号礎石建物跡遺物出土状況図 3（木製容器類）
図版 13　1 号礎石建物跡遺物出土状況図 4（木製道具類）
図版 14　1 号礎石建物跡遺物出土状況図 5（木製品部材）
図版 15　1 号礎石建物跡遺物出土状況図 6（金属製品）
図版 16　1 号礎石建物跡遺物出土状況図 7（石製品）
図版 17　1 号井戸跡実測図
図版 18　1 号井戸跡遺物出土状況図
図版 19　1 号炉跡実測図 1
図版 20　1 号炉跡実測図 2
図版 21　1 号畑跡実測図
図版 22　2 号畑跡・1 号土坑跡実測図
図版 23　1 号溝跡・7 号溝跡実測図
図版 24　2 号溝跡・3 号溝跡実測図
図版 25　4 号溝跡実測図
図版 26　5 号溝跡実測図
図版 27　6 号溝跡実測図
図版 28　溝状遺構遺物出土状況図
図版 29　1 号道跡実測図
図版 30　陶磁器実測図
図版 31　建築部材実測図 1（囲炉裏枠）
図版 32　建築部材実測図 2（板材①）
図版 33　建築部材実測図 3（板材②）
図版 34　建築部材実測図 4（板材③）
図版 35　建築部材実測図 5（板材④）
図版 36　建築部材実測図 6（角材・柱材）
図版 37　木製部材実測図 1（杭①）
図版 38　木製部材実測図 2（杭②）
図版 39　木製部材実測図 3（竹材）
図版 40　木製品実測図 1（漆器・曲物①）
図版 41　木製品実測図 2（曲物②）
図版 42　木製品実測図 3（曲物③・臼①）
図版 43　木製品実測図 4（臼②・箱物①）
図版 44　木製品実測図 5（箱物②・桶①）
図版 45　木製品実測図 6（桶②）
図版 46　木製品実測図 7（道具類①）
図版 47　木製品実測図 8（道具類②）
図版 48　木製品実測図 9（道具類③・板材①）
図版 49　木製品実測図 10（板材②・角材・燃料材）
図版 50　金属製品実測図 1
図版 51　金属製品実測図 2
図版 52　石製品実測図
図版 53　試掘確認調査 1（向原遺跡Ⅲ）
　1．向原遺跡Ⅲ①地点（南西から）
　2．掘り込み検出状況（北東から）
　3．土層（南東から）
　4．②地点（北西から）
　5．作業風景（北西から）
図版 54　試掘確認調査 2（向原遺跡Ⅲ・長野原字向原）
　1．③地点（東から）
　2．2 トレ（南東から）
　3．長野原字向原（南東から）
　4．1 トレ（南東から）
　5．2 トレ（南東から）
図版 55　試掘確認調査 3（町遺跡）
　1．町遺跡 1 トレ（北から）
　2．1 トレ土層（東から）
　3．2 トレ（南東から）
　4．2 トレ土層（南から）
　5．調査前風景（北から）
図版 56　調査区 1
　1．第 1 次調査南側調査区全景（北から）
　2．第 1 次調査北側調査区全景（北から）
図版 57　調査区 2
　1．第 3 次調査調査区全景（南から）
　2．基本土層（南西から）
図版 58　1 号礎石建物跡 1
　1．1 号礎石建物跡第 1 次調査＜ザシキ＞完掘状況（南から）
　2．1 号礎石建物跡＜ザシキ＞遺物出土状況 1 面目①（西から）
図版 59　1 号礎石建物跡 2
　1．1 号礎石建物跡＜ザシキ＞遺物出土状況 1 面目②（南から）
　2．1 号礎石建物跡＜ザシキ＞遺物出土状況 2 面目（南から）
図版 60　1 号礎石建物跡 3
　1．1 号礎石建物跡＜ザシキ＞遺物出土状況 3 面目（南から）
　2．1 号礎石建物跡＜ザシキ＞遺物出土状況 4 面目（南から）
図版 61　1 号礎石建物跡 4
　1．1 号礎石建物跡第 3 次調査＜ダイドコロ＞（西から）

2．1号礎石建物跡＜ダイドコロ＞遺物出土状況（西から）

図版 62　1号礎石建物跡5

1．囲炉裏完掘状況（南西から）
2．囲炉裏遺物出土状況（南西から）
3．囲炉裏半截状況（南西から）
4．囲炉裏掘り方（南西から）
5．竈検出状況①（西から）
6．竈検出状況②（西から）
7．竈南側断ち割り状況①（東から）
8．竈南側断ち割り状況②（東から）

図版 63　1号礎石建物跡6

1．竈北側断ち割り状況①（東から）
2．竈北側断ち割り状況②（東から）
3．竈東西断ち割り状況（北から）
4．竈火床検出状況（北から）
5．竈掘り方（北から）
6．南側階段状テラス①（西から）
7．南側階段状テラス②（北東から）
8．南側階段状テラス土台検出状況（南東から）

図版 64　1号礎石建物跡7

1．遺物出土状況①＜瀬戸美濃系碗（図版30-1）＞
2．遺物出土状況②＜肥前染付碗（図版30-7）＞
3．遺物出土状況③＜獅子人形（図版30-20）＞
4．遺物出土状況④＜漆器蓋（図版40-83）＞
5．遺物出土状況⑤＜東・曲物（図版36-66・41-86・41-87）＞
6．遺物出土状況⑥＜臼（図版42-90）＞
7．遺物出土状況⑦＜臼（図版43-93）＞
8．遺物出土状況⑧＜桶底（図版44-101）＞

図版 65　1号礎石建物跡8

1．遺物出土状況⑨＜横櫛（図版46-106）＞
2．遺物出土状況⑩＜横櫛（図版46-107）＞
3．遺物出土状況⑪＜横櫛（図版46-108）＞
4．遺物出土状況⑫＜団扇（図版46-111）＞
5．遺物出土状況⑬＜タガ（図版39-82）＞
6．遺物出土状況⑭＜竹籠（図版48-121）＞
7．遺物出土状況⑮＜銭貨（図版51-151）＞
8．遺物出土状況⑯＜石臼（図版52-157）＞

図版 66　1号礎石建物跡9

1．遺物出土状況⑰＜砥石（図版52-158）＞
2．遺物出土状況⑱＜みの？№206＞
3．遺物出土状況⑲＜むしろ№93付近＞
4．遺物出土状況⑳＜布№298＞
5．遺物出土状況㉑＜縄№365＞
6．遺物出土状況㉒＜繊維№378＞
7．遺物出土状況㉓＜スギ葉№159の下＞

図版 67　1号礎石建物跡10・1号井戸跡1

1．遺物出土状況㉔＜クリ皮＞
2．遺物出土状況㉕＜昆虫№291の下＞
3．作業風景
4．事業団小野氏・関氏来跡
5．1号井戸（北東から）

図版 68　1号井戸跡2

1．1号井戸周辺（南から）
2．1号井戸検出状況（南から）
3．1号井戸石積状況（南から）
4．遺物出土状況①＜肥前染付皿（図版30-14）＞
5．遺物出土状況②＜メンパ（図版40-84）＞
6．遺物出土状況③＜櫛粉木（図版47-114）＞
7．遺物出土状況④＜角材（図版36-60）＞

図版 69　1号炉跡1

1．1号炉跡完掘状況①（南西から）
2．1号炉跡完掘状況②（南西から）
3．1号炉跡完掘状況③（北東から）
4．1号炉跡火床部①（北から）
5．1号炉跡火床部②（南東から）

図版 70　1号炉跡2

1．1号炉跡検出状況（南西から）
2．1号炉跡断ち割り状況（西から）
3．1号炉跡サブトレ南（東から）
4．1号炉跡サブトレ北①（西から）
5．1号炉跡サブトレ北②・西①（南西から）
6．1号炉跡サブトレ西②（東から）
7．1号炉跡サブトレ東（南から）
8．1号炉跡火床部セクション（西から）

図版 71　1号畑跡1

1．1-1号畑跡北側①・2号溝跡・6号溝跡（西から）
2．1-1号畑跡北側②（南から）
3．1-1号平坦面（南から）
4．木材痕検出状況（西から）

図版 72　1号畑跡2

1．1-1号畑跡南側（西から）

2．1-2 号畑跡（西から）

図版 73　2 号畑跡・1 号土坑跡

1．2-1 号畑跡①（西から）

2．2-1 号畑跡②（南から）

3．2-1 号平坦面（南から）

4．2-1 号平坦面検出状況（南から）

5．1 号土坑（西から）

図版 74　溝状遺構 1

1．1 号溝跡（西から）

2．2 号・3 号・6 号溝跡（西から）

図版 75　溝状遺構 2

1．4 号・5 号溝跡・1 号道跡（西から）

2．5 号溝跡・陸橋＜第 3 次調査＞（南西から）

図版 76　溝状遺構 3

1．5 号溝跡・陸橋（東から）

2．5 号溝跡北東隅（南から）

3．遺物出土状況①＜杭（図版 37-69）＞

4．遺物出土状況②＜桶底（図版 45-103）＞

5．遺物出土状況③＜火打石（図版 52-163・164）＞

6．遺物出土状況④＜布（№ 304-1）＞

7．遺物出土状況⑤＜草（№ 304-2）＞

8．遺物出土状況⑥＜モモ核（№ 283）＞

図版 77　溝状遺構 4・トレンチ・調査風景

1．7 号溝跡（南から）

2．第 1 次調査南側調査区トレンチ（北から）

3．堆積土層（西から）

4．測量風景（南東から）

5．作業風景（南から）

図版 78　出土遺物 1（陶磁器）

図版 79　出土遺物 2（建築部材 1＜囲炉裏枠＞）

図版 80　出土遺物 3（建築部材 2＜板材①＞）

図版 81　出土遺物 4（建築部材 3＜板材②＞）

図版 82　出土遺物 5（建築部材 4＜板材③＞）

図版 83　出土遺物 6（建築部材 5＜板材④＞）

図版 84　出土遺物 7（建築部材 6＜角材・柱材＞・木製部材 1＜杭①＞）

図版 85　出土遺物 8（木製部材 2＜杭②＞）

図版 86　出土遺物 9（木製部材 3＜竹材＞）

図版 87　出土遺物 10（木製品 1＜漆器・曲物①＞）

図版 88　出土遺物 11（木製品 2＜曲物②・臼①＞）

図版 89　出土遺物 12（木製品 3＜臼②・箱物①＞）

図版 90　出土遺物 13（木製品 4＜箱物②・桶①＞）

図版 91　出土遺物 14（木製品 5＜桶②＞）

図版 92　出土遺物 15（木製品 6＜道具類①＞）

図版 93　出土遺物 16（木製品 7＜道具類②＞）

図版 94　出土遺物 17（木製品 8＜道具類③＞・木製品部材 1＜板材①＞）

図版 95　出土遺物 18（木製品部材 2＜板材②＞・その他の木製遺物＜燃料材＞）

図版 96　出土遺物 19（金属製品 1）

図版 97　出土遺物 20（金属製品 2）

図版 98　出土遺物 21（石製品）

# 第１章　調査概要

## 第１節　調査に至る経緯

町道長野原向原線は、長野原町の中心市街地と群馬県企業局が分譲中の長野原向原産業団地及び八ッ場ダムに係る移転代替地を結ぶ道路である。本路線は、市街地と産業団地を直結させることにより、産業団地への民間企業の立地を促進させるとともに、進出企業の業績を向上させる効果が期待されている。また、八ッ場ダム建設に伴う代替地に整備しているため、代替地移転者の生活道路としての機能を有している。

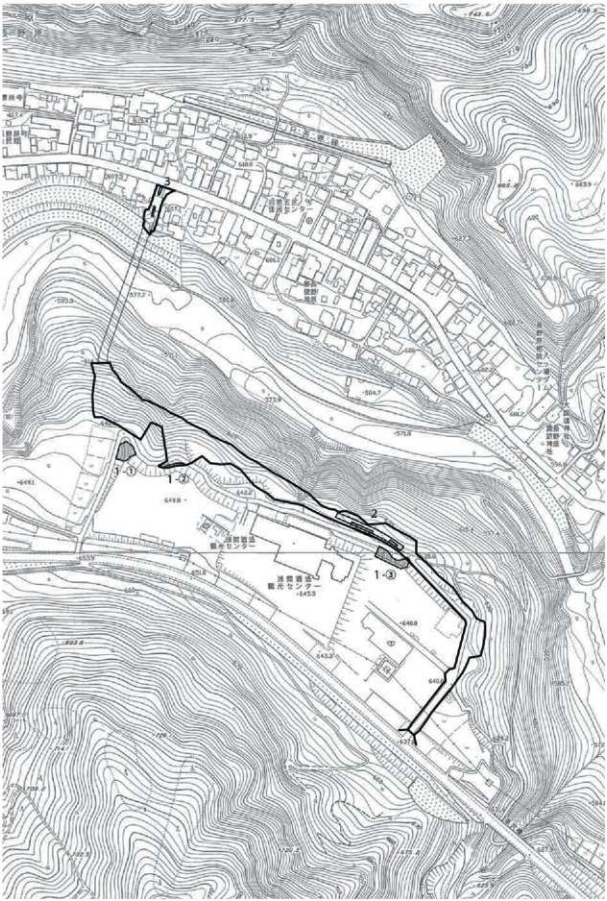
平成 24 年 12 月初旬に長野原町役場建設課より町道長野原向原線整備事業の計画が示され、埋蔵文化財の取り扱いについて、長野原町教育委員会教育課に照会があった。対象地は周知の包蔵地の範囲外ではあるが、天明３年（1783）に浅間山の大噴火に起因して発生した泥流の到達範囲に含まれていることから試掘調査の必要がある旨を説明し、調査実施の合意を得た。文化財保護法第 94 条第１項の規定により、同年９月９日・10 月４日付けで関係書類（「開発に伴う文化財調査願書」・「発掘届」）が提出された。同年９月 24 日に教育委員会文化財担当の立会いのもと、対象地内に２本の試掘坑（トレンチ）を設定し、遺構の有無および土層の堆積状況の事前調査を行った。その結果は、①１トレで天明泥流に埋没した畑跡、２トレで同建物跡が検出された、②２トレは泥流に水分が多く含まれており十分な精査が難しい状況だったが、軽石が見当たらず、木製遺物や陶磁器片が出土したことから屋内と判断した、③泥流は１トレで 106cm厚、２トレで 154cm厚で確認され、いずれも３層に分層できた、④街道沿いに屋敷跡があり、川側の裏庭には畑があったという景観が想定される、の４点に要約でき、橋台および本線予定地の発掘調査が必要であると判断された。この時点で、東側に隣接する筆も事業地に予定されており、教育委員会直営で、第１次調査を平成 25 年 10 月７日から、第３次調査を平成 28 年 11 月 14 日から実施する運びとなった。

## 第２節　試掘確認調査・立会調査

町道長野原向原線関係の試掘確認調査及び立会調査は第１表の通りである。上述したように、本事業に伴い、平成19年度～25年度までの間に３地点で実施された。そのうち１地点は確認調査の結果、本発掘調査を実施し、残りの２地点については、立会調査で工事施工に支障ないと判断され調査不要となった。

第１表　町道長野原向原線道路整備事業に伴う試掘確認調査及び立会調査一覧

| No | 年　度 | 遺　跡　名 | 所　在　地 | 原　因<br>種　類 | 調査<br>面積 | 調 査 期 間 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 平成19・20<br>年度 | 向原遺跡Ⅲ | 長野原字向原1392-<br>18外２筆 | 町道拡幅<br>立会調査 | 352<br>㎡ | H20年２月26・<br>28日・４月11日 | 遺構・遺物な<br>し。 |
| 2 | 平成20年度 | 長野原字向<br>原 | 長野原字向原1392-<br>２・-3 | 町道敷設<br>立会調査 | 60㎡ | H20年11月13日 | 遺構・遺物な<br>し。 |
| 3 | 平成25年度 | 町遺跡 | 長野原字町148-2<br>外11筆 | 橋台設置・道路敷設<br>確認調査 | 32㎡ | H25年９月24日 | 天明畑１・建<br>物跡１。<br>発 掘 届（94-<br>1） |




第１図　町道長野原向原線整備計画範囲と調査地点位置図（1/5,000）

## 1．向原遺跡Ⅲ（第１図／第１表／ＰＬ１・２）

(1) 所在地　　長野原字向原 1392-18 外２筆
(2) 開発事業名　町道長野原向原線整備事業
(3) 調査期間　　平成 20 年２月 26・28 日、４月 11 日
(4) 開発総面積　626.67㎡
(5) 調査面積　　352㎡
(6) 調査概要
・町道拡幅予定３箇所の削平工事に立会い、土層の堆積状況と遺構の有無を確認する。
・写真等の記録をとり、調査終了。
(7) 調査所見
町道拡幅予定箇所①～③地点の削平工事に立会い、土層の堆積状況と遺構の有無を確認した。その結果、対象地には顕著な遺構は検出されなかったので、文化財保護的には町道拡幅工事に支障はないと判断した。①・②地点とも地山の関東ローム層が確認されたが、遺構・遺物は確認されなかった。

## 2．長野原字向原（第１図／第１表／ＰＬ１・２）

(1) 所在地　　長野原字向原 1392-2,-3
(2) 開発事業名　町道長野原向原線整備事業
(3) 調査期間　　平成 20 年 11 月 13 日
(4) 開発総面積　450㎡
(5) 調査面積　　60㎡
(6) 調査概要
・町道敷設予定箇所に２本のトレンチを設定し、土層の堆積状況と遺構の有無を確認する。
・写真等の記録をとり、調査終了。
(7) 調査所見
町道敷設予定箇所に２本のトレンチを設定し、土層の堆積状況と遺構の有無を確認した。その結果、対象地には顕著な遺構は検出されなかったので、文化財保護的には町道拡幅工事に支障はないと判断した。１・２トレともに地山の関東ローム層が現地表下 1.6 ～ 1.7 m で確認されたが、遺構・遺物は確認されなかった。

## 3．町遺跡（第１・２図／第１表／ＰＬ１・２）

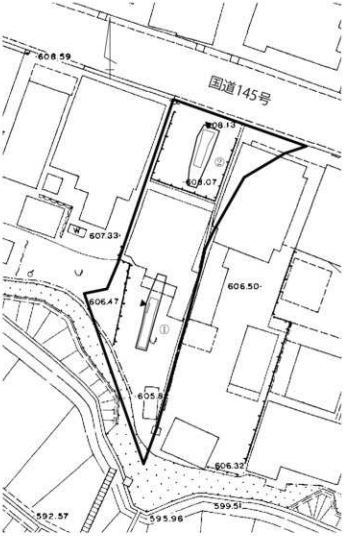
(1) 所在地　　長野原字町 148-2 外 11 筆
(2) 開発事業名　町道長野原向原線整備事業
(3) 調査期間　　平成 25 年９月 24 日
(4) 開発総面積　1,147.7㎡
(5) 調査面積　　32㎡
(6) 調査概要
・橋台・町道敷設予定箇所に２本のトレンチを設定し、土層の堆積状況と遺構の有無を確認する。
・土層記録・写真撮影をして、埋め戻して終了する。

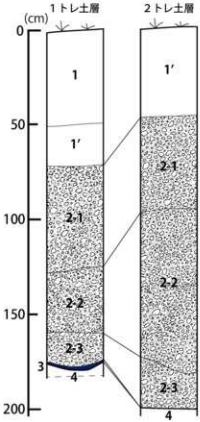
(7) 調査所見

町道長野原向原線橋台・本線予定地内に２本のトレンチを設定し、土層の堆積状況と遺構の有無を確認した。その結果、１トレンチで天明泥流に埋没した畑跡、２トレンチで同屋敷跡が検出された。従って、工事施工前に予定地内の本調査が必要と判断された。

堆積土層は１・1′層：表土・整地土・砕石（現地表から 47㎝～ 72㎝厚）、2-1 ～ 2-3 層：天明泥流（106㎝厚）、３層：軽石（３～４㎝厚）、４層：旧表土であった。江戸時代の天明面は確認されたが、それ以前の遺構の存在は不明である。１トレではサブトレにより畝サクが確認され、畑跡だったことが判明した。２トレは当時の街道沿いで屋敷があったと推定されたが、泥流に水分が多く含まれており充分な精査が難しい状況であった。泥流を除去していくと、建築部材と考えられる木材片が出土し、軽石が検出されていないことから判断して屋内である可能性が高いと考えられた。また１・２トレともに泥流が３層に大きく分類することができることから少なくとも３回以上に分けて泥流が到達したことが推測された。調査地点には旧大津屋があったとされることから、街道に面した屋敷跡とその裏庭の畑という景観が想定された。

なお対象地は周知の包蔵地にはなっていなかったため、「町遺跡（№ 219）」の範囲拡張の措置を講じた。




1．表土
1′.整地土・砕石
2-1.明茶褐色砂質土（小礫混）
2-2.茶褐色砂質土（小～中礫混）
2-3.暗茶褐色砂質土（中～大礫混）
3．軽石
4．暗褐色土（旧表土）

第２図　トレンチ配置図（1/500）・土層図（1/20）

## 第３節　調査の方法

### （1）発掘調査

１．表土除去

表土除去は重機（バックフォー）、排土運搬はクローラーを使用して行なった。調査地は市街地で調査区東西に住宅が隣接しているため、排土置き場に余裕がなかった第１次調査は調査区内に表土・排土を置き、反転して調査を行なった。試掘調査で確認された土層を参考に、砕石・整地盛土、泥流の順に除去していき、天明面の直上まで掘削を行なった。バケットの爪に鉄板を装着し、遺構を傷つけないように配慮した。

２．遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に行なった。確認面上面の泥流を人力で削り、軽石の有無を確認して平面形を確定していった。

３．遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した後で、適宜土層観察ベルトを設定して行なった。礎石建物跡は調査区が狭かったため、調査区壁で堆積土層を確認しながら掘り下げた。付帯施設の囲炉裏や竈、屋外炉跡は十字ベルトを設定し、溝状遺構は走行状況によって適宜ベルトを設定した。

遺物の取り上げについては、遺構に伴うと判断したもの及び遺存状態の良いものは出土状況図またはドット図を作成し、標高を計測して取り上げた。その他の遺物は、出土層位に留意して遺構毎に取り上げた。

４．遺構実測図の作成および遺構の写真撮影

遺構実測図は、光波測距儀を用いて全体図、土層堆積状況図、遺物出土位置図、完掘状況遺構平面図を作成し、必要に応じてエレベーション図の作成も行った。全体図を１/100、建物跡の囲炉裏・竈、屋外炉跡、個別の遺物出土位置図を１/10、その他の図面を１/20 で図化した。

遺構の記録写真は、35㎜小型一眼レフカメラとデジタルカメラを併用して撮影した。モノクローム・カラーリバーサルの２種類のフィルムを使用し、両者同一カットを３枚１単位で露出を変えて撮影した。

### （2）自然科学分析

遺跡及び確認された遺構の性格を詳細に把握するため、発掘調査の成果に基づいて以下の項目で自然科学分析を実施した。

１．樹種同定（出土木製遺物の樹種、木製品あるいは建築部材）

通常台地上では残存しない生の材が火山灰により良好に残存しており、かつ現地性が高いため、建築部材の樹種による使い分けなどを議論することが可能な稀な遺跡である。そのため器種が明確な木製品について、ある程度の量悉皆的に樹種同定を実施した。

２．大型植物遺体分析（発掘中に取り上げられた葉や種実などの同定：食用あるいは周辺での栽培状況や植生の分析）

通常台地上では残存しない生の種実や葉が火山灰により良好に残存しているため実施した。また土壌中から種実を検出し、栽培状況や周辺の植生を検討した。

3．昆虫遺体同定（発掘中に取り上げられた昆虫遺体の同定：周辺での栽培状況や植生の分析）
通常台地上では残存しない昆虫遺体が火山灰により良好に残存しているため実施した。

4．編組製品の素材植物同定（織物や縄などの素材植物種の同定）
通常台地上では残存しない織物や縄が火山灰により良好に残存しており、その素材植物を議論することが可能な稀な遺跡である。そのため、編組製品の素材植物同定を実施した。

5．編組製品のクリーニング及び観察（織物や縄などの技法観察）
織物や縄などを適正な方法でクリーニングし、技法や素材植物の観察を実施した。遺存状態の良いもの5点は保存処理も実施した。

### （3）調査の経過

町道長野原向原線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務は、平成20年度から試掘確認調査及び立会調査が始まり、平成25・28年度に本調査が実施された。

1．発掘調査
第1次調査は、平成25年10月7日から同年11月12日にわたって実施された。排土置き場の関係で打って返しの調査となった。

10月 7日、南側調査区の表土掘削開始。約2分の1位まで。
10月 8日、表土掘削終了。硬化面確認。建物跡か。サブトレ設定。畑面検出。
10月 9日、硬化面サブトレ。水みちか。調査区南端付近でロームを多量に用いた遺構検出。被熱面2箇所確認。
10月11日、硬化面サブトレ。自然流木出土。被熱面をもつ遺構のサブトレセクション図作成。遺物取り上げ（№1～3）。断ち割り開始。
10月15日、硬化面サブトレ。自然堆積？。被熱面をもつ遺構の断ち割り途中。畑面精査途中。雨天のため午後中止。
10月16日、台風のため中止。現場水没。
10月17日、被熱面をもつ遺構の断ち割り。屋外炉跡であることが判明。畑面精査途中。平面図作成。全体清掃開始。
10月18日、屋外炉掘り下げ途中。全体清掃、全景撮影。
10月21日、屋外炉セクション図・写真、完掘。平断面図補足。サブトレ出土流木取り上げ。
10月22日、屋外炉平断面補足。江戸時代以前の遺構の有無を確認するためトレンチ1本設定。掘り込みを検出するも遺構とするには至らず。反転開始。
10月23日、北側調査区のほうが排土が多いため、南側調査区の排土運び出し。
10月24日、北側調査区表土掘削開始。建物跡検出。部材多量に出土。
10月25日、表土掘削途中。台風のため午後中止。
10月28日、表土掘削途中。建物跡精査。
10月29日、表土掘削終了。建物跡精査。板材・筵の他、陶磁器・漆器・鉄製品出土。
10月30日、建物跡精査、銅銭出土。遺物出土状況図1面目作成。
10月31日、平面図追加、エレベーション図作成。写真清掃開始。
11月 1日、遺物出土状況写真撮影、遺物取り上げ（№6～30）。
11月 2日、遺物出土状況2面目写真清掃、写真撮影。建物南側泥流除去。溝状遺構・道検出。

11月 5日、遺物出土状況2面目平断面図追加。遺物取り上げ（№31 ～ 118）。3面目写真清掃。建物南側で畑跡検出。
11月 6日、遺物出土状況3面目写真撮影、平断面図追加。遺物取り上げ（№119 ～ 159）。
11月 7日、遺物出土状況4面目写真撮影、平断面図追加。遺物取り上げ（№160 ～ 218）。櫛・昆虫出土。
11月 8日、遺物出土状況4面目写真撮影、平断面図追加。遺物取り上げ（№219 ～ 251）。全体清掃・全景撮影。囲炉裏半截途中。
11月11日、遺物取り上げ（№252 ～ 281）。溝状遺構・道・畑平断面図作成。囲炉裏セクション図・写真。礎石の配列図作成。
11月12日、囲炉裏掘り方平断面図追加、完掘写真。撤収。埋め戻し。

第3次調査は、平成28年11月14日から同年12月14日にわたって実施された。
11月14日、表土掘削開始。調査区周辺の施工業者と調整。調査区東半分を先に掘削。21日に西側へ拡張。
11月15日、土層確認。
11月16日、天明面精査。
11月17日、天明面精査。調査区東壁沿いに溝状遺構検出。軽石直上遺物精査、礫洗浄。
11月18日、全体清掃・写真撮影。写真測量。遺物取り上げ（№282 ～ 287）。遺構断ち割り。
11月21日、井戸半截開始。溝状遺構掘り下げ。調査区拡張開始。
11月22日、調査区拡張終了。泥流除去。
11月24日、降雪、雪除去。建物内の泥流除去。
11月25日、建物内の泥流除去。遺物精査、遺物出土状況図・写真。5号溝周辺精査。
11月28日、雨により調査区水没・壁崩落。復旧。遺物取り上げ（№288 ～ 311）。遺物出土状況図・写真。5号溝周辺掘り下げ。
11月29日、建物内掘り下げ。遺物取り上げ(№312 ～ 321)。遺物出土状況図・写真。5号溝周辺掘り下げ。建物東側に屋根付きの井戸施設があったことが判明。
11月30日、建物内遺物精査、井戸周辺精査、写真。5号溝掘り下げ、遺物出土状況図・写真。筵か。
12月 1日、遺物取り上げ(№322 ～ 339)。遺物出土状況図・写真。5号溝周辺・井戸掘り下げ。平坦面検出。
12月 2日、建物内精査、竈跡検出。半截。遺物出土状況図・写真。5号溝周辺掘り下げ、作業場か。井戸掘り下げ、未だ泥流。
12月 5日、竈跡断面図・写真。5号溝断面図・写真。ベルト除去。井戸掘り下げ。平坦面平断面図作成。遺物取り上げ（№340 ～ 357）。
12月 6日、土嚢積み、石除去。調査区南側精査。軽石混じるが畝サクの痕跡なし。井戸掘り下げ。
12月 7日、石洗浄、全体清掃、全景撮影。写真測量。遺物取り上げ（№358 ～ 366）。
12月 8日、竈跡断ち割り。井戸上端泥流除去。遺物取り上げ（№367 ～ 377）。
12月 9日、竈跡掘り方測量補足。井戸完掘写真・平断面図作成。遺物取り上げ（№378 ～ 379）。
12月12日、竈跡掘り方完掘写真。土嚢崩し。撤収。道具の手入れ。午後から埋め戻し。
12月13日、午前埋め戻し、午後雨天中止。
12月14日、埋め戻し終了。

2．整理調査・報告書作成

整理調査・報告書作成は、平成25年11月25日から平成30年3月28日にわたって実施された。発掘調査によって得られた遺物は第1次調査がテンパコで35箱（作物遺存体含む）、第3次調査が15箱、現場で作成した図面は第1次調査が37枚、第3次調査が16枚、合計53枚であった。整理調査は担当の他に作業員4名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。

遺物洗浄・注記作業・接合作業は第１次調査が平成 25 年 11 月 13 日から同年 12 月 26 日まで、第３次調査が平成 28 年 12 月 13 日から平成 29 年３月 30 日まで実施した。第１次・第３次調査で同一建物跡の遺物であったため、同一個体の製品がある可能性が高いため、観察も含めて時間をかけて行なった。また出土遺物のほとんどが木製遺物であったため、表面の汚れを除去した後に、現状での写真撮影をした。その後水漬けにして、内部に入り込んだ汚れを除去した。水は１～３ヶ月毎に取り換えた。

遺物の実測・トレースは平成 29 年４月３日から平成 30 年３月 28 日まで本事業関連出土遺物をまとめて実施した。

遺構図版・写真図版のデジタル基礎編集は平成 29 年４月３日～平成 30 年３月 28 日までに事業の合間に実施した。

平成 30 年４月から報告書編集作業を開始し、遺構図版・写真図版のデジタル編集を平成 31 年１月下旬まで、併せて執筆作業を平成 30 年 12 月上旬～平成 31 年２月下旬にかけて行い、２月下旬～３月下旬に編集の最終調整・校正、印刷製本を実施し、併せて保管用に資料・遺物の整理をしてすべての作業を完結した。

# 第２章　遺跡の立地と環境

## 第１節　遺跡の位置

町遺跡が所在する長野原町は群馬県北西部にある吾妻郡域の南西隅に位置し、東は吾妻郡東吾妻町（旧吾妻町）・高崎市倉渕町（旧倉渕村）、北は吾妻郡草津町・同郡中之条町（旧六合村）、西は吾妻郡嬬恋村と接し、南は浅間高原を経て長野県北佐久郡軽井沢町と県境をなす。本町は高間・白根の両山系と大洞山系とに挟まれた吾妻川流域地帯の北部と、高原地帯の南部とに大別され、高原地帯を除きほとんどが河川・渓沢に向かう山岳傾斜地帯である。

町の北西には草津白根山（標高 2,170m）、南西には浅間山（標高 2,568m）が位置する。町域も北部は高間山（標高 1,341.7m）や王城山（標高 1,123.2m）、吾妻川より南に丸岩（標高 1,124m）や菅峰（標高 1,473.5m）など、南部は南東から南にかけて浅間隠山（標高 1,756.7m）、鷹繋山（標高 1,431.4m）、鼻曲山（標高 1,655m）など、周囲を 1,000m ～ 1,800m 級の険しい山々で囲まれている。

長野原町の河川は長野県境の鳥居峠付近（標高 1,362m）を水源とする吾妻川が東流し、それに万座川や熊川・白砂川など主に両岸の山地から発する諸支流が注ぎ、渋川市街地付近で利根川右岸に合流する。町域は吾妻川の中流にあたるが、かつて酸性を帯びた水質をもつ支流の流入により、中流より下流にかけて魚類の生息に適さない状態であった。しかし石灰投入による中和処理が開始されて以来、水質の改善が行われている。

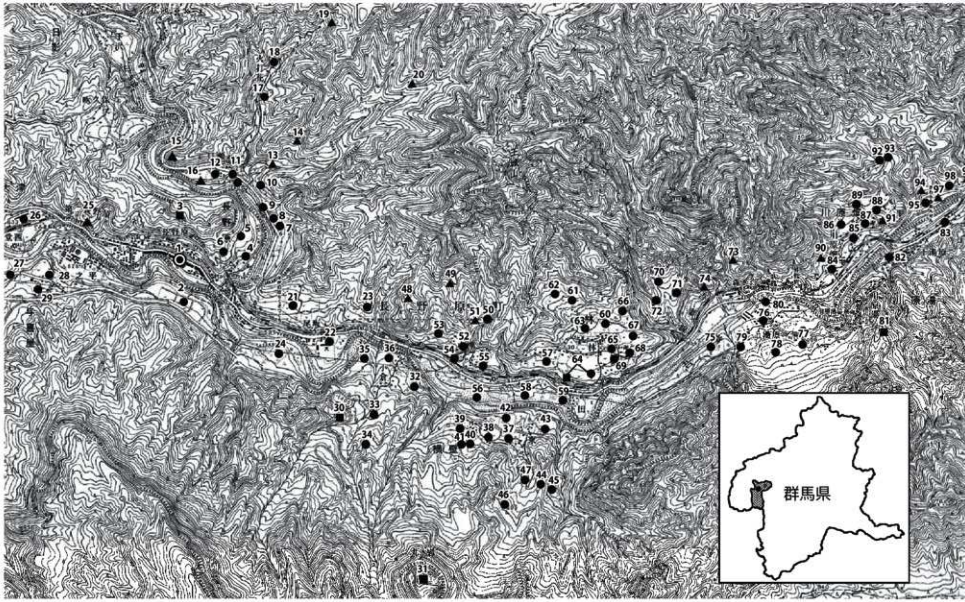
吾妻川両岸は大字長野原付近でやや幅が広く、河岸段丘が発達する（第４図）。この段丘面は最上位・上位・中位・下位の４段階で形成されている。これら段丘面とその上位の丘陵上に縄文時代～平安時代にかけての遺跡が多く見つかっており、現在でも住宅地や田畑として利用されている。これらの段丘は約 21,000 年前に浅間山から噴出した応桑泥流堆積物が侵食されて形成されており、その上を覆っている関東ローム層中には約 11,000 年前に噴出した浅間 - 草津黄色軽石層（As-YPk）が堆積しているのが認められる。現在の吾妻川からの比高差は最上位段丘面で約 80 ～ 90m、上位段丘で約 60 ～ 65m、中位段丘で 30m 前後、下位段丘で約 10 ～ 15m を測る。大字川原湯から東では川幅が狭まり峡谷をなし、吾妻渓谷を形成している。

長野原町が含まれる浅間山周辺地域は、気候的には太平洋側の気候区に入るが、高地であることから寒冷な中央高地型の気候がみられる。しかし吾妻川沿いの標高 600m の谷底から、最高点の浅間隠山の 1,756m までと起伏に富んでおり、地理的条件も変化が大きいため、地区ごとに気候・気象に変化が見られる。降水量も地形により変化するが、年間降水量は関東平野各地域とほぼ等しい。降水量の年変化は日本海側と異なり冬季に少なく夏季に多い。

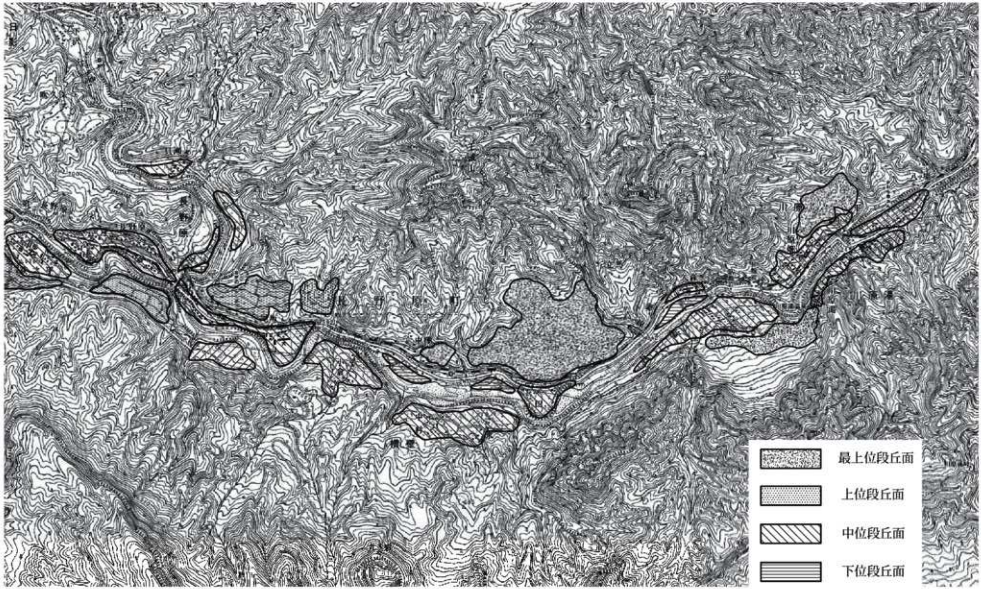
今回報告する町遺跡は町域北部の吾妻川流域帯にあり、吾妻川左岸の中位段丘上に立地している。調査地点の標高は 605 m位である。

## 第２節　周辺の遺跡

長野原町における遺跡の調査は、昭和 29 年に行われた勘場木遺跡の調査を始めとして、昭和 38・47・48 年には群馬県による分布調査が行われ、昭和 53 年には石畑Ⅰ岩陰遺跡が発掘調査された。本町における遺跡分布状況は昭和 48 年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和 62 年度から３ヶ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199 の遺跡包蔵地を確認した [1]。また平成６年度から八ツ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が継続して調査を実施しており、新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成 14 年３月と平成 16 年４月に遺跡地図の改訂を実施した。その後も小さな変更を繰り返しているが、平成 31 年２月現在




第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡（S＝1/30,000）




第４図　遺跡周辺の河岸段丘分布図（S＝1/30,000）

で225の包蔵地（指定史跡等を含む）が把握されている[2]。

本遺跡群の位置する吾妻川流域地帯の東部地区はダム関連事業と直結している地域で、先述した（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（平成24年4月に公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に名称変更）が常時数カ所の発掘調査を継続して実施してきた地域である。町教育委員会でも本地域でこれまで生活再建事業として水源地域対策特別措置法（以下、水特法）および利根川・荒川水源地域対策基金（以下、基金）関連事業を実施してきたが、ダム本体の完成間近であり、計画通りいけば次年度で最終年度となる[3]。

本遺跡群を含む吾妻流域地帯東部地区には多くの遺跡が分布している（第3図・第2表）。遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占地しているが近年丘陵上にも遺跡が発見されはじめ、これまで空白だった時期を埋める遺構も検出されている。ここでは調査を実施した遺跡を中心に当該地域の遺跡を概観したい。なお、長野原町の現時点での歴史観をなるべく記載する立場から、筆者が実見したり、調査担当者に聞き取った未報告の情報を多分に含んでいる。従って本報告時には多少異なる見解になるかもしれないのでご注意願いたい。

## （1）旧石器時代

これまでのところ長野原町では旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は前述した応桑泥流やAs-YPkが厚く堆積しており、それより下位の発掘調査が困難な状況がある。遺構外の遺物としては柳沢城跡（30）で細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが1点出土している。吾妻郡内においても旧石器時代遺跡は高山村に所在する新田西沢遺跡[4]でしか確認されていないというのが現状である。

このことは長野県側の浅間山麓でも同様で、厚く堆積した火山噴出物により旧石器時代面の発掘調査は困難である。長野県側の浅間山麓付近で発掘調査されている旧石器時代遺跡は、いずれも千曲川を挟み浅間山麓の対岸側で確認されている。

## （2）縄文時代

縄文時代になると遺跡数も膨大となる。吾妻川及びその支流沿岸の下位段丘面は低調だが主として中・上・最上位河岸段丘および丘陵部に集落が展開する。

### ①草創期～早期

現在のところ、長野原町で人々の生活が確認されているのは草創期末～早期初頭からである。該期の遺跡として石畑Ⅰ岩陰（96）がある。昭和53年に群馬県教育委員会により一部調査され、中期を除く草創期～晩期の土器片・獣骨・人骨などが出土している。特に草創期～早期の土器片には表裏縄文・撚糸文・押型文が認められる。平成26年度から國學院大学により学術調査が実施されている居家以岩陰群（13）でも草創期～晩期の土器片・石器・獣骨・人骨が出土している。平成28～30年度の調査では岩陰部の灰層中から遺存状態の良い早期中葉の埋葬人骨が20体確認されており、その数は今後も増えるだろう[5]。また横壁勝沼Ⅰ遺跡（43）では草創期の槍形尖頭器が表採されている。近年、丘陵上での調査機会も増え、楡木Ⅱ遺跡（53）、立馬Ⅰ遺跡（70）、立馬Ⅲ遺跡（72）で早期の集落が検出されている。楡木Ⅱ遺跡では早期前半撚糸文期の住居跡が31軒検出され、遺構外で表裏縄文・押型文・沈線文・条痕文土器片も出土している。該期の住居跡検出数では県はもとより全国的にも有数である。また立馬Ⅰ遺跡では撚糸文期の住居跡の他、沈線文（田戸下層式）期の住居跡も検出され、遺構外では押型文・条痕文をはじめ晩期までの土器片が連綿と出土している。立馬Ⅲ遺跡では子母口式や稲荷台式、沈線文土器などの住居跡が検出されている。さらに同時期の遺物は、調査事例の多い東部地区に偏っており、三平Ⅰ遺跡（88）、三平Ⅱ遺跡（89）、花畑遺跡（66）、中棚Ⅰ遺跡（55）、幸神遺跡（23）、横壁中村遺跡（42）、山根Ⅲ遺跡（39）、長野原一本松遺跡（21）、西部地区では坪井遺跡[6]で確認されているのみである。それまでの岩陰での生活から早期前半撚糸文期になると丘陵上のオープンサイトでの集落に移行していくようである。また石畑Ⅰ岩陰に代表される岩陰遺跡は丘陵部の自然に迫り出した岩場

第２表　周辺の遺跡

| No | 遺跡名 | 町No. | 種別 | 時代 | 概要 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 文献 2,32,135,161,162 |
| 1 | 町遺跡 | 219 | その他 | 近世 | 本報告。 | |
| 2 | 向原遺跡 | 75 | 集落跡 | 縄文・弥生・平安 | 平成５・19・20 年度調査（町）縄文後期住居・中期後半埋甕、弥生中期土坑、平安住居・陥し穴等を検出。 | 文献 2,6,9,19,20,41,47,68 |
| 3 | 長野原城跡 | 85 | 城館跡 | 中世・近世 | 吾妻川左岸、町の市街地北側の尾根上に立地。土塁・堀切・物見台などが遺存している。長野原合戦の舞台。平成 24 年度調査（町）、平成 23 年度調査（事）天明畑・平坦面を検出。 | 文献 2,28,37,38,40,43,44,61,133,160 |
| 4 | 嶋木Ⅰ遺跡 | 72 | 集落跡その他 | 平安・近世・近代 | 平成 16・22・24 ～ 26 年度調査（町）天明畑・平坦面、旧太子線グラター橋橋台石積を検出。 | 文献 2,16,23,28,29,32,59 |
| 5 | 嶋木Ⅱ遺跡 | 73 | 散布地 | 縄文・平安 | 黒曜石・砥石採集。平成 26 年度調査（町）。 | 文献 2,32 |
| 6 | 嶋木Ⅲ遺跡 | 74 | 散布地 | 縄文 | 石鏃・石錐採集。 | 文献 2 |
| 7 | 東貝瀬Ⅰ遺跡 | 64 | 散布地 | 縄文 | | 文献 2 |
| 8 | 東貝瀬Ⅱ遺跡 | 65 | 散布地 | 縄文 | | 文献 2 |
| 9 | 東貝瀬Ⅲ遺跡 | 66 | 散布地 | 縄文 | チャート片採集。平成 24 ～ 26 年度調査（町）天明畑・平坦面を検出。 | 文献 2,28,29,32,59 |
| 10 | 貝瀬Ⅰ遺跡 | 67 | 散布地 | 縄文・平安 | 石斧採集。 | 文献 2 |
| 11 | 貝瀬Ⅱ遺跡 | 68 | 散布地 | 縄文 | | 文献 2 |
| 12 | 貝瀬Ⅲ遺跡 | 69 | 散布地 | 縄文・平安 | | 文献 2 |
| 13 | 居家以岩陰群 | 80 | その他 | 縄文・弥生・平安 | 岩陰６ヵ所にわたる。平成 26 ～学術調査（国學院大學）縄文早期の埋葬人骨 20 体、土坑を検出。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・陶磁器・獣骨等出土。 | 文献 2,53,62 |
| 14 | ガン沢岩陰 | 79 | その他 | 不明 | | 文献 2 |
| 15 | 池原岩陰群 | 81 | その他 | 縄文・弥生 | 岩陰４ヵ所にわたる。 | 文献 2 |
| 16 | 貝瀬岩陰群 | 82 | その他 | 不明 | 岩陰２ヵ所にわたる。 | 文献 2 |
| 17 | 火打花Ⅰ遺跡 | 70 | 散布地 | 縄文 | | 文献 2 |
| 18 | 火打花Ⅱ遺跡 | 71 | 散布地 | | 石斧出土。 | 文献 2 |
| 19 | 仙下岩陰 | 76 | その他 | 不明 | | 文献 2 |
| 20 | 駒倉岩陰 | 78 | その他 | 不明 | | 文献 2 |
| 21 | 長野原一本松遺跡 | 63 | 集落跡 | 縄文・弥生・古墳・平安・中世・近世 | 平成 22 年度調査（町）、平成６～ 20 年度調査（事）縄文中期後半～後期を中心とする拠点集落跡。平安住居、中世掘立柱建物等多数検出。 | 文献 1,2,22,37,55,67,68,76,80,81,87,88,92,95,109,112,116,119,135,143~156<br>旧一本松遺跡 |
| 22 | 尾坂遺跡 | 201 | その他 | 縄文・弥生・平安・近世 | 平成 23・25 年度調査（町）、平成６・７・11・18 ～ 23・25 ～ 30 年度調査（事）天明泥流で埋没した民家と麻畑、溝等を検出。畑下から縄文中期後半住居・後期土坑、弥生前期末再葬墓・土坑、平安住居、中世掘立柱建物等、近代田太子線長野原駅と考えられる建物跡を検出。 | 文献 25,29,60,76,96,128,138,144,155~160,162,~166 |
| 23 | 幸神遺跡 | 62 | 集落跡その他 | 縄文・平安・近世 | 平成 21 年度調査（町）、平成８・９・14・17 年度調査（事）縄文中期中葉住居・土坑、平安陥し穴、古代の可能性のある畑跡を検出。 | 文献 2,22,76,110,145,151,153,154 |
| 24 | 久々戸遺跡 | 200 | その他 | 縄文・弥生・近世 | 平成 19 年度調査（町）、平成９～ 12・14・15・27・28 年度調査（事）天明泥流で埋没した畑跡・小屋跡、弥生土坑、縄文中期末敷石住居を検出。 | 文献 47,79,83,94,97,98,140,146,149,151,152,164,165 |
| 25 | 遠西岩陰群 | 83 | その他 | 不明 | 岩陰２ヵ所にわたる。 | 文献 2 |
| 26 | 小林家屋敷跡 | 211 | 屋敷跡 | 近世 | 平成 13・14 年度調査（町）天明泥流に埋没した吾妻の分限者小林助右衛門の屋敷跡。石垣１基・土蔵跡１棟・礎石建物跡２棟を検出。 | 文献 1,2,11 ～ 13,49,57,59,60,61,66,71,77 |
| 27 | 旧新井村跡 | 143 | 村落跡 | 近世 | 昭和 55 年度調査（町）天明泥流に埋没した村落。屋敷跡や用水池などを検出。南側台地上に墓地が残る。 | 文献 2,44,45,49,57,60,91 |
| 28 | 長畝Ⅰ遺跡 | 126 | 散布地 | 縄文・平安 | 中期、平成 15 年度調査（町）平安住居跡・土坑を検出。 | 文献 2,14 |
| 29 | 長畝Ⅱ遺跡 | 127 | 集落跡 | 縄文・平安 | 石斧採集。平成２・21・27 年度調査（町）前期住居跡・中期後半住居跡等、平安住居跡を検出。 | 文献 2,4,22,33,47 |
| 30 | 柳沢城跡 | 35 | 城館跡 | 旧石器・縄文・中世 | 平成４・５年度調査（町）中世：郭跡、堀切、土塁、礎石、腰曲輪、石組遺構、溝、陶磁器、鉄製品、銅製品、石臼等を検出。 | 文献 1,2,5,37,38,40,41,43,52,61 |
| 31 | 丸岩城跡 | 34 | 城館跡 | 中世 | 土塁や水場が遺存。 | 文献 1,2,37,38,40,41,43,52,61 |
| 32 | 西久保Ⅰ遺跡 | 31 | 集落跡 | 縄文・弥生・平安・中世・近世 | 平成６・10・12・29 年度調査（事）縄文中期末葉の敷石住居・水場遺構等を検出。 | 文献 2,76,81,96,143,146,149,166 |
| 33 | 西久保Ⅱ遺跡 | 32 | 散布地 | 平安 | 平成 28・29 年度調査（町）。 | 文献 2 |
| 34 | 西久保Ⅲ遺跡 | 33 | 散布地 | 不明 | | 文献 2 |
| 35 | 西久保Ⅳ遺跡 | 216 | その他 | 縄文・平安・近世 | 平成 17・26 年度調査（町）、平成 12・21・23 年度調査（事）縄文後期前葉掘立柱建物、平安時代住居・焼土遺構、天明泥流に埋没した畑跡・平坦面・道路・溝を検出。泥流の天端を確認。 | 文献 17,32,81,129,149,158,159 |
| 36 | 西久保Ⅴ遺跡 | 222 | その他 | 近世 | 平成 27 年度調査（町）、平成 29 年度（事）天明泥流に埋没した畑跡を検出。 | 文献 33,81,165,166 |
| 37 | 山根Ⅰ遺跡 | 26 | 散布地 | 平安 | 平成 27・29 年度調査（町）。 | 文献 1,2,33,89<br>『鳥遺跡地図』No.3118<br>旧山根Ⅰ遺跡<br>（中村遺跡） |
| 38 | 山根Ⅱ遺跡 | 28 | 散布地 | 平安・近世 | | 文献 2 |
| 39 | 山根Ⅲ遺跡 | 29 | 散布地集落跡 | 縄文・弥生・平安・近世 | 平成 16・17・30 年度調査（町）、平成 10・13・18 年度調査（事）縄文中期後半住居跡・土坑、中近世の溝等を検出。 | 文献 2,16,17,76,96,110,147,150,155 |

を利用して居住・墓域とするものであるため、県内では分布・遺跡数ともに限定される。吾妻川流域はそのほとんどが河川や渓沢に沿う山岳傾斜地帯であることから岩陰遺跡の立地する条件を満たしているといえよう。岩陰遺跡は長野原町域で21遺跡34ヶ所確認されており、その大半がこの東部地区に集中している。この岩陰遺跡の多さは本町の原始古代の大きな特徴の一つでもある。

### ②前期

前期の遺跡も少ないが漸増の傾向にある。立地は丘陵上が多いが、河岸段丘へも集落が広がる傾向が見受けられる。前期前半の遺跡は東部地区より西部地区で顕著であったが近年の調査で東部地区の該期の状況が明らかとなってきている。坪井遺跡では前期初頭（花積下層式期）の住居跡と土坑が検出され、土坑内で花積下層Ⅰ式と長野県で主体的な塚田式との共伴が初めて確認された[7]。暮坪遺跡では前期前葉（二ッ木式期）の住居跡[8]、長畝Ⅱ遺跡（29）では前期前葉（関山式期）の土坑と前期前葉（黒浜式期）の住居跡土坑が検出されている。東部地区では上原Ⅰ遺跡（60）で前期初頭の住居跡が15軒検出され、花積下層Ⅰ式土器が主体で塚田式土器が共伴するかたちで追認されている[9]。楡木Ⅱ遺跡で前期前葉（黒浜式期）の住居跡が検出されている他、横壁中村遺跡では埋没河道で少量の破片が認められている。前期後半は楡木Ⅱ遺跡、三平Ⅰ遺跡、林中原Ⅰ遺跡（64）で前期後葉（諸磯式期）の住居跡や土坑、川原湯勝沼遺跡（75）で前期末葉の土坑が検出されている以外は遺構外の出土である。

### ③中期

中期の遺跡は他時期に比して最も多い。中期前半は県内でも極めて限られた検出事例で少ないが、丘陵上あるいは最上位段丘に占地しているようである。後半になると河岸段丘の平場を中心として積極的な居住区域を展開している。中期前半の集落は近年東部地区の丘陵上あるいは最上位段丘に立地する遺跡で発見されはじめている。中期初頭（五領ヶ台式期）の遺跡は楡木Ⅱ遺跡で住居跡３軒、上原Ⅱ遺跡（61）で屋外焼土遺構を伴う竪穴状遺構が３基・土坑21基、上原Ⅳ遺跡（63）で土坑１基が確認されている[10]。中期前葉（阿玉台式期）の遺跡は立馬Ⅱ遺跡（71）で五領ヶ台式期～阿玉台式期の住居跡11軒・土坑100基ほど、林中原Ⅰ遺跡で住居跡が１軒、幸神遺跡で土坑が検出されている。横壁中村遺跡では中期中葉（勝坂式期）の住居跡、西久保Ⅰ遺跡（32）では同時期の土坑が確認されている。中期中葉（焼町類型期）の遺跡は幸神遺跡で焼町土器の深鉢を好体土器とした住居跡、林中原Ⅱ遺跡（65）と横壁中村遺跡で焼町土器を主体とする住居跡がそれぞれ１軒ずつ確認されている他、上ノ平Ⅰ遺跡（86）では同時期の住居跡が12軒検出された。今年度、町営横壁土地改良事業の工事中に中期前半の水場遺構が発見され、山根Ⅴ遺跡（41）を追加した。全国的にみても古手の水場遺構である。西部地区では観奈遺跡[11]で中期前半の土坑８基、クヌギⅡ遺跡[12]で中期中葉の埋設土器が検出されているのみで、山岸Ⅱ遺跡[13]で少量の破片が認められたぐらいである。中期後半になると列石を伴う拠点集落が吾妻川流域地帯に分布を広げて出現する。長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡を筆頭として近年の調査により林中原Ⅰ遺跡、林中原Ⅱ遺跡、東宮遺跡（85）、石川原遺跡（76）が新たに加わり[14]、西部地区では坪井遺跡から比較的遺跡に代表される。遺跡を大規模に調査している前６者に共通するのは中期後半に引き続き、後期前半（～加曽利Ｂ式期）まで継続して集落が営まれていることである。また坪井遺跡は前２者に比して規模は小さいが、弧状石列１基、住居跡19軒（拡張住居含む）、土坑49基が検出されている。土器は大きく４系統（①加曽利Ｅ式土器＜北関東系＞、②曽利・唐草文系土器＜信州系＞、③「郷土」式土器＜①と②の融合型式＞、④栃倉Ⅱ式土器＜越後系＞）が認められ、特に③の「郷土」式土器が該期の主体となる時期であり、環浅間山地域に分布し、小文化圏を形成していることが最近分かってきている[15]。この坪井遺跡出土土器の傾向は前６者出土土器、さらに県指定史跡「勘場木石器時代住居跡」[16]出土土器にも看取される。その他、向原遺跡[14]では中期末～後期初頭の敷石住居跡が検出されており、立地から拠点集落のひとつになる可能性が高い。最近の調査では尾坂遺跡（22）で中期後半の住居跡が６軒検出されており、うち３軒が敷石住居と確認され、敷石住居出現期の可能性がある。尾坂遺跡の対岸に位置する久々戸遺跡（24）でも中期末

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 40 | 山根Ⅴ遺跡 | 30 | 散布地 | 縄文・平安 | 縄文中期：チャート片出土。平成 19・29 年度調査（町） | 文献 2,19 |
| 41 | 山根Ⅴ遺跡 | 225 | その他 | 縄文 | 平成 30 年度調査（町） 縄文中期前半の水場遺構の一部を検出。 | |
| 42 | 横壁中村遺跡 | 24 | 集落跡<br>墓その他<br>その他 | 縄文・弥生・平安・中世・近世 | 平成 8～18・30 年度調査（事）縄文中期後半～後期を中心とした拠点集落跡。平安住居跡も含めて 250 軒以上を検出。中近世掘立柱建物跡、硬石建物、土坑墓、塚など多数検出。 | 文献 1,2,37,41,60,76,80 ～ 82,84,86,88～90,92,99,101,104,113,114,120,121,123,126,131,133,134,145～155<br>旧上野Ⅱ遺跡 |
| 43 | 横壁勝沼Ⅰ遺跡 | 23 | 集落跡<br>墓その他 | 縄文・弥生・平安・中世・近世 | 平成 6・7 年度調査（事）縄文土坑、平安住居を検出。槍先形尖頭器1点表採。 | 文献 1,2,76,81,96,143,144<br>『県遺跡地図』No. 3118<br>旧勝沼遺跡（東平遺跡）旧横壁勝沼遺跡 |
| 44 | 横壁勝沼Ⅱ遺跡 | 223 | 散布地<br>その他 | 縄文 | 平成 29・30 年度調査（町）。 | |
| 45 | 横壁勝沼Ⅲ遺跡 | 224 | 集落跡 | 平安 | 平成 29・30 年度調査（町）。 | |
| 46 | 上野Ⅰ遺跡 | 21 | 散布地 | 縄文・弥生・平安 | 平成 29・30 年度調査（町） | 文献 2,76 |
| 47 | 上野Ⅱ遺跡 | 22 | 散布地 | 縄文・平安 | 平成 29・30 年度調査（町） | 文献 2 |
| 48 | 御殿山岩陰 | 57 | その他 | 不明 | | 文献 2 |
| 49 | 蛙ヶ沢岩陰 | 56 | その他 | 縄文 | 打製石斧出土。 | 文献 2 |
| 50 | 二反沢遺跡 | 52 | 社寺<br>その他 | 中世・近世 | 平成 28 年度調査（町）、平成 12 年度調査（事）中世の石垣を伴う土坑ほか、鍛冶関連遺物。近世の畑跡を検出。 | 文献 2,81,88,103,149<br>旧大乗院窟跡 |
| 51 | 滝沢観音岩陰 | 55 | その他 | 不明 | 平成 28 年度調査（町）「大日堂」の堂宇と石仏群。北側石仏群前面の沢で陰橋を検出。 | 文献 2 |
| 52 | 楡木Ⅰ遺跡 | 50 | 散布地 | 縄文・平安 | 平成 21 年度調査（事）平安住居・かまど屋・土坑・ピット・溝・焼土・集石、江戸硬石建物等を検出。 | 文献 2,129,158 |
| 53 | 楡木Ⅱ遺跡 | 51 | 集落跡 | 縄文・平安・中世・近世 | 平成 12 年度調査（町）、12・13・16・17 年度調査（事）縄文早期前半（撚糸文系）住居・前期住居・中期初頭住、平安住居、中世の掘立柱建物群を検出。「三家」の墨書土師、刻字「称」をもつ石製紡錘車出土。 | 文献 2,6,10,76,111,118,149,150,153,154 |
| 54 | 楡木Ⅲ遺跡 | 202 | 散布地 | 縄文・弥生・平安・中世 | 平成 10 年度調査（事）縄文前～後期、弥生中期：包含層。 | 文献 81,147 |
| 55 | 中幡Ⅰ遺跡 | 49 | 散布地 | 縄文・平安 | 平成 18・23・28 年度調査（町）、平成 11・29 年度調査（事）縄文早期包含層。平安住居跡 4 軒。土坑 17 基。黒曜石片、チャート片出土。 | 文献 2,18,25,31,148,166<br>旧中幡遺跡 |
| 56 | 中幡Ⅱ遺跡 | 203 | その他 | 近世 | 平成 11 ～ 13・15・28・30 年度調査（事）天明泥流で埋没した畑跡、および安永九年と考えられる埋没畑跡。 | 文献 2,47,53,56,57,59,60,71,76,77,97,148 ～ 150,152,165 |
| 57 | 林宮原遺跡 | 48 | 集落跡 | 縄文・古墳・平安 | 平成 14 ～ 16・18 ～ 20・24・28・29 年度調査（町）、24・27 年度調査（事）縄文中期～後期包含層、古墳後期住居、平安住居、土坑、中近世掘立柱建物群を検出。 | 文献 1,2,12,14 ～ 16,18 ～ 20,24,28,136,161,164<br>『県遺跡地図』No.3127<br>旧宮原遺跡（神社前遺跡） |
| 58 | 下原遺跡 | 204 | 集落跡<br>その他 | 縄文・弥生・古墳・平安・中近世 | 平成 12・13・15・16・29・30 年度調査（事）古墳後期住居、平安住居、中世の屋敷跡、中世～近世の畑跡を検出。 | 文献 2,60,71,76,77,82,91,96 ～ 98,106,149,150,152,153,166 |
| 59 | 下田遺跡 | 47 | 集落跡<br>その他 | 縄文・近世 | 平成 6・7・9・26・28・29 年度調査（事）天明泥流に埋没した民家・畑跡を検出。 | 文献 2,60,63,76,81,96,142 ～ 144,146,163,165,166<br>『県遺跡地図』No.3126<br>旧下原（下田）遺跡 |
| 60 | 上原Ⅰ遺跡 | 41 | 散布地 | 縄文・平安・近世 | 平成 18・23・24 年度調査（町）、平成 9・24 年度調査（事）縄文早期末～前期初頭住居・中期後半住居、弥生前期末土坑、古墳前期住居・中期土坑、平安住居・陥し穴等を検出。 | 文献 2,18,25,28,31,54,60,76,96,136,146,161 |
| 61 | 上原Ⅱ遺跡 | 42 | 散布地 | 縄文・平安 | 平成 18・23 年度調査（町）、平成 16 年度調査（事）縄文中期初頭堅穴状遺構・焼土遺構・土坑、平安陥し穴。 | 文献 2,18,25,31,76,153 |
| 62 | 上原Ⅲ遺跡 | 43 | 散布地 | 縄文・弥生・平安 | 平成 18・23 年度調査（町）、平成 25・27 年度（事）縄文中期後半包含層、弥生中期土坑、平安竈冶工房、住居跡、焼土遺構、陥し穴等。 | 文献 ,18,25,31,136,140,162,164 |
| 63 | 上原Ⅳ遺跡 | 44 | 散布地 | 縄文・近世 | 平成 14・18・20・24 年度調査（町）、平成 15・25・26 年度調査（事）縄文中期初頭土坑・後期敷石住居・配石遺構・晩期～弥生包含層、古墳後期住居、平安住居、近世溝等を検出。下駄、曲物の底、農具、石鉢、陶磁器が出土。 | 文献 2,12,18,20,28,31,76,88,110,129,152,162,163 |
| 64 | 林中原Ⅰ遺跡 | 45 | 集落跡<br>城館跡 | 縄文・平安・中世・近世 | 昭和 37 年度（群大）、平成 14 ～ 22・25 年度（町）、平成 16・20・21・30 年度調査（事）縄文中期後半～後期の拠点集落、縄文前期後葉住居・土坑、中近世「林城」・竪穴状遺構・区画溝・掘立柱建物群を検出。 | 文献 1,2,12,14,16,23,29,31,37,40,45,54,76,88,133,153,157,158<br>旧中原Ⅰ遺跡 |
| 65 | 林中原Ⅱ遺跡 | 46 | 散布地 | 縄文・平安・中世・近世 | 平成 15 ～ 19・21・22・25 年度（町）、平成 16・20・21 年度調査（事）縄文中期前半～後期の拠点集落、墓坑8基。弥生前期末～中期前半土坑・再葬墓か。中期前半住居、中近世掘立柱建物群。 | 文献 2,14,16 ～ 20,22,23,29,31,37,90,153,157,158<br>旧中原Ⅱ遺跡 |
| 66 | 花畑遺跡 | 205 | 集落跡 | 縄文・平安 | 平成 10 年～ 12 年度調査（事）平安住居跡・陥し穴多数検出。 | 文献 2,68,76,81,96,147 ～ 149 |
| 67 | 東原Ⅰ遺跡 | 38 | 散布地 | 縄文・平安・近世 | 平成 17・18・24・26 年度調査（町）、20 年度調査（事）縄文前期～中期後半の陥し穴・土坑、平安住居を検出。 | 文献 2,17,18,28,124,157 |
| 68 | 東原Ⅱ遺跡 | 39 | 散布地 | 縄文 | 平成 20・30 年度調査（事）縄文後期土器片、黒曜石片出土。 | 文献 2,107,124,140,157 |
| 69 | 東原Ⅲ遺跡 | 40 | 散布地 | 平安・近世 | 平成 15・18 年度調査（町）、20・21 年度調査（事）近世屋敷跡 1 ヵ所、土坑、ピット検出。 | 文献 2,14,18,124,157,158 |

の遺存状帯の良い敷石住居が検出され、町では本年度に移築保存を実施した。

### ④後期

後期の遺跡は規模は縮小するものの吾妻川流域の比較的広い範囲に分布する。上記の中期後半の遺跡の他、西部地区では本町で初めて敷石住居跡を検出したクヌギⅡ遺跡[17]、向原遺跡（２）、滝原Ⅲ遺跡[18]、古屋敷遺跡[19]、東部地区では上ノ平Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、林中原Ⅰ遺跡、石川原遺跡に代表される。後期初頭（称名寺式期）～後期中葉（加曽利Ｂ式期）までの敷石住居跡、掘立柱建物跡は長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡で多く検出されている。長野原一本松遺跡では壁に板材の痕跡を遺す柄鏡形敷石住居跡や方形周礫を明瞭に遺す柄鏡形敷石住居跡が確認されている。また横壁中村遺跡では主軸全長９ｍにも及ぶ大形の柄鏡形敷石住居跡や配石墓群が検出されている。その他、林中原Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡でも後期初頭～前葉（称名寺式期～堀之内式期）の敷石住居跡等が検出されている。後期後葉（高井東式期）の住居跡は横壁中村遺跡で３軒、久々戸遺跡で土坑が検出されているのみである。石川原遺跡では後期後半～晩期前半の住居跡、配石遺構、水場遺構が多数検出されている。後期終末（安行１・２式期）に関しては横壁中村遺跡や立馬Ⅰ遺跡で土器片が出土しているがいずれも遺構外である。

### ⑤晩期

晩期に関してはこれまで石畑Ⅰ岩陰で土器片が出土している他、横壁中村遺跡で晩期末葉（千網式併行）の包含層が確認されているだけであった。遺構の検出は晩期前半は前述の石川原遺跡で確認されてきているものの、依然少なく、後半（特に末葉～弥生中期）に関しては最近の調査で増えつつある。立馬Ⅰ遺跡では晩期末葉の住居跡１軒、横壁中村遺跡では晩期末葉の住居跡２軒、埋甕１基、上原Ⅳ遺跡・西ノ上遺跡（82）では土坑１基が検出されている。立馬Ⅰ遺跡では南信松本盆地に分布する女鳥羽川式土器が出土している。さらに川原湯勝沼遺跡からは該期の土坑が数基検出され、その中の１基は壺棺再葬墓であることが判明している。同一土坑に２個体が埋置されており、ひとつが中沢氏のいう「氷式突帯壺」[20]の上半部が逆位に、もう一方は浮線文系の半精製甕が正位の状態で出土している。この壺棺再葬墓は東日本でも最古級として注目されよう。その他、遺構外ではあるが久々戸遺跡で氷式土器の浅鉢、向原遺跡で大洞Ａ′式まで遡ると考えられる土器片も確認されている。

## （３）弥生時代

弥生時代の遺跡は分布調査の時点で後期に属する３遺跡のみであったが、縄文時代晩期末葉から弥生中期前半までの資料が増えてきている。遺跡は丘陵上あるいは最上位段丘に立地する傾向が強く、縄文時代早期や中期前半と共通しているようである。東部地区では本遺跡のほか長野原一本松遺跡で中期前半までと考えられる土坑１基、横壁中村遺跡では埋甕（再葬墓か）１基が検出され、東海地方に分布する樫王式土器の甕が出土している。下原遺跡（58）では集石遺構から中期前半を中心とした遺物が認められた。未報告ではあるが、林中原Ⅱ遺跡では中期前半と考えられる住居跡４軒の他、前期末に遡る土坑墓（再葬墓か）、尾坂遺跡でも前期末の再葬墓と思われる土坑や完形土器２個体を出土する土坑、貯蔵穴など、上原Ⅰ遺跡では前期末の短頸壺を納めた土坑、三平Ⅰ遺跡では前期末～中期前半の土坑が数基検出されている。西部地区では遺物出土量が少なく時期が判然としないものが多いが、坪井遺跡で中期初頭と考えられる住居跡１軒、土坑が５基[21]、向原遺跡では前期に遡るものも含めて中期前半までの土坑が７基検出されている。遺構外では外輪原Ⅰ遺跡、上ノ平遺跡で中期前半までの資料が比較的まとまっている[22]。中期後半に関しては、立馬Ⅰ遺跡で住居跡２軒と土器棺墓２基を含む土坑が数基、後期に関しては、石畑遺跡（98）で土坑１基が確認されているのみである。分布調査時に居家以岩陰群、寺久保遺跡、新田原Ⅰ遺跡で土器片が表採されている他、立馬Ⅰ遺跡では遺構外で、二社平遺跡（95）周辺で後期～古墳時代前期に比定される土器片が表採されている。

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 70 | 立馬Ⅰ遺跡 | 37 | 集落跡<br>墓その他 | 縄文・弥生・平安・中世・近世 | 平成13・14・17年度調査（事）縄文早期前半住居・包含層遺物多数・晩期住居跡、弥生中期住居・貯蔵墓、平安住居跡、縄文～平安の陥し穴を多数検出。 | 文献1,2,68,76,79,90,105,150,151,154<br>旧立馬遺跡 |
| 71 | 立馬Ⅱ遺跡 | 213 | 集落跡 | 縄文・弥生・平安 | 平成14年度調査（事）縄文中期初頭～後半住居、縄文早期包含層、縄文～平安陥し穴多数検出。 | 文献87,102,151 |
| 72 | 立馬Ⅲ遺跡 | 215 | 集落跡 | 縄文・平安 | 平成19年度調査（事）縄文早期を中心とする集落跡、縄文住居・竪穴状遺構・集石・土坑墓、平安土坑・陥し穴、中近世の土坑・溝を検出。 | 文献76,79,117,156 |
| 73 | 久森沢Ⅰ岩陰群 | 53 | その他 | 縄文 | 岩陰3ヵ所にわたる。 | 文献2,147 |
| 74 | 久森沢Ⅱ岩陰群 | 54 | その他 | 近世 | | 文献2,147 |
| 75 | 川原湯静沼遺跡 | 206 | 散布地<br>その他 | 不明 | 平成9・15・16・28年度調査（事）縄文晩期の埋甕、平安住居跡、天明泥流に埋没した畑跡を検出。 | 文献59,60,70,71,76,77,81,85,9<br>6,100,146,152,153,165 |
| 76 | 石川原遺跡 | 17 | 散布地 | 縄文・平安・近世 | 平成20・26～29年度調査（事）天明泥流に埋没したムラ。平安住居、縄文中期後半～後期冬中心とする拠点集落跡。 | 文献2,137,156,163~165,167<br>北入遺跡（No.20）と統合 |
| 77 | 川原湯中原Ⅰ遺跡 | 16 | 散布地 | 不明 | チャート片出土。平成19年度調査（町）、平成29年度調査（事） | 文献2,19,166<br>旧中原Ⅰ遺跡 |
| 78 | 川原湯中原Ⅱ遺跡 | 18 | 散布地 | 平安 | 平成17年度調査（町） | 文献2,17<br>旧中原Ⅱ遺跡 |
| 79 | 川原湯中原Ⅲ遺跡 | 19 | 散布地 | 不明 | 縄文中期：チャート片出土。平成28年度調査（事） | 文献2,165,166<br>旧中原Ⅲ遺跡 |
| 80 | 前原遺跡 | 210 | その他 | 近世 | 平成29年度調査（事）、天明泥流下の畑。 | 文献184,185,211 |
| 81 | 金花山巻跡 | 207 | 城館跡 | 縄文・弥生・平安・近世 | 平成12年度踏査（町・事）明治期の「川原湯真図」に「トリデアト」の記載あり。 | 文献2,149 |
| 82 | 西ノ上遺跡 | 212 | その他 | 縄文 | 平成18・26年度調査（町）、平成14・27・29年度調査（事）天明泥流に埋没した畑跡・道、縄文晩期土坑を検出。 | 文献18,32,60,76,83,98,151,164,166 |
| 83 | 下湯原遺跡 | 217 | 不明 | 中・近世 | 平成27～30年度調査（事）天明泥流に埋没した畑跡・道・墓、平安住居を検出。 | 文献164～166 |
| 84 | 西宮遺跡 | 7 | 散布地 | 縄文・近世 | 平成20・26～30年度調査（事）天明泥流に埋没したムラ、泥流埋没畑5区画以上、便田溝10数本、ヤックラ、小屋と屋敷1棟を検出。 | 文献2,157,163~165,167 |
| 85 | 東宮遺跡 | 208 | その他 | 近世 | 平成12年度調査（町）、7～9・19～21・26～30年度調査（事）天明泥流で埋没したムラ。民家、それに伴う建物跡、畑跡等を検出。 | 文献10,59,60,76,82～86,125,127,141,144~146,147,155～157,163～165,167 |
| 86 | 上ノ平Ⅰ遺跡 | 5 | 集落跡 | 平安 | 平成18・19・28年度調査（事）縄文中期中葉～後期初頭住居、平安住居・陥し穴を検出。皇朝十二銭の「貞観永宝」が出土。貞観永宝の出土は本例を含め県内で3例ある。 | 文献2,37,75,76,81,115,139,155,156,165 |
| 87 | 上ノ平Ⅱ遺跡 | 6 | 散布地 | 不明 | チャート片出土。 | 文献2 |
| 88 | 三平Ⅰ遺跡 | 3 | 集落跡 | 縄文・弥生・平安・近世 | 平成10・16・17・24・30年度調査（事）、平成20年度調査（町）諸磯式期の住居跡、縄文時代早期後半～後期中葉の土坑、弥生時代中期初頭～中期前半の土坑、早期の押型文系土器も出土している。平安時代の陥し穴群、竪穴住居跡。近世の掘立柱建物跡。弓引金具をはじめとして、各時代とも長野県域と共通性が認められる。 | 文献2,20,27,32,76,81,92,107,147,153,154,161 |
| 89 | 三平Ⅱ遺跡 | 4 | 集落跡 | 縄文・平安 | 平成16年度調査（事）縄文早期前期～晩期の土器・石器を多量に出土。掘立柱建物跡7棟ほかを含む中世屋敷跡1カ所。 | 文献2,76,79,92,107,153 |
| 90 | 西宮岩陰 | 13 | その他 | 不明 | 平成26年度調査（事） | 文献2,163 |
| 91 | 三ツ堂岩陰 | 12 | その他 | 不明 | 堂宇・石仏群は平成20年度に本移設。平成28年度調査（事） | 文献2,165 |
| 92 | 湯井Ⅰ遺跡 | 2 | 散布地 | 縄文・平安 | 縄文後期。 | 文献2 |
| 93 | 湯井Ⅱ遺跡 | 2 | 散布地 | 縄文 | 中期。 | 文献2 |
| 94 | 二社平岩陰 | 11 | その他 | 不明 | 岩陰遺跡。 | 文献2 |
| 95 | 二社平遺跡 | 209 | 散布地 | 縄文・弥生・平安・近世 | 平成8・10・28・29年度調査（事）弥生後期土器片。近世畑。 | 文献81,96,145,147,165,166 |
| 96 | 石畑Ⅰ岩陰 | 9 | 墓その他 | 縄文 | 昭和53年度調査（県）縄文草創期～晩期：土器片、獣骨、人骨など出土。平成29・30年度調査（事） | 文献2,38,39,41,44,48,58,76,147,166 |
| 97 | 石畑Ⅱ岩陰 | 10 | その他 | 不明 | 岩陰遺跡。 | 文献2 |
| 98 | 石畑遺跡 | 210 | 散布地<br>その他 | 縄文・弥生・近世 | 平成7・9・10・29年度調査（事）<br>縄文前期包含層、弥生後期土坑、近世畑。 | 文献2,54,60,81,96,144,146,147,166 |

## （4）古墳時代

これまで遺構外では他時期の遺物に混入するかたちで５世紀後半の土器片は坪井遺跡[24]、長野原一本松遺跡、二社平遺跡などで確認されてきたが、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。平成15年度に最上位段丘面に立地する林宮原遺跡（57）で５世紀末～６世紀初頭の住居跡が１軒検出されたのが初例である。これに続いて平成16年度の調査で川原湯静沼遺跡で焼土を伴う土坑から同時期の土師器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡で同時期の住居跡１軒の他、土師器（片）がまとまって出土している。最近の調査では上原Ⅳ遺跡でも５世紀後半～６世紀初頭の住居跡が２軒検出されている。これらは吾妻川に直面した最上位・中位段丘面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構の可能性が高い。これら４遺跡で検出された遺構は時期的にほぼ合致しており注目される。さらに上原Ⅰ遺跡で前期と考えられる住居跡から S 字状口縁台付甕や坩形土器が出土し、中期の高坏を包含する土坑も検出され[25]、これまで空白であった時期の遺構検出事例が徐々にではあるが大規模調査の成果として増えてきている。

また昭和13年に刊行された『上毛古墳綜覧』によれば、大津地区の「鉄塚」、与喜屋地区の「五輪塚」が前

方後円墳と報告されている。また昭和11年刊行の『群馬県吾妻郡誌』では林地区の「御塚」が古墳とされ、合計３基が古墳とされている。「五輪塚」は現況で畑としてならされているが、「鉄塚」と「御塚」は円形の形状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、「てつか（てづか）」や林地区中棚にある「砂塚」に関しては『長野原町誌』で「宮内地区の「てづか」は鉄塚の訛音ではあるまいか。鉄塚の地名には城跡や屋敷跡などに多いといわれ、砂塚との対照がおもしろい」とあり、古墳という認識ではないが同じ林地区に少なくとも「塚」と付くものが３基あるということが注目される。いずれも古墳とするには根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

## （5）奈良・平安時代

奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾Ⅱ遺跡のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。調査した遺跡を挙げれば、西部地区では、坪井遺跡[26]、向原遺跡、長畝Ⅰ遺跡（28）、長畝Ⅱ遺跡、山岸Ⅱ遺跡[27]、東部地区では東宮遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡、三平Ⅰ遺跡、下湯原遺跡（83）、西ノ上遺跡（82）、石川原遺跡、川原湯勝沼遺跡、立馬Ⅰ遺跡、東原Ⅰ遺跡（67）、楡木Ⅰ遺跡（52）、楡木Ⅱ遺跡、花畑遺跡、下原遺跡、中棚Ⅰ遺跡、上原Ⅰ遺跡、上原Ⅲ遺跡（62）、上原Ⅳ遺跡、林宮原遺跡、横壁勝沼Ⅰ遺跡、横壁勝沼Ⅲ遺跡（45）、山根Ⅳ遺跡（40）、上野Ⅰ遺跡（46）、上野Ⅱ遺跡（47）、横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡、尾坂遺跡などから住居跡や掘立柱建物跡、陥し穴などが検出され、該期集落として把握されている。この中で楡木Ⅱ遺跡では９世紀後半～10世紀前半の住居跡が38軒、竪穴遺構３基が検出され、「長」・「三家」の墨書土器と刻字「称」をもつ石製紡錘車、上ノ平Ⅰ遺跡では住居跡が20軒検出され、県内２例目となる皇朝十二銭「貞観永寶」が出土しており注目される。この他、上原Ⅲ遺跡では鍛冶工房跡１軒・住居跡11軒・焼土遺構６基・陥穴29基など、中棚Ⅰ遺跡では住居跡４軒が検出され、そのうち全容が判明した２軒は一辺が６ｍを超える大形住居であった。このうちの１軒からは「赤」の墨書が大量に出土しておりその性格が注目される。

## （6）中　世

吾妻渋域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡[28]、長野原城跡（3）、丸岩城跡（31）、柳沢城跡（30）、金花山砦跡（81）などがあり、その他に林城跡（64）、林の烽火台[29]などといわれている箇所も存在する。これらはいずれも山城である。この中で丸岩城は「丸屋の要害」として『加沢記』にも記され、箔理の発達した岩山の山頂に立地している。この丸岩城跡の北西麓に里城としての柳沢城跡が位置し、山城部と丘城部から成る本城を構えている。この柳沢城跡の一部が発掘調査されており、郭跡・堀切・土居・礎石建物・腰曲輪・石組遺構・溝・柵列などが検出されている。遺物のほとんどが礎石建物から出土しておりかつ豊富である。陶器・鉄製品・銅製品・石臼などが出土しており、特に陶器類は常滑系大甕・古瀬戸三耳壺・古瀬戸菊皿・珠洲系陶器甕の他、輸入陶磁器である景徳鎮窯梅瓶などが準完形で出土している。また最近の調査で林中原Ⅰ遺跡範囲内に林城跡が確認され、その範囲や構造が明らかになりつつある。金花山砦跡は明治期の絵図『川原湯真図』に「トリデアト」の記載があったことから平成12年度に町教委と事業団で踏査して堀切などを確認した。

近年は河岸段丘面の遺跡でも該期の遺構が検出されはじめており、集落として把握されるようになっている。それらを列挙すると立馬Ⅰ遺跡、林宮原遺跡、楡木Ⅱ遺跡、二反沢遺跡（50）、下原遺跡、横壁中村遺跡、西久保Ⅰ遺跡、長野原一本松遺跡、尾坂遺跡となる。このうち、横壁中村遺跡と下原遺跡では石垣で区画された屋敷跡がそれぞれ１棟、長野原一本松遺跡では掘立柱建物群と竪穴状遺構、楡木Ⅱ遺跡でも掘立柱建物群、二反沢遺跡では区画跡のほか羽口や鉄サイなど鍛冶関連遺構などが検出されており注目される。

## （7）近　世

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも

窺える。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに９万年前には黒斑山は活動をはじめており、2.4～2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は仏岩火山の活動期で浅間板鼻黄色軽石（As-YP）降下物をもたらした。１万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により縄文時代中期の浅間Ｄ軽石（As-D）、４世紀の浅間Ｃ軽石（As-C）、天仁元（1108）年の浅間Ｂ軽石（As-B）、天明３（1783）年の浅間Ａ軽石（As-A）という４つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古年代の指標にもなっている。その中でも天明３（1783）年の噴火は軽石降下後に襲った泥流（鎌原火砕流）により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらし、有史以来の記録の火山災害として知られている。この泥流によって埋没した嬬恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺観音堂の石段」、「十日ノ窪」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが[30]、翌年に本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるグランド造成中に日待供養塔・石臼・農具などが出土し、旧新井村跡（27）の痕跡が確認された[31]。平成14年度には町立中央小学校の屋内体育館・プールの新築に伴って、当時の分限者小林助右衛門屋敷の一部が発見され、石垣・土蔵・礎石建物跡が調査されている[32]。また平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・薬缶・鉄釜・石臼の他、「青面金剛塔」が泥流中から出土しており、旧長野原村が壊滅的状況であった一端を垣間見る発見があった[33]。さらに平成20年度に草木原遺跡[34]、平成23年度に小滝Ⅱ遺跡[35]で天明泥流に埋没した畑跡が検出され、立石村・羽根尾村の被災状況も確認された。

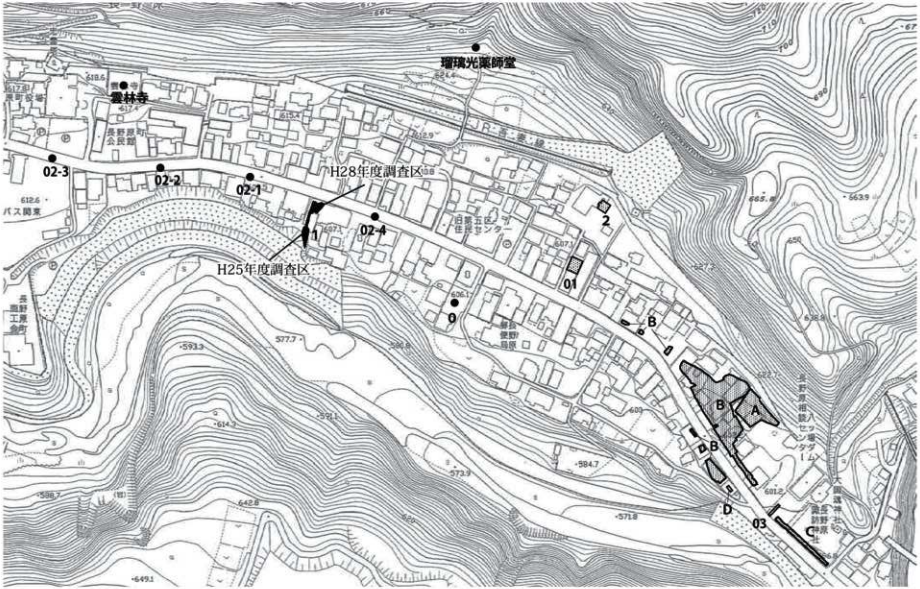
近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを列挙すると、本遺跡のほか、長野原城跡、嶋木Ⅰ遺跡（４）、東貝瀬Ⅲ遺跡（９）、下田遺跡（59）、下原遺跡、中棚Ⅱ遺跡（56）、西宮遺跡（84）、東宮遺跡、石川原遺跡、石畑遺跡、西ノ上遺跡、川原湯勝沼遺跡、横壁勝沼Ⅰ遺跡、横壁中村遺跡、西久保Ⅳ遺跡（35）、西久保Ⅴ遺跡（36）、尾坂遺跡、久々戸遺跡などがあり、現在も継続調査中である。これらの遺跡では主として畑跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物などが検出されている。現時点での成果として天明泥流に埋まった畑景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位畑」の構造、さらには泥流とその逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている。また東宮遺跡、西宮遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡などでは民家跡も検出されている。特に東宮遺跡は泥流に埋没した川原畑村を面的に調査した貴重な発見である。建物跡が14棟のほか畑20区画・道３条・溝６条・石垣10基・集石１基・土坑８基を検出した。通常遺存しない建築部材や漆器など植物遺存体の検出例が多く、当時の川原畑村の景観復原はもとより、近世建築学、民俗学など多角的な分析に寄与する部分が大きいと考えられる。さらに隣接する西宮遺跡では埋没畑とともに南北方向に10数本の復旧溝が検出され、被災後の復旧の痕跡が本町ではじめて確認された。

また推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。林中原Ⅱ遺跡、上原Ⅳ遺跡、二反沢遺跡、楡木Ⅰ遺跡、幸神遺跡、長野原一本松遺跡が該当する。このうち上原Ⅳ遺跡では溝（旧河川流路）を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。

## 第３節　既往の調査

本遺跡周辺は江戸時代には宿場（長野原宿）を形成しており、街道に面して長方形の地割もその面影をよく残している。この宿場は1783（天明３）年に浅間火山の大噴火に伴って発生した泥流により壊滅的な被害を被ったことは意外と知られていない。この泥流による犠牲者数は有名な鎌原村の466名に次いで長野原村では200名を数える。

本遺跡は過去に長野原町教育委員会（以下、町教委）で１次、（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下、事業団）で３次にわたる調査が実施されており、今回の調査は第１次・３次調査にあたる。また包蔵地指定以前の調査や発見が３件あり０～02で示した（第５図・第３表）。




第５図　調査地点位置図（S ＝1/3,000）

第３表　町遺跡調査一覧（第５図の番号と対応）

| 番号 | 調査年度 | 調査機関 | 原因<br>種類 | 調査面積<br>（開発面積） | 概要 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 0 | 昭和２年度 | ― | 警察署地下留置所<br>不時発見 | －㎡<br>（－㎡） | 塗下駄・下駄の歯・衡器・木札・鎌・刀身・銅製鏡・石臼などが出土。 | 文献１ |
| 01 | 平成14年度 | 長野原町教育委員会 | 個人専用住宅<br>立会調査 | ６㎡<br>（50㎡） | 天明泥流・軽石層確認。 | 文献12 |
| 02 | 平成16年度 | 〃 | 公営下水道<br>立会調査 | －㎡<br>（－㎡） | 02-1では薬缶蓋・鉄鍋片出土。02-2では石垣検出。付近で石臼出土。02-3では「青面金剛塔」出土。02-4では建築部材、さらに南側の引き込み箇所で桶蓋・獣骨台石が出土。 | 未報告 |
| 03 | 平成25年度 | 〃 | 公営下水道<br>立会調査 | 10㎡<br>（10㎡） | 遺構・遺物なし。 | 未報告 |
| **1** | **〃** | **〃** | **町道長野原向原線<br>本調査** | **110㎡<br>（1,148㎡）** | **本報告** | |
| 2 | 平成26年度 | 〃 | 教会教職舎<br>本調査 | 27㎡<br>（124㎡） | 天明畑１ | 文献32 |
| **3** | **平成28年度** | **〃** | **町道長野原向原線<br>本調査** | **40㎡<br>（1,148㎡）** | **本報告** | |
| A | 平成23年度 | （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 県道林長野原線<br>本調査 | 630㎡<br>（630㎡） | 江戸天明畑１・平坦面２・包含層（縄文～江戸） | 文献150 |
| B | 平成24年度 | 〃 | 県道林長野原線<br>本調査 | 4,483㎡<br>（４，４８３㎡） | 江戸天明畑７・建物跡１・土坑４・鍛冶関連遺構１ | 文献135・151 |
| C | 平成25年度 | 〃 | 歩道拡幅<br>本調査 | 213㎡<br>（213㎡） | 江戸天明畑１・道１ | 文献152 |
| D | 平成30年度 | 〃 | 県道林長野原線<br>本調査 | 607㎡<br>（607㎡） | 江戸天明畑１ | |

まず包蔵地指定以前の事例から触れておきたい。現在の群馬銀行長野原支店がかつての長野原警察署であり、昭和２年に地下勾留所工事の際、20余尺（約６～７ｍ）くらい掘り下げると下駄・衡器（はかり）・陶器・木札・刀・鎌・銅製鏡・石臼などの生活道具が出土した。この記述の後に「長野原町の市街は天明三年の浅間噴火の濁流に潰滅して泥土が二十尺余埋没したので」という文章が続き、出土遺物が泥流に埋没したものであることが当時認識されていたことが分かる（第５図０）。残念ながらこれら出土遺物の所在は不明である。また平成14年度には個人専用住宅増築に伴う浄化槽改修に先行して立会調査が実施された（第５図01）。現地表

下1.2mで軽石層（3㎝厚）が確認され、天明泥流（100㎝厚）により旧長野原町の町並みがパッキングされていることが窺われた。さらに、平成16年度には公営下水道を現道内に埋設する工事が実施され、4箇所で遺物や遺構が発見された（第5図02-1～02-4）。平成25年度には区事務所の下水を本管に繋ぐ工事が実施され、立会調査を実施している（第5図03）。

町教委の第2次調査は平成26年に教会教職舎建設に先行して実施された。本調査地点は周辺の中で最も標高の高い地点での調査事例で、畑1枚のみの検出であったが、宿場から山側にかけて約9°の傾斜地で江戸時代に畑としての土地利用が確認されたことは重要である（第4図2）。

事業団の第1・2次調査は平成23･24年度に県道林長野原線整備事業に先行して実施された（第4図A・B）。

第1次調査は、旧長野原尋常小学校跡地周辺にあたり、調査区全面が天明畑で畝サクや平坦面も明瞭に確認された。さらに下層調査面の有無を試掘坑により確認すると、中近世陶磁器片や縄文時代石器などが出土した。

第2次調査では長野原宿側（北西端）の調査区で、建物跡が検出された。板間の一部のみの検出に留まったが、大引や根太、床板までもが良好に遺存していた。出土遺物も、床板下を中心に団扇や扇子、下駄、笛、漆椀など脆弱な木製品や漆製品などが集中していた。この建物より東側では天明泥流に埋没した建物跡は検出されていないことから、長野原宿の東端と考えられる。またその他の調査区では畑が7枚検出されているが、下層調査で鍛冶に伴う鉄滓や鍛造剥片、羽口や鉄製品が出土している。

第3次調査は長野原諏訪神社前の歩道の拡幅工事に伴って平成25年度に実施された（第4図C）。調査区の東側で道跡と思われる高まり、中央寄りで畑跡が検出されている。道跡は旧須川橋の方向へ延びている。畑跡の畝幅は通常より広く3尺（約91㎝）を測る。

第4次調査は工事に伴って平成30年度に実施された（第4図D）。調査区が狭小であったため、およそ2m×5mの範囲でトレンチを設定し、調査を行なった。厚さ50㎝ほどの泥流で覆われた畑1枚を検出した。2面目の確認調査として、調査区南西部に約50㎝×150㎝の範囲でトレンチを設定したが、遺構は確認されなかった。

## 第4節　基本土層

本遺跡の基本層序は図版のA・B地点で確認した。発掘調査での所見を併せると以下の通りである（第5図）。

第Ⅰ層　暗灰褐色土

いわゆる表土で、浅間A軽石（以下、AS-A軽石）を疎らに含んでいる。上位は畑の耕作土で拳大の礫を多く含んでいる。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。A地点は舗装とその下の砕石・盛土であったためⅠ'層とした。

第Ⅱ層　茶褐色砂質土

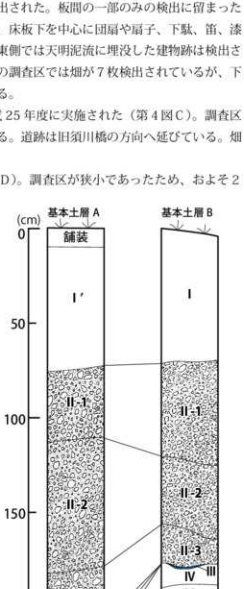
いわゆる天明泥流で全体的に砂質で締まりは弱い。人頭大～の焼石（黒石）を含んでいる。本調査区では色調・礫の混入等で4～5層に分層ができる。混入する礫は上層ほど大きく、下層ほど小さくなる逆級化層理として捉えられる。層厚は北端のA地点で最厚150㎝を測り、南側へ向かって減じている。

Ⅱ-1：明茶褐色砂質土

Ⅱ-2：茶褐色砂質土

Ⅱ-3：暗茶褐色砂質土

Ⅱ-4：暗黄褐色砂質土




第6図　基本土層図（S＝1/20）

Ⅱ-5：暗褐色砂質土：（A地点は建物内部でそこに泥流が流れ込んで建築部材や各種出土遺物を包含する土層）

第Ⅲ層　軽石層

いわゆるAS-A軽石である。天明3（1783）年新暦の7月27日～29日に北東方向に降った軽石にあたる。A地点は建物内部のため堆積が確認されていないが、本調査区での層厚は2～3㎝である。

第Ⅳ層　暗灰褐色土

いわゆる天明期の表土層である。本調査区では粘質が強い。

第Ⅴ層　暗褐色土

本調査区ではⅣ層とⅤ層の間に1～2層挟むことが確認されている。本層は江戸時代以前の中世～古代の包含層と考えられる。Ⅳ層同様、粘質が強い。

## 第5節　大津屋について

本町の宿場街道沿いでは現在でも屋号が残されていることが多い。本調査区は地元では「大津屋」と呼ばれており、この土地がどのような変遷を辿ったのかについて触れておきたい。

長野原宿がいつできたのかは正確には分かっていないが、江戸時代初期には市場が置かれていたことは確かなようである。『長野原町誌』によると「中之条町一場氏所蔵一場文書によると、慶長十二年十二月御朱印伝馬（公用の伝馬）は沼田－平川戸－長野原次ぎであった。そのほかの宿駅においては継ぎ立をしてはいけないといっており、その当時長野原が公用伝馬の宿駅であった･･･江戸時代初期の経済は「領主中心の経済」であった。領主は沼田藩主である真田氏である。沼田藩は東西三十三里（一三二キロ）余、南北八里（三二キロ）余にわたる広漠な領域であったので、沼田市場に領主米を始めとして各種の生産物を集積することは不可能であり、･･･領主は各地に在市をこしらえて、城下町の出張所（支店）的性格のものとして育てた。･･･ある一

第7図　「長野原村壬申地券地引絵図」部分　群馬県立文書館所蔵（網掛けは今回調査した筆全体）

定の日時を定めて農民に一定の場所で商売を行なわせた。沼田領の在市としては、月夜野、中之条、大笹、原町、長野原の５カ所であったが･･･一年の内十二月の月しか立たなかった」とある。長野原は江戸時代初期には公用伝馬の宿駅であり、沼田領の在市として12月だけ市場が開催され、宿場機能がすでに備わっていたと理解してよいだろう。

その後、信州街道に３つの関所が置かれることとなり、町内では、狩宿新田に寛文４（1664）年、番所が開設された。これに伴い、狩宿新田に宿場町（狩宿宿）が形成された。この宿場は自然発生的にできたものではなく、人工的に計画されたため、既設の長野原宿はそのモデルの一つとなったことが考えられる。

江戸時代中期になると、元禄時代の経済の急成長により、貨幣経済が農村にも浸透し、商品作物の栽培が進んだといわれている。その流れは長野原にも及んでおり、これを契機として麻の栽培が活発になり、宿場も賑わっていたことが考えられる。そのような時代背景の中、天明３（1783）年に浅間山の大噴火に伴い発生した泥流により吾妻川流域はもとより、利根川流域にも甚大な被害が及び、長野原宿は壊滅的な被害を被ったことは前述のとおりである。

「大津屋」に関する文献資料は時間的な制約もあり収集することができなかったが、時代は移り変わり、最初に活字でみられるのが明治37（1904）年の『群馬県商業便覧』（第８図）である。右側の真ん中やや下に「旅館　長栄館　大津屋清次郎」とある。これとほぼ同じ頃の写真が第９図である。草津馬車会社の創立が明治31（1898）年で社長は長野原町初代町長の桜井伝三郎氏であった。渋川－草津間乗合馬車が開通し、町内での停留所は川原湯の敬業館、川原畑の茛屋、この大津屋の３箇所であった。天明の被害から120年余り経過しているが、旅館を経営し、馬車の停留所となっていたことが分かる。

時代が進み、馬車から自動車・鉄道へと移動手段が変化する。昭和２年に群馬自動車、昭和５年に吾妻自動車が誕生し、大正13（1924）年草軽電鉄の開業も加えて、吾妻地域の交通事

第８図　『群馬県商業便覧』（明治37年）

第９図　大津屋（明治時代末頃）

情は一変する。第 10 図は昭和 4 年の大津屋旅館で乗合自動車の発着所であった。この時も旅館を経営していたと思われるが、建物の東側が乗合自動車の発着所として分離されている。

さらに昭和 31 年には、乗合自動車発着所だったところが、映画館「文化劇場」（第 11 図）、昭和 45 年にはパチンコ店「文化ホール」（第 12 図）となり、現在に至っている。調査地点は建物東側のこの部分にあたり、調査前には建物は取り壊されていたが建物基礎は残されており、調査にあたって撤去した次第である。

以上のように現在残されている資料から調査地点の変遷を追ってみた。時代の流れに沿って、その土地の使われ方は変化しているが、家業は時代が古ければ古いほど引き継がれていると考えられる。現時点で最も遡った明治 37 年には「大津屋」は旅館と馬車の停留所であり、天明期以後に復興した第 9 図にみる外観は正に旅籠といっていいだろう。馬車が導入された背景には、明治 28（1895）年に当時群馬県議会議員だった野口茂四郎による道陸神峠の開削が大きく影響している。それまでは真田街道で道陸神峠・尾坂が難所とされており、人馬の通行がやっとであったことから物資の流れは信州街道の大戸経由で入ることが主だったようである。以上のことから、「大津屋」は天明期以前は長らく長野原宿で旅籠を経営し、荷馬の継ぎ立てをしていた可能性が高いといえよう。

出典：第 9~12 図：長野原町 1990『写真でつづる長野原町 100 年のあゆみ』

第 10 図　大津屋（昭和 4 年）

第 11 図　文化劇場（昭和 31 年）

第 12 図　文化ホール（昭和 45 年）

註

1．文献２。
2．主に下位・中位段丘で発見された天明泥流に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細については「マッピングぐんま　遺跡・文化財」（http://www2.wagmap.jp/pref-gunma/top/select.asp&npr=dtp=86/pl=3）で参照願いたい。本書では第３　表および本章にできるだけ最新情報を記載した。
3．現時点では発掘調査が平成31年度まで、整理調査・報告書作成が平成32年度までの予定である。
4．（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2004『新田西沢遺跡 新田平林遺跡』
5．前庭部においても２mにもおよぶ厚さの灰層が検出されており、獣骨や押型文土器が出土している。今後は岩陰部の灰層との関係の解明が注目される。また今年度、考古学研究室によりリサーチデザインを示した遺跡のパンフレットが作成された。
6．文献26。平成23年度に実施した坪井遺跡の第８次調査で縄文時代早期前半の土坑２基を検出したほか、包含層からも遺物が多く出土した。口縁部の外反が強いものが多く、撚糸文よりも縄文施文のものが主体的で井草式併行と考えられる。
7．文献８・51。
8．文献９。
9．文献31・136。
10．文献31。平成18年度に実施した町営林土地改良事業に伴う試掘調査でも上原Ⅱ遺跡で土坑を検出したが、この試掘結果をもとにほ区内の埋蔵文化財の取り扱いや発掘調査区域を確定し、平成23年度～25年度の３年間を発掘調査、平成26年度に報告書刊行した。
11．文献35。
12．文献３・46。
13．文献25。
14．文献137。その他は未報告。
15．文献８・11・52・74など。
16．文献39・42・44・47・50など。今年度から３カ年計画で整備事業を進めている。
17．註12と同じ。
18．文献７。
19．文献１。
20．中沢道彦　1998「「氷１式」の細分と構造に関する試論」『長野県小諸市氷遺跡発掘調査資料図譜』第三冊　氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
21．註10と同じ。
22．文献６。未報告資料が多くあり、今後資料紹介する予定である。
23．文献65。
24．註７・15と同じ。
25．註10と同じ。
26．註７・15と同じ。
27．註13と同じ。
28．文献１・２・37・38・40・43・44。
29．文献43。
30．嬬恋村教育委員会　1981『鎌原遺跡発掘調査概報　浅間山噴火による埋没村落の研究』
　　1994『埋没村落　鎌原遺跡発掘調査概報（よみがえる延命寺）』
　その他文献45・47・53など。
31．文献44・45。
32．文献13・77。かみつけの里博物館 2007『第16回特別展　江戸時代、浅間山大噴火』
33．本遺跡が包蔵地外であった時期の発見である。詳細な地点は第５図・第３表を参照。なお、「青面金剛塔」は雲林寺参道に安置されている。
34．文献１・２・17・20・37。
35．文献26。

## 参考文献（第３・４表の文献番号に対応）


番号

1. 長野原町　1976 『長野原町誌』上巻
2. 長野原町教育委員会　1990 『長野原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査－』長野原町理蔵文化財調査報告第１集
3. 長野原町教育委員会　1990 『クヌギⅡ遺跡』長野原町理蔵文化財調査報告第２集
4. 長野原町教育委員会　1992 『長畝Ⅱ遺跡　坪井遺跡』長野原町理蔵文化財調査報告第３集
5. 長野原町教育委員会　1995 『柳沢城跡』長野原町理蔵文化財調査報告第４集
6. 長野原町教育委員会　1996 『向原遺跡』長野原町理蔵文化財調査報告第５集
7. 長野原町教育委員会　1998 『滝原Ⅲ遺跡』長野原町理蔵文化財調査報告第６集
8. 長野原町教育委員会　2000 『坪井遺跡Ⅱ』長野原町理蔵文化財調査報告第７集
9. 長野原町教育委員会　2001 『鞍坪遺跡』長野原町理蔵文化財調査報告第８集
10. 長野原町教育委員会　2002 『町内遺跡Ⅰ』長野原町理蔵文化財調査報告第９集
11. 長野原町教育委員会　2003 『町内遺跡Ⅱ』長野原町理蔵文化財調査報告第 10 集
12. 長野原町教育委員会　2003 『町内遺跡Ⅲ』長野原町理蔵文化財調査報告第 11 集
13. 長野原町教育委員会　2005 『小林家屋敷跡』長野原町理蔵文化財調査報告第 12 集
14. 長野原町教育委員会　2004 『町内遺跡Ⅳ』長野原町理蔵文化財調査報告第 13 集
15. 長野原町教育委員会　2004 『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町理蔵文化財調査報告第 14 集
16. 長野原町教育委員会　2005 『町内遺跡Ⅴ』長野原町理蔵文化財調査報告第 15 集
17. 長野原町教育委員会　2006 『町内遺跡Ⅵ』長野原町理蔵文化財調査報告第 16 集
18. 長野原町教育委員会　2008 『町内遺跡Ⅶ』長野原町理蔵文化財調査報告第 17 集
19. 長野原町教育委員会　2009 『町内遺跡Ⅷ』長野原町理蔵文化財調査報告第 18 集
20. 長野原町教育委員会　2010 『町内遺跡Ⅸ』長野原町理蔵文化財調査報告第 19 集
21. 長野原町教育委員会　2010 『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』長野原町理蔵文化財調査報告第 20 集
22. 長野原町教育委員会　2011 『町内遺跡Ⅹ』長野原町理蔵文化財調査報告第 21 集
23. 長野原町教育委員会　2012 『町内遺跡Ⅺ』長野原町理蔵文化財調査報告第 22 集
24. 長野原町教育委員会　2012 『林宮原遺跡Ⅲ』長野原町理蔵文化財調査報告第 23 集
25. 東京電力株式会社群馬支店・長野原町教育委員会　2013 『山岸Ⅱ遺跡』長野原町理蔵文化財調査報告第 24 集
26. 長野原町教育委員会　2013 『町内遺跡Ⅻ』長野原町理蔵文化財調査報告第 25 集
27. 長野原町教育委員会　2013 『三平Ⅰ遺跡』長野原町理蔵文化財調査報告第 26 集
28. 長野原町教育委員会　2013 『町内遺跡XⅢ』長野原町理蔵文化財調査報告第 27 集
29. 長野原町教育委員会　2014 『町内遺跡XⅣ』長野原町理蔵文化財調査報告第 28 集
30. 東京電力株式会社群馬支店・長野原町教育委員会　2014 『滝原Ⅳ遺跡』長野原町理蔵文化財調査報告第 29 集
31. 長野原町教育委員会　2015 『林地区遺跡群』長野原町理蔵文化財調査報告第 30 集
32. 長野原町教育委員会　2016 『町内遺跡XⅤ』長野原町理蔵文化財調査報告第 31 集
33. 長野原町教育委員会　2017 『町内遺跡XⅥ』長野原町理蔵文化財調査報告第 32 集
34. 長野原町教育委員会　2018 『町内遺跡XⅦ』長野原町理蔵文化財調査報告第 33 集
35. 長野原町教育委員会　2018 『観奈遺跡』長野原町理蔵文化財調査報告第 34 集
36. 長野原町教育委員会　2019 『町内遺跡XⅧ』長野原町理蔵文化財調査報告第 35 集
37. 小池富治郎編　1936 『吾妻郡誌』吾妻教育学会
38. 山崎　一・山口武夫　1972 『吾妻郡城郭史』
39. 亀野新一　1972 『群馬県吾妻郡長野原町（群馬県指定史跡）勘場木遺跡』
40. 山崎　一　1978 『群馬県古城郭址の研究』上巻
41. 中　隆之　1979 『石畑遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
42. 群馬県　1988 『群馬県史』資料編Ⅰ
43. 群馬県教育委員会　1988 『群馬県の中世城館跡』
44. 長野原町教育委員会　1989 『長野原町の文化財』
45. 群馬県立歴史博物館　1995 第 52 回企画展『天明の浅間焼け』
46. 笠懸野岩宿文化資料館　1999 第 25 回企画展『群馬の注口土器展』
47. 上毛新聞社　1999 『群馬県遺跡大辞典』
48. 笠懸野岩宿文化資料館　2000 第 30 回企画展『利根川流域の縄文草創期』
49. かみつけの里博物館　2000 第 6 回特別展『鍋について考える』
50. 群馬県教育委員会　2001 『群馬の史跡（原始古代編）』
51. 笠懸野岩宿文化資料館　2004 第 39 回企画展『底の尖った土器』
52. 群馬県立歴史博物館　2004 第 77 回企画展『新発見考古遺報展　群馬発掘情報　石室の入り口を通り抜けると・・・』
53. 浅間縄文ミュージアム　2004 『浅間嬬大焼』
54. 群馬大学教育学部編　2004 『尾崎喜左雄博士　調査収集考古遺物・調査資料目録』雄山閣
55. （財）群馬県理蔵文化財調査事業団編　2005 『群馬の遺跡２縄文時代』
56. （財）群馬県理蔵文化財調査事業団編　2005 『群馬の遺跡７中世～近代』
57. かみつけの里博物館　2007 第 16 回特別展『江戸時代、浅間山大噴火』
58. 原田昌幸　2007 『日本の美術No495 縄文土器 草創期 早期』至文堂
59. 関　俊明　2010 『浅間山大噴火の爪痕－天明三年浅間山災害遺跡－』新泉社
60. （公財）群馬県理蔵文化財調査事業団編　2013 『自然災害と考古学』
61. 宮坂武男　2015 『信濃をめぐる境目の山城と館　上野編』戎光祥出版
62. 國學院大學考古学研究室　2017 『群馬県吾妻郡長野原町尻家以谷隠遺跡　2014 年度発掘調査報告書』 國學院大學文学部考古学実習報告　第 53 集
63. 関　俊明・諸田康成　1999 『天明三年浅間災害に関する地域史的研究』『研究紀要 16』（財）群馬県理蔵文化財調査事業団
64. 白石光男・山口逸弘　1999 『外輪原Ⅰ遺跡出土の縄文前期土器』『群馬考古学手帳９』群馬土器観会

65. 富田孝彦 2000 「外輪原Ⅰ遺跡出土の弥生土器」『群馬考古学手帳 10』群馬土器観会
66. 谷藤保彦・関根慎二・今井和久 2002 「群馬県内出土の縄文時代石製装身具集成」『研究紀要 20』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
67. 関根慎二 2003 「群馬県における加曽利Ｅ式土器の地域相」「第 16 回縄文セミナー 中期後半の再検討」縄文セミナーの会
68. 石田 真 2004 「群馬県北西部における陥し穴の構築時期をめぐって－長野原町の事例を中心として－」『研究紀要 22』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
69. 関 俊明 2005 「天明三年浅間山噴火災害遺跡の調査と成果」『日本歴史』吉川弘文館
70. 関 俊明 2006 「天明泥流はどう流下したか」『くんま史料研究』24 群馬県立文書館
71. 中央防災会議 2006 「1783 天明浅間山噴火報告書」 内閣府
72. 藤巻幸男 2007 「縄文時代中期の住居内施設について－横壁中村遺跡従書」「研究紀要 25』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
73. 谷藤保彦 2007 「加曽利Ｅ式の系統を引く土器群－北関東における後期初頭の様相－」「第 20 回縄文セミナー 中期終末から後期初頭の再検討」縄文セミナーの会
74. 関根慎二 2008 「浅間山を巡る縄文土器」「研究紀要 26』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
75. 山口逸弘 2009 「上ノ平遺跡 31 号住居跡出土土器の再検討」「研究紀要 27』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
76. 藤巻幸男 2009 「八ッ場ダム建設地域における調査遺跡一覧作成の試み－出土遺物総量把握の効用－」「研究紀要 27』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
77. 黒澤照弘・大西雅広 2009 「茨城県、栃木県、群馬県内の江戸後期における生産と流通」「江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 関東・東北・北海道編」
78. 山口逸弘 2010 「「勝坂系」土器に関する再検討」「研究紀要 28』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
79. 橋本 淳 2010 「中部地方における縄紋早期沈線紋土器の編年－八ッ場ダム関連遺跡出土資料の位置付け－」「研究紀要 28』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
80. 鈴木徳雄 2012 「堀之内式土器研究の諸問題－堀之内式の概観と周辺諸型式」「第 25 回縄文セミナー 縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会
81. 山口逸弘 2013 「吾妻川中流域における縄文時代中期後葉の土器様相－加曽利Ｅⅰ式古段階を中心として－」「研究紀要 31』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
82. 黒澤照弘 2012 「東宮遺跡－天明三年８月５日の様相－」「江戸遺跡研究会会報No.133』江戸遺跡研究会
83. 黒澤照弘 2013 「天明三年浅間山噴火災害と東宮遺跡」『月刊考古学ジャーナル (646)』ニュー・サイエンス社
84. 黒澤照弘 2013 「東宮遺跡における天明三年新暦八月五日の様相－調査成果から推測される天明泥流被害前の状況－」「研究紀要 31』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
85. 伊藤美香・小原奈津子・黒澤照弘 2013 「東宮遺跡出土の繊維遺物について」「研究紀要 31』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
86. 大塚昌彦 2014 「天明三年浅間泥流埋没遺跡の守護神と高崎秤座」『群馬県立女子大学第２期群馬学センターリサーチフェロー研究報告集』 群馬県立 女子大学群馬学センター
87. 山口逸弘 2015 「吾妻川中流域における「郷土式」の一様相－報告書「長野原一本松遺跡 (6)」を中心として－」「研究紀要 33』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
88. 小川卓也・宮田忠洋・向出博之 2015 「北関東地域における後期注口土器の様相」「第 28 回縄文セミナー 縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会
89. 藤巻幸男・嶋崎修一郎・能登健 2016 「群馬県長野原町横壁中村遺跡の中近世慰と同地区における両墓制の研究」「研究紀要 34』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
90. 山口逸弘 2016 「鹿歯状口縁曲隆線文土器について－「横壁類型」の提唱－」「地域考古学』地域考古学研究会
91. 大塚昌彦 2016 「天明三年浅間泥流下出土の守護神」『群馬文化』327 群馬県地域文化研究協議会
92. 谷藤保彦・論谷昌彦 2017 「群馬県内出土の石棒・石剣・石刀集成－縄文時代後期前葉以降－」「研究紀要 35』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
93. 鈴木徳雄 2018 「縄紋後期前半における土器型式の存立構造－関東信越地域の「型式と諸"類型"－」「地域考古学３号』地域考古学研究会
94. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998 「長野原久々戸遺跡』県道長野原草津口停車場線道路 (橋梁) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
95. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002 「長野原一本松遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第１集
96. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002 「八ッ場ダム発掘調査集成 (１)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第２集
97. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2003 「久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 報告書 第３集
98. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2004 「久々戸遺跡 (２)・中棚Ⅰ遺跡 (２)・西ノ上遺跡・上郷Ａ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第４集
99. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005 「横壁中村遺跡 (２)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第５集
100. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005 「川原湯勝沼遺跡 (２)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第６集
101. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 「横壁中村遺跡 (３)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第７集
102. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 「立馬Ⅱ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第８集
103. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 「上郷Ｂ遺跡 廣石Ａ遺跡 二反沢遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第９集
104. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 「横壁中村遺跡 (４)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
105. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 「立馬Ⅰ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
106. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007 「下原遺跡Ⅱ』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
107. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007 「三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集

108. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2007　『横壁中村遺跡（5）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第14集
109. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2007　『長野原一本松遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第15集
110. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008　『幸神遺跡・上原Ⅳ遺跡・山根Ⅲ遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第17集
111. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008　『楡本Ⅱ遺跡（1）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第18集
112. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008　『長野原一本松遺跡（3）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第19集
113. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008　『横壁中村遺跡（6）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第20集
114. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008　『横壁中村遺跡（7）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第22集
115. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008　『上ノ平Ⅰ遺跡（1）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第23集
116. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2008　『長野原一本松遺跡（4）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第24集
117. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2009　『立馬Ⅲ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第26集
118. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2009　『楡本Ⅱ遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第27集
119. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2009　『長野原一本松遺跡（5）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第28集
120. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2009　『横壁中村遺跡（8）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第29集
121. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2009　『横壁中村遺跡（9）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第30集
122. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2010　『横壁中村遺跡（10）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第33集
123. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2010　『横壁中村遺跡（11）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第34集
124. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2010　『東宮Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第35集
125. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2011　『東宮遺跡（1）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第36集
126. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2012　『横壁中村遺跡（12）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第37集
127. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2012　『東宮遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第38集
128. 群馬県・（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2012　『尾坂遺跡』社会資本整備総合交付金事業（活力創出基盤整備）長野原草津口駅舎整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第546集
129. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2012　『楡本Ⅰ遺跡　上原Ⅳ遺跡（2）　西久保Ⅳ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査　報告書　第39集
130. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2013　『長野原一本松遺跡（6）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第40集
131. （公財）人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2013　『横壁中村遺跡（13）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第41集
132. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2014　『長野原一本松遺跡（7）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第42集
133. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2014　『林中原Ⅰ遺跡　長野原城跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第43集
134. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2014　『横壁中村遺跡（14）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第44集
135. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2015　『町遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第45集
136. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2015　『上原Ⅰ遺跡　上原Ⅲ遺跡　林宮原遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第46集
137. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2016　『林中原Ⅱ遺跡（1）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第47集
138. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2016　『尾坂遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第48集
139. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2017　『上ノ平Ⅰ遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第49集
140. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2017　『上原Ⅲ遺跡（2）　久々戸遺跡（3）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第50集
141. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2017　『東宮遺跡（3）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第51集
142. （公財）人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省　2017　『下田遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第52集

143. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995　『年報 14』
144. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996　『年報 15』
145. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997　『年報 16』
146. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998　『年報 17』
147. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999　『年報 18』
148. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2000　『年報 19』
149. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001　『年報 20』
150. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002　『年報 21』
151. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003　『年報 22』
152. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2004　『年報 23』
153. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005　『年報 24』
154. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006　『年報 25』
155. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007　『年報 26』
156. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008　『年報 27』
157. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2009　『年報 28』
158. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2010　『年報 29』
159. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2011　『年報 30』
160. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2012　『年報 31』
161. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2013　『年報 32』
152. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2014　『年報 33』
163. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2015　『年報 34』
164. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2016　『年報 35』
165. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2017　『年報 36』
166. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2018　『年報 37』
167. （公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・長野原町教育委員会　2018　『発掘された八ッ場の軌跡』

# 第３章　検出された遺構と遺物

## 第１節　遺　構

### A　概　要

本調査で検出された遺構は７号溝を除き、近世江戸期以前の所産である。調査区からは礎石建物跡１棟、井戸跡１基、屋外炉跡１基、畑跡（畝畑）３枚、土坑１基、溝状遺構７条、道路状遺構１条が検出されている。調査地点は旧長野原宿のほぼ中央に位置し、街道沿いの旅籠と考えられる建物跡とその裏庭の一部にあたる。

上記遺構は 1783（天明３）年に浅間山の大噴火に伴い発生した泥流堆積物にパッキングされた状態で検出された。調査は道路敷設および橋台部埋設を原因としているため細長い調査区であったうえに、現表土から深いところで２m近く泥流（砂質土）で埋もれていたため、困難を極めた。特に第１次調査では台風で調査区壁が崩落し、調査区域を確保することに努めた。

### B　各　説

#### １）礎石建物跡

**１号礎石建物跡**（図版１～ 16・30 ～ 52・56 ～ 67・78 ～ 98）

**位　　置**　調査区北西隅。１号井戸跡の西側、４号溝跡・５号溝跡・１号道路の北側。

**検出状況**　第１次・第３次調査区に跨がって検出された。周辺遺構と比べても調査区の中でも標高が高く、およそ長方形の基壇を造成した上に建物が建っていたことが判明した。建物内部には軽石の堆積は認められず、泥流を除去していく過程で礎石の間に建築部材や各種製品が折り重なるように検出された。

**重複関係**　なし。

**遺存状態**　部分検出であるが遺存状態は良好である。

**規　　模**　東西間口 4.95 m以上、奥行き 2.92 m以上。

**主軸方位**　東西Ｎ－ 74°－Ｗ、南北Ｎ－ 16°－Ｅ。

**概　　要**　礎石建物跡である。検出範囲は建物の南東隅にあたる。調査区が敷地の約３分の１であることや宿場街道に面した宿屋を経営していたことを前提とするならば、建物はさらに西側、北側へ延び、間口 12 間程、奥行き６～７間程の建物が想定される。上述したように建物は基壇上に構築されており、その標高は 605.9 m、その一段下である１号井戸周辺や建物南側の階段状テラス部分が標高 605.6 mを測る。今回の検出範囲はザシキとダイドコロの一部であり、概ね第１次調査区が前者、第３次調査区が後者にあたる。礎石はＳ１～Ｓ 15 まで検出されているが、礎石に使用される石は扁平な輝石安山岩で比較的大振りである。本建物の特徴としてザシキとダイドコロの礎石列に喰い違いが認められることと桁行方向と梁間方向の柱間が異なることを挙げることができる。Ｓ１～Ｓ５がザシキの礎石列、Ｓ７～Ｓ 11 がダイドコロの礎石列で 54㎝（1.8 尺）の喰い違いが見られる。またザシキの桁行方向の柱間が約 1.6 m（約 5.3 尺）なのに対して梁間方向が推定で 2.7 m（1.5 間）、ダイドコロの桁行方向の柱間が 1.15 m（3.5 尺）なのに対して梁間方向が約 1.9 m（約１間）である。すべての礎石が検出できたわけではなく、Ｓ６のように梁間方向に相対する礎石が見当たらないものも存在する。建物周りではダイドコロの東側と南側で礎石列が存在し、勝手口や下屋などが想定される。施設としては、ザシキで囲炉裏、ダイドコロで竈が検出されている。

**囲 炉 裏**　Ｓ２とＳ３の間でＳ１寄りに位置する。確認面では薪の下から灰層が東西 110㎝×南北 115㎝の範囲で分布し、囲炉裏の枠木が３本検出されている（図版８・60）。２本はやや東側へ、１本は北東側へ大き

くずれて調査区壁際で検出されている。枠木を復元すると内法で 89㎝角であり、灰の分布と併せると元々の枠木の位置が復元できる。灰層は約 10㎝の厚さを有し、炭化材を多く含みとても堅固であった。掘り込みは東西に長軸を有するおおよそ隅丸長方形を呈しており、実際の使用面を考えると南北・西側の掘り込み面は枠木と一致するのに対して東側の掘り込み面が枠木を大きく越えている。掘り込みの規模は長軸 138㎝、短軸 120㎝、確認面からの深さは 20㎝を測る。掘り方はさらに大きく、長軸 169㎝、短軸 147㎝、確認面からの深さは 45㎝を測る。灰層は検出面から上面・上層・下層・最下層の 4 層をサンプリングし、各種自然科学分析の試料とした（詳細は第 4 章第 2 ～ 4 節参照）。

**竈**　ダイドコロの建物南壁際に位置する。泥流除去後に確認面では山砂混白色粘土と石の集積が確認された。粘土は東西 1.2 m、南北 1.74 m の範囲で分布していた。焚口の掘り込みは東西約 50㎝を測り、Ｓ８とＳ９のラインが建物壁ならば、南北方向は壁から 70㎝、確認面（土間）からの深さは約 15㎝を測る。焼土や灰はそれほど顕著ではなかった。火床はＳ９の西側に凹状の石積で焼土が集中する箇所が見られたが、断ち割りラインから外れていたため、写真での記録に留まった。なお、煙り出しと思われる縦位の土層堆積が認められている。掘り方は 1 次・3 次調査区に跨っており、1 次調査区側は推定だが、平面形は不整楕円形を呈し、長軸 216㎝、短軸 182㎝、床面からの深さは 48㎝を測る。

**遺物出土状況**　遺物のほとんどが本建物から出土している。特に第 1 次調査区はザシキ部分にあたり、建築部材と木製品等が重なりあうようなかたちで出土した。囲炉裏では枠木や薪の他、陶磁器類では瀬戸美濃系碗（図版 30-1）と肥前染付碗（図版 30-7）が完形に近いかたちで出土している。木製品類は漆器蓋（図版 40-83）、曲物（図版 40-85 ～図版 42-89）、膳（図版 42-90 ～ 43-93）、箱物（図版 43-96 ～ 44-99）、桶（図版 44-101・45-104）などの食膳具・容器類、横櫛（図版 46-106・107）などの服飾具、茶筅（図版 46-109）や団扇（図版 46 - 111）、竹籠の口縁（図版 48-121）等の竹製品が出土している。金属製品では茶釜（図版 51-146）に柄杓（図版 40-85）が入った状態で出土している他、火打金（図版 50-145）、寛永通宝（図版 51-150 ～ 153）、も出土している。石製品では、砥石（図版 52-158）、火打石（図版 52-159）が出土している。一方、第 3 次調査区はダイドコロ部分にあたり、竈周りで少ないながら遺物の出土が認められた。陶磁器類では内野山諸窯皿（図版 30-12）や陶器人形（図版 30-20）、木製品類では横櫛（図版 46 - 108）、金属製品では鉄釘（図版 50-140・141）、銅板状の飾り金具（図版 50-142）、石製品では粉挽臼（図版 52-157）が出土している。また建物南側の階段状テラスから 1 号道にかけての調査区壁で建物の土台が滑り落ちたように斜めに浮いた状態で泥流中より検出されている（図版 63-8）。

**遺　物**　総出土量は陶磁器類 25 点（6.81％）、木製遺物 310 点（84.47％）、金属製品 14 点（3.82％）、石製品 8 点（2.18％）、植物遺体 10 点（2.72％）の合計 367 点である。木製遺物の内訳は建築部材 190 点、木製品 84 点、竹製品（材含む）17 点、その他の木製部材 19 点である。そのうち陶磁器 10 点、建築部材 40 点、木製品（竹製品含む）39 点、金属製品 15 点、石製品 8 点を図示し得た。

## 2）井 戸 跡

### 1 号井戸跡（図版 1 ～ 6・17・18・30・33・35 ～ 40・44 ～ 50・67・68）

**位　置**　調査区北側。1 号礎石建物の跡東側、5 号溝跡の北西側。

**検出状況**　泥流堆積土を除去していく過程で 1 号礎石建物跡の東側に 5 号溝跡に区画された空間が確認され、礫の集積とその中心部に円形に近い泥流の堆積が検出された。

**重複関係**　なし。

**遺存状態**　北側は巨石と調査区壁沿いで掘り方のラインを把握することはできなかったが、遺存状態は良好である。

**規　模**　上面で直径 125 ～ 130㎝、底面で約 100㎝、確認面からの深さは 1 号建物側で一番深く 154㎝、その反対側で 110㎝を測る。

**主軸方位**　東西N－63°－W、南北N－35°－E（上屋）。

**概　　要**　東隣りとの共同の井戸であろう。井戸周囲に配置された比較的大振りなＳ１～Ｓ６の礫のうちＳ１・Ｓ３・Ｓ６には柱（13～14㎝角：4.5 寸角）が載っていた痕跡が確認され、軽石の分布状況と併せて考えると上屋があったことが判明した。柱間は 125㎝（4.13 尺）で、屋根は東西で 265㎝の大きさを測る。１号建物からはダイドコロ（土間）から井戸への勝手口があり、高さがある替わりに足掛け石が２石認められる。東隣り側からは１号建物側と比べると一段低くなっており、さらに５号溝は陸橋となっている。井戸を構成する石は大きさにバラツキがあるものの横長の河原石を多用しており、やや外傾しながら 10 段位積み上げている。積み方は長辺を水平に積む平積みである。

**その他の施設**　なし。

**遺物出土状況**　遺物は１号礎石建物跡・５号溝跡に次いで出土している。井戸の中からは木製遺物が多く出土しているが、５号溝跡に区画された井戸周辺でも遺物の出土が認められた。井戸からは、肥前系染付皿（図版 30-14）、メンパ（図版 40-84）の中に杓文字（図版 46-112）が入った状態で出土している。この他に桶の側板（図版 44－100・45-105）や杭（図版 37-67・68）、包丁（図版 50-144）も泥流中から出土している。

**遺　　物**　総出土量は陶磁器片１点（3.85％）、木製遺物 24 点（92.3％）、金属製品１点（3.85％）の合計 26 点である。木製遺物の内訳は建築部材４点、木製品 13 点、竹製品（材含む）４点、その他の木製部材３点である。そのうち陶磁器１点、建築部材４点、木製品７点、竹材２点、その他の木製部材３点、金属製品１点を図示し得た。

### ３）屋外炉跡

#### １号炉跡（図版１～３・６・19・20・30・69・70）

**位　　置**　調査区南側。１号畑跡の南側、７号溝跡の北側。

**検出状況**　泥流堆積物を除去していく過程で、部分的に被熱した壁土（ローム）および暗褐色・黄褐色粘質土が東西 2.4 m×南北 3.0 mの範囲で分布している状況を検出した。また壁土上にはブロック状に軽石の分布も認められた。

**重複関係**　明確ではないが、1-2 号畑跡と接しており、重複関係は不明である。

**遺存状態**　焚口部分が南西方向の調査区外に延びており、全体像は不明だが遺存状態は良好である。

**規　　模**　（本体内部）長軸 116㎝以上、短軸 75㎝、高さ 60㎝。（火床部）長軸 80㎝、短軸 30㎝、深さ 12㎝。（本体石組）長軸 150㎝以上、短軸 126㎝。（掘り方）長軸 225㎝、短軸 212㎝以上。

**主軸方位**　Ｎ－30°－Ｅ。

**概　　要**　調査時から総称して炉跡としていたが、構造的には屋外の竈跡または窯跡である。竈としては規模が大きいため、窯跡として報告する。サブトレを設定し、一部切石を検出したが、本体の軸とずれており、ベルトを再設定した。このサブトレにより、本体の位置や本体周辺には純度の高い壁土（ローム）が使用されており、酸化還元が認められること、図版 19・20 で１・２層とした暗褐色・黄褐色粘質土が壁土（ローム）とともに本体の被覆に使用されていた可能性が高いことが明らかとなった。本体は細長い安山岩質の切石を用いて組んでおり、基底部は凹形に組み、火床部としている。上屋はあったと考えられるが、周辺で検出されたピットや礫から想定は難しい。本体南側で検出された溝状の窪みが柱等の倒れ込んだ痕跡と考えられなくもない程度である。本体内部での泥流の混入は認められなかったことから被災時に本窯跡が機能していたのかどうかの判断も難しい。いずれにせよ天明期以前の所産であることは確かであろう。

**その他の施設**　なし。

**遺物出土状況**　遺物は少なく、疎らな出土であった。

**遺　　物**　総出土量は陶磁器片２点、石製品２点の合計４点である。そのうち 陶磁器片１点（図版 30-13）を図示し得た。

4）畑跡・平坦面

1号畑跡（図版1～3・6・21／第4表）

**位　　置**　調査区中央南側。

**検出状況**　上面はいくつかの建物により攪乱を被っているため泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、泥流堆積物を除去していく過程で、現表土から最深180㎝で畑面を検出した。泥流と畑面の間には全体的にAs-A軽石で覆われている状況であった。畑面は北東から南西に向けて0～1°の勾配でほぼ平坦であり、当時の斜面の様子が確認された。

**重複関係**　1号溝跡・2号溝跡・6号溝跡・1号土坑跡・1号炉跡と重複し、前3者を切り、後2者に切られている。

**規　　模**　最大長15.5 m、最大幅5.4 m、検出面積58.6㎡を測る。

**遺物出土状況**　遺物は少なく、畑面で土化した木材片が散乱している状況が確認されている以外は、陶磁器片5点のみの出土である。

**単 位 畑**　2枚の単位畑のみの検出である。

① 1-1号畑跡

**位　　置**　前述と同じ。1-2号畑跡の北側。

**遺存状況**　良好。

**規　　模**　検出長9.2 m、最大幅5.3 m、検出面積30.7㎡を測る。畝幅0.49 m。

**畝サク方向**　N－70°－W

**畝サク断面形状**　関氏の2類。サブトレ（図版21）で確認したが、As-A降下前に1番ザクと2番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。

**泥流によるキズ痕**　明確なキズ痕は確認されていないが、畑面で礫が散見された。

**作物遺存体・株痕**　作物遺存体は若干認められる程度である。株痕の検出は今回実施しなかった。

**平 坦 面**　1箇所。1-1号平坦面（図版21）。

① 1-1号平坦面

**位置**　1-1号畑跡の上端付近中央。

**遺存状況**　遺存状態は良好である。

**形状**　平面形は円形を呈している。

**規模**　0.5㎡を測る。

**周溝**　なし。

**比高**　山側は畝、川側は畝の方が低い。

② 1-2号畑跡

**位　　置**　前述と同じ。1-1号畑跡の南側。

**遺存状況**　不良。

**規　　模**　検出長5.9 m、最大幅5.4 m、検出面積27.9㎡を測る。畝幅0.45 m。

**畝サク方向**　N－72°－W

**畝サク断面形状**　1-1号畑跡と違い、畝サクが不明瞭である。被災時は休耕畑であった可能性が高い。

**泥流によるキズ痕**　明確なキズ痕は確認されていないが、畑面で礫が散見された。

**作物遺存体・株痕**　作物遺存体・株痕ともに認められなかった。

**平 坦 面**　なし。

### 2号畑跡（図版1・5・6・22／第4表）

**位　　置**　調査区北側東壁沿い。5号溝の南側。

**検出状況**　第3次調査区の南側半分にあたり、As-A 軽石は散見されるが、畝サクは確認されていない。2-1号平坦面の検出により畑と判断した。上面はいくつかの建物により攪乱を被っているため泥流のプライマリーな堆積状況は不明だが、現表土から最深270㎝で畑面を検出した。畑面は北東から南西に向けて3°の勾配で傾斜しており、当時の斜面の様子が確認された。

**規　　模**　最大長6.8 m、最大幅6.4 m、検出面積18.8㎡を測る。

**遺物出土状況**　2-1号平坦面で植物遺体（種実）1点が出土したのみである。種実はモモ核であることが判明している（第4章第2節参照）。

**単 位 畑**　1枚の単位畑のみの検出である。

① 2-1号畑跡

**位　　置**　前述と同じ。

**遺存状況**　不良。

**規　　模**　前述と同じ。

**畝サク方向**　不明。

**畝サク断面形状**　不明。

**泥流によるキズ痕**　畑面に礫が多く認められ、その礫により数箇所の凸凹が確認されている。

**作物遺存体・株痕**　作物遺存体・株痕ともに認められなかった。

**平 坦 面**　1箇所。2-1号平坦面（図版21）。

① 2-1号平坦面

**位置**　2-1号畑跡の上端付近中央。

**遺存状況**　調査区外に延びており全体の約4分の3の検出で、遺存状態は良好である。

**形状**　平面形は円形を呈していると考えられる。

**規模**　現状で1.2㎡、復元1.8㎡を測る。

**周溝**　全周する。

**比高**　山側は畑面より低く、川側は同じ位置である。

第4表　町遺跡　畑跡・平坦面一覧

＊尺換算は曲尺：1尺＝10/33 mを用いた。面積は1歩＝6尺平方で算出。

| 畑名 | 単位畑名 | 単位畑 面積（㎡） | 単位畑 反・畝・歩 | 単位畑 斜度（°） | 単位畑 畝幅（m） | 単位畑 相当尺寸（尺） | 畑面積 畑面積（㎡） | 畑面積 反・畝・歩 | 畑断面 | 平坦面 平坦面 | 平坦面 面積（㎡） | 平坦面 形状 | 平坦面 溝 | 平坦面 窪み | 平坦面 形状 | 平坦面 比高 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1-1 | (30.7) | ・・9 | 0 | 0.49 | 1.6 | (234.7) | ・・17 | 2類 | 1-1 | <3.3>(2.1) | 円 | | ／ | — | ↑ |
| | 1-2 | (27.9) | ・・8 | 1 | 0.45 | 1.5 | | | 2類 | 1-2 | — | — | — | ／ | — | — |
| 2 | 2-1 | (18.8) | ・・6 | 3 | — | — | (18.8) | ・・6 | — | 2-1 | <1.5>(2.1) | 円 | ○ | ／ | — | ↑ |

## 5）土坑跡

### 1号土坑跡（図版 22・73）

**位　　置**　調査区中央。2号溝跡の南側。

**検出状況**　1-1 号畑跡を精査中に検出された。

**重複関係**　1-1 号畑跡・6号溝跡と重複しており、これを切っている。

**遺存状態**　良好。

**平面形と規模**　平面形は円形を呈し、規模は長軸 94㎝、短軸 83㎝、確認面からの深さ 14㎝を測る。

**長軸方位**　N－21°－E

**概　　要**　天明以後の土坑である。

**遺物出土状況**　数点出土している。

**遺　　物**　総出土量は陶磁器片 1 点、木製部材 4 点、竹材 1 点の合計 6 点である。そのうち陶磁器片 1 点（図版 9）を図示し得た。

## 6）溝状遺構

### 1号溝跡（図版 23・74）

**位　　置**　調査区南側。1-1 号畑跡の南側、1 号炉跡の北側。

**検出状況**　1-2 号畑跡を精査中に調査区を東西に横断して検出された。

**重複関係**　1-2 号畑跡と重複しており、これに切られている。

**遺存状態**　良好。

**規　　模**　検出長 4.84 m、最大幅 1.16 m、確認面からの最深 0.09 mを測る。

**走行方向**　N－88°－E

**概　　要**　1-2 号畑跡と重複し、本溝埋没後に畑が耕作されている。天明以前の溝であり、1 次調査南側調査区の東壁沿いのサブトレで確認すると溝幅は約 4.2 m、深さは畑面から 48㎝を測る。また本溝から自然流木が確認されている。

**遺物出土状況**　なし。

**遺　　物**　なし。

### 2号溝跡（図版 24・27・28・71・74）

**位　　置**　調査区中央。

**検出状況**　泥流堆積物を除去して天明面を精査中に調査区を横断するかたちで検出された。

**重複関係**　3 号溝跡・6 号溝跡、1-1 号畑跡と重複し、前者を切り、後者に切られている。ただし溝底面に軽石が帯状に堆積していることから、被災時に北側部分は溝として機能していたと考えられる。

**遺存状態**　良好。

**規　　模**　検出長 2.7 m、最大幅 2.3 m、確認面からの最深 0.09 mを測る。

**走行方向**　N－127°－E。

**概　　要**　天明以前から機能していた溝と考えられる。

**遺物出土状況**　なし。

**遺　　物**　なし。

### 3号溝跡（図版 24・28・39・86）

**位　　置**　調査区中央。

**検出状況**　泥流堆積物を除去していく過程でP1周辺の空間を囲繞するような在り方で検出された。
**重複関係**　2号溝跡・4号溝跡と重複し、前者に切られ、後者を切っている。
**遺存状態**　良好。
**規　　模**　検出長4.04 m、最大幅0.34 m、確認面からの最深0.05 mを測る。
**走行方向**　東西N－73°－W、南北N－163°－W。
**概　　要**　1号礎石建物跡から1号道跡で南下した場所にあたり、小屋状の施設があった可能性もある。南側には3号溝跡の東西軸と並行する軽石の帯状堆積が認められ、片屋根から落ちたように見えなくもない。3号溝と2号溝でとり囲まれた空間にはピットが1基検出されている。平面形は不整楕円形を呈しており、長軸85㎝、短軸63㎝、確認面からの深さ18㎝を測る。
**遺物出土状況**　溝からの出土はないが、囲繞した空間からは少量認められており本遺構出土遺物とした。
**遺　　物**　総出土量は陶磁器片3点、竹材1点の合計4点であるが、図示するには至らなかった。

### 4号溝跡（図版24・25・28・36～38）

**位　　置**　調査区北側～中央西壁沿い。
**検出状況**　泥流堆積物を除去していく過程で1号道跡に沿って検出された。
**重複関係**　3号溝跡と重複し、これに切られる。
**遺存状態**　良好。
**規　　模**　検出長6.66 m、最大幅0.86 m、確認面からの最深0.06 mを測る。
**走行方向**　N－160°－W。
**概　　要**　5号溝跡とともに1号道跡の側溝である。走行状況から6号溝跡と同一であった可能性がある。
**遺物出土状況**　遺物は少なく、溝から疎らな出土が認められた。
**遺　　物**　総出土量は陶磁器片1点、建築部材1点、木製部材2点、鉄サイ1点の合計5点である。そのうち建築部材（角材）1点（図版36-63）、木製部材（杭）2点（図版37-70・38-73）を図示し得た。

### 5号溝跡（図版25・26・28・36・37・45・47・52・75・76）

**位　　置**　調査区北側～中央。
**検出状況**　第1次・第3次調査区に跨がって検出されている。第1次調査では1号道跡に沿って検出され、第3次調査では1号礎石建物跡・1号井戸跡の空間と2号畑跡を区切るかたちで検出されている。2箇所で陸橋が認められている。
**重複関係**　なし。
**遺存状態**　良好。
**規　　模**　検出長約14.0 m、最大幅1.34 m、確認面からの最深0.48 mを測る。陸橋は2箇所。そのうちの1箇所は幅0.63 m。
**走行方向**　東西N－136～170°－W、南北N－83～108°－E。
**概　　要**　本調査区で主要な区画溝である。調査区北東隅は陸橋となっており、1号井戸跡の屋根と並行して（N－136°－W）流下し、1号井戸跡南側をとり囲みながら（N－108°－W）、2つ目の陸橋（N－85°－W）へ辿り着く。陸橋をこえると1号礎石建物跡のテラスに沿って緩く方向を変えて（N－83°－W）、1号道跡の東側側溝となり南下する（N－170°－W）。
**遺物出土状況**　建築部材のほか、種実や編組製品などの植物遺体が多く出土している（図版5・28・76）。これら植物遺体は各種自然科学分析の試料とした（第5章第1・2・5・6節参照）。
**遺　　物**　総出土量は陶磁器片4点、木製品1点、竹材5点、その他木製部材5点、石製品2点、植物遺体12点の合計29点である。そのうち、建築部材1点、木製品2点、竹材1点、石製品2点を図示し得た。

### ６号溝跡（図版 24・27・28・71・74）

**位　　置**　調査区中央西壁沿い。

**検出状況**　泥流堆積物を除去していく過程で南北に走行する溝の一部が検出された。

**重複関係**　２号溝跡・１号畑跡・１号土坑跡と重複し、これらに切られている。

**遺存状態**　南側は攪乱を被り、走行方向が分からなくなっているが、遺存状態は良好である。

**規　　模**　検出長 5.8 m、最大幅 0.86 m、確認面からの最深 0.11 mを測る。

**走行方向**　N－161°－W。

**概　　要**　天明以前の溝である。走行状況から６号溝跡と同一であった可能性がある。

**遺物検出状況**　なし。

**遺　　物**　なし。

### ７号溝跡（図版 23・77）

**位　　置**　調査区南端。

**検出状況**　泥流堆積物を除去していく過程で東西に走行する溝が検出された。

**遺存状態**　調査区外に延びており、部分検出であるが遺存状態は良好である。

**規　　模**　検出長 1.8 m、最大幅 1.0 m、確認面からの最深 0.25 mを測る。

**走行方向**　N－98°－E。

**概　　要**　調査時には後世の攪乱として取り扱っていた溝である。河川改修前には川沿いに道があったということから側溝の可能性があると考えて掲載した。覆土に近現代の廃棄物が混入していたことから天明期以後の所産である。

**遺物出土状況**　なし。

**遺　　物**　なし。

## ７）道路状遺構

### １号道跡（図版 29・75）

**位　　置**　調査区北側～中央。１号礎石建物跡の南側、３号溝跡の北側。

**検出状況**　１号礎石建物跡南側のテラスが一番拡がる部分に接続して４号溝跡・５号溝跡に挟まれるかたちで検出された。テラス部では確認されなかったが、軽石が２㎝厚で堆積していた。

**重複関係**　３号溝跡と重複し、これに切られる。

**遺存状態**　良好。

**規　　模**　検出長 6.7 m、最大幅 1.67 mを測り、約５°の勾配を有する。

**主軸方位**　N－162°－W。

**概　　要**　１号礎石建物跡から裏庭へ通じる道である。テラスの幅が最も拡がる箇所に接続する。建物面・テラス・１号道へと約 30㎝の比高差をもって階段状となっており、４号溝跡・５号溝跡を側溝としている。明確な硬化面は未検出である。

**遺物出土状況**　なし。

**遺　　物**　なし。

## 第2節　遺　物

### A　概　要

出土遺物は陶磁器類・木製遺物・金属製品・石製品・植物遺体に大別される。陶磁器類 65 点（8％）・木製遺物 554 点（66％）・金属製品 25 点（3％）・石製品 20 点（2％）・植物遺体 174 点（21％）で、出土遺物総数は 838 点に及ぶ。そのほとんどが 1 号礎石建物跡からの出土であり、遺構外からの出土遺物も 1783（天明 3）の浅間泥流による 1 号礎石建物跡からの流入と思われる遺物が多く、出土遺物のほとんどが近世の所産となる。

### B　各　説

#### 1）陶磁器類（図版 30・78）

1 ～ 3 は瀬戸美濃系碗で、2 は柳茶碗、3 は底部のみの残存であるが尾呂茶碗か丸碗と思われる。4 は京信楽系碗で体部外面に文様が描かれる。5・6 は陶胎染付碗である。7 ～ 10 は肥前系染付碗で、7 の見込みには蛇の目釉剥ぎの技法が見られ、8 の外面には雪輪草花文が表現される。11 ～ 13 は陶器皿で 11 は瀬戸美濃系志野菊皿、12 は内野山諸窯皿、13 は瀬戸美濃系の皿である。14 は肥前系染付皿で、見込みには蛇の目釉剥ぎが施され、中央部には 5 弁花のコンニャク印判が押される。15 は京信楽焼系の灯火皿で口縁部外面には炭化物が付着している。16 は肥前系香炉でやや外向きに開く。17 は瀬戸美濃系香炉で直立気味に開く。18 は擂鉢で内面には擂目が施される。19 は在地産の内耳土器で、中世の所産である。20 は越後獅子の陶製人形である。型合わせによる成 形で右目付近と胸付近に緑釉を流しかけている。

#### 2）木製遺物（図版 31 ～ 49・79 ～ 95）

木製遺物は本遺跡において最も出土比率の高い遺物である。本項では木製遺物を a）建築部材・b）木製品・c）その他の木製遺物に大別し、報告を行う。a）建築部材では、床や天井、建具で使用されていたと考えられる板材を中心に解説するが、そのうち杭や竹材は厳密に言えば建築部材ではないが、木製部材として取り扱う。b）木製品では、曲物・箱物等の容器や櫛・団扇等の生活で用いられた道具を中心に取り扱う。また、用途がはっきりしていない木釘穴をもつ板材等は木製品部材として取り扱う。その他、薪（燃料材）は c）その他の木製遺物とした。

#### a）建築部材

21 ～ 23 は 1 号礎石建物跡内の囲炉裏付近から出土した囲炉裏枠である。4 辺で火床を囲む囲炉裏枠であるが、出土が確認された木枠はこの 3 点のみである。22・23 の木枠には両端に切り欠きがあるが、21 の木枠には片方の端部にしか切り欠きがない。このことから木枠は組み合わせた際に口の字に閉じるものではなく、一部を灰掻きのために意図的に空けた造りとなっていたと推定され、4 本目の木枠は他の木枠よりも短いものであったと考えられる。

24 ～ 59 は板材である。欠損や変形、変質により用途のはっきりしないものが多いが、板状に成形されていることから、床板・天井板・建具などの建築部材である可能性が高い。出土した板材は、厚いものから A 類（厚さ 1.3cm 以上）、B 類（厚さ 1.0cm ～ 1.3cm 未満）、C 類（厚さ 0.7 ～ 1.0cm 未満）、D 類（厚さ 0.4cm ～ 0.7cm 未満）、E 類（厚さ 0.4cm 未満）の 5 つに分類し、厚さの分布を確認した。その結果、A 類が 9％、B 類が 21％、C 類が 16％、D 類が 41％、E 類が 13％であった。D 類（0.4 ～ 0.7cm 未満）が最も出土率が高いことが分かり、次いで B 類（1.0 ～ 1.3cm 未満）の出土率が高かった。これを踏まえて出土板材について考察してゆきたい。

24 ～ 27 は、A 類に属する厚さ 1.3cm 以上の厚手の板材である。同程度の厚さの板材が少ないことから、床板・天井板である可能性は低いが、チョウナによる加工痕や成形が観察でき、建築部材の一部と判断した。いずれも表面は鉋により加工されている。A 類の樹種はマツ属が多く使用されている。

28 ～ 35 は、B 類に属する厚さ 1.0cm ～ 1.3cm 程の板材である。出土した板材の厚さの分布を見ると、D 類に次いで B 類の厚さ 1.0cm ～ 1.3cm の出土率が高いことが分かる。さらにその中でも厚さ 1.0cm の遺物が最も多く出土している。このことから当時の床板等に使用された板材の規格が 1.0cm 前後であったことが推察される。また、図示した遺物はすべて 1 号礎石建物からの出土であり、これらが 1 号礎石建物に伴う部材であったであったと想定できる。なお、厚さ 1.0cm ～ 1.3cm 前後の板材は欠損により長さが判明するものは皆無であった。B 類の樹種はクリなどが用いられている。

36 ～ 46 は、C・D・E 類に属する厚さ 1.0cm 未満のやや薄手の板材をまとめた。厚さ 1.0cm 未満の板材の中では、厚さ 0.5cm の板材が突出して多く出土している。こちらも B 類と同じく、部材の規格であったと推定できる。C・D・E 類の樹種はマツやスギなど多種にわたる。

47 ～ 59 は面取り加工や切り欠きをもつ板材をまとめた。49 は面取り加工が観察できるほか、円状の圧痕があり、椀とともに埋没していたことが推察される。52 は片側側面に面取り加工が施され、ケビキ線や刃物痕が観察できる。53 ～ 55 は切り欠きをもつ遺物で、53 は相欠き加工が施される。55 の先端に枘があり、木を組み合わせたものと思われる。

60 ～ 66 は角材とした。60 ～ 63 は棒状で断面が四角形を呈する。面取り加工をされるものが見受けられるが用途は不明である。64・65 は欠損のため長さは不明であるが、一定の法量を有し、根太や束である可能性が高い。66 は柱材の端材のようであるが、出土状況より同じ規格のものが重なっていたようである。束の代用と考えられる。

67 ～ 76 は杭である。長さにはばらつきがあるがいずれも棒状であり、先端が斜めに加工され地部が尖る。68・72 は樹皮が残存していた。

77 ～ 82 は竹材の遺物をまとめた。77 は全周する竹の両端部が切断されている。78 ～ 81 は竹を縦に分割した材を利用している。いずれも先端が切断されているが、欠損箇所が多く、用途は不明である。土壁に用いられた小舞の可能性がある。82 は細長く加工された竹である。出土状況から桶などのタガであろう。

### b）木製品

83 は漆器の蓋である。内外面ともに赤漆が塗られるが、口縁部のみ黒漆が施される。天部には黒色で文字が書かれているが欠損により判読は不能である。

84 ～ 89 は曲物である。84 はメンパで、側面に「七」の焼印が押される。底板の裏面にも焼印が押されるが判読は不能である。側板と同じであろうか。側板と底板にはともに 3 箇所の木釘穴が確認できる。85 は柄杓である。図版 51-146 の茶釜とともに出土している。木釘穴の位置から、柄部を合部に貫通させ固定していたものと考えられる。合部は木皮で綴じられている。86・87 は出土位置から同一個体の可能性が高い。86 は側板で大きさから櫃と推定した。桜の皮綴じでケビキ線・木釘穴 1 箇所が観察できる。87 は底板で、木釘穴が 3 箇所確認でき、うち 2 箇所には木釘が残存していた。88 は側板で、外面に黒漆が塗られ、桜の皮により綴じられている。89 は底板と考えられ、木釘穴が 2 箇所、相対する位置に認められる。

90 ～ 93 は膳とした。90 は辺部の一部で、91 は隅部の一部である。90・91 ともに内面に赤漆、外面に黒漆が塗られており、側板と脚部が付いていた痕跡が見られる。出土地点も近接していることから同一個体の可能性が高い。92・93 は脚がつかない折敷である。92 は底板であり、内外面ともに黒漆が塗られる。37cm 四方の方形を呈すると考えられ、表面には側板の圧痕が残る。93 は底板と側板の一部が残存し、本遺跡から出土した木製品の中でも比較的残存状態が良い。木釘穴が 23 箇所確認され、うち 17 箇所に木釘が残存している。一辺 21㎝、側板高 2㎝を測り、内外面は透漆で仕上げられている。

94 ～ 97 は蓋とした。94 は大型の蓋であり、把手が付くと思われる木釘穴が観察できる。味噌桶（樽）な

どの蓋であろうか。95はヒノキ材で表裏丁寧に仕上げられており、一辺が11.7cm、内角が135度であることから、八角形を呈すると考えられる。「正月」と墨書されていることから、正月料理を盛りつける重箱の一部と考えた。木釘穴が認められないことから蓋とした。96・97は火打箱の蓋である。96は方形小型の蓋で、中央部につまみがつく。97も方形小型の蓋で中央部につまみをつけたと思われる釘穴2箇所と、側面に木釘穴1箇所が残存している。

98・99は箱とした。98は火打箱で底板と側板3辺が残存しており、底板の一部が炭化している。96の蓋が寸法からセットとなるものと考えられる。99は底板か側板か不明であるが、木釘穴および木釘が残存している。

100～105は桶である。100は桶の側板であり、外面上部と下部にタガの痕跡が見られる。内面下部には帯状の圧痕があり、底板との接地面と考えられる。101～103は桶の底板で、側面に木釘穴が認められないことで曲物の底板と区別した。101は細長く平たい板を木釘により接合し、円形の底板としている。100の側板と同程度の径と考えられ、同一個体である可能性が高い。104・105は桶の側板であり、いずれも外面にタガの痕跡が見られる。105は側面に木釘が残存しており、接する板との接合に木釘を使用したことがわかる。内面下部には圧痕が見られ、底板との接地面と考えられる。

106～108は櫛である。108は40％の遺存であるが3点とも横櫛である。107には一部黒漆が残存している。

109は茶筅とした。竹2本を木釘で横並びに接合したものである。

110は竹製の棒で木釘穴が空いていることから道具類の柄部と考えられるが詳細は不明である。

111は団扇である。柄部分は肩入れという特徴的な製法で、骨の先端は二つ割りと呼ばれる技法が用いられている。

112は杓文字である。全体に面取りの調整が行われている。84のメンパ内に収められて出土している。

113・114は棒状でほぼ真円に成形されており、113は径が6.0cm、114が3.0cmである。113は延し棒ないし擂粉木棒であろうか。114は径が太く、不明である。

115・116は楔のような形状であり、刃物による切断痕跡が見られる。66の束と同じ使われ方をしたのだろうか。

117は用途不明である。長さ19cmの隅丸長方形の板状を呈し、中央に1対の穴が認められる。表面の穴周囲は3cm幅でザラザラしている。裏面は黒く変色が認められる。

118は薪の端材を用いた作業台と考えられる。断面三角状の頂部付近に鉈等の刃物の痕跡が多数認められ、薪や杭の切断・成形等に使用したものと考えられる。

119・120は薄いへぎ材で付木と考えられる。98の火打箱に収められていたものであろう。

121は竹籠の口縁とした。3mm幅に加工された竹に同幅の薄い竹を巻き付けており、出土状況では長軸21.0cm、短軸7.0cmの楕円形を呈していた。

122～134は木釘穴をもつ木製品部材とした。組み合わせて箱物など製品となると推定される。122～133は板状、134は角棒状を呈する。端部は組接ぎの加工が施されているものが多い。

### c）その他の木製遺物

135～137は燃料材である。いずれも1号礎石建物跡の囲炉裏から出土している。片方の端部が炭化しており、もう片方の端部は切断されている。

## 3）金属製品（図版50・51・96・97）

138は用途は明確ではないが、灯火具と考え、燭台とした。泥流の影響で欠損・変形が著しい。

139～141は釘である。140は端部が丸く曲がっていることが観察できる。いずれも断面は方形を呈する。

142は銅板である。薄い板状で調度品の飾り金具であろうか。

143は小さな鉄塊である。鉄滓か。

144 は包丁である。刃部は欠損している。柄部はスギ材でやや短く作られる。

145 は火打金である。鎧山形では欠損している。

146 は茶釜である。胴部中央が張り出し、肩部付近に耳部が付く。耳部には２箇所の孔が空けられ、鉤の手状の把手（147 ～ 149）が付くと考えられる。蓋も共伴して出土しており、蓋は中央部につまみが付き、つまみには孔が空けられる。環状の把手がつくものと考えられる。

150 ～ 155 は銭貨である。150 ～ 154 は寛永通宝で、154 は２枚が重なった状態で出土している。155 は富士一銭アルミ貨である。昭和 17 年の文字が確認できる。

### ４）石製品（図版 52・98）

156・157 は石臼である。156 は上臼で、供給口・引手穴の一部が遺存している。157 は下臼で、若干摩滅しているが挽目が観察できる。７分割か。

158 は砥石である。調整時の櫛歯状の削り痕跡が観察できる。表・裏２面の使用面は摩滅が顕著である。

159 ～ 165 は火打石である。いずれも石質は石英で、尖部に使用痕跡が認められる。

166 ～ 168 は軽石製品である。

# 第４章　自然科学分析

## 第１節　町遺跡出土木材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

### １．はじめに

長野原町に所在する町遺跡で江戸時代（天明期）の屋敷跡から出土した木製品や加工木について樹種同定を行った。

### ２．試料と方法

試料は、１号建物跡と井戸および井戸周辺、５号溝から出土した木製品・加工木 133 点である。遺跡は天明３年（1783 年）の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した。No.206 のみの？は、同一試料を用いて植物珪酸体分析も行われている（植物珪酸体分析の項参照）。

樹種同定は、木取りの確認した後、試料から剃刀を用いて３断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。タケ亜科のうち節が残存していた試料は、肉眼観察で節の形状から同定を行った。

### ３．結果

同定の結果、針葉樹ではモミ属とカラマツ、マツ属複維管束亜属、ツガ属、ヒノキ、スギ、アスナロの７分類群、広葉樹ではカツラとクリ、ブナ属、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節と呼ぶ）、カバノキ属、ハシバミ属、ノリウツギ、ネジキ、ツツジ属、ムラサキシキブ属、コシアブラ 11 分類群、単子葉類ではタケ亜科とマダケ属の２分類群の、計 20 分類群が確認された。

木製品・加工木全体では、マツ属複維管束亜属が 48 点で最も多く、その他はクリが 16 点、スギが 14 点、

第５表　町遺跡出土木製品および木材の樹種同定結果

| 樹種 | 工具 | 服飾具 | 容器 | 食事具 | 建築・土木 | 板材 | 加工木 | その他 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| モミ属 | | | 4 | | | 1 | 1 | 1 | 7 |
| カラマツ | | | 2 | | | 1 | 1 | 1 | 5 |
| マツ属複維管束亜属 | | | 6 | | 5 | 18 | 5 | 14 | 48 |
| ツガ属 | | | | | | 1 | | | 1 |
| ヒノキ | | | 8 | | | 4 | | 1 | 13 |
| スギ | 1 | | 8 | | | 4 | | 1 | 14 |
| アスナロ | | | | | | 2 | | | 2 |
| カツラ | | | | | | | 1 | 1 | 2 |
| クリ | 1 | | | | 3 | 8 | 1 | 3 | 16 |
| ブナ属 | | | 1 | | | | | | 1 |
| コナラ属コナラ節 | | | | | | | 1 | 1 | 2 |
| カバノキ属 | | 2 | | 1 | | | | | 3 |
| ハシバミ属 | | | | | | | | 1 | 1 |
| ノリウツギ | | | 1 | | | | | | 1 |
| ネジキ | | 1 | | | | | | | 1 |
| ツツジ属 | | | | | | | | 1 | 1 |
| ムラサキシキブ属 | | | | | | | 1 | | 1 |
| コシアブラ | | | 3 | | | | | | 3 |
| マダケ属 | | | | | | | | 4 | 4 |
| タケ亜科 | | | 2 | | | | | 5 | 7 |
| 計 | 2 | 3 | 35 | 1 | 8 | 39 | 11 | 34 | 133 |

ヒノキが 13 点、モミ属とタケ亜科 7 点、カラマツが 5 点、マダケ属が 4 点、カバノキ属とコシアブラが 3 点、アスナロとカツラとコナラ節が 2 点、ツガ属、ハシバミ属、ブナ属、、ノリウツギ、ネジキ、ツツジ属、ムラサキシキブ属が各 1 点であった（第 5・6 表）。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を第 13 ～ 16 図に示す。

(1) **モミ属** *Abies* マツ科 第 13 図 1a-1c（No.335）

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織で数珠状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 1 ～ 4 個存在する。モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミやシラベ、トドマツなど約 5 種がある。材は軽軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

(2) **カラマツ** *Larix kaempferi* (Lamb.) Carrière マツ科 第 13 図 2a-2c（No.229）

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は小型のヒノキ型で、1 分野に 4 ～ 5 個みられる。また放射組織は数珠状末端壁を有し、放射組織の上下には放射仮道管がある。

カラマツは温帯～亜寒帯に分布する落葉高木で、自生では宮城県・新潟県以南から中部地方の山地に生育する。材は水湿に強い。

(3) **マツ属複維管束亜属** *Pinus subgen*. Diploxylon マツ科 第 13 図 3a-3c（No.265）

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靭性は大である。

(4) **ツガ属** *Tsuga* マツ科 第 13 図 4a-4c（No.288）

仮道管、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は急である。放射組織の上下に放射仮道管があり、有縁壁孔対によって確認できる。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1 分野に 2 ～ 4 個存在する。

ツガ属は暖帯から福島県以南の温帯に生育する常緑高木で、ツガとコメツガがある。材はやや強い程度で、耐朽性・保存性は中庸、割裂および乾燥は容易である。

(5) **ヒノキ** *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 第 13 図 5a-5c（No.56-1）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1 分野に 2 個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性および耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

(6) **スギ** *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 第 13・14 図 6a-6c（No.140-1）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に通常 2 個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

(7) **アスナロ** *Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 第 14 図 7a-7c（No.360）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。樹脂細胞は晩材部に散在し、放射組織内にも豊富に樹脂を含む。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1 分野に不揃いに 3 ～ 4 個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木である。材は、加工性や割裂性は中庸だが、耐朽性および保存性が高い。

(8) **カツラ** *Cercidiphyllum japonicum* Siebold et Zucc. ex Hoffm. et Schult.　カツラ科　第 14 図　8a-8c (No.352)

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で、30 段程度となる。放射組織は 1 ～ 3 列幅で、平伏細胞と方形細胞からなる異性である。

カツラは暖帯から温帯に分布する落葉高木である。材は軽軟で靭性があり、加工は容易である。

(9) **クリ** *Castanea crenata* Siebold et Zucc.　ブナ科　第 14 図　9a-9c (No.316)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

(10) **ブナ属** *Fagus*　ブナ科　第 14 図　10a-10c (No.12)

小型で単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は単一のものと階段状の 2 種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、2 ～数列のもの、広放射組織の 3 種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は、比較的硬く靭性があるが、保存性は低い。

(11) **コナラ属コナラ節** *Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　第 14・15 図　11a-11c (No.206)

大型の道管が年輪のはじめに 1 列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と広放射組織の 2 種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

(12) **カバノキ属** *Betula*　カバノキ科　第 15 図　12a-12c (No.233)

径が中型の道管が単独もしくは数個複合して、まばらに分布する散孔材である。道管の穿孔は 10 ～ 20 段程度の階段状である。放射組織はほぼ同性で 1 ～ 3 列幅である。道管相互壁孔は交互状で極めて小さく、密に分布する。

カバノキ属は温帯～亜寒帯に分布する落葉高木もしくは低木で、カバノキやミズメなど 11 種がある。材は全般的にやや重硬で、切削および加工は中庸である。

(13) **ハシバミ属** *Corylus*　カバノキ科　第 15 図　13a-13c (No.207)

小型の道管が、単独あるいは数個複合する散孔材で、放射方向に配列する傾向がある。軸方向柔組織は接線状に配列する。道管の穿孔は単一である。放射組織は 1 ～ 2 列幅で、ほぼ同性である。

ハシバミ属は温帯に生育する落葉低木で、ハシバミとツノハシバミがある。材は堅硬および強靭である。

(14) **ノリウツギ** *Hydrangea paniculata* Sieb. et Zucc.　ユキノシタ科　第 15 図　14a-14c (No.127)

小型でやや角張った道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は 40 段程度の階段状である。放射組織は異性で、1 ～ 2 列幅であり、単列部と多列部の幅が同じである。

ノリウツギは北海道から九州（屋久島まで）に分布する落葉小高木あるいは低木である。温帯林の先駆樹種で、伐採跡地に最初に出現する種の一つである。材は強靭である。

(15) **ネジキ** *Lyonia ovalifolia* (Wall.) Drude var. *elliptica* (Siebold et Zucc.) Hand.-Mazz.　ツツジ科　第 15 図　15a-15c (No.196)

小型で角張った道管が単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は 10 ～ 20 段程度の階段状である。道管相互壁孔は対列～交互で、道管壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は 1 ～ 3 列幅の異性で、接線断面では単列部の直立細胞はレンズ状である。

ネジキは山形県および岩手県以南に生育し、疎林内や岩場に生える落葉小高木である。材は硬堅であるが反りやすく、捩れがひどい。

(16) **ツツジ属** *Rhododendron*　ツツジ科　第 15 図　16a-16c (No.301)

小型で角張った道管が、ほぼ単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は 20 段程度の階段状である。道管

相互壁孔は階段状となる。放射組織は単列と 5 ～ 10 列幅の 2 種類からなる異性で、単列部は接線断面においてレンズ状を呈する。

ツツジ属は熱帯から寒帯まで幅広く分布し、樹形も低木から高木まである常緑もしくは落葉の広葉樹である。ツツジ亜属やシャクナゲ亜属などを含む約 50 種がある。

(17) **ムラサキシキブ属** *Callicarpa* シソ科 第 16 図 17a-17c (No.284)

小型の道管が、単独もしくは数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は随伴散在状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1 ～ 4 列幅である。

ムラサキシキブ属は熱帯から温帯にかけて分布する落葉または常緑の低木または小高木で、ヤブムラサキやムラサキシキブなど 11 種がある。

(18) **コシアブラ** *Acanthopanax sciadophylloides Fr.* et Sav. 第 16 図 18a-18c (No.202)

年輪のはじめにやや大型の道管がまばらに配列し、晩材部では小型の道管が単独もしくは放射方向に数個複合して分布する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は 1 ～ 4 列幅で、上下に 1 つずつ方形細胞が連なる異性である。

コシアブラは、温帯および暖帯上部に分布する落葉高木である。材は軽軟で、割裂しやすい。

(19) **マダケ属** *Phyllostachys* イネ科 第 16 図 19a (No.18)

稈の組織はタケ亜科と同じ特徴を有するが、肉眼観察で稈の節が 2 輪状の試料をマダケ属とした。ただし、モウソウチクは節が 1 輪状のため、モウソウチクを除くマダケ属とする。

(20) **タケ亜科** *Subfam. Bambusoideae* イネ科 第 16 図 20a (No.114-1)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類である。維管束が柔細胞中に散在する不斉中心柱で、維管束は一対の道管とそれと直行する原生木部間隙と師部で形成され、その周囲を厚膜組織からなる維管束鞘が取り囲む。タケ類とササ類があり、日本では 12 属が含まれるが、稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

4．考察

以下、木製品および木材の樹種同定結果を考察する。

工具では、刃物の柄がスギ、楔？がクリであった。柄には軽軟で加工容易なスギが利用され、楔？には重硬なクリが利用されたと考えられる。

服飾具では、横櫛がカバノキ属とネジキであった。遺跡出土遺物での類例は少ないが、「木材ノ工藝的利用」によると、近代ではカバノキ属のミズメは緻密で狂いの少ない材質、ネジキは材の色合いが好まれ、それぞれ櫛として利用されている（農商務省山林局編，1912）。

容器類では、漆器はいずれも広葉樹で、ブナ属とコシアブラであった。ブナ属は重硬な材で、コシアブラは軽軟で加工容易な材である。近世の漆器には、全国的にケヤキとブナ属、トチノキが多く利用される傾向がある（北野，2005）。漆器でのコシアブラの類例は、福島県の越前朝倉氏遺跡から出土した戦国時代～江戸初期の漆器のみである（伊東・山田編，2012）。曲物と桶、折敷、木箱には針葉樹が多く利用されていたが、一部には広葉樹もみられた。針葉樹ではモミ属とカラマツ、マツ属複維管束亜属、ヒノキ、スギが確認された。広葉樹は、折敷？の底板でコシアブラ、箱底板の木釘でノリウツギがみられた。針葉樹は全般に木理直通で軽軟なため、製材が容易である。また、耐水性もあるため、桶のような水場での利用にも適している。編組製品の口縁と巻き付け材はともにタケ亜科で、形状は割裂き材であった。タケ亜科は割裂性が大きく、ひごに整形しやすい。

食事具では、シャモジがカバノキ属であった。カバノキ属の材は比較的重硬で、緻密である。

建築材では、柱材および柱片？がマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属は、針葉樹の中では重厚な部類で、樹脂を多く含むため保存性がある。床板と杭は、クリであった。クリの材は重硬で、保存性も高い。

板材は、建築部材の可能性がある厚板や木製品と思われる板材を含む。全般にマツ属複維管束亜属が多く、ほかにクリ、スギ、ヒノキ、モミ属、カラマツ、アスナロなどがみられた。用途に応じて、軽軟な針葉樹と、

重硬な広葉樹のクリが使い分けされていたと推測される。

加工木では、木製品と思われる加工木がモミ属とマツ属複維管束亜属、丸棒がマツ属複維管束亜属とコナラ節、ムラサキシキブ属、角材がカラマツとマツ属複維管束亜属、カツラ、クリであった。

その他の木材では、みの？がコナラ節で、直径 0.3 ～ 0.5㎝程の丸木の植物遺体を 5 点ほど抽出して樹種同定を行ったが、いずれもコナラ節の枝材であった。なお、小枝以外にも幅 5mm 程度、厚さ 0.1mm 未満の植物遺体がみられたが、状態が悪く切片が作製できなかったため、組織観察による同定は行えなかった。木片類ではモミ属とカラマツ、マツ属複維管束亜属、ヒノキ、スギ、クリが確認された。丸木や枝類ではマツ属複維管束亜属とカツラ、クリ、ハシバミ属、ツツジ属、根株ではマツ属複維管束亜属が確認された。根株や枝類は自然木と考えられるため、遺跡周辺の植生が反映されていると考えられる。

編組製品以外の竹類は、組織の観察ではタケ亜科までの同定にとどまるが、節が残存していた試料の一部はマダケ属までの同定が可能であった。また、節の環が一重で直径が細い試料（No.268）は、ササ類の可能性がある。

試料全体では、マツ属複維管束亜属やヒノキ、スギを中心とした針葉樹が多く確認されたが、これは板材や曲物・組物などが多かったためと思われる。また、根株や枝材など自然木と思われる試料ではマツ属複維管束亜属が多く、カツラやクリなどの広葉樹も確認されている。木製品や板材にはカラマツやカバノキ属、コシアブラなど温帯上部の山地に生育する樹種も使用されている。したがって、町遺跡周辺に生育していた樹木が伐採利用されていた可能性がある。

第 6 表　町遺跡出土木製品および木材の器種別樹種

| | 工具 | | 服飾具 | 容器 | | | | 食事具 | 建築・土木 | | | | 板材 | | | 加工木 | | | | | その他 | | | | タケ類 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 樹種 | 刃物（柄） | 櫟？ | 櫛 | 漆器 | 曲物・折敷・木箱 | かご・口縁・巻き付け材 | 不明 | シャモジ | 床板 | 杭材 | 柱片（杭？） | 杭 | 円い板 | 厚板 | 板（木製品？） | 木製品 | 丸棒 | 角材 | みの？ | 木片類 | 丸木・枝類 | 株根 | ほうき？ | 小枝 | 竹 | 計 |
| モミ属 | | | | | 4 | | | | | | | | | 1 | | | 1 | | | 1 | | | | | | 7 |
| カラマツ | | | | | 2 | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | | 1 | | | | | | 5 |
| マツ属複維管束亜属 | | | | | 6 | | | | | 4 | 1 | | 1 | 14 | 3 | 1 | 2 | 2 | | 8 | 4 | 2 | | | | 48 |
| ツガ属 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| ヒノキ | | | | | 8 | | | | | | | | | 2 | 2 | | | | | 1 | | | | | | 13 |
| スギ | 1 | | | | 8 | | | | | | | | | 4 | | | | | | 1 | | | | | | 14 |
| アスナロ | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | 2 |
| カツラ | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | 1 | | | | | 2 |
| クリ | | 1 | | | | | | | 1 | | 2 | | | 8 | | | | 1 | | 1 | 2 | | | | | 16 |
| ブナ属 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| コナラ属コナラ節 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | 2 |
| カバノキ属 | | | 2 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| ハシバミ属 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 |
| ノリウツギ | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| ネジキ | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| ツツジ属 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 |
| ムラサキシキブ属 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| コシアブラ | | | | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| マダケ属 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 4 |
| タケ亜科 | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | 3 | 7 |
| 計 | 1 | 1 | 3 | 2 | 31 | 2 | | 1 | 1 | 4 | 1 | 2 | 1 | 1 | 30 | 7 | 2 | 4 | 5 | 1 | 13 | 9 | 2 | 1 | 1 | 7 | 133 |

第７表　町遺跡出土木製品および木材の樹種同定結果一覧

| No. | 図版No. | 試料No. | 分類１ | 種別・器種 | 樹　種 | 木取り | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 40-83 | 12 | 容器 | 漆器椀蓋 | ブナ属 | 横木取り | 内外面赤漆。口縁は黒色漆。 |
| 2 | 32-29 | 13 | 板材 | 板材 | クリ | 板目 | 床板。 |
| 3 | — | 14 | 板材 | 板材 | クリ | 柾目 | 数片に割れている。 |
| 4 | 42-92 | 16 | 板材 | 膳 | ヒノキ | 追柾目 | 内外面黒漆、No.15、25と接合。 |
| 5 | 32-27 | 17 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 柾目 | うちわの跡あり。 |
| 6 | 39-82 | 18 | その他 | タガ | マダケ属 | 割材 | 節は２輪状、削ぎ。 |
| 7 | — | 25 | 板材 | 板材 | クリ | 板目 | 数片に割れている。 |
| 8 | 44-101 | 26 | 容器 | 桶 | スギ | 柾目 | 釘綴じ。 |
| 9 | 46-111 | 33 | その他 | 団扇 | タケ亜科 | 割材 | 節は１輪状。柄部分「肩入れ」。 |
| 10 | — | 40 | 容器 | 桶 | スギ | 柾目 | 内外面黒色化。桶の側板。 |
| 11 | 48-128 | 42 | 板材 | 板状 | マツ属複維管束亜属 | 板目 | 木釘あり、片端切断痕。 |
| 12 | 45-104 | 45 | 容器 | 桶側板 | スギ | 柾目 | 木釘で接合。帯状圧痕。 |
| 13 | 48-129 | 49 | 板材 | 板状 | マツ属複維管束亜属 | 柾目 | 片端切断痕。 |
| 14 | 36-62 | 54 | 板材 | 角材 | クリ | 割材 | 両端切断痕。 |
| 15 | 42-92 | 56-1 | 板材 | 膳 | ヒノキ | — | 片側黒漆。No.4と接合。 |
| 16 | 47-115 | 58 | 工具 | 道具類 | クリ | 柾目 | 留楔か。 |
| 17 | — | 72 | 板材 | 板材 | スギ | 柾目 | 片端切断痕、釘穴あり。 |
| 18 | 32-26 | 81 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 板目 | 両端切断、炭化している。 |
| 19 | — | 84 | 板材 | 板材 | カラマツ | 板目 | 両端切断（斜め）。 |
| 20 | 48-119 | 88 | 板材 | 付木 | ヒノキ | 柾目 | 数枚重なっている、へぎ材である。 |
| 21 | 48-127 | 90 | 板材 | 板状 | マツ属複維管束亜属 | 柾目 | 片端切断痕。 |
| 22 | 35-56 | 91 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 板目 | 下部は厚く加工。 |
| 23 | 49-131 | 92 | 板材 | 板状 | マツ属複維管束亜属 | 追柾目 | 両端切り込みあり。 |
| 24 | 32-24 | 93 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 追柾目 | 両端切断痕、側面に刃物痕、団扇の跡。 |
| 25 | 42-92 | 94 | 板材 | 膳 | ヒノキ | 追柾目 | 内外面黒色漆。No.4と接合。 |
| 26 | 33-33 | 98 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 板目 | — |
| 27 | — | 108 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 板目 | 樹皮付き、片端切断痕。 |
| 28 | 35-53 | 109 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 柾目 | ケビキ線あり、両端に相欠。 |
| 29 | — | 113-1 | その他 | 竹 | マダケ属 | 割裂き | 節は２輪状、削ぎ。 |
| 30 | 48-121 | 114-1 | 容器 | かご | タケ亜科 | 割裂き | 竹籠の口縁。 |
| 31 | — | 114-2 | 容器 | かごの巻き付け材 | タケ亜科 | 割裂き | 巻縁。 |
| 32 | 33-37 | 123 | 板材 | 板材 | クリ | 柾目 | — |
| 33 | 43-98 | 126 | 容器 | 箱 | ヒノキ | 柾目 | 木釘綴じ。火打箱側板。No.34、35、36が接合。 |
| 34 | 43-98 | 127 | 容器 | 箱 | ノリウツギ | 割材 | 火打箱側板、木釘が３本付き。No.33と接合。 |
| 35 | 43-98 | 129 | 容器 | 箱 | スギ | — | 釘綴じ、一部が炭化。火打箱底板。No.33と接合。 |
| 36 | 43-98 | 131 | 容器 | 箱 | ヒノキ | 柾目 | 釘綴じ、一部が炭化。火打箱底板。No.33と接合。 |
| 37 | 43-96 | 140-1 | 容器 | 蓋 | スギ | 柾目 | 方形の蓋、つまみ付き。No.38と同一。 |
| 38 | 43-96 | 140-2 | 容器 | 蓋 | マツ属複維管束亜属 | 割材 | 方形の蓋のつまみ部分。No.37と同一。 |
| 39 | 34-44 | 142 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 板目 | — |
| 40 | — | 144 | その他 | 板材 | カラマツ | 板目 | — |
| 41 | 32-30 | 146 | 板材 | 板材 | クリ | 柾目 | 面取り。 |
| 42 | 33-32 | 149 | 板材 | 板材 | クリ | 柾目 | — |
| 43 | 41-86 | 154 | 容器 | 曲物側板 | ヒノキ | 柾目 | 櫃か。No.52、63、66、67、77と接合。 |
| 44 | 35-52 | 155 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 板目 | 面取り。チョウナ痕？ケビキ線あり。 |
| 45 | — | 156 | 容器 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 柾目 | 釘綴じ。ケビキ線あり。 |
| 46 | 48-120 | 157-2 | 板材 | 付木 | スギ | 柾目 | ケビキ線あり。へギ材。 |
| 47 | 44-99 | 158 | 容器 | 箱 | マツ属複維管束亜属 | 柾目 | 釘綴じ。ケビキ線あり。底板か側板か。 |

| No. | 図版No. | 試料No. | 分類 1 | 種別・器種 | 樹 種 | 木取り | 備 考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 48 | 49-130 | 159 | 板材 | 部材 | マツ属複維管束亜属 | 板目 | 釘綴じ。面取り、ケビキ線あり。 |
| 49 | 46-110 | 179 | その他 | 柄 | タケ亜科 | 丸 | 削ぎなし。 |
| 50 | 32-31 | 182-1 | 板材 | 板材 | クリ | 柾目 | チョウナ痕あり。 |
| 51 | 33-35 | 187 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 板目 | 両端が切断。 |
| 52 | 41-86 | 189 | 容器 | 曲物側板 | スギ | 柾目 | 櫃か、№ 43 と接合。 |
| 53 | 46-107 | 196 | 服飾具 | 横櫛 | ネジキ | 板目 | 横櫛。一部に黒漆残存。 |
| 54 | 48-122 | 197 | 板材 | 板状 | スギ | 柾目 | 両端部段あり。木釘残存。 |
| 55 | 48-124 | 199 | 板材 | 板状 | スギ | 追柾目 | 両端に切欠き。 |
| 56 | 42-91 | 201 | 容器 | 膳 | コシアブラ | 板目 | 内側赤漆、外側黒漆。 |
| 57 | 42-90 | 202 | 容器 | 膳 | コシアブラ | 板目 | 内側赤漆、外側黒漆。 |
| 58 | 36-66 | 203-1 | 建築材 | 角材 | マツ属複維管束亜属 | 割材 | 柱材の端材束か。六面全部切断痕。 |
| 59 | — | 203-2 | 容器 | 不明漆器 | コシアブラ | 板目 | 片側赤漆。 |
| 60 | 35-58 | 204 | 板材 | 板材 | スギ | 板目 | 両端切断。チョウナの加工痕あり。 |
| 61 | — | 206 | その他 | みの？ | コナラ属コナラ節 | 芯持丸木～割材 | 直径 0.3 ～ 0.5cmの枝材、その他植物繊維多数。 |
| 62 | 38-74 | 207 | その他 | 杭 | ハシバミ属 | 丸木 | 地部が尖る。 |
| 63 | 41-86 | 213-1 | 容器 | 曲物側板 | ヒノキ | — | 櫃か、№ 43 と接合。 |
| 64 | 41-87 | 213-4 | 容器 | 曲物底板 | ヒノキ | 柾目 | 釘綴じ、円形。 |
| 65 | 35-55 | 217 | その他 | 板材 | カラマツ | 角材 | 端部にホゾあり。 |
| 66 | 41-86 | 226 | 容器 | 曲物側板 | ヒノキ | — | 櫃か、№ 43 と接合。 |
| 67 | 41-86・88 | 229 | 容器 | 曲物側板 | カラマツ | 柾目 | 櫃か、№ 43 と接合。 |
| 68 | 39-80 | 230 | その他 | 竹材 | マダケ属 | 割裂き | 節は 2 輪状、削ぎ。径 3.0cm を 4 分割。 |
| 69 | 46-106 | 233 | 服飾具 | 横櫛 | カバノキ属 | 板目 | 歯が数本欠損。ほぼ完存。 |
| 70 | 43-93 | 234 | 容器 | 膳 | マツ属複維管束亜属 | 板目 | 内外面透漆、方形か、№ 76 と接合。 |
| 71 | 39-78 | 247 | その他 | 竹材 | マダケ属 | 割裂き | 節は 2 輪状。径 3.6cm を 4 分割。 |
| 72 | 47-118 | 252 | その他 | 道具類 | マツ属複維管束亜属 | みかん割り | 刃物痕。作業台。 |
| 73 | 31-21 | 264 | 建築材 | 囲炉裏枠 | マツ属複維管束亜属 | 芯持丸木両 | 片端段あり、囲炉裏枠。 |
| 74 | 31-23 | 265 | 建築材 | 囲炉裏枠 | マツ属複維管束亜属 | 芯持丸木片 | 両端段あり、囲炉裏枠。 |
| 75 | 46-109 | 268 | その他 | 茶筅 | タケ亜科 | 丸 | 節は 1 輪状、竹 2 本を木釘で連結。 |
| 76 | 43-93 | 275 | 容器 | 膳 | ヒノキ | — | 内外面黒漆、方形か。№ 70 と接合。 |
| 77 | 41-86 | 276 | 容器 | 曲物側板 | カラマツ | 柾目 | 櫃か、№ 43 と接合。 |
| 78 | 48-120 | 278 | 板材 | 付木 | ヒノキ | 柾目 | 内面ケビキ線あり。 |
| 79 | 31-22 | 279 | 建築材 | 囲炉裏枠 | マツ属複維管束亜属 | 角材（芯持） | 両端に段あり、囲炉裏枠。 |
| 80 | 37-70 | 281 | その他 | 杭 | クリ | 芯持丸木 | 地部が尖る。 |
| 81 | 43-95 | 一括 | その他 | 蓋 | ヒノキ | 柾目 | 「正月」墨書あり、八角形。 |
| 82 | 36-61 | 282 | その他 | 角材 | クリ | 角材 | 細い角材。 |
| 83 | — | 284 | その他 | 丸棒 | ムラサキシキブ属 | 丸木 | — |
| 84 | 35-54 | 285 | 板材 | 板材 | モミ属 | 柾目 | 切欠きあり。 |
| 85 | — | 286 | その他 | 木片 | クリ | 丸木？ | — |
| 86 | 47-116 | 287 | その他 | 楔か | マツ属複維管束亜属 | 角材 | 加工あり、斜切断と直切断。 |
| 87 | 42-89 | 288 | 容器 | 曲物 | ツガ属 | 柾目 | 釘穴あり、曲げ物の底板。 |
| 88 | 45-102 | 289-1 | 容器 | 桶 | モミ属 | 柾目 | 桶の底板。 |
| 89 | 43-94 | 289-2 | 容器 | 蓋 | マツ属複維管束亜属 | 追柾目 | 大型の蓋。取っ手が付くと思われる。 |
| 90 | 36-64 | 290 | その他 | 角材 | カツラ | 追柾目 | 加工面あり。棒状。 |
| 91 | 33-36 | 291 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 追柾目 | 8 片が接合。 |
| 92 | 34-43 | 292 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 板目 | 3 片が接合。 |
| 93 | 32-25 | 294 | その他 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 柾目 | 加工あり、葉が付着、折れている。脆弱。 |
| 94 | — | 296 | その他 | 木片多数 | マツ属複維管束亜属 | 割材 | — |
| 95 | 46-108 | 299 | 服飾具 | 櫛 | カバノキ属 | 板目 | 両端部欠損。 |
| 96 | — | 300 | その他 | 木片多数 | マツ属複維管束亜属 | 板目 | 加工なし。 |
| 97 | — | 301 | その他 | 小枝 | ツツジ属 | 丸木 | 2 ケ。 |

| No. | 図版No. | 試料No. | 分類 1 | 種別・器種 | 樹 種 | 木取り | 備 考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 98 | — | 305 | その他 | 株根 | マツ属複維管束亜属 | 節 | 2ケ。 |
| 99 | — | 306 | その他 | 竹材 | タケ亜科 | 竹 | 加工あり。 |
| 100 | — | 308 | その他 | 小枝 | マツ属複維管束亜属 | 丸木 | — |
| 101 | 38-75 | 312 | その他 | 杭 | クリ | 丸木 | 多面的に斜めに加工され地部が尖る。 |
| 102 | 47-117 | 315 | 容器 | 道具類 | アスナロ | 板目 | 表面中央部にざらざら面あり。 |
| 103 | — | 316 | 板材 | 板 | クリ | 板目 | 長方形の穴あり。 |
| 104 | 34-43 | 324 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 追柾目 | 3片が接合。 |
| 105 | — | 325 | 容器 | 木片多数 | スギ | 柾目 | 桜の皮で留めてある木片1片。 |
| 106 | — | 329 | その他 | 木片 | モミ属 | 板目 | — |
| 107 | — | 331 | その他 | 木片 | マツ属複維管束亜属 | 柾目 | — |
| 108 | — | 333 | その他 | 丸木 | マツ属複維管束亜属 | 丸木 | 多数。 |
| 109 | 37-69 | 334 | その他 | 杭 | クリ | 丸木 | 斜めに加工され地部が尖る。 |
| 110 | 45-103 | 335 | 容器 | 桶 | モミ属 | 板目 | 桶の底板。 |
| 111 | — | 339 | その他 | 丸木片 | クリ | 丸木？ | — |
| 112 | — | 340 | その他 | 小枝 | タケ亜科 | 丸木<br>(中空) | — |
| 113 | — | 341 | その他 | 木片 | マツ属複維管束亜属 | 割材 | — |
| 114 | — | 343 | その他 | 木片<br>(年輪片) | マツ属複維管束亜属 | 割材 | — |
| 115 | — | 344 | その他 | 木根 | マツ属複維管束亜属 | 節 | — |
| 116 | 37-68 | 349 | その他 | 杭 | コナラ属コナラ節 | 丸木 | 斜めに加工され地部が尖る。 |
| 117 | 37-67 | 351 | その他 | 杭 | マツ属複維管束亜属 | 丸木 | 斜めに加工され地部が尖る。 |
| 118 | 47-113 | 352 | その他 | のし棒か | カツラ | 丸木 | ほぼ真円に成形。擂り粉木棒か、のし棒。 |
| 119 | 47-114 | 353 | その他 | 道具類 | マツ属複維管束亜属 | 丸木 | ほぼ真円に成形。 |
| 120 | 44-100 | 354 | 容器 | 桶 | スギ | 板目 | 外面上部と下部にタガ痕あり。内面下部には帯状の圧痕あり。 |
| 121 | 36-60 | 358 | その他 | 角材 | モミ属 | 角材 | 棒状で断面が四角形。 |
| 122 | 48-123 | 359 | 板材 | 板材 | マツ属複維管束亜属 | 追柾目 | 釘穴2カ所。 |
| 123 | 33-38 | 360 | 板材 | 板材 | アスナロ | 追柾目 | — |
| 124 | 50-144 | 362 | 工具 | 刃物　木柄 | スギ | 芯去削出 | 刃部は欠損している。柄部はやや短い。 |
| 125 | 36-65 | 367 | その他 | 角材 | マツ属複維管束亜属 | 割材 | 片端が斜めに切断。 |
| 126 | — | 368 | その他 | 木片 | マツ属複維管束亜属 | 割材 | — |
| 127 | — | 370 | その他 | 木片 | マツ属複維管束亜属 | 割材 | — |
| 128 | — | 371 | その他 | 木片 | マツ属複維管束亜属 | 割材 | 3ケ。 |
| 129 | — | 372 | その他 | 杭 | マツ属複維管束亜属 | 丸木 | 杭？株根？ |
| 130 | — | 373 | その他 | 丸木の枝 | マツ属複維管束亜属 | 丸木 | — |
| 131 | 46-112 | 379-1 | 食事具 | シャモジ | カバノキ属 | 追柾目 | 全体に面取り。132のメンバ内に収められていた。 |
| 132 | 40-84 | 379-2 | 容器 | 曲物 | モミ属 | 柾目 | メンバ側板、No.133と同一。焼印あり。 |
| 133 | 40-84 | 379-3 | 容器 | 曲物 | モミ属 | 追柾目 | メンバ底板、No.132と同一。焼印あり。 |

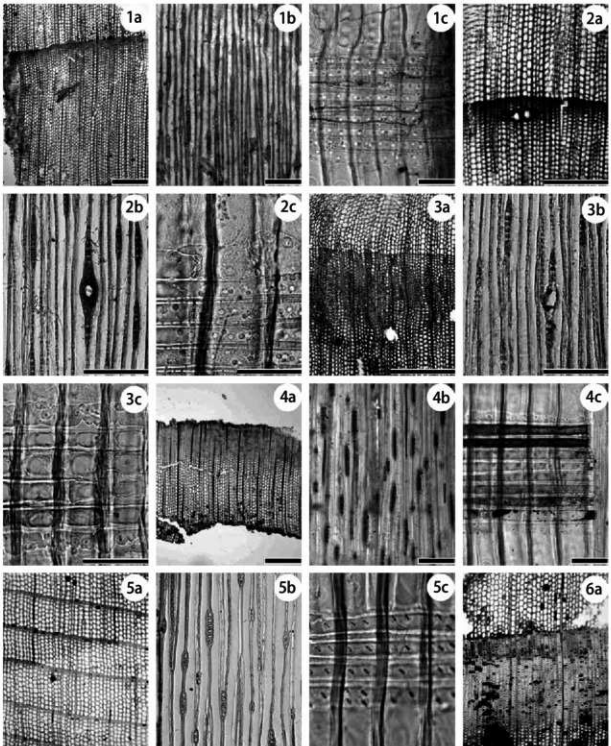
## 参考・引用文献


平井信二（1996）木の大百科．394p．朝倉書店．

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－．449p．海青社．

北野信彦（2005）近世出土漆器の研究．394p．吉川弘文館．

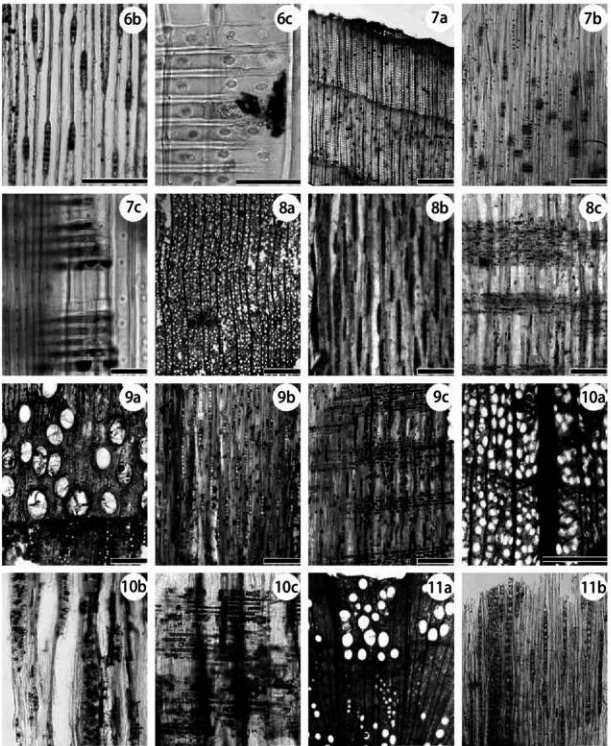
農商務省山林局編（1912）木材ノ工藝的利用．725p．大日本山林會．2．試料と方法




1a-1c．モミ属（No.335）、 2a-2c．カラマツ（No.229）、 3a-3c．マツ属複維管束亜属（No.265）、
4a-4c．ツガ属（No.288）、5a-5c．ヒノキ（No.56-1）、6a．スギ（No.140-1）

横断面（スケール =500 μ m）、b：接線断面（スケール =200 μ m）、c：放射断面（スケール =50 μ m）

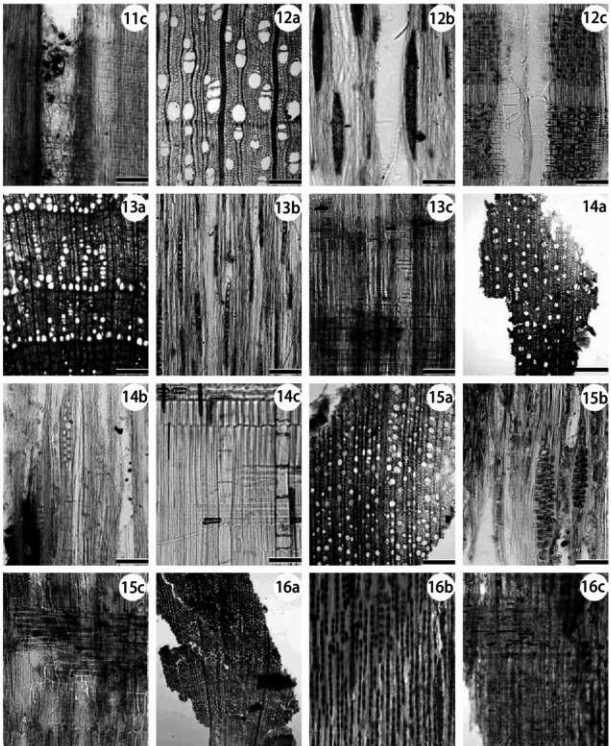
第 13 図　町遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（1）




6b-6c. スギ（No.140-1）、 7a-7c. アスナロ（No.360）、 8a-8c. カツラ（No.352）、
9a-9c. クリ（No.316）、10a-10c. ブナ属（No.12）、11a-11b. コナラ属コナラ節（No.206）

横断面（スケール =500 μ m）、b：接線断面（スケール =200 μ m）、c：放射断面（スケール =6-9:50 μ m、10:100 μ m）

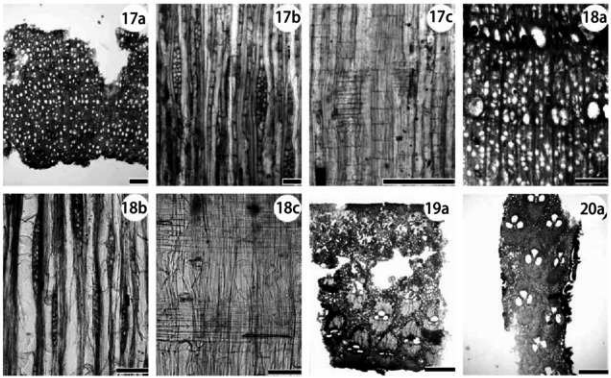
第 14 図　町遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（2）




11c. コナラ属コナラ節（No.206）、 12a-12c. カバノキ属（No.233）、 13a-13c. ハシバミ属（No.207）、14a-14c. ノリウツギ（No.127）、15a-15c. ネジキ（No.196）、16a-16c. ツツジ属（No.301）

横断面（スケール =250 μ m）、b：接線断面（スケール =100 μ m）、c：放射断面（スケール =100 μ m）

第 15 図　町遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（3）




17a-17c．ムラサキシキブ属（No.284）、 18a-18c．コシアブラ（No.202）、19a．マダケ属（No.18）、20a．タケ亜科（No.114-1）

横断面（スケール =250 μ m）、b：接線断面（スケール =100 μ m）、c：放射断面（スケール =100 μ m）

第 16 図　町遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（4）

## 第２節　町遺跡出土の大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

### １．はじめに

長野原町大字長野原に所在する町遺跡から検出された大型植物遺体の同定を行い、当時利用された種実や周辺の植生について検討した。なお、灰試料については植物珪酸体分析も行われている（植物珪酸体分析の項参照）。

### ２．試料と方法

現地取り上げ試料は、肉眼で確認、採取された種実 20 試料（No. 付きの試料が 10 試料、遺物に付着していた 4 試料と、遺物の下に付着した土壌から回収された 2 試料、一括試料が 4 試料）である。水洗試料は、1 号建物の囲炉裏の灰の上面、灰の上層と下層、最下層からそれぞれ採取された土壌（灰）4 試料である。江戸時代（天明期）の屋敷跡とその裏庭（溝など）がみつかっており、種実は 1 号建物と 5 号溝、調査区南側から出土した。遺構は、天明 3 年（1783 年）の浅間山の噴火に伴う泥流で埋没した。

土壌試料は、採取量が少なかったため、最大 200cc を 0.5mm 目の篩を用いて水洗した。大型植物遺体の抽

出・同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。数の多い分類群は、完形と破片数をあわせたおおよその数を記号（+）で示した。同定された試料は、長野原町教育委員会に保管されている。

## 3．結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のイチョウ種子とスギ枝・炭化葉、アカマツ葉・炭化葉の 3 分類群、広葉樹のモモ核とクリ果実、クワ属核、マタタビ属種子の 4 分類群、草本植物ではソバ果実とタニソバ果実、スベリヒユ属種子、ウシハコベ種子、アカザ属種子、キケマン属種子、タケニグサ属種子、シソ属果実、ヒエ有ふ果・炭化有ふ果、アワ有ふ果、コムギ炭化種子、ホタルイ属果実の 12 分類群の、計 19 分類群が得られた（第 8 ・ 9 表）。このほかに、科以下の同定ができなかった芽を不明芽とし、科以下の識別点をもたない一群を同定不能炭化種実とした。なお種実以外には昆虫が得られ、昆虫分析も実施されている（昆虫分析の項参照）。

以下、得られた大型植物遺体を遺構別に記載する（不明芽と同定不能炭化種実は除く）。

1 建：イチョウが 1 点（炉外住居一括）とモモが 4 点（うち 3 点がかまど一括）得られた。

No.59 付着物：アカマツがわずかに得られた。

No.122 付着物：ソバが多量、シソ属がわずかに得られた。

No.176 付着物：スギがわずかに得られた。

No.197 付着物：同定可能な種実は得られなかった。

No.159 の下:スギとアカマツ、クワ属、ソバ、キケマン属、タケニグサ属、シソ属、ヒエがわずかに得られた。

No.279 の下：ソバがわずかに得られた。

1 号建物一括：クリがわずかに得られた。

囲炉裏灰の上面：スギとソバがやや多く、クリやシソ属、ヒエ、アワなどがわずかに得られた。

囲炉裏灰の上層：アカマツがやや多く、スギとコムギがわずかに得られた。

囲炉裏灰の下層：アカマツとソバ、コムギがわずかに得られた。

囲炉裏灰の最下層：マタタビ属とアカザ属、ヒエがわずかに得られた。

5 溝：モモが 9 点得られた。

**第 8 表　町遺跡出土の現地取り上げ試料の大型植物遺体（括弧内は破片数）**

| 分類群 | 遺構 | 1 号建物 | | | | | | | | | 5 溝 | 調査区南側 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 遺物 No. | № 346 | No.59 付着物 | No.122 付着物 | No.176 付着物 | No.197 付着物 | No.159 の下 | No.279 の下 | カマド | 一括 | | |
| イチョウ | 種子 | | | | | | | | | 1 | | |
| スギ | 枝 | | | | (3) | | (4) | | | | | |
| アカマツ | 葉 | | 1 | | | | 5 (6) | | | | | |
| モモ | 核 | 1 | | | | | | | 2 (1) | | 9 | 1 (1) |
| クリ | 果実 | | | | | | | | | (2) | | |
| クワ属 | 核 | | | | | | (1) | | | | | |
| ソバ | 果実 | | | (+++) | | | (3) | (4) | | | | |
| キケマン属 | 種子 | | | | | | 1 | | | | | |
| タケニグサ属 | 種子 | | | | | | (1) | | | | | |
| シソ属 | 果実 | | | 3 | | | 2 | | | | | |
| ヒエ | 有ふ果 | | | | | | 5 | | | | | |
| 昆虫 | | | | | | (+) | (++) | (++) | | | | |

+：1-9,++:10-49,+++:50-99

次に、主要な大型植物遺体の記載を行い、第 17 図に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APG Ⅲリストの順とした。

(1) **イチョウ**　*Ginkgo biloba* L.　種子　イチョウ科　第 17 図　1（1 建）

淡褐色で、やや扁平な楕円体。先端がわずかに突出する。表面は平滑で光沢がない。側方全周に角がある。

長さ 21.3mm、幅 16.7mm、厚さ 11.8mm。

(2) **スギ** *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don　枝・炭化葉　ヒノキ科　第 17 図　2（№ 159 の下）

暗褐色で、葉は鱗状の針形。断面は三角形に近い。基部は細くなる。残存長 54.3mm、幅 13.5mm。

(3) **アカマツ** *Pinus densiflora* Siebold et Zucc.　葉・炭化葉　マツ科　第 17 図　3a-3b（№ 159 の下）

赤褐色で、針形。横断面（図版 1 の 2b）で表皮に接した樹脂道がみられる。マツ属複維管束亜属の葉は中央に維管束があり、その周囲に樹脂道がみられる。アカマツは樹脂道が表皮に接するが、クロマツは樹脂道が表皮に接さない。本試料は樹脂道が表皮に接しているため、アカマツの葉とした。残存長 8.6mm、幅 1.4mm。

(4) **モモ** *Amygdalus persica* L.　核　バラ科　第 17 図　4（5 溝、№ 355）、5a-5b（調査区南側）

茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。完形ならば下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また、片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。大きさは表 2 に示した。半割れの個体が 2 点含まれていたが、動物食痕や打撃痕のある個体は観察されなかった。

(5) **クリ** *Castanea crenata* Siebold et Zucc.　果実　ブナ科　第 17 図　6（一括）

黒褐色で光沢がある。完形ならば、広卵形。表面は平滑で、細く浅い縦筋が密にみられる。殻斗着痕は果実幅と同じ程度に幅広で、不規則で微細な丘状の突起が密にある。果皮内面にはいわゆる渋皮が厚く付着する。

第 9 表　町遺跡出土の水洗試料の大型植物遺体（括弧内は破片数）

| | | 遺構 | 1 号建物囲炉裏 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 採取位置 | 灰の上面 | 灰の上層 | 灰の下層 | 灰の最下層 |
| 分類群 | 水洗量 (cc) | 150 | 100 | 200 | 150 |
| スギ | 枝 | 14 | 2 | | |
| | 炭化葉 | | 2 | | |
| アカマツ | 葉 | (1) | | (1) | |
| | 炭化葉 | | (++) | (+) | |
| クリ | 果実 | (1) | | | |
| マタタビ属 | 種子 | | | | (1) |
| ソバ | 果実 | (++) | | (2) | |
| タニソバ | 果実 | (1) | | | |
| スベリヒユ属 | 種子 | 1 | | | |
| ウシハコベ | 種子 | 1 | | | |
| アカザ属 | 種子 | (1) | | | 1 |
| キケマン属 | 種子 | 2 | | | |
| シソ属 | 果実 | 2(1) | | | |
| ヒエ | 有ふ果 | (6) | | | |
| | 炭化有ふ果 | | | | 1 |
| アワ | 有ふ果 | 1 | | | |
| コムギ | 炭化種子 | | 1 | 1 | |
| ホタルイ属 | 果実 | 1 | | | |
| 不明 | 芽 | | (+) | | |
| 同定不能 | 炭化種実 | (1) | | (2) | |
| 昆虫 | | (+) | | (+) | (+) |

+：1-9、++：10-49

最大の破片で、残存長 21.6mm、残存幅 15.9mm。

(6) **マタタビ属** *Actinidia* spp.　種子　マタタビ科　第 17 図　7（№ 122 付着物）

赤褐色で、完形ならば上面観は楕円形、側面観は倒卵形または楕円形。表面には五角形や六角形、円形、楕円形などの窪みが連なる規則的な網目模様がある。壁は薄く硬い。サルナシやマタタビなど、種までの同定には至らなかった。長さ 2.4mm、幅 1.6mm。

(7) **ソバ** *Fagopyrum sagittatum* Gilib.　果実　タデ科　第 17 図　8（№ 122 付着物）

黒褐色で、上面観は三稜形、側面観は先端がやや尖る紡錘形。稜の端部は翼状に突き出る。長さ 8.1mm、幅 4.8mm。

(8) **タニソバ** *Persicaria nepalensis* (Meisn.) H.Gross　果実　タデ科　第 17 図　9（囲炉裏灰の上面）

黒褐色で、上面観は扁平、側面観は広卵形。先端が突出する。表面には明瞭な網目状隆線がある。基部には果柄の小突起がある。長さ 1.6mm、残存幅 1.4mm。

(9) **スベリヒユ属** *Portulaca* spp.　種子　スベリヒユ科　第 17 図　10（囲炉裏灰の上面）

黒色で、上面観は扁平、側面観は円形。全体にいぼ状の突起がある。「の」の字状で、先端に着点がある。長さ 0.7mm、幅 0.8mm。

(10) **ウシハコベ** *Stellaria aquatica* (L.) Scop.　種子　ナデシコ科　第 17 図　11（囲炉裏灰の上面）

赤暗褐色で、上面観は扁平、側面観は円形。全体にいぼ状の突起があり、突起は鈍頭で幅広。長さ 0.8mm、

幅 1.0mm。

(11) **アカザ属** *Chenopodium* spp. 種子 アカザ科 第 17 図 12（囲炉裏灰の上面）

黒色で、上面観はやや扁平、側面観は円形。種皮は強い光沢があり、硬い。着点の一端がやや突起し、中心部方向にむかって浅い溝がある。長さ 1.1mm、幅 1.2mm。

(12) **キケマン属** *Corydalis* spp. 種子 ケマンソウ科 第 17 図 13（№ 159 の下）

黒色で腎形。丸い臍孔がある。表面は平滑で、強い光沢がある。長さ 1.3mm、残存幅 1.2mm。

(13) **タケニグサ属** *Macleaya* sp. 種子 ケシ科 第 17 図 14（№ 159 の下）

黄白色で、両端が丸い円柱形。丸い凹孔が縦に並ぶ。表皮細胞は細かく目立たない。長さ 1.7mm、幅 1.0mm。

(14) **シソ属** *Perilla* sp. 果実 シソ科 第 17 図 15（№ 122 付着物）

茶褐色で、いびつな球形。端部にやや突出する着点がある。表面には多角形の不規則な低い網目状隆線がある。網目部分の周囲はわずかに凹む。エゴマ以外のシソ属である。長さ 1.8mm、幅 1.6mm。

(15) **ヒエ** *Echinochloa esculenta* (A.Braun) H.Scholz 有ふ果・炭化有ふ果 イネ科 第 17 図 16a-16b（№ 159 の下）、第 17 図 16a-16b（№ 159 の下）、第 17 図 17a-17b（№ 122 付着物）

有ふ果は、明褐色で楕円形。先端と基部はやや尖り、内頷は膨らまない。微細な縦筋がある。壁は薄く、光沢がある。長さ 3.0mm、幅 2.4mm。炭化有ふ果の大きさは、長さ 2.5mm、幅 1.4mm。

(16) **アワ** *Setaria italica* P.Beauv. 有ふ果 イネ科 第 17 図 18（№ 122 付着物）

赤褐色で、紡錘形。内頷と外頷に独立した微細な乳頭突起がある。長さ 2.1mm、幅 1.8mm。

(17) **コムギ（パンコムギ）** *Triticum aestivum* L. 炭化種子 イネ科 第 17 図 19（囲炉裏灰の下層）

残存状態は悪いが、上面観・側面観は共に楕円形。腹面中央部には、上下に走る 1 本の溝がある。背面の下端中央部には、扁形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸っこい。断面形状は腹面側が窪み、背面側が円形となる（Jacomet, 2006）。またコムギの場合、側面観で最も背の高い部分（幅の広い部分）が基部付近に来る。コムギ属にはパンコムギやマカロニコムギなど複数種あるが、一般的にコムギと呼称しているのはパンコムギである。ここでは一般的な呼称で記載した。長さ 3.6mm、幅 2.6mm、厚さ 2.3mm。

(18) **ホタルイ属** *Scirpus* spp. 果実 カヤツリグサ科 第 17 図 20（囲炉裏灰の上面）

黒色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は短倒卵形。頂部が尖り、基部は狭まって着点がある。壁は硬い。光沢がある。波打った溝が横に走る。長さ 2.3mm、幅 1.7mm。

4．考察

町遺跡では、一般には台地上に立地する建物跡では残存しない生の植物遺体が、火山灰に埋没したために良好な状態で残存していた。同定の結果、栽培植物ではソバとヒエ、アワ、コムギ、イチョウ、モモ、食用可能な野生植物ではクリとクワ属、マタタビ属、シソ属が得られた。タニソバやスベリヒユ属、ウシハコベ、キケマン属、アカザ属、タケニグサ属は、乾いた草地や荒れ地に生育する草本である。これらの雑草はいずれも産出数がごくわずかなため、建物周辺に生育していたものが偶発的に堆積したと考えられる。

囲炉裏の灰の中から産出したスギやアカマツの葉は、炭化しているものも多く、焚き付けのために用いられた可能性がある。ソバも破片が多いため、ソバ殻を焚き付けなどに用いた可能性がある。ヒエやアワは有ふ果が産出しているため、建物内に殻付（有ふ果）の状態で持ち込まれたと考えられる。同様に、コムギは粉食されることが多いが、建物内に粒の状態で持ち込まれ、何らかの要因で粒のまま炭化し、囲炉裏内に堆積したと考えられる。

山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津（1999）によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代には核長は 2.46 ～ 2.65cm と比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、奈良・平安時代の核長は 2.36 ～ 2.66cm で、

スケール 2:10mm, 1,3a,4-6:5mm, 3b,7-20:1mm

1. イチョウ種子（1 建）、2. スギ枝（No.159 の下）、3. アカマツ葉（No.159 の下）、4. モモ核（5 溝、No.355）、5. モモ核（調査区南側）6. クリ果実（一括）、7. マタタビ属種子（囲炉裏灰の最下層）、8. ソバ果実（No.122 付着物）、9. タニソバ果実（囲炉裏灰の上面）、10. スベリヒユ属種子（囲炉裏灰の上面）、11. ウシハコベ種子（囲炉裏灰の上面）、12. アカザ属種子（囲炉裏灰の上面）、13. キケマン属種子（No.159 の下）、14. タケニグサ属種子（No.159 の下）、15. シソ属果実（No.122 付着物）、16. ヒエ有ふ果（No.159 の下）、17. ヒエ炭化有ふ果（囲炉裏灰の最下層）、18. アワ有ふ果（囲炉裏灰の上面）、19. コムギ炭化種子（囲炉裏灰の下層）、20. ホタルイ属果実（囲炉裏灰の上面）

第 17 図　町遺跡 1 号建物から出土した大型植物遺体

第 10 表　町遺跡出土モモ核の大きさ（括弧内破片値、単位：mm）

| 遺構 | 試料 No. | 長さ | 幅 | 厚さ | 形状 |
|---|---|---|---|---|---|
| 5 溝 | 283 | 32.7 | 20.3 | 14.3 | 完形 |
| 5 溝 | 309 | 30.1 | 23.1 | 16.4 | 完形 |
| 5 溝 | 310 | 28.5 | 21.0 | 15.6 | 完形 |
| 5 溝 | 313 | 29.8 | 19.4 | 14.1 | 完形 |
| 5 溝 | 328 | 29.1 | 23.0 | 16.9 | 完形 |
| 5 溝 | 330 | 31.3 | 22.8 | 15.6 | 完形 |
| 5 溝 | 336 | 28.2 | 21.0 | 14.7 | 完形 |
| 1 建 | 346 | 30.9 | 20.0 | 15.2 | 完形 |
| 5 溝 | 355 | 33.4 | 22.9 | 16.2 | 完形 |
| 5 溝 | 356 | 30.2 | 22.6 | 17.2 | 完形 |
| 1 建 | かまど一括 -1 | 30.4 | 20.3 | 15.6 | 完形 |
| 1 建 | かまど一括 -2 | 32.7 | 22.6 | 16.9 | 完形 |
| 1 建 | かまど一括 -3 | (25.7) | (18.6) | (7.9) | 半割れ |
| | 調査区南側 -1 | 30.9 | 21.8 | 16.7 | 完形 |
| | 調査区南側 -2 | 30.5 | 21.2 | (6.9) | 半割れ |
| | 最小 | 28.2 | 19.4 | 14.1 | |
| | 最大 | 33.4 | 23.1 | 17.2 | |
| | 平均 | 30.6 | 21.6 | 15.8 | |
| | 標準偏差 | 1.5 | 1.3 | 1.0 | |

鎌倉期には大きさの変異幅が大きくなり、江戸時代後期になると大型になって、平均核長 2.69cm、最大で 3.8cm 程度の核がみられるとしている。今回の町遺跡の江戸時代後期のモモ核の平均は、長さ 3.06 ± 0.15cm で、山梨県で出土している江戸時代後期のモモ核の平均よりも大きかった。

全国の遺跡出土大型植物遺体のデータベース（石田ほか，2016）によると、江戸時代におけるイ チョウの出土例は、群馬県内では例がなく、関東地方ではこれまで江戸周辺のみで確認されている。

屋敷跡である町遺跡での出土は、イチョウがどのような場所に植栽されていたかを知る上でも重要 と考えられる。

## 引用文献


石田糸絵・工藤雄一郎・百原　新（2016）日本の遺跡出土大型植物遺体データベース．植生史研究，24，18-24．

新津　健（1999）遺跡から出土するモモ核について―山梨県内の事例から―．山梨考古学論集Ⅳ，361-374，山梨県考古学協会．

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info

Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab.（2006）Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.

## 第３節　町遺跡の花粉分析

森　将志（パレオ・ラボ）

### １．はじめに

群馬県長野原町に所在する町遺跡は、天明三年（1783）の浅間山噴火に伴う泥流によって埋まった建物跡が残る遺跡である。この遺跡において、花粉分析用の試料が採取された。以下では、採取された試料の花粉分析結果を示し、考察した。なお、同一試料を用いて大型植物遺体分析も行なわれている（大型植物遺体分析の節参照）。

### ２．試料と方法

分析試料は、１号建物のS3 礎石まわり（筵）と、S6 礎石南（６層）から採取された計２点である。S3 礎石まわり（筵）は植物片混じり黒色（2.5Y2/1）シルト、S6 礎石南（６層）は砂礫混じり黒色（10YR2/1）シルトである。これらの試料について、次の手順で花粉分析を行った。

試料（湿重量約 3g）を遠沈管にとり、10％水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46％フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣よりプレパラートを作製して行った。S3 礎石まわり（筵）については、花粉化石が少なく、複数枚のプレパラートを検鏡しても分布図の作製に足る数に満たないと判断されたため、プレパラート１枚の全面を検鏡する間に現れる花粉・胞子を全て数えた。S6 礎石南（６層）については、樹木花粉が 200 を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで、単体標本（PLC.1253 ～ 1260）を作製し、写真を第 19 図に載せた。

### ３．結果

両試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 20、草本花粉 11、形態分類のシダ植物胞子２の総計 33 である。これらの花粉と胞子の一覧を第 11 表に、花粉分布図を第 18 図に示した。分布図において、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉および胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン（－）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科とマメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。なお、S3 礎石まわり（筵）については、樹木花粉の産出が少なかったため、産出した樹木花粉の分類群を＊で表示するにとどめておく。

S3 礎石まわり（筵）では、樹木花粉の産出がほとんど見られず、草本花粉が圧倒的に多く産出した。草本花粉はほとんどがイネ科で占められており、90％の産出率を示す。また、栽培植物のソバ属がわずかに産出している。

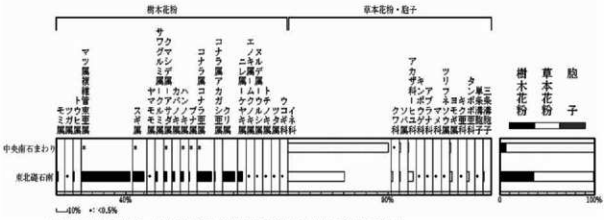
S6 礎石南（６層）においても草本花粉の産出が多く、特にイネ科は 51％の産出率を示し、S3 礎石まわり（筵）と同じくソバ属もわずかに産出している。また、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属が 44％の産出率で、産出が最も多い。次いでコナラ属コナラ亜属が 13％、クリ属が 11％、スギ属が 10％となり、その他にはサワグルミ属－クルミ属やクマシデ属－アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属などが数％の産出率である。

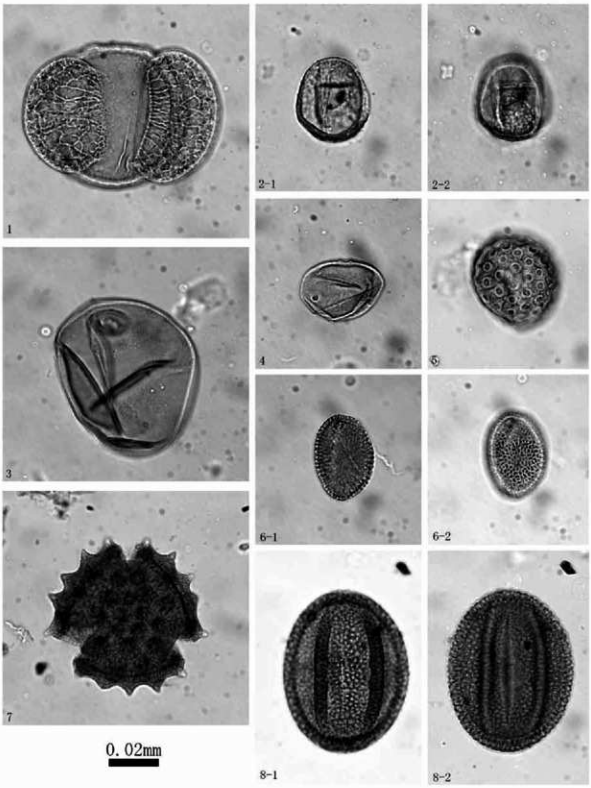
4．考察

まず、S3 礎石まわり（筵）であるが、イネ科花粉の産出率が極めて高く、その他の花粉はほとんど産出していない。イネは開花後すぐに籾殻を閉じ、籾殻内に多量の花粉が取り込まれるため、籾殻には多くの花粉が付着している。S3 礎石まわり（筵）におけるイネ科花粉の特異的な産出は、イネの籾殻が存在した可能性を示している。試料採取地点は筵のある場所であり、農作業など人間活動と関わりがあったのだろうか。また、S3 礎石まわり（筵）では、栽培植物のソバ属が産出した。ソバは花粉生産量の少ない虫媒花で、広範囲に花粉を散布しないと考えられるため、1 号建物の周辺でソバ栽培が行われていたと思われる。1 号建物の南へおよそ 20 m付近には畑跡が検出されており、この畑でソバ栽培が行われていた可能性が高い。

第 11 表　産出花粉胞子一覧

| 学名 | 和名 | S3礎石まわり | S7礎石南 |
|---|---|---|---|
| 樹木 | | | |
| *Abies* | モミ属 | － | 3 |
| *Tsuga* | ツガ属 | － | 1 |
| *Picea* | トウヒ属 | － | 2 |
| *Pinus* subgen. *Diploxylon* | マツ属複維管束亜属 | 6 | 91 |
| *Cryptomeria* | スギ属 | 3 | 21 |
| *Myrica* | ヤマモモ属 | － | 1 |
| *Pterocarya*－*Juglans* | サワグルミ属－クルミ属 | － | 4 |
| *Carpinus*－*Ostrya* | クマシデ属－アサダ属 | 1 | 6 |
| *Betula* | カバノキ属 | － | 5 |
| *Alnus* | ハンノキ属 | 1 | 6 |
| *Fagus* | ブナ属 | 1 | 2 |
| *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* | コナラ属コナラ亜属 | 2 | 27 |
| *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* | コナラ属アカガシ亜属 | － | 2 |
| *Castanea* | クリ属 | － | 23 |
| *Ulmus*－*Zelkova* | ニレ属－ケヤキ属 | － | 9 |
| *Celtis*－*Aphananthe* | エノキ属－ムクノキ属 | － | 1 |
| *Rhus*－*Toxicodendron* | ヌルデ属－ウルシ属 | － | 1 |
| *Aesculus* | トチノキ属 | － | 1 |
| *Parthenocissus* | ツタ属 | － | 1 |
| Araliaceae | ウコギ科 | － | 1 |
| 草本 | | | |
| Gramineae | イネ科 | 194 | 293 |
| Moraceae | クワ科 | 1 | 7 |
| *Fagopyrum* | ソバ属 | 2 | 4 |
| Chenopodiaceae－Amaranthaceae | アカザ科－ヒユ科 | 2 | 27 |
| Ranunculaceae | キンポウゲ科 | － | 1 |
| Brassicaceae | アブラナ科 | － | 2 |
| Leguminosae | マメ科 | － | 2 |
| *Impatiens* | ツリフネソウ属 | － | 1 |
| *Artemisia* | ヨモギ属 | 2 | 12 |
| Tubuliflorae | キク亜科 | － | 2 |
| Liguliflorae | タンポポ亜科 | － | 14 |
| シダ植物 | | | |
| monolate type spore | 単条溝胞子 | － | 1 |
| trilate type spore | 三条溝胞子 | － | 5 |
| Arboreal pollen | 樹木花粉 | 14 | 208 |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | 201 | 365 |
| Spores | シダ植物胞子 | 0 | 6 |
| Total Pollen&Spores | 花粉・胞子総数 | 215 | 579 |
| Unknown pollen | 不明花粉 | － | 9 |


樹木花粉
草本花粉・胞子
モミ属
ツガ属
ヤマモモ属
スギ属
サワグルミ属
マツ属複維管束亜属
マツ属単維管束亜属
ルミ属
ミズナラ属
ヤナギ属
ハンノキ属
カバノキ属
ヘクルミ属
コナラ属コナラ亜属
コナラ属アカガシ亜属
コナラ属クリ属
エノキ属ムクノキ属
ニレ属ケヤキ属
ヒノキ属
ヒバ属
ツガ属
ヤブツバキ属
ヤブコウジ属
ヤブニッケイ属
ヤブムラサキ属
ヤブヤナギ属
ヤブヤブ属
ヤブヤブ属
ヤブヤブ




1. マツ属複維管束亜属（PLC.1253）　2. コナラ属コナラ亜属（PLC.1254）　3. イネ科（PLC.1255）
4. クワ科（PLC.1256）　5. アカザ科 - ヒユ科（PLC.1257）　6. アブラナ科（PLC.1258）
7. キク亜科（PLC.1259）　8. ソバ属（PLC.1260）

第 19 図　町遺跡（1 号建物 6 層）から産出した花粉化石

跡や畑などが発見された遺跡であるが、同時にこの遺跡は一瞬にして封じ込められたムシたちの調査から、ヒトが貯蔵した穀類に誘引されるゴミムシダマシの知られざる生態が明らかになったわが国最初の遺跡である。なお、同一試料を用いて、大型植物遺体分析も行われている（別項参照）。

2．分析試料

昆虫分析試料は、2 種類がある。遺跡発掘の過程において肉眼で採取された試料（現地取り上げ試料、木製品に付着していた土壌も含む）が 4 試料と、大型植物遺体の水洗選別の際に抽出された試料（水洗試料）が 3 試料の、計 7 試料であった。

以下に、各分析試料の内訳を簡単に述べる。現地取り上げ試料の No.289 の下と No.291 の下は 1 号建物跡と井戸の間から出土した。No.289 の下は、ケース内にほぼ一体分の昆虫が入っていた。No.291 の下は土壌混じりの昆虫片であった。No.159 の下と No.279 の下は、1 号建物跡から出土した。

水洗試料は、1 号建物跡囲炉裏の灰の上層と灰の下層、灰の最下層からそれぞれ得られた（水洗方法は別項参照）。

試料は、いずれも昆虫の体節片で構成されていたが、中には内ばね（後翅）や腹部など通常は遺跡から検出されることのない軟体部が保存されたものや、ほぼ一体分が揃った昆虫遺体も認められた。

昆虫の同定作業は、実体顕微鏡を用いて行った。なお、昆虫はそのほとんどが体節片に分離した状態で発見されており、計数点数は個体数を示したものではない。

3．分析結果

得られた昆虫は、No.289 の下が 1 点（ほぼ一体分）、No.291 の下が 6 点、No.159 の下が 67 点、No.279 の下が 18 点、囲炉裏の灰の上層が 5 点、灰の下層が 2 点、灰の最下層が 1 点の、計 101 点であった（第 12 ～ 14 表）。

全試料を通じ、多産したのはゴミムシダマシ Neatus picipes（計 82 点）である。囲炉裏の灰の下層および灰の最下層をのぞいて、どの試料からも発見された。本種は、ゴミムシダマシ科に属する体長 13.0 ～ 17.0mm の黒褐色甲虫である（第 20 図 -5）。科名および族名が、そのまま種小名に採用されたゴミムシダマシ科の代表種であり、近年では種名と科名とが同じ場合には別名とされることも多く、出版されて間もない「日本産ゴミムシダマシ大図鑑」（むし社 2016 年 11 月 30 日刊）では、クロゴミムシダマシの和名がつけられている。

頭部は小点刻を密に有し（第 20 図 -1）、前胸背板は小点刻を一面にもち、これに混じって直径が 2 ～ 3 倍の大点刻を散らす（第 20 図 -2）。この大点刻は中央付近には少ない。上翅は小さく密な点刻を見える明瞭な条溝をもち、間室はやや盛り上がり、浅く微小な点刻を密に配する（第 20 図 -4 および 6）特徴から、近似種のコメノゴミムシダマシ Tenebrio obscurus やチャイロコメノゴミムシダマシ T. molitor などより識別される（秋田・益本，2016）。

分析試料より得られたゴミムシダマシの各体節はいずれも大変保存がよく、後翅や腹部腹板、3 本の肢の基節や転節などといった、遺跡産出昆虫では発見されることが少ない軟体部や微小体節片まで発見されている。そのことは、この昆虫が死後、他の捕食者に食べられたり空気にさらされて分解されることなく、速やかに被

第 12 表　町遺跡 1 号建物出土の現地取り上げ試料の昆虫化石（1）

| 試料番号 | 細分番号 | 種名 | 学名 | 部位 | 長さ（mm） | 食性 | 生態 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| No.289 の下 | 1 | ゴミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 左上翅 | 12.5 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.291 の下 | 1 | ゴミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板 | 4.8 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.291 の下 | 2 | ルリナガスネトビハムシ | *Psylliodes brettingham*/ Baly | 左上翅 | 2.8 | 食植性 | 陸生 |
| No.291 の下 | 3 | ゴミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 右上翅上半部 | 7.2 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.291 の下 | 4 | ゴミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板片 | 2.0 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.291 の下 | 5 | ゴミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板 | 3.5 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.291 の下 | 6 | 不明甲虫 | non identified beetle | 前胸背板片 | 1.8 | 不明 | 不明 |

第 13 表　町遺跡 1 号建物出土の現地取り上げ試料の昆虫化石（2）

| 試料番号 | 細分番号 | 種名 | 学名 | 部位 | 長さ（mm） | 食性 | 生態 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| No.159 の下 | | 1アカマダラカツオブシムシ | *Trogoderma varium* Matsumara et Yokoyama | 左上翅 | 1.7 | 食植性・貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 2アカマダラカツオブシムシ | *Trogoderma varium* Matsumara et Yokoyama | 右上翅 | 2.2 | 食植性・貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 3ゾウムシ科 | Curculionidae gen. et sp. indet. | 右上翅 | 2.3 | 食植性？ | 屋内性？ |
| No.159 の下 | | 4ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 左上翅 | 11.5 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 5ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板 | 5.7 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 6ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 前胸腹板 | 4.8 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 7ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 右上翅 | 11.5 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 8ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 左上翅 | 12.2 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 9ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 10ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 後翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 11ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 右上翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 12ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 左上翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 13ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 右上翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 14ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 左上翅下半部 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 15ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 左上翅下半部 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 16ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 前胸腹板 | 4.5 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 17ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 18ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板 | 5.2 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 19ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 前胸背板 | 5.4 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 20ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 頭部 | 2.8 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 21ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 後脚腔節　　脛節 4.1 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 22ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 前胸腹板 | 4.3 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 23ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 24ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 25ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 26ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 27ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 28ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 29ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 30ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 31ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 32ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 33ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 脛腔節　　脛節 3.1 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 34ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 転節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 35ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 基節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 36ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 基節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 37ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 基節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 38ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 基節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 39ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 後翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 40ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 後翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 41ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 後翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 42ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 後翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 43クロチビエンマムシ | *Carcinops pumilio* (Erichson) | 右上翅 | 2.2 | 食植性・貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 44クロチビエンマムシ | *Carcinops pumilio* (Erichson) | 前胸背板 | 1.5 | 食植性・貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 45ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 基節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 46ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 基節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 47ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 基節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 48ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 基節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 49ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 基節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 50ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 基節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 51ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板片 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 52ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 53ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 54ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 55ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 56ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 後翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 57ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 後翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 58ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 後翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 59ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 後翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 60不明甲虫 | non identified beetle | 部位不明 | | 不明 | 不明 |
| No.159 の下 | | 61不明甲虫 | non identified beetle | 部位不明 | | 不明 | 不明 |
| No.159 の下 | | 62不明甲虫 | non identified beetle | 部位不明 | | 不明 | 不明 |
| No.159 の下 | | 63ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 前胸腹板 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 64ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 中胸腹板 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 65ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 中胸腹板 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 66ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 小楯板 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.159 の下 | | 67ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 小楯板 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 1ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 右上翅 | 11.0 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 2ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 左後脛腔節　　脛節 4.0 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 3ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 左後脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 4ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 基節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 5ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 右上翅下半部 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 6ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 前胸背板片 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 7ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 左中脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 8ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 左前脛腔節 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 9ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 後翅片 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 10ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 左上翅片 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 11ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 前胸腹板片 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 12ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 右上翅 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 13ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 頭部 | 3.0 | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 14ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 頭部片 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 15ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 腹部腹板 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 16ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 頭部片 | | 貯穀性 | 屋内性 |
| No.279 の下 | | 17不明甲虫 | non identified beetle | 胸部片 | | 不明 | 不明 |
| No.279 の下 | | 18ミミムシダマシ | *Neatus picipes* (Herbst) | 上翅片 | | 貯穀性 | 屋内性 |

第 14 表　町遺跡 1 号建物囲炉裏出土の水洗試料の昆虫化石

| 試料番号 | 細分番号 | 種名 | 学名 | 部位 | 長さ（mm） | 食性 | 生態 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 灰の上層 | | 1マルガタゴミムシ | *Amara chalcites* Dejean | 左上翅鞘端 | 2.0 | 雑食性 | 地表性 |
| | | 2イエバエ | *Musca domestica* Linne | 囲蛹片 | 2.4 | 雑食性 | 地表性 |
| | | 3ゴミムシダマシ | *Neatus picipes*（Herbst） | 中腿節 | 2.7 | 貯穀性 | 屋内性 |
| | | 4アリ科 | Formicidae gen. et sp. indet. | 腹部 | 1.4 | 雑食性 | 地表性 |
| | | 5不明甲虫 | non idetified beetle | 部位不明 | | 不明 | 不明 |
| 灰の下層 | | 1不明甲虫 | non idetified beetle | 部位不明 | | 不明 | 不明 |
| | | 2オサムシ科 | Carabidae gen. et sp. indet. | 腹部 | | 雑食性 | 地表性 |
| | | 3ハネカクシ科 | Staphylinidae gen. et sp. indet. | 腹部 | | 雑食性 | 地表性 |
| 灰の最下層 | | 1不明甲虫 | non idetified beetle | 部位不明 | 2.2 | 不明 | 不明 |

覆され今日に至ったことを示しており、浅間山の火山泥流に襲われたとされる遺跡の調査成果とも合致している。

ゴミムシダマシ以外の昆虫は、計 19 点確認された。不明甲虫が 8 点含まれるが、そのほかは 1 点を除き、すべて地表性ないし屋内性の昆虫であった。地表性ないし屋内性ではない昆虫は、No.291 の下より発見された長さ 2.8mm のハムシの仲間の左上翅であった（第 21 図 -4）。青藍色のはねを有するハムシの種類は多く分類は難しいが、上翅に粗点刻列を具え列部は凹み、間室には小点刻をやや列状に具える（中根ほか，1984）特徴により、ルリナガスネトビハムシ Psylliodes brettinghami に同定される。ルリナガスネトビハムシは、ナスやジャガイモほかナス科植物の葉を加害する（尾関，2014）。

地表性昆虫では、囲炉裏の灰の上層よりマルガタゴミムシ Amara chalcites（第 21 図 -6）、アリ科 Formicidae（第 21 図 -7）、イエバエ Musca domestica（第 21 図 -5）が各 1 点ずつ検出された。なお、マルガタゴミムシに似るゴミムシの仲間は多数いるため、発見されたハネはあるいはニセマルガタゴミムシ A. congrua、コマルガタゴミムシ A. simplicidens、コアオマルガタゴミムシ A. chalcophaea などに同定される可能性もあるが、いずれも人家周辺にいる普通種で成虫は主に草の種子や苗などを食べている（中根，1975）。囲蛹片が検出されたイエバエは便池からは発生せず、都会地では主にゴミ、農村では畜舎の敷わらや堆肥が発生源である（安富・梅谷，1983）という。

囲炉裏の灰の下層からは、種名不明のオサムシ科 Carabidae、およびハネカクシ科 Staphylinidae が発見された。いずれも雑食性ないし肉食性の地表性歩行虫である。

ゴミムシダマシに伴って発見された屋内性昆虫では、アカマダラカツオブシムシ Trogoderma varium（第 21 図 -3）と、クロチビエンマムシ Carcinops pumilio（第 21 図 -1 および 2）が得られている。いずれも、No.159 の下より各 2 点ずつ発見された。

前者は、古来、蚕繭の害虫として知られ（日本家屋害虫学会編，1995）、食品害虫としても知られている（農研機構ホームページ「貯穀害虫・天敵図鑑」より）。アカマダラカツオブシムシはカツオブシムシ科 Dermestidae に属し、体長 3.0 ～ 4.0mm の紡錘形、上翅に 3 本の横帯を有する赤褐色の甲虫である。上翅表面に点刻を密布し側縁を中心に黄白色のやや長い毛が覆い、また上翅会合部がやや膨らむ特徴などにより同定される。マダラカツオブシムシ属（Trogoderma）の多くが植物性食品を害し、その一つで欧米ではカプラビートル（Khapra beetle）と呼ばれるヒメアカカツオブシムシ T. granarium は植物性食餌のみで生活し、貯蔵

第 15 表　町遺跡 1 号建物出土の昆虫化石

| 和　名 | 学　名 | 食性 | 生態 | No.289 の下 | No.291 の下 | No.159 の下 | No.279 の下 | 囲炉裏灰の上層 | 囲炉裏灰の下層 | 囲炉裏灰の最下層 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| オサムシ科 | Carabidae gen. et sp. indet. | 雑食性 | 地表性 | | | | | | 1 | | 1 |
| マルガタゴミムシ | Amara chalcites Dejean | 雑食性 | 地表性 | | | | | 1 | | | 1 |
| クロチビエンマムシ | *Carcinopus pumilio* (Erichson) | 食菌性・貯穀性 | 屋内性 | | | 2 | | | | | 2 |
| ハネカクシ科 | Staphylinidae gen. et sp. indet. | 雑食性 | 地表性 | | | | | | 1 | | 1 |
| ゴミムシダマシ | *Neatus picipes*（Herbst） | 貯穀性 | 屋内性 | 1 | 4 | 59 | 17 | 1 | | | 82 |
| アカマダラカツオブシムシ | *Trogoderma varium* Matsumura et Yokoyama | 食穀性・貯穀性 | 屋内性 | | | 2 | | | | | 2 |
| ルリナガスネトビハムシ | *Psylliodes brettinghami* Baly | 食植性 | 移生 | | 1 | | | | | | 1 |
| ゾウムシ科 | Curculionidae gen. et sp. indet. | 食植性？ | 屋内性？ | | | 1 | | | | | 1 |
| アリ科 | Formicidae gen. et sp. indet. | 雑食性 | 地表性 | | | | | 1 | | | 1 |
| イエバエ | *Musca domestica* Linne | 雑食性 | 地表性 | | | | | 1 | | | 1 |
| 不明甲虫 | non idetified beetle | 不明 | 不明 | | 1 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 8 |
| 合　計 | | | | 1 | 6 | 67 | 18 | 5 | 2 | 1 | 101 |

穀類の大害虫として世界中で恐れられている（日本家屋害虫学会編，1995）。より小型で植物質食品や乾燥魚・毛織物・昆虫の死骸などを食べるヒメマルカツオブシムシ Anthrenus verbasci とともに、アカマダラカツオブシムシもまた重要な家屋害虫として知られている（松崎・武衛，1993）。

クロチビエンマムシは、エンマムシ科 Histeridae に所属する体長 2.2 ～ 2.7mm の小型の食屍性甲虫である。本種は腐敗動植物質に集まる習性があり、とくに穀類など貯蔵食品中で採集されることが多い（上野ほか，1985）。エンマムシ科は、成虫・幼虫ともに捕食性があり、主としてハエのウジを捕食する。クロチビエンマムシは、マルマメエンマムシ Gnathoncus nanus やオオマルマメエンマムシ G. nannetensis とともに貯穀類から見いだされる（日本家屋害虫学会編，1995）が、これらは貯蔵穀物を食べるだけでなく、穀類に集まる貯穀性昆虫の幼虫や蛹などを捕食していたとも考えられる。

4．考察

浅間山の火山噴出物に覆われたとされる町遺跡から、計 101 点の昆虫が発見された。その 81.2％にあたる 82 点が、ゴミムシダマシ 1 種だけで占められていた（第 15 表）。このため、町遺跡から得られた昆虫組成を理解するには、ゴミムシダマシについての生態的情報が不可欠である。

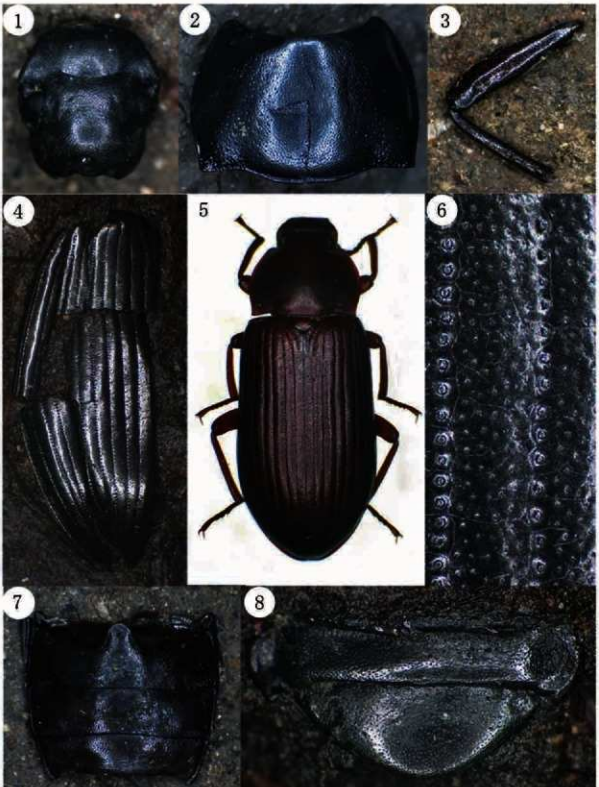
ゴミムシダマシとよく似た昆虫には、いずれも貯穀害虫として著名なコメノゴミムシダマシとチャイロゴミムシダマシがいる。コメノゴミムシダマシは、ヨーロッパ原産の移入種とされ、わが国では 1953（昭和 28）年に定着が確認されて以来、日本各地の倉庫や精米・製粉工場などで普遍的な害虫となっている（安富・梅谷，1983）。後者のチャイロゴミムシダマシは、同じくヨーロッパ原産とされるが、幼虫が各種小動物の飼料（ミールワーム）として利用されるなど、日本国内では害虫被害より飼料用途の利益の方がまさっている（安富・梅谷，1983）。

一方で、在来種のゴミムシダマシは昆虫研究者の間でも謎の多い昆虫の一つとされ、生息環境や生活史の詳細は十分明らかになっていない。「日本産ゴミムシダマシ大図鑑」では、本種は自然林内で乾燥した樹洞内部や大きな倒木の乾燥した樹皮下から見いだされ、ときに納屋の床下などからも発見されることがあるという（秋田・益本，2016）。筆者の一人である森は、ゴミムシダマシの標本を、大井川上流で豪雪地帯でもある静岡県安倍郡井川村（現在静岡市葵区井川）の牧場付近から計 5 頭採集した経験がある。また森の友人（複数）は、愛知県内の標高 1,000m を超えるブナ林内での採集のみならず、平地では知多半島の鷲舎内の採集経験があるといい、本種が人為度の高い場所でも生息可能であることを示している。しかし、これまでの報告や観察例からは、ゴミムシダマシが貯穀害虫であるとの考えは知られていなかった。

こうしたなか、町遺跡から得られた 1 号建物跡の No.159 の下における分析結果は、大変興味深いものである。ゴミムシダマシが計 59 点発見された同じ場所から、食品害虫として知られるアカマダラカツオブシムシと、穀類など貯蔵食品の中で採集されるクロチビエンマムシが産出している。アカマダラカツオブシムシもクロチビエンマムシも、「家屋害虫事典」（井上書院）に登場する著名な家屋害虫の仲間である（日本家屋害虫学会編，1995）。

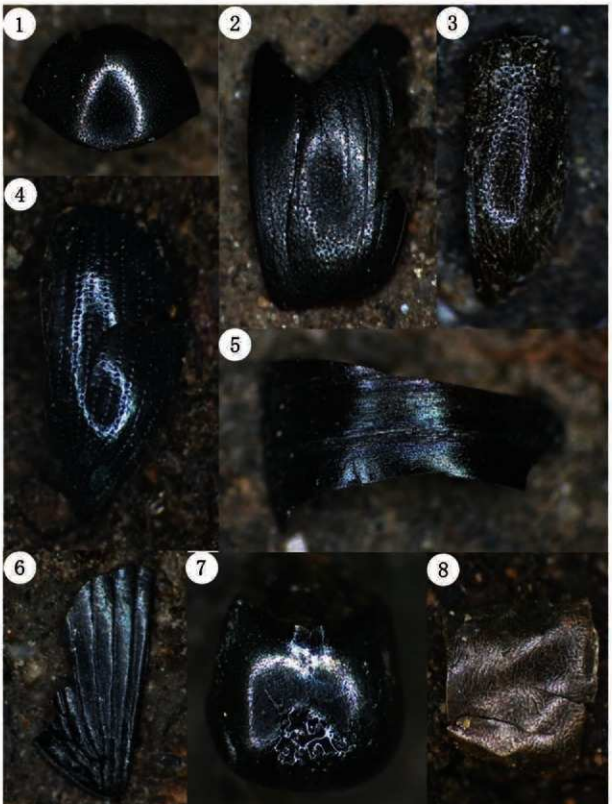
2011 ～ 2013 年に行われた八ッ場ダム建設工事に伴う町遺跡の発掘調査では、合計 706 点の昆虫が発見され、うち 73.5％にあたる 519 点が、貯蔵された穀類に由来する昆虫で占められた（群馬県埋蔵文化財調査事業団，2015）。ゴミムシダマシだけで 329 点検出されたが、この昆虫群集にはコメやムギ、トウモロコシなどの穀粒を食害するコクゾウムシ Sitophilus zeamais が計 112 点伴っていた。このほか、明らかに穀類との関連が疑われる昆虫では、貯蔵された穀粉を食べ貯穀害虫として有名なノコギリヒラタムシ Oryzaephilus surinamensis（1 点）が同時に見つかった（群馬県埋蔵文化財調査事業団，2015）。そして、八ッ場ダム建設工事に伴う調査でも、家屋害虫のクロチビエンマムシとヒメカツオブシムシ Attagenus uncolor が発見されている。ヒメカツオブシムシは、幼虫が各種の種子や豆、穀粒、穀粉、貯蔵タバコなどを食べ（日本家屋害虫学会編，1995）、本報告で得られたアカマダラカツオブシムシとともに見つかることが多い貯穀害虫である。

こうして、町遺跡では、ゴミムシダマシは穀物や貯蔵食品を食べるコクゾウムシやノコギリヒラタムシ、ヒ




1. ゴミムシダマシ　*Neatus picipes* (Herbst)　頭部　幅 2.8mm（No.159 の下；標本 20）
2. ゴミムシダマシ　*Neatus picipes* (Herbst)　前胸背板　幅 5.4mm（No.159 の下；標本 19）
3. ゴミムシダマシ　*Neatus picipes* (Herbst)　左後脛脛節　脛節の長さ 4.0mm（No.279 の下；標本 2）
4. ゴミムシダマシ　*Neatus picipes* (Herbst)　左上翅　長さ 12.5mm（No.289 の下；標本 1）
5. ゴミムシダマシ　*Neatus picipes* (Herbst)　現生標本（静岡市井川 1991.9.22 採集）
6. ゴミムシダマシ　*Neatus picipes* (Herbst)　右上翅上半部の拡大（No.159 の下；標本 7）
7. ゴミムシダマシ　*Neatus picipes* (Herbst)　腹部腹板　幅 5.7mm（No.159 の下；標本 5）
8. ゴミムシダマシ　*Neatus picipes* (Herbst)　第 4 ～ 5 腹板　幅 3.5mm（No.289 の下；標本 5）

第 20 図　町遺跡から産出した昆虫の顕微鏡写真（1）




1. クロチビエンマムシ　*Carcinopus pumilio* (Erichson)　前胸背板　幅 1.5mm（No.159 の下；標本 44）
2. クロチビエンマムシ　*Carcinopus pumilio* (Erichson)　右上翅　長さ 2.2mm（No.159 の下；標本 43）
3. アカマダラカツオブシムシ　*Trogoderma varium* Matsumura et Yokoyama　右上翅　長さ 2.2mm（No.159 の下；標本 2）
4. ルリナガスネトビハムシ　*Psylliodes brettinghami* Baly　左上翅　長さ 2.8mm（No.291 の下；標本 2）
5. イエバエ　*Musca domestica* Linne　囲蛹片　長さ 2.4mm（囲炉裏の灰の上層；標本 2）
6. マルガタゴミムシ　*Amara chalcites Dejean*　左上翅翅端　長さ 2.0mm（囲炉裏の灰の上層；標本 1）
7. アリ科　Formicidae gen. et sp. indet.　胸部　長さ 1.4mm（囲炉裏の灰の上層；標本 4）
8. 不明甲虫　non idetified beetle　前胸背板片　長さ 1.8mm（No.289 の下；標本 6）

第 21 図　町遺跡から産出した昆虫の顕微鏡写真（2）

メカツオブシムシなどと並んでヒトが蓄えた食物に集まり、これを加害する貯穀害虫であったことがほぼ確実となった。それは、発掘調査の結果、検出された屋敷跡や囲炉裏の周りに、穀類が保存されていたことの裏返しであるといえる。

そして、発見された昆虫のほとんどが地表性昆虫であり、かつ屋内昆虫のみで占められたことは、昆虫分析試料を産した場所が家屋内だったか、それに近い環境下であったことを示しており、唯一発見された陸生の食植性昆虫であるルリナガスネトビハムシの食草がナス科植物であることから、遺跡周辺にナスやジャガイモなどの畑作物が植栽されていた可能性も考えられる。

## 5．おわりに

ゴミムシダマシ（科）は、虫屋の間で「ゴミダマ」と呼ばれている。多くは、つやのある黒褐色の甲虫だが、カブトムシやクワガタムシのようにツノがあるわけでなく、ホタルのように光るわけでもなく、人気のない目立たないムシである。研究者もコレクターも大変少なく、注目されることのほとんどない昆虫だが、生息場所や食性が変化に富み、形態のうえでも驚くほど多様である。「ゴミダマ」という名称は、昆虫仲間には蔑視にも似た呼び方であるが、よく分からないものは「ゴミダマ」にしておけばたいていあたる、というほど種数の多い分類群なのである。

不思議なことに、ゴミムシダマシ科に属する昆虫の中には、非常に多くの貯穀害虫が含まれる。先にあげたコメノゴミムシダマシやチャイロコメノゴミムシダマシだけでなく、クロゴミムシダマシ Neatus ventralis、ガイマイゴミムシダマシ、ヒメゴミムシダマシ、コゴメゴミムシダマシなどはいずれも世界に知られた穀物害虫である。このほか、コクヌストモドキの仲間は、最も警戒すべき貯穀害虫として多くの生物学の教科書に登場する。こうした貯穀害虫とされる昆虫のほぼすべてが海外からの移入種であり、いつどのような方法で日本列島に渡ってきたか、ほとんど分かっていない。

町遺跡では、江戸時代後期のころ、日本在来のゴミムシダマシは穀類を加害する貯穀害虫だった。本種がヒトの居住域から遠ざかり貯穀害虫の座を外来種に譲り渡すには、いったいどのようなできごとがあったのか、追究すべき課題は多い。

## 引用文献


秋田勝己・益本仁雄（2016）日本産ゴミムシダマシ大図鑑．300p，むし社．

平嶋義宏・森本　桂・多田内修（1989）昆虫分類学．597p，川島書店．

群馬県埋蔵文化財調査事業団（2015）町遺跡－八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 45 集．群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告（第 593 集）．148p，群馬県埋蔵文化財調査事業団．

松崎沙和子・武衛和雄（1993）都市害虫百科．236p，朝倉書店．

中根猛彦（1975）学研中高生図鑑・昆虫Ⅱ（甲虫），445p，学習研究社．

中根猛彦・大林一夫・野村　鎮・黒沢義彦（1984）原色昆虫大図鑑Ⅱ（甲虫篇），448p，北隆館．

日本家屋害虫学会編（1995）家屋害虫事典．468p，井上書院．

農研機構食品害虫運営グループ http://www.naro.affrc.go.jp/org/nfri/yakudachi/gaichu/index.html「貯穀害虫・天敵図鑑」（2017 年 3 月 22 日引用）

尾関　暁（2014）ハムシハンドブック．104p，文一総合出版．

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝（1985）原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），514p，保育社．

安富和男・梅谷献二（1983）衛生害虫と衣食住の害虫．310p，全国農村教育協会．

## 第５節　町遺跡出土の灰および編組製品の植物珪酸体

米田恭子（パレオ・ラボ）

### １．はじめに

町遺跡の建物跡から検出された囲炉裏の灰と編組製品について、素材の母植物を検討する目的で植物珪酸体分析を行った。以下に、分析結果および考察を記す。なお、灰試料については大型植物遺体分析も行われている（大型植物遺体の項参照）。

### ２．試料と方法

試料は、１号建物の囲炉裏の上面（分析 No.1）、上層（分析 No.2）、下層（分析 No.3）、最下層（分析 No.4）からそれぞれ採取された灰４点と、同じく１号建物から出土したむしろ（分析 No.5）、みの？（分析 No.6）、茶釜付着の藻製品？（分析 No.7）の編組製品３点の、計７試料である。１号建物は江戸時代（天明期）の建物跡で、天明３年（1783）の浅間山の噴火に伴う泥流で埋没した。

灰試料は、実体顕微鏡で観察したところ、植物遺体とみられる白色物が微細であり、直接抽出するのは困難であった。そこで、以下の手順にしたがって処理を行い、試料に含まれる植物珪酸体の抽出を試みた。秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30％の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーを用いて試料を分散させ、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体を中心とした植物珪酸体についてガラスビーズが 300 個に達するまで行った。

編組製品については、試料の表面に付着する土壌などを超音波洗浄機で取り除き、乾燥させた試料を管瓶にとり、電気炉を用いて灰化した。灰化の工程は藤原（1976）を参考にした。処理工程は、はじめ毎分５℃の割合で温度を上げ、100℃において 15 分ほど温度を保ち、その後毎分２℃の割合で 550℃まで温度を上げ、５時間温度を保持した。灰化した試料の一部を取り出し、グリセリンを用いてプレパラートを作製し、検鏡した。なお、茶釜付着の藻製品？（分析 No.7）については、上記の方法で植物珪酸体の抽出を試みたところ植物珪酸体が得られなかったため、走査型電子顕微鏡を用いて試料表面の観察を行い、素材の母植物についての手がかりを探った。

### ３．観察の結果

観察された植物珪酸体を第 16・17 表に示した。

［分析 No.1（囲炉裏灰：上面）］

イネの機動細胞珪酸体が 12 個検出された。次いでキビ族の機動細胞珪酸体が５個とネザサ節型の機動細胞珪酸体が２個観察された。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体が９個とポイント型の不明植物珪酸体が３個検出された。棒状型およびポイント型の不明植物珪酸体は、すべてのイネ科植物に類似した形態の植物珪酸体が存在するため（近藤，2010）、由来した分類群の同定は難しい。

［分析 No.2（囲炉裏灰：上層）］

棒状型の不明植物珪酸体が４個観察された。

［分析 No.3（囲炉裏灰：下層）］

ササ属とキビ族、ウシクサ族の機動細胞珪酸体がそれぞれ２個検出された。次いでイネとネザサ節型、ヨシ属の機動細胞珪酸体が各１個得られた。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体３個とポイント型の不明植物珪酸体が１個検出された。

第 16 表　町遺跡 1 号建物囲炉裏の灰の植物珪酸体（ガラスビーズ 300 個あたりの検出個数）

| 分析 No. | 遺構 | 採取位置 | | 種類 | 機動細胞珪酸体 | | | | | | 不明植物珪酸体 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | イネ | ネザサ節型 | ササ属 | ヨシ属 | キビ族 | ウシクサ族 | 棒状型 | ポイント型 |
| 1 | 1 号建物 | 囲炉裏 | 上面 | 灰 | 12 | 2 | | | 5 | | 9 | 3 |
| 2 | | | 上層 | | | | | | | | 4 | |
| 3 | | | 下層 | | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | 2 | 3 | 1 |
| 4 | | | 最下層 | | 7 | | 19 | 26 | 9 | 7 | 15 | 4 |

第 17 表　町遺跡 1 号建物出土編組製品の植物珪酸体

| 分析 No. | 遺構 | 採取位置 | 遺物名 | 機動細胞珪酸体 | 短細胞珪酸体 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | イネ | イネ型 | キビ型 | タケ型 |
| 5 | 1 号建物 | No.93 付近 | むしろ | | | | ○ |
| 6 | | No.206 | みの？ | ○ | ○ | | |
| 7 | | 茶釜付着 | 藁製品？ | | | ○ | |

［分析 No.4（囲炉裏灰：最下層）］

ヨシ属の機動細胞珪酸体が 26 個検出された。次いでササ属の機動細胞珪酸体が 19 個得られた。また、キビ族の機動細胞珪酸体が 9 個、イネとウシクサ族の機動細胞珪酸体が各 7 個得られた。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体 15 個とポイント型の不明植物珪酸体が 4 個検出された。

［分析 No.5（むしろ：No.93 付近）］

タケ型の短細胞珪酸体が観察された。

［分析 No.6（みの？：No.206）］

イネの機動細胞珪酸体とイネ型の短細胞珪酸体が観察された。

［分析 No.7（藁製品？：茶釜付着）］

キビ型の短細胞珪酸体が観察された。

## 4．考察

1 号建物の囲炉裏跡から採取された灰 4 点について植物珪酸体分析を行った結果を下層から順に見ていく。

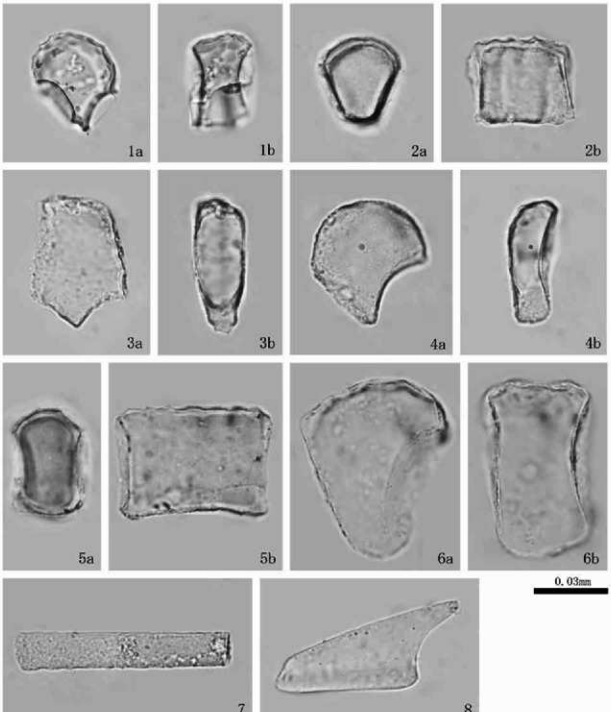
最下層（分析 No.4）からは、他の灰試料と比較して最も多くの植物珪酸体が得られた。特にヨシ属が多く、次いでササ属がやや多く得られた。また、キビ族とウシクサ族、イネも含まれていた。囲炉裏内から採取された灰であるため、これらの植物が着火材などとして利用されていた可能性がある。

下層（分析 No.3）は、最下層に含まれていた分類群に、ネザサ節型を含めた植物珪酸体組成であったが、含有量はそれぞれごくわずかであった。得られたイネ科の植物については、着火材などとして利用されていた可能性がある。

上層（分析 No.2）からは、植物珪酸体はほとんど検出されなかった。よって上層の灰の主体は、イネ科植物ではないとみられる。

上面（分析 No.1）からは、イネが 4 試料中で最も多く検出され、ほかにキビ族とネザサ節型を少量含む植物珪酸体の組成であった。これらのイネ科植物は、着火材として利用された可能性がある。一方、分析 No.1 は囲炉裏の上面の灰であるため、囲炉裏とは直接関係ない、建物の屋根材や壁材、敷物など何らかの生活用具などに使われていたイネ科植物に、由来する可能性も挙げられる。また、大型植物遺体分析の結果、囲炉裏の上面からはヒエとアワの有ふ果が検出されている一方で、雑草類の種子も得られており（大型植物遺体分析の項参照）、建物外部からの流れ込みがあった可能性もある。

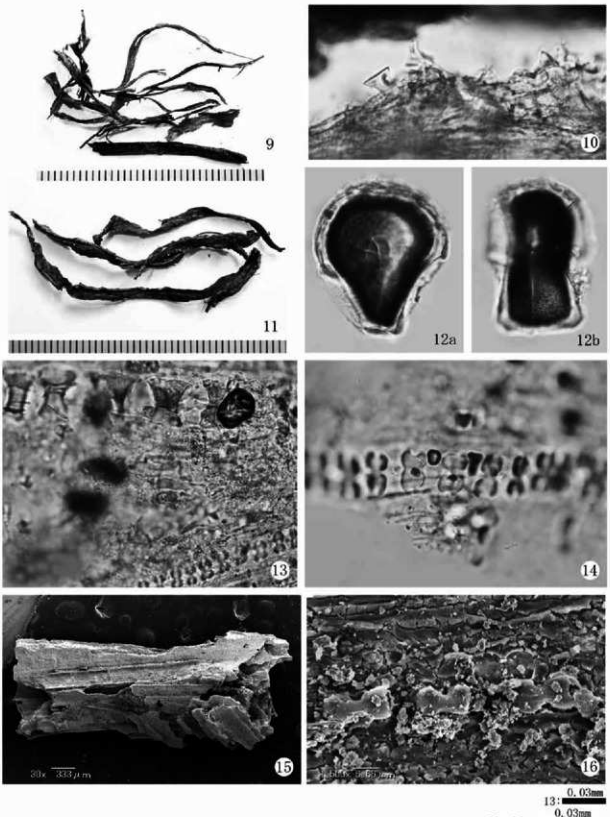
次に、編組製品について植物珪酸体分析を行った結果を見ていくと、むしろ（分析 No.5）からは、タケ型の短細胞珪酸体が検出された。むしろの母植物は、タケ亜科とみられる。分析試料中からタケ亜科以上の同定の手がかりとなる機動細胞珪酸体が検出されていないため、科以上の同定は、現時点では困難である。




1．イネ機動細胞珪酸体(分析 No.1)、2．ネザサ節型機動細胞珪酸体(分析 No.3)、3．ササ属機動細胞珪酸体(分析 No.3)、4．ヨシ属機動細胞珪酸体（分析 No.4）、5．キビ族機動細胞珪酸体（分析 No.1）、6．ウシクサ族機動細胞珪酸体（分析 No.4）、7．棒状型不明植物珪酸体（分析 No.1）、8．ポイント型不明植物珪酸体（分析 No.1）

a：断面、b：側面

第 22 図　町遺跡 1 号建物囲炉裏から検出された灰の植物珪酸体




9．むしろ（分析 No.5）、10．タケ型短細胞珪酸体（分析 No.5）、11．みの？（分析 No.6）、12．イネ機動細胞珪酸体（分析 No.6）、13．イネ機動細胞珪酸体とイネ型短細胞珪酸体（分析 No.6）、14．イネ型短細胞珪酸体（分析 No.6）、15．茶釜付着の藁製品？（分析 No.7）、16．キビ型短細胞珪酸体（分析 No.7）
a：断面、b：側面、走査型電子顕微鏡写真のスケールは写真上に示す

第 23 図　町遺跡 1 号建物出土編組製品の植物珪酸体

みの？（分析 No.6）からは、イネの機動細胞珪酸体とイネ型の短細胞珪酸体が検出されており、素材の母植物は稲藁と判断される。

茶釜付着の藁製品？（分析 No.7）では、走査型電子顕微鏡を用いて試料表面を観察した結果、キビ型の短細胞珪酸体が観察された。キビやヒエ、エノコログサなどのキビ族や、ススキなどのウシクサ族に観察されるキビ型の短細胞珪酸体は、細胞に対して水平方向に連なる配列を持つ特徴があり、短細胞珪酸体が垂直方向に配列するイネ型と識別される。今回観察された短細胞珪酸体からは、茶釜に付着した植物遺体は少なくとも稲藁ではなかったと判断される。

### 引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，15-29．

近藤鋉三（2010）プラント・オパール図譜，167p．北海道大学出版会．

## 第６節　町遺跡出土編組製品等の素材植物種の同定

黒沼保子・佐々木由香（パレオ・ラボ）
鈴木三男・小林和貴（東北大学植物園）
能城修一（明治大学黒曜石研究センター）

### １．はじめに

長野原町に所在する町遺跡から出土した繊維製品と草本８点について、樹脂包理法による素材植物種の同定を行った。

### ２．試料と方法

試料は、1 号建物跡から出土した布３点（遺物 No.298、348、374）と縄１点（遺物 No.365）、繊維製品１点（遺物 No.378）と、５号溝から出土した筵もしくは畳１点（遺物 No.304-1）と草？１点（遺物 No.304-2）、出土位置不明の藁？１点である。遺構の時期は、いずれも江戸時代（天明期）と推測されている。

方法は、まず肉眼もしくは実体顕微鏡で試料を観察し、同定用試料として布と繊維製品、筵もしくは畳は経糸と緯糸から各２点、縄と藁？、草？は本体から各２点、小片を採取して、状態の良いどちらか１点を樹脂包埋試料とした。樹脂包理は、アセトンの上昇系列で脱水処理を行なった後、エポキシ樹脂に包理した。樹脂包埋試料はミクロトームを用いて切片を作製し、プレパラートに封入した。プレパラートは光学顕微鏡下で観察し、現生標本と比較して同定を行った。プレパラートは、パレオ・ラボに保管されている。

### ３．結果

同定の結果、１号建物から出土した布３点（遺物 No.298、348、374）と、５号溝から出土した筵または畳（遺物 No.304-1）で同定できた経糸と緯糸は、いずれもアサの靭皮繊維であった。１号建物から出土した縄（遺物 No.365）は、シナノキの靭皮繊維であった。同じく１号建物から出土した繊維（遺物 No.378）は、絹であった。出土位置不明の藁？はヨシ、５号溝出土の草？（遺物 No.304-2）はヨシ？であった。結果の一覧を第 18 表に示す。

以下に、各素材植物の特徴と同定根拠を示す。また、試料写真を第 24 ～ 27 図、光学顕微鏡写真を第 28 ～ 30 図に示す。

(1) **アサ** *Cannabis sativa* L.　アサ科　第 28・29 図：1-7（遺物 No.298、348、374：布、遺物 No.304-1：筵もしくは畳）、8（市販の麻縄）

遺物 No.298、348、374、304-1 はいずれも平織で、太さ約 1㎜の糸で織られていた。糸の細胞の断面は角の丸い多角形で、短径が 10 ～ 20 μ m 程度である。細胞内腔は、径の小さい細胞では狭く、径が大きいものでは細胞が押しつぶされて細胞内腔は線状となっている。単独あるいは数細胞、時に 10 細胞以上が互いに結合して塊となったものが多数撚り合わさっている。細胞の大きさ、細胞は単独あるいは細胞塊だが基本的には繊維細胞塊と考えられる点、繊維細胞の横断面の形が角の丸い多角形である点などから、アサの靭皮繊維と同定した。現在市販されている麻縄（第 29 図：8）と比較したところ、出土遺物の繊維の細胞径の方が一回り小さかった。しかし、現生のアサでも繊維細胞の径にはかなりの変異があり、出土遺物の繊維はその変異の範疇である。

(2) **シナノキ** *Tilia japonica* (Miq.) Simonkai　シナノキ科　第 29 図：9（遺物 No.365：縄）

遺物は太さ約 1.5cm の縄で、太さ約 0.7cm の繊維 2 本を S 撚りにしている。横断面では繊維細胞の塊が四角～長方形をしており、個々の塊の横断面は多角形の細い繊維細胞が密に集まってできている。繊維細胞の集まり方は不整で、ヤマブドウの靭皮繊維のように長方形の細胞が整然と並んでいるのとは異なる。繊維細胞の太さと断面の形、配列の仕方等からシナノキの靭皮繊維と同定した。

(3) **絹**　第 29 図：10-11（遺物 No.378：繊維）

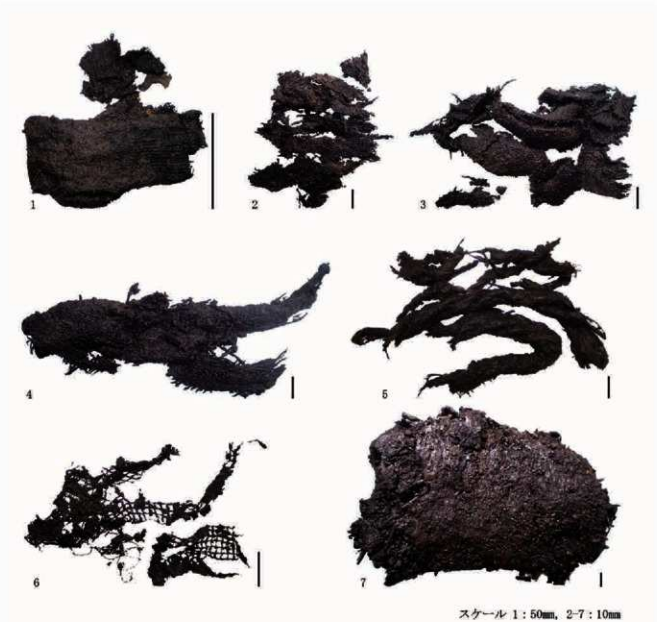
遺物は、太さ 0.3㎜程の糸をより合わせて、2 ㎜程の間隔をあけて緩く織られている。糸の繊維は、直径が 10 μ m 前後の太さが比較的均一な繊維で、すべて単独である。出土遺物の色は、アサなどの植物性の繊維が褐色になるのに対し、本遺物はほとんど色が着いていない。繊維の断面は楕円形～角が丸い三角形である。側面は平滑で、彫紋・紋様などはない。以上の点から、絹の繊維と同定した。

(4) **ヨシ** *Phragmites australis* (Cav.) Trin. ex Steud.　イネ科　第 30 図：12（遺物 No. 不明：藁？）

遺物試料は横断面が扁平なテープ状で、厚さ 0.4mm、幅 3 mm ほどである。片側に表皮があり、反対の面

**第 18 表　結果一覧**

| 遺構名 | 遺物 No. | 製品 | 織り方等 | 糸の太さ | 採取部位 | 包理 No. | 同定結果 | 部位 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 号建物 | 298 | 布 | 平織 | 約 1㎜ | 経糸 1 | 分析 No.1 | アサ | 靭皮繊維 | ― |
| | | | | | 経糸 2 | ― | ― | ― | |
| | | | | | 緯糸 1 | ― | ― | ― | |
| | | | | | 緯糸 2 | 分析 No.2 | アサ | 靭皮繊維 | |
| 1 号建物 | 348 | 布 | 平織 | 約 1㎜ | 経糸 1 | ― | ― | ― | - |
| | | | | | 経糸 2 | 分析 No.3 | 同定不可 | ― | プレパラート作製不可 |
| | | | | | 緯糸 1 | ― | ― | ― | ― |
| | | | | | 緯糸 2 | 分析 No.4 | アサ | 靭皮繊維 | ― |
| 1 号建物 | 374 | 布 | 平織 | 約 1㎜ | 経糸 1 | ― | ― | ― | ― |
| | | | | | 経糸 2 | 分析 No.5 | アサ | 靭皮繊維 | |
| | | | | | 緯糸 1 | ― | ― | ― | |
| | | | | | 緯糸 2 | 分析 No.6 | アサ | 靭皮繊維 | |
| 5 号溝 | 304-1 | 筵または畳 | 平織 | 約 1㎜ | 経糸 1 | ― | ― | ― | ― |
| | | | | | 経糸 2 | 分析 No.7 | アサ | 靭皮繊維 | |
| | | | | | 緯糸 1 | 分析 No.8 | アサ | 靭皮繊維 | |
| | | | | | 緯糸 2 | ― | ― | ― | |
| 1 号建物 | 365 | 縄 | S 撚り | 約 0.7cm | 本体 1 | 分析 No.9 | シナノキ | 靭皮繊維 | ― |
| | | | | | 本体 2 | ― | ― | ― | |
| 1 号建物 | 378 | 繊維 | 絡み織 | 約 0.3㎜ | 経糸 1 | ― | ― | ― | 経緯は任意 |
| | | | | | 経糸 2 | 分析 No.10 | 絹 | ― | |
| | | | | | 緯糸 1 | 分析 No.11 | 絹 | ― | |
| | | | | | 緯糸 2 | ― | ― | ― | |
| 不明 | 不明 | 藁（ござ）？ | 不明 | 幅約 3㎜ | 本体 1 | ― | ― | ― | ― |
| | | | | | 本体 2 | 分析 No.12 | ヨシ | 茎（半割） | |
| 5 号溝 | 304-2 | 草？ | - | 幅約 3.5㎜ | 本体 1 | ― | ― | ― | ― |
| | | | | | 本体 2 | 分析 No.13 | ヨシ？ | 丸茎 | |




1．布（1 建、No.298）、2．布（1 建、No.348）、3．布（1 建、No.374）、4．筵または畳（5 溝、No.304）、5．縄（1 建、No.365）、6．繊維（1 建、No.378）、7．葦？（遺構・No. なし）

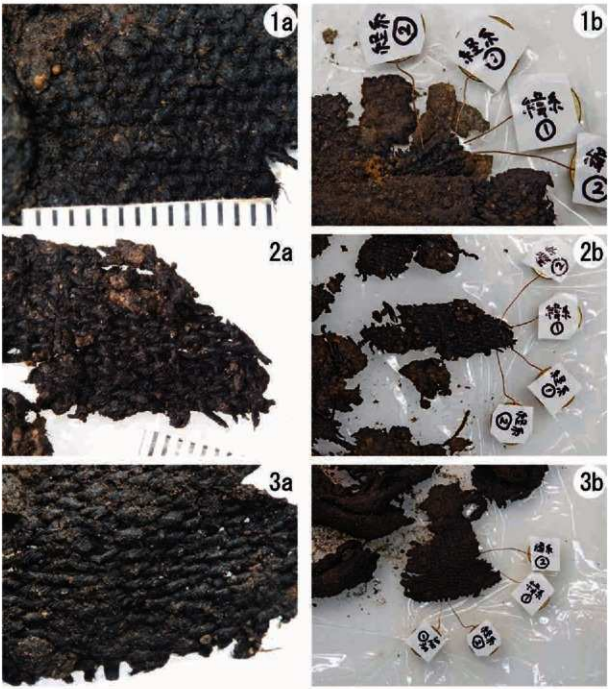
第 24 図　町遺跡出土の素材植物種の同定を行った編組製品

は髄腔の潰れた組織である。両側は丸く調整されている。表皮にはクチクラがあり、やや平滑、下表皮組織は数細胞層で、下表皮と髄腔の潰れた組織の間に２～３層程度にまばらに維管束が散在する。維管束は髄腔側に現生木部、その外側両側にそれぞれ１本の大きな丸い後生木部道管、原生木部の反対側の表皮側にひとかたまりの篩部を持つ、いわゆるイネ科型の維管束である。維管束の周囲には繊維組織は発達していない。

イネ科型の維管束で、大きな髄腔を持つ点、維管束周囲の繊維組織は発達していない点、維管束の層数が２～３層と薄い点などから、ヨシの茎と同定した。ヨシの茎を半割にして、両側の尖った部分を削り落として丸くしたもので編んだと考えられる。

(5) **ヨシ？**　*Phragmites australis* (Cav.) Trin. ex Steud.？　イネ科　第 30 図：13（遺物 No.304-2: 草？）

両面が極めて平らなテープ状で、断面では両面がほとんど平行に見える。表皮組織が上下両面に観察され、中央部分は空隙が潰れた構造となっているため、元は丸い中空の管が潰れて扁平になったと考えられる。維管束は観察されないが、イネ科の植物では維管束を取り巻く柔組織（基本組織）が互いに繋がって網目状になっており、それと同じ構造が見られる。




1．遺物 No.298（分析 No.1・2：1 号建物出土の布）
2．遺物 No.348（分析 No.3・4：1 号建物出土の布）
3．遺物 No.374（分析 No.5・6：1 号建物出土の布）
a：試料拡大、b：採取位置

第 25 図　町遺跡出土繊維製品の試料写真（1）

4．遺物 No.304-1（分析 No.6・7：5 号溝出土の筵または畳）

5．遺物 No.365（分析 No.8・9：1 号建物出土の縄）

6．遺物 No.378（分析 No.10・11：1 号建物出土の繊維）

a：試料拡大、b：採取位置

第 26 図　町遺跡出土繊維製品の試料写真（2）

遺物試料は、大きな髄腔を持つ点、柔組織の網目状構造が見られる点などがヨシの茎の特徴と良く一致するため、ヨシの可能性が高いと判断した。

4．考察

1 号建物から出土した布（遺物 No.298、348、374）はいずれも平織で、経糸・緯糸ともにアサの靭皮繊

7．遺物 No. 不明（分析 No.12：出土位置不明の葦？）
8．遺物 No.304-2（分析 No.13：5 号溝出土の草？）
a：試料拡大、b：採取位置

第 27 図　町遺跡出土繊維製品の試料写真（3）

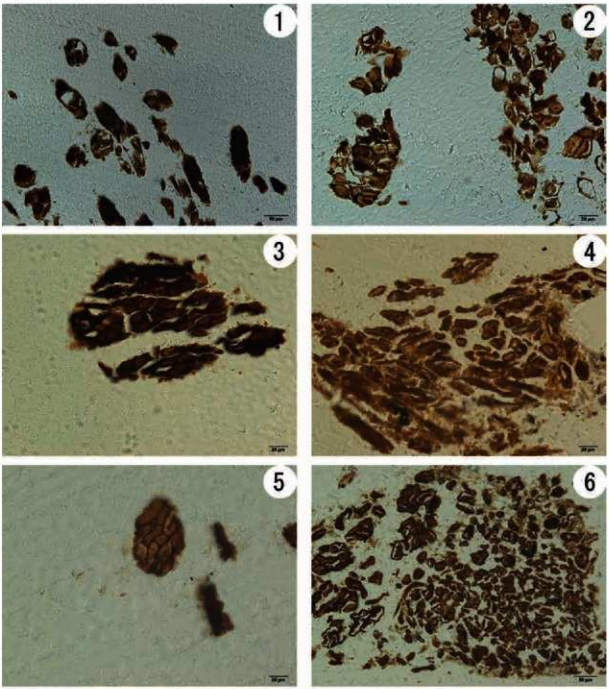
維が使用されていた。アサ（Cannabis sativa L.）は、アサ科アサ属の 1 年生草本である。中央アジアが原産とされ、日本列島では縄文時代早期にアサの果実が確認されている（工藤・一木，2014）。江戸時代から昭和初期にかけては全国的に栽培されており、栃木県や長野県などでは商品作物として生産されていた。また、群馬県でも長野原町付近の榛名山北麓一帯で生産されていた（篠崎，2014）。長野原町でも、東宮遺跡から出土した近世の布がアサと同定されている（鈴木，2012）。

5 号溝から出土した筵または畳（遺物 No.304-1）も、素材はアサの靭皮繊維であった。したがって、布製品である可能性が考えられる。なお、同じく 5 号溝から出土した草？（遺物 No.304）は、ヨシ？であった。加工痕は見られなかったため、製品を作るための素材の束であった可能性や、自然堆積したヨシ？であった可能性などが考えられる。

1 号建物から出土した縄（遺物 No.365）は、シナノキの靭皮繊維であった。シナノキの靭皮繊維の出土例としては、青森県の川原平（1）遺跡から出土した縄文時代後期～晩期の縄、同じく青森県の十三盛遺跡から出土した平安時代の縄、福井県の鳥浜貝塚から出土した縄文時代前期の紐が確認されている（鈴木，2015）。

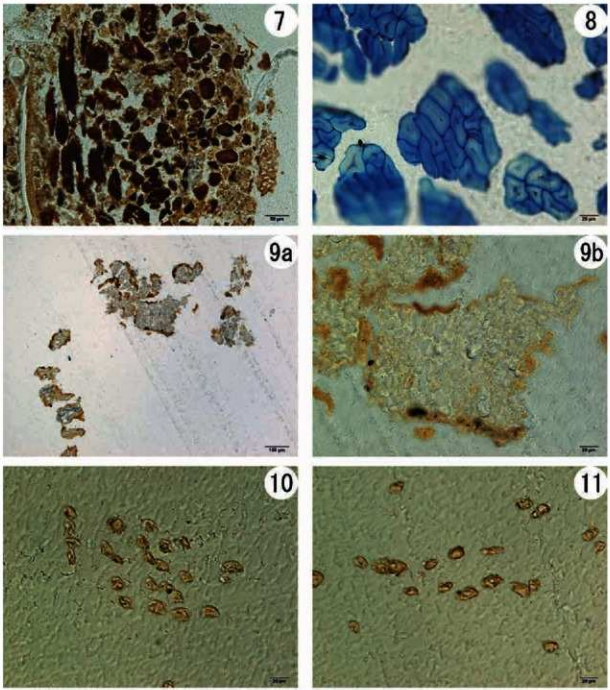
同じく 1 号建物から出土した繊維（遺物 No.378）は、絹であった。繊維 2 本を撚り合わせて緩く織ってあり、絡み織の一種と思われる。絡み織は、2 本の経糸を捩りながら横糸と織り込む、目の粗い織り方である。絹の出土例は、新宿区の南元町遺跡で近世～近代の絹織物が同定されている（小林ほか，2015）。

出土位置不明の葦？はヨシで、茎を半割にして両端が加工されていた。葦かどうかは不明であるが、加工された製品である可能性は高い。



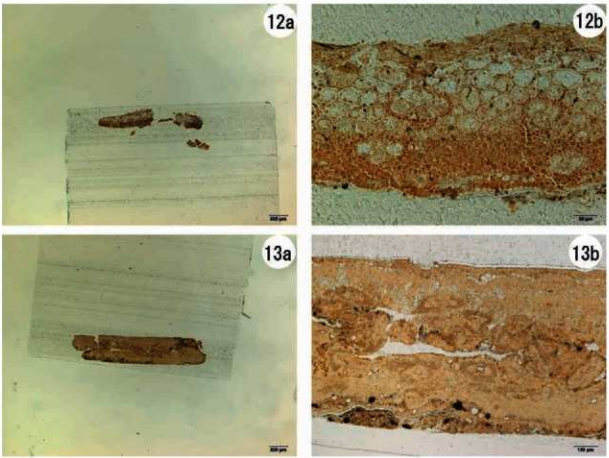

1. アサ靭皮繊維（分析 No.1：1 号建物出土の布（遺物 No.298）経糸 1）
2. アサ靭皮繊維（分析 No.2：1 号建物出土の布（遺物 No.298）緯糸 2）
3. アサ靭皮繊維（分析 No.4：1 号建物出土の布（遺物 No.348）緯糸 2）
4. アサ靭皮繊維（分析 No.5：1 号建物出土の布（遺物 No.374）経糸 1）
5. アサ靭皮繊維（分析 No.6：1 号建物出土の布（遺物 No.374）緯糸 2）
6. アサ靭皮繊維（分析 No.7：5 号溝出土の筵または畳（遺物 No.304-1）経糸 2）

第 28 図　町遺跡出土繊維製品の顕微鏡写真（1）




7. アサ靭皮繊維（分析 No.8：5 号溝出土の筵または畳（遺物 No.304-1）緯糸 1）
8. 現在の市販麻縄の横断面
9. シナノキ靭皮繊維（分析 No.9：1 号建物出土の縄（遺物 No.365）本体 1）
10. 絹（分析 No.10：1 号建物出土の繊維（遺物 No.378）経糸 2）
11. 絹（分析 No.11：1 号建物出土の繊維（遺物 No.378）緯糸 1）
a：低倍率、b：高倍率

第 29 図　町遺跡出土繊維製品の顕微鏡写真（2）




12．ヨシ（分析 No.12：出土位置不明の葉？　本体 2）
13．ヨシ（分析 No.13：5 号溝出土の草？（遺物 No.304-2）本体 2）
a：低倍率、b：高倍率

第 30 図　町遺跡出土繊維製品の顕微鏡写真（3）

## 引用文献

小林和貴・佐々木由香・能城修一・鈴木三男（2015）南元町遺跡第 3 次調査出土繊維製品等の素材植物．国際文化財株式会社編「南元町遺跡 Ⅲ」：248-254．住友不動産．

工藤雄一郎・一木絵里（2014）縄文時代のアサ出土例集成．工藤雄一郎編「国立歴史民俗博物館研究報告　第 187 集　縄文時代の人と植物の関係史」：425-440．国立歴史民俗博物館．

篠崎茂雄（2014）アサ利用の民俗学的研究．工藤雄一郎編「国立歴史民俗博物館研究報告　第 187 集　縄文時代の人と植物の関係史」：405-420．国立歴史民俗博物館．

鈴木三男（2012）東宮遺跡出土織物の繊維素材．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「東宮遺跡（2）－遺物編－」：478-479．群馬県埋蔵文化財調査事業団．

鈴木三男（2015）縄文・弥生時代の樹皮製品の素材とその地域性．あみもの研究会編「シンポジウム縄文・弥生時代の編組製品研究の新展開－植物資源利用・技法・用途－要旨集」：35-44．あみもの研究会．

# 要　　約

1．町遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字長野原字町 148-2 ほかに所在する。遺跡は長野原町の北部、吾妻川流域地帯に属し、吾妻川左岸の中位段丘に立地しており、現在の長野原市街地にあたる。吾妻川との比高差は約 30 m、標高は 604.6 ～ 605.9 mである。

2．遺跡の調査は町道長野原向原線道路整備事業に伴い、平成 25・28 年度に長野原町教育委員会が実施した。調査面積は 150㎡である。

3．調査の結果、1783（天明３）年に浅間山の大噴火に伴って発生した泥流によって埋没した屋敷跡の一部が検出された。調査地点では礎石建物跡１棟、井戸跡１基、屋外炉跡１基、畑跡３枚、土坑跡１基、溝状遺構７条、道路状遺構１条が検出された。いずれの遺構も部分検出であった。

4．礎石建物跡は調査区の北西隅、井戸の西側で検出された。規模は東西間口 4.95 m以上、奥行き 2.92 m以上。を測る。検出範囲は建物の南東隅にあたる。調査区が敷地の約３分の１であることや宿場街道に面した宿屋を経営していたことを前提とするならば、建物はさらに西側、北側へ延び、間口 12 間程、奥行き６～７間程の建物が想定される。上述したように建物は基壇上に構築されており、その標高は 605.9 m、その一段下である井戸周辺や建物南側のテラス部分が標高 605.6 mを測る。今回の検出範囲はザシキとダイドコロの一部であり、概ね第１次調査区が前者、第３次調査区が後者にあたる。礎石に使用される石は扁平な輝石安山岩で比較的大振りである。本建物の特徴としてザシキとダイドコロの礎石列に喰い違いが認められることと桁行方向と梁間方向の柱間が異なることを挙げることができる。またザシキの桁行方向の柱間が約 1.6 m（約 5.3 尺）なのに対して梁間方向が推定で 2.7 m（1.5 間）、ダイドコロの桁行方向の柱間が 1.15 m（3.5 尺）なのに対して梁間方向が約 1.9 m（約１間）である。建物周りではダイドコロの東側と南側で礎石列が存在し、勝手口や下屋などが想定される。施設としては、ザシキで囲炉裏、ダイドコロで竈が検出されている。囲炉裏は、確認面では薪の下から灰層が東西 110㎝×南北 115㎝の範囲で分布し、囲炉裏の枠木が３本検出されている。２本はやや東側へ、１本は北東側へ大きくずれて調査区壁際で検出されている。枠木を復元すると内法で 89㎝角であり、灰の分布と併せると元々の枠木の位置が復元できた。灰層は約 10㎝の厚さを有し、炭化材を多く含みとても堅固であった。竈は建物の南東隅に位置し、竈表面を構成していた山砂混白色粘土が建物南壁を跨って、東西 120㎝×南北 174㎝の範囲で検出された。基本的に拳大～人頭大の礫を多く用いて竈本体は構成されている。焚口の掘り込みは建物側で東西 50㎝、南北方向は壁から約 70㎝、確認面（土間）からの深さは約 15㎝を測る。断ち割りにより、煙出しと思われる縦位の土層堆積が建物外で確認されている。また本遺跡で出土した遺物のほとんどが本遺構からの出土である。

5．井戸跡は礎石建物の東側で検出された。規模は上面で直径 125 ～ 130㎝、底面で約 100㎝、確認面からの深さは礎石建物側で一番深く 154㎝、その反対側で 110㎝を測る。東隣りとの共同の井戸である。井戸周囲に配置された比較的大振りな６基の礎石のうち３基から柱（13 ～ 14㎝角：4.5 寸角）が載っていた痕跡が確認され、軽石の分布状況と併せて考えると上屋があったことが判明した。柱間は 125㎝で、屋根は東西で 265㎝の大きさを測る。１号建物からはダイドコロ（土間）から井戸への勝手口があり、高さがある替わりに足掛け石が２石認められる。東隣り側からは１号建物側と比べると一段低くなっており、さらに５号溝は陸橋となっている。井戸を構成する石は大きさにバラツキがあるものの横長の河原石を多用しており、やや外傾しながら 10 段位積み上げている。積み方は長辺を水平に積む平積みである。

6．屋外炉跡は調査区南側、１号畑跡の南側で検出された。規模は本体内部が長軸 116㎝以上、短軸 75㎝、高さ 60㎝、火床部が長軸 80㎝、短軸 30㎝、深さ 12㎝を測る。構造的には屋外の竈跡または窯跡であるが、総称して炉跡とした。焚口が南西方向の調査区外であるため全体像は把握できなかったが、竈としては規模が大きいため、窯跡として報告した。泥流を除去していく過程で部分的に被熱した壁土（ローム）および暗

褐色・黄褐色粘質土が東西 2.4 m×南北 3.0 mの範囲で分布している状況を検出した。サブトレを設定し、一部切石を検出したが、本体の軸とずれており、ベルトを再設定した。このサブトレにより、本体の位置や本体周辺には純度の高い壁土（ローム）が使用されており、酸化還元が認められること、暗褐色・黄褐色粘質土が壁土（ローム）とともに本体の被覆に使用されていた可能性が高いことが明らかとなった。本体は細長い安山岩質の切石を用いて基底部は凹形に組み、火床部としている。上屋はあったと考えられるが、周辺で検出されたピットや礫からは想定は難しく、本体南側で検出された溝状の窪みが柱等の倒れ込んだ痕跡と考えられなくもない程度である。本体内部での泥流の混入は認められなかったことから被災時に本窯が機能していたのかどうかの判断も難しい。いずれにせよ天明期以前の所産であることは確かであろう。

7．畑跡は礎石建物・井戸の南側で２面、単位畑は３枚検出され、うち２枚に平坦面が付随している。３枚の単位畑のうち２枚は、畑断面から As-A 降下前に１番ザクと２番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況を示している。残りの１枚は畝サクが確認されないことから休耕畑であったと考えられる。

8．土坑跡は１基検出されたが、１号畑跡を切っており、天明期以降の所産である。

9．溝状遺構は調査区内で７条検出された。機能としては区画溝・用水路の機能が考えられるが、被災時に機能していたのは礎石建物・井戸を区画し、１号道の側溝であった５号溝とそれに対となる４号溝、１号畑の北側を区画していた２号溝、小屋状施設を区画していたと考えられる６号溝である。

10. 道路状遺構は調査区の北側～中央、礎石建物の南側で検出された。礎石建物跡から裏庭へ通じる道である。テラスの幅が最も拡がる箇所に接続する。建物面・テラス・１号道へと約 30cmの比高差をもって階段状となっており、４号溝・５号溝を側溝としている。明確な硬化面は未検出である。

11. 出土遺物はテンバコ（約 54 × 34 × 15cm） 50 箱分である。それらは大きく陶磁器・木製品・金属製品・石製品・その他に大別され、図示し得た遺物は 168 点である。

12. 陶磁器に関しては、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京信楽系陶器に分類される。器種は碗・皿・灯火皿・香炉・擂鉢が出土した。また陶器人形（図版 30-20）が１点出土しており、型合わせ成型の獅子人形である。

13. 木製遺物に関しては、出土量は圧倒的に多いが、遺存度の低いものがほとんどで、製品・部位を特定できるものが少ない。建築部材と木製品（部材）とに大別し、その中で形状・加工の類似性・木釘穴の有無を重視して細別した。建築部材では囲炉裏の枠材や板材・杭等の加工材が主体で、取り上げていないが、建物土台が出土している。木製品（部材）は漆器・曲物・桶等の容器類、膳・箱物・杓子等の食事具類、櫛等の服飾具類の他、竹製品の団扇や茶筅、桶のタガ等、また鉈等の刃物痕が多数残された作業台も出土している。囲炉裏上面に残されていた薪材も松葉・杉葉を焚き付けした燃料材として把握され、その他の木製遺物とした。

14. 金属製品に関しては、銅製品と鉄製品に大きく分類される。銅製品は木製品の角等に取り付ける銅板状の飾り金具と銭貨に分けられる。鉄製品は包丁・茶釜・把手・火打金・釘の他、用途は明確ではないが燭台としたもの（図版 51-138）や鉄サイが出土している。

15. 石製品に関しては、砥石・石臼・火打石・軽石が出土している。石臼は粉挽臼が上下１セット出土しているが、いずれも破片で１号建物の竈用材あるいは基壇補強材に転用されたものである。火打石は１号建物の囲炉裏と竈周辺、５号溝の陸橋で７点出土しており、石質は流紋岩（石英）である。

16. その他に遺構外遺物が２点あったが、それぞれ近世遺物と一緒に掲載している。一つは内耳鍋片で囲炉裏内で出土しているが中世の所産と考えられる。もう一つは一銭アルミ貨で後世の混入である。第１次調査の南側調査区でトレンチを設定して近世以前の遺構の有無を確認したが検出するには至らなかった。

17. 図版には分布図のみの掲載であるが、植物等遺存体が多く出土したことも本遺跡の大きな特徴の一つである。詳細は第４章に譲るが、通常の遺跡では遺存しない大型植物遺体や昆虫遺体、編組製品が出土し、周辺環境の復元等に寄与するものであろう。

18. 以上、調査地点は天明３（1783）年に浅間山の大爆発により発生した泥流に被災した長野原宿のほぼ中央に位置し、建物は旅籠大津屋の一部と考えられる。即ち街道に面した旅籠とその裏庭の一部が検出され、

裏庭は東隣の金木屋と共同で使用されたと考えられる井戸、区画溝、道、畑、屋外炉で構成されていたことが今回の調査で明らかとなった。長野原宿は有名な鎌原村に次ぐ 200 名の犠牲者を出したことはあまり知られていないが、壊滅的な被害の一端を垣間見る貴重な調査であった。

## 第 19 表　町遺跡出土遺物観察表

### 陶磁器類観察表

| No. | 図版No. | 種別・器種 | 法量（器高／口径／底径）(cm) | 特　　徴（形態・手法等） | 焼成 | 胎土・材質等 | 色調（外面／内面） | 備　　考 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 30・78 | 陶器・碗 | 7.0／10.2／4.4 | 瀬戸天遺系碗。 | 良好 | φ 2mm 礫 | オリーブ褐／灰黄 | ほぼ完存 | 1 建 |
| 2 | 30・78 | 陶器・碗 | 5.5／＜12.4＞／＜4.6＞ | 瀬戸天遺系柳茶碗か。 | 良好 | | 灰オリーブ | 20% 残存 | 調査区 |
| 3 | 30・78 | 陶器・碗 | (1.5) ／—／4.8 | 瀬戸天遺系尾呂茶碗か丸碗。 | 良好 | | にぶい黄橙／黒褐 | 底部 95% 残存 | 調査区 |
| 4 | 30・78 | 陶器・碗 | (3.4) ／＜9.4＞／— | 京信楽系碗。 | 良好 | | 灰白 | 1 掘部～体部 20% 残存 | 調査区南側東壁サブトレ |
| 5 | 30・78 | 陶器・碗 | (2.2) ／—／— | 陶胎染付碗。 | 良好 | | 灰 | 破片資料 | 1 建 |
| 6 | 30・78 | 陶器・碗 | (2.1) ／—／＜5.5＞ | 陶胎染付碗。 | 良好 | | 明オリーブ灰 | 底部 20% 残存 | 1 建カマド |
| 7 | 30・78 | 磁器・碗 | 4.7／10.7／4.4 | 肥前染付碗。見込み蛇の目釉はぎ。 | 良好 | | 灰白 | ほぼ完存 | 1 建 |
| 8 | 30・78 | 磁器・碗 | (3.3) ／＜9.6＞／— | 肥前系染付碗。雪輪草花文。 | 良好 | | 灰白 | 1 掘部 30% 残存 | 調査区 |
| 9 | 30・78 | 磁器・碗 | (1.6) ／—／＜3.0＞ | 肥前系染付碗。 | 良好 | | 灰白 | 底部付近 20% 残存 | SK01 |
| 10 | 30・78 | 磁器・碗 | (3.1) ／—／＜3.0＞ | 肥前系染付碗。 | 良好 | | 灰白 | 体部～底部 40% 残存 | 調査区 |
| 11 | 30・78 | 磁器・皿 | (2.6) ／—／— | 瀬戸天遺系志野菊皿。 | 良好 | | 灰白 | 破片資料（1 掘部） | 1 建 |
| 12 | 30・78 | 陶器・皿 | (3.3) ／＜18.8＞／— | 内野山窯黄瀬。 | 良好 | | にぶい黄橙 | 1 掘部 20% 残存 | 1 建 |
| 13 | 30・78 | 陶器・皿 | (1.1) ／—／＜4.4＞ | 瀬戸天遺系皿。 | 良好 | | にぶい黄橙／灰白・オリーブ灰 | 底部 25% 残存 | 1 建 |
| 14 | 30・78 | 磁器・皿 | 3.1／14.0／7.2 | 肥前系染付皿。見込み蛇の目釉はぎ。コンニャク印刷による五弁花。 | 良好 | | 灰白 | 80% 残存 | 1 井戸 |
| 15 | 30・78 | 陶器・灯火皿 | 2.35／＜10.2＞／＜3.8＞ | 京信楽系灯火皿。 | 良好 | | 灰白 | 30% 残存 | 調査区南側 |
| 16 | 30・78 | 磁器・香炉 | (6.3) ／＜9.3＞／— | 肥前系染付香炉。 | 良好 | | 灰白／淡黄 | 1 掘～体部 25% 残存 | 調査区北側崩落土 |
| 17 | 30・78 | 陶器・香炉 | 6.9／＜11.2＞／8.0 | 瀬戸天遺系香炉。 | 良好 | | 黄褐／淡黄 | 底部 40%・胴部 10% 残存 | 1 建 |
| 18 | 30・78 | 陶器・擂鉢 | (5.0) ／—／— | 内面に擂目。 | 良好 | φ 2 ～ 3mm 礫 | 橙／にぶい褐 | 破片資料 | 1 建 |
| 19 | 30・78 | 内耳土器 | (4.6) ／—／— | 中世。在地土器。 | 良好 | φ 3mm 礫 | 橙／褐灰 | 破片資料 | 1 建四炉裏 |
| 20 | 30・78 | 陶器・人形 | 高さ 5.0／幅 2.5／厚さ 1.5 | 陶製人形。越後獅子。型合わせ成型。中実。全体に透明釉。前面の胸付近と右目に緑釉。 | 良好 | | 黄橙 | ほぼ完存 | 1 建 |

### 木製遺物観察表

| No. | 図版No. | 種別・器種 | 木取り | 法量（長／幅／厚）(cm) | 特　　徴（形態・手法等） | 樹　種 | 備　　考 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 21 | 31・79 | 建築部材・四炉裏枠 | 芯持 | 98.6／9.0／11.0 | 片端に切欠きをもつ。釘穴 1 箇所。ヨキ・チョウナ痕あり。 | マツ属複維管束亜属 | | 1 建 |
| 22 | 31・79 | 建築部材・四炉裏枠 | 芯持 | 106.6／8.6／10.4 | 両端に切欠きをもつ。釘穴 2 箇所。うち 1 箇所に鉄釘残存。ヨキ・チョウナ痕あり。 | マツ属複維管束亜属 | | 1 建 |
| 23 | 31・79 | 建築部材・四炉裏枠 | 芯持 | 106.0／10.9／9.0 | 両端に切欠きをもつ。釘穴 1 箇所。ヨキ・チョウナ痕あり。 | マツ属複維管束亜属 | | 1 建 |
| 24 | 32・80 | 建築部材・板材 | 追柾目 | (31.5) ／ (20.4) ／ 3.5 | 側面にチョウナ痕あり。団扇（図版 46-111）や板の圧痕あり。繊維質の付着物あり。 | マツ属複維管束亜属 | | 1 建 |
| 25 | 32・80 | 建築部材・板材 | 柾目 | 74.3／ (9.3) ／ 2.6 | 両端が切断され、折れ曲がっている。 | マツ属複維管束亜属 | | 1 建 |
| 26 | 32・80 | 建築部材・板材 | 板目 | 23.5／12.0／2.5 | 木表の平分が炭化。 | マツ属複維管束亜属 | | 1 建 |
| 27 | 32・80 | 建築部材・板材 | 柾目 | (65.5) ／ (13.9) ／ 1.35 | 団扇（図版 46-111）の圧痕あり。 | マツ属複維管束亜属 | | 1 建 |

| No. | 図版No. | 種別・器種 | 木取り | 法量（長／幅／厚）(cm) | 特　　徴（形態・手法等） | 樹　種 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 28 | 32・80 | 建築部材・板材 | 追柾目 | (12.4) ／ (6.0) ／ 1.3 | 切断面あり。 | － | 1建 |
| 29 | 32・80 | 建築部材・板材 | 板目 | (71.3) ／ 16.0 ／ 1.0 | 割れは激しいが切断面はしっかりしている。 | クリ | 1建 |
| 30 | 32・80 | 建築部材・板材 | 柾目 | (20.4) ／ (8.0) ／ 1.1 | 面取り加工。 | クリ | 1建 |
| 31 | 32・80 | 建築部材・板材 | 柾目 | (27.3) ／ 8.3 ／ 1.1 | チョウナの加工痕明瞭。 | クリ | 1建 |
| 32 | 33・81 | 建築部材・板材 | 柾目 | (42.8) ／ (9.8) ／ 1.0 | | クリ | 1建 |
| 33 | 33・81 | 建築部材・板材 | 板目 | (34.2) ／ (12.7) ／ 1.0 | 木表はしっかりしているが、木裏はボサボサしている。 | マツ属複維管束亜属 | 1建 |
| 34 | 33・81 | 建築部材・板材 | 板目 | (20.7) ／ 8.2 ／ 1.0 | 両端が切断、その字に折れ曲がっている。 | － | 1建 |
| 35 | 33・81 | 建築部材・板材 | 板目 | (19.1) ／ 4.6 ／ 1.0 | 両端が切断。 | マツ属複維管束亜属 | 1建 |
| 36 | 33・81 | 建築部材・板材 | 追柾目 | (54.1) ／ (8.7) ／ 0.65 | | マツ属複維管束亜属 | 1建 |
| 37 | 33・81 | 建築部材・板材 | 柾目 | (44.5) ／ (11.0) ／ 0.6 | | クリ | 1建 |
| 38 | 33・81 | 建築部材・板材 | 追柾目 | (42.3) ／ (12.3) ／ 0.9 | | アスナロ | 1井戸 |
| 39 | 33・81 | 建築部材・板材 | 板目 | (32.9) ／ (10.6) ／ 0.6 | 一部が炭化。 | － | 1建 |
| 40 | 33・81 | 建築部材・板材 | 追柾目 | (34.1) ／ (11.0) ／ 0.55 | 切断面あり。 | － | 1建 |
| 41 | 33・81 | 建築部材・板材 | 柾目 | (41.0) ／ (7.3) ／ 0.6 | 切断面あり。 | スギ | 1建 |
| 42 | 33・81 | 建築部材・板材 | 板目 | (18.3) ／ (7.6) ／ 0.8 | チョウナによる加工痕あり。切断面あり。 | － | 1建 |
| 43 | 34・82 | 建築部材・板材 | 板目／追柾目 | (79.6) ／ (12.5) ／ 0.55 | 3点が接合。 | マツ属複維管束亜属 | 1建 |
| 44 | 34・82 | 建築部材・板材 | 板目 | (63.1) ／ (8.6) ／ 0.5 | | マツ属複維管束亜属 | 1建 |
| 45 | 34・82 | 建築部材・板材 | 柾目 | (27.9) ／ (10.7) ／ 0.55 | 鉄分が付着、切断面あり。 | － | 1建 |
| 46 | 34・82 | 建築部材・板材 | 板目 | (16.5) ／ (5.3) ／ 0.45 | 切断面あり。 | － | 1建 |
| 47 | 34・82 | 建築部材・板材 | 板目 | (49.3) ／ (5.0) ／ 0.5 | 面取り加工。 | － | 1建 |
| 48 | 34・82 | 建築部材・板材 | 柾目 | 35.7／10.0／0.7 | 側面、木口は面取り加工。 | － | 1建 |
| 49 | 34・82 | 建築部材・板材 | 柾目 | (34.1) ／ (9.7) ／ 0.65 | 麻（印概30.7）の圧痕あり。面取り加工。 | － | 1建 |
| 50 | 34・82 | 建築部材・板材 | 板目 | (23.9) ／ (9.4) ／ 0.75 | 面取り加工。 | － | 1建 |
| 51 | 34・82 | 建築部材・板材 | 柾目 | (15.5) ／ 3.4 ／ 0.35 | 片側の側面が面取り加工。他方は溝状に加工。 | － | 1建四石業 |
| 52 | 35・83 | 建築部材・板材 | 板目 | 15.1／11.6／ (3.1) | 側面片側のみ面取り加工。表面チョウナ痕、ケビキ線あり。刃物痕あり。 | マツ属複維管束亜属 | 1建 |
| 53 | 35・83 | 建築部材・板材 | 柾目 | (21.0) ／ (7.4) ／ 1.2 | 両端に相欠きをもつ、ケビキ線あり。 | マツ属複維管束亜属 | 1建 |
| 54 | 35・83 | 建築部材・板材 | 柾目 | (11.5) ／ (2.6) ／ 0.7 | 側面に切欠きをもつ。 | モミ属 | 1井戸周辺 |
| 55 | 35・83 | 建築部材・板材 | 角材 | (7.6) ／ 4.1 ／ 2.3 | 棒状。端部に枘あり。 | カラマツ | 1建 |
| 56 | 35・83 | 建築部材・板材 | 板目 | 31.1／ (11.3) ／ 1.35 | 下部から4cmの範囲が厚く加工されている。 | マツ属複維管束亜属 | 1建 |
| 57 | 35・83 | 建築部材・板状 | 追柾目 | (30.8) ／ (16.3) ／ 0.65 | 片側の側面が斜めに切断される。 | － | 1建 |
| 58 | 35・83 | 建築部材・板材 | 板目 | 17.9／12.4／1.1 | 側面にチョウナの加工痕明瞭。片方の木口は斜めに切断される。 | スギ | 1建 |
| 59 | 35・83 | 建築部材・板状 | 板目 | 30.5／19.0／1.2 | チョウナ痕あり。3点が接合。 | － | 1建 |
| 60 | 36・84 | 建築部材・角材 | 角材 | (53.0) ／ 2.3 ／ 1.5 | 棒状。面取り加工。 | モミ属 | 1井戸 |
| 61 | 36・84 | 建築部材・角材 | 角材 | (36.0) ／ 2.0 ／ 1.5 | 棒状。細い角材。 | クリ | 5溝 |
| 62 | 36・84 | 建築部材・角材 | 割材 | 14.1／3.8／3.5 | 棒状。両端に切断痕。片方は斜めに切断される。 | クリ | 1建 |
| 63 | 36・84 | 建築部材・角材 | 柾目 | (20.7) ／ 3.3 ／ 1.8 | | － | 4溝 |

| No. | 図版No. | 種別・器種 | 木取り | 法量（長／幅／厚）(cm) | 特徴（形態・手法等） | 樹種 | 備考 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 64 | 36・84 | 建築部材・梁太か | 追柾目 | (40.5) ／ 8.0 ／ 2.75 | 加工面あり。 | カツラ | | 1 建 |
| 65 | 36・84 | 建築部材・束か | 割材 | 14.0 ／ 17.0 ／ 6.0 | 片端が斜めに切断される。 | マツ属複維管束亜属 | | 調査区 |
| 66 | 36・84 | 建築部材・束か | 割材 | 14.0 ／ 17.0 ／ 6.0 | 同じような端材が重なりあって出土しており、束と考えられる。 | マツ属複維管束亜属 | 完存 | 1 建 |
| 67 | 37・84 | 木製部材・杭 | 芯持 | 長 (93.7) ／径 5.0 | 片端が斜めに加工され地部が尖る。 | マツ属複維管束亜属 | | 1 井戸 |
| 68 | 37・84 | 木製部材・杭 | 芯持 | 長 83.0 ／径 3.0 | 樹皮あり。片端が斜カットに成形される。 | コナラ属コナラ節 | | 1 井戸 |
| 69 | 37・85 | 木製部材・杭 | 芯持 | 長 (72.7) ／径 8.2 | 片端が斜めに加工され地部が尖る。 | クリ | | 5 溝 |
| 70 | 37・85 | 木製部材・杭 | 芯持 | 長 (35.3) ／径 (7.7) | 片端が斜めに加工され地部が尖る。 | クリ | | 4 溝 |
| 71 | 37・85 | 木製部材・杭 | 割材 | 27.4 ／ (6.1) ／ 3.5 | 片端が斜めに加工され地部が尖る。 | — | | 1 建 |
| 72 | 37・85 | 木製部材・杭 | 芯持 | (22.0) ／径＜ 6.5 ＞ | 樹皮あり。 | — | | 1 建 |
| 73 | 38・85 | 木製部材・杭 | 丸木 | 54.4 ／径 8.0 | 片端が斜めに加工され地部が尖る。 | クリ | | 4 溝 |
| 74 | 38・85 | 木製部材・杭 | 丸木 | (51.0) ／径 1.5 | 片端が多面的に斜めに加工され地部が尖る。 | ハシバミ属 | | 1 建 |
| 75 | 38・85 | 木製部材・杭 | 丸木 | 長 (37.0) ／径 8.0 | 片端が多面的に斜めに加工され地部が尖る。 | クリ | | 1 井戸周辺 |
| 76 | 38・85 | 木製部材・杭 | 芯持 | 38.5 ／ 7.5 ／ 4.8 | 片端が斜めに加工され地部が尖る。 | — | | 1 建 |
| 77 | 39・86 | 木製部材・竹材 | — | 15.5 ／径 1.8 | 両端が切断される。 | タケ | | 1 井戸周辺 |
| 78 | 39・86 | 木製部材・竹材 | 割裂 | (9.7) ／ 2.5 ／ 0.4 | 片端が切断される。径 3.6cm を 4 分割。節は 2 輪状。 | マダケ属 | | 3 溝周辺 |
| 79 | 39・86 | 木製部材・竹材 | 割裂 | (23.5) ／ 2.0 ／ 0.6 | 表皮・芯を除去。径 3.0cm を 4 分割。 | タケ | | 5 溝 |
| 80 | 39・86 | 木製部材・竹材 | 割裂 | (25.3) ／ 2.0 ／ 0.5 | 径 3.0cm を 4 分割。節は 2 輪状。 | マダケ属 | | 1 建 |
| 81 | 39・86 | 木製部材・竹材 | 割裂 | 27.5 ／ 3.0 ／ 0.9 | 片端が斜めに切断される。 | タケ | | 1 井戸 |
| 82 | 39・86 | 木製部材・タガ | 割裂 | (40.5) ／ 1.0 ／ 0.1 | 内側芯を除去。かまぼこ型に加工。節を滑らかに加工。節は 2 輪状・削ぎ。 | マダケ属 | | 1 建 |
| 83 | 40・87 | 木製品・漆器梅酒 | 横木取り | 口径＜ 5.6 ＞／底径＜ 11.4 ＞／ (1.9) | 内外面に赤漆、口縁部は黒漆。高台に黒漆の文字があるが判読不可。 | ブナ属 | 残存率 30% | 1 建 |
| 84 | 40・87 | 木製品・曲物 | 柾目・追柾目 | 21.0 ／ 14.2 ／ (5.2) | メンパ。側板外面に彩の焼印。底板外面にも同様の焼印があるが判読不明。側板と底板は木釘 3 箇所で接合。側面内側にケビキ線 4 本あり。側面の接合部分は薄く加工されている。 | モミ属 | | 1 井戸 |
| 85 | 40・87 | 木製品・柄杓 | — | (19.9) ／ (2.6) ／ 0.3 | 木皮で留めている。柄の先端は曲物の上から 1.8cm の位置に付く。 | | | 1 建地中裏 |
| 86 | 41・87 | 木製品・曲物側板 | 柾目 | 21.0 ／径 25.0 ／— | 側板垂直部を輝縁め。ケビキ線あり。釘穴 1 箇所。櫛か。 | ヒノキ・スギ・カラマツ | 87・88 は同一個体と考えられる。6 点が接合。 | 1 建 |
| 87 | 41・87 | 木製品・曲物底板 | 柾目 | 径＜ 25.0 ＞／ 1.4 | 側板用の釘穴 2 箇所うち 1 箇所木釘残存。接合用の木釘 1 箇所残存。櫛か。 | ヒノキ | 残存率 60% | 1 建 |
| 88 | 41・87 | 木製品・曲物側板 | 柾目 | (27.2) ／ (12.6) ／ 0.1 | 黒漆が塗られる。輝の皮縁と。 | カラマツ | | 1 建 |
| 89 | 42・88 | 木製品・曲物底板 | 柾目 | 径 12.0 ／ 0.7 | 釘穴相対して 1 箇所ずつ。 | ツガ属 | 完存 | 1 建 |
| 90 | 42・88 | 木製品・櫛 | 板目 | (10.9) ／ (3.5) ／ 0.5 | 内面赤漆、外面黒漆。櫛板の痕跡あり。 | コシアブラ | | 1 建 |
| 91 | 42・88 | 木製品・櫛 | 板目 | (5.1) ／ (3.6) ／ 0.6 | 内面は黒漆の上に赤漆が塗られる。外面は黒漆。表に櫛板の痕跡、裏に櫛板の痕跡あり。 | コシアブラ | | 1 建 |
| 92 | 42・88 | 木製品・櫛 | 追柾目 | 37.0 ／ (19.5) ／ 0.7 | 内外面黒漆。釘穴 4 箇所うち 2 箇所木釘残存。面取り加工。 | ヒノキ | 4 点が接合。 | 1 建 |
| 93 | 43・89 | 木製品・櫛 | 板目 | 21.0 ／ 21.0 ／ 2.0 | 内外面漆塗。釘穴 23 箇所うち 17 箇所木釘残存。 | ヒノキ・マツ属 | 残存率 80%。2 点が接合。 | 1 建 |
| 94 | 43・89 | 木製品・補箒 | 追柾目 | (58.9) ／ (10.8) ／ 0.65 | 木口は弧状に切断される。面取り加工。ケビキ線あり。把手がつくと思われる。釘穴 2 箇所。 | マツ属複維管束亜属 | | 1 建 |
| 95 | 43・89 | 木製品・箱蓋 | 柾目 | 6.4 ／ 6.4 ／ 2.0 | 墨書で「正月」。正月料理を盛りつけた八角形の重箱の蓋の一部か。 | ヒノキ | 残存率 30% | 調査区北側 |
| 96 | 43・89 | 木製品・箱蓋 | 柾目 | 6.4 ／ 6.4 ／ 2.0 | 方形の蓋。ツマミ部は面取り加工。98 の火打箱の蓋と考えられる。 | 蓋：スギ、ツマミ：マツ属複維管束亜属 | 完存 | 1 建 |
| 97 | 43・89 | 木製品・箱蓋 | 追柾目 | 6.7 ／ 5.5 ／ 1.1 | 正方形の蓋。中心部に 0.5cm の穴が 2 箇所。火打箱の蓋である。 | — | | 1 建 |

| No | 図版No | 種別・器種 | 木取り | 法量（長／幅／厚）(cm) | 特徴（形態・手法等） | 樹種 | 備考 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 98 | 43・89 | 木製品・火打箱 | 柾目 | 20.0／9.0／6.7 | 底板一部が現在。釘穴6箇所うち5箇所木釘残存。側板3枚に釘穴17箇所うち9箇所木釘残存。 | スギ・ヒノキ・ノリウツギ | 8点が組合。 | 1建 |
| 99 | 44・90 | 木製品・箱 | 柾目 | (16.7) ／ (15.3) ／0.7 | 釘穴3箇所うち2箇所木釘残存。 | マツ属複維管束亜属 | | 1建 |
| 100 | 44・90 | 木製品・桶底板 | 板目 | 15.5／径＜40.0＞／1.2 | 外面上部と下部にタガ痕あり。内面下部に1.7cm幅の帯状圧痕あり。木釘3箇所残存。 | スギ | 100・101は同一個体と考えられる。 | 1井戸 |
| 101 | 44・90 | 木製品・桶底板 | 柾目 | 径41.2／1.85 | 片面縁際に面取り加工。木釘2箇所留が3箇所。 | スギ | 残存率80% | 1建 |
| 102 | 45・91 | 木製品・桶底板 | 板目 | 径＜14.0＞／0.75 | 中央部が厚くなる。 | モミ属 | 残存率70% | 1建 |
| 103 | 45・91 | 木製品・桶底板 | 板目 | 径14.5／0.6 | 縁の破損。 | モミ属 | 残存率95% | 5溝 |
| 104 | 45・91 | 木製品・桶側板 | 柾目 | 20.0／(24.0) ／1.2 | 木釘で綴合されている。1cm幅の帯状圧痕あり。 | スギ | | 1建 |
| 105 | 45・91 | 木製品・桶側板 | 板目 | 16.0／5.5／1.2 | 外面上部と下部にタガ痕あり。内面下部に1.5cm幅の帯状圧痕あり。木釘2箇所残存。 | － | | 1井戸 |
| 106 | 46・92 | 木製品・櫛 | 板目 | 12.5／3.9／0.85 | 横櫛。歯が数本欠損。横位調整痕。 | カバノキ | ほぼ完存 | 1建 |
| 107 | 46・92 | 木製品・櫛 | 板目 | 12.5／4.0／1.0 | 横櫛。一部に黒漆残存。歯が数本欠損。横位調整痕。 | ネジキ | ほぼ完存 | 1建 |
| 108 | 46・92 | 木製品・櫛 | 板目 | 4.5／(6.1) ／0.9 | 横櫛。両端部欠損。 | カバノキ属 | 残存率40% | 1建 |
| 109 | 46・92 | 木製品・茶筅 | － | 12.5／3.5／1.5 | 径1.5cmの竹2本を木釘で連結。連結に使用された木釘は楕円形。 | タケ | 完存 | 1建 |
| 110 | 46・92 | 木製品・柄 | － | (19.0) ／1.8／1.3 | 釘穴1箇所。切断面あり。 | タケ亜科 | | 1建 |
| 111 | 46・92 | 木製品・団扇 | 割材 | ＜37.0＞／＜24.0＞／0.6 | 柄部分は「羽入れ」骨は途中から二つに割れている「二つ割り」製法。 | タケ亜科 | | 1建 |
| 112 | 46・92 | 木製品・杓文字 | 追柾目 | (16.0) ／6.8／1.2 | 一枚板で出来ている。面取りしてある。 | カバノキ属 | | 1井戸 |
| 113 | 47・93 | 木製品・足し棒か | 丸木 | 長(20.0) ／径6.0 | ほぼ真円に成形される。 | カツラ | | 1井戸 |
| 114 | 47・93 | 木製品・道具類 | 丸木 | (24.3) ／径3.0 | 棍状なし。両端欠損。 | マツ属複維管束亜属 | | 1井戸 |
| 115 | 47・93 | 木製品・道具類 | 板目 | 10.5／9.1／3.7 | 台形状に成形される。穴か。 | クリ | | 1建 |
| 116 | 47・93 | 木製品・道具類 | 角材 | 10.5／2.0／1.8 | 片端が斜カットされる。 | マツ属複維管束亜属 | | 1建 |
| 117 | 47・93 | 木製品・道具類 | 板目 | 19.0／＜6.9＞／0.5 | 表面中央部に3cm幅のざらざらの面あり。裏面は黒く変色。 | アスナロ | | 1井戸 |
| 118 | 47・93 | 木製品・道具類 | 割材 | 68.5／(23.9) ／11.0 | 刃物痕多数あり。切断面あり。作業台か。 | マツ属複維管束亜属 | | 5溝 |
| 119 | 48・94 | 木製品・付木 | 柾目 | (10.3) ／ (4.5) ／0.5 | ヘギ材。薄板が3枚重なる。2cm幅の圧痕あり。 | ヒノキ | | 1建 |
| 120 | 48・94 | 木製品・付木 | 柾目 | 10.0／3.0／0.5 | ヘギ材。横に2mm間隔の圧痕あり。 | ヒノキ・スギ | | 1建 |
| 121 | 48・94 | 木製品・箒 | 割裂 | 円周48.5 | 竹箒の穂先端か。出土状況では長軸21.0cm、短軸7.0cmの楕円形を呈していた。3mm幅の竹に3mm幅の薄い竹を巻きつけている。 | タケ亜科 | | 1建 |
| 122 | 48・94 | 木製品・板状 | 柾目 | (45.8) ／8.0／1.2 | 表面に斜位段差、片端に切欠きあり。釘穴13箇所うち4箇所に木釘残存。 | スギ | | 1建 |
| 123 | 48・94 | 木製品・板状 | 追柾目 | (38.9) ／12.0／1.2 | 釘穴2箇所。 | マツ属複維管束亜属 | | 1井戸 |
| 124 | 48・94 | 木製品・板状 | 追柾目 | 44.5／(17.0) ／0.95 | 両端に切欠きをもつ。釘穴4箇所。 | スギ | | 1建 |
| 125 | 48・94 | 木製品・板状 | 柾目 | (19.6) ／(7.5) ／1.2 | 釘穴4箇所うち2箇所に木釘残存。 | | | 1建 |
| 126 | 48・94 | 木製品・板状 | 板目 | (22.8) ／ (4.3) ／0.8 | 切欠あり。木釘穴2箇所のうち1箇所に木釘残存。 | － | | 1建 |
| 127 | 48・94 | 木製品・板状 | 柾目 | (9.0) ／2.8／0.9 | 片端に切断痕。釘穴1箇所。 | マツ属複維管束亜属 | | 1建 |
| 128 | 48・94 | 木製品・板状 | 板目 | (6.3) ／ (4.8) ／1.0 | 片端に切断痕。釘穴2箇所のうち1箇所に木釘残存。 | マツ属複維管束亜属 | | 1建 |
| 129 | 48・94 | 木製品・板状 | 柾目 | (4.5) ／ (3.0) ／0.7 | 片端に切断痕。釘穴1箇所。 | マツ属複維管束亜属 | | 1建 |
| 130 | 49・95 | 木製品・板状 | 板目 | (64.0) ／ (14.6) ／0.85 | 茶碗?の圧痕あり。面取り加工。ケビキ痕あり。釘穴5箇所。 | マツ属複維管束亜属 | | 1建 |
| 131 | 49・95 | 木製品・板状 | 追柾目 | 38.6／(16.0) ／0.85 | 両端に切欠きをもつ。茶碗の圧痕あり。両面にチョウナ痕?。釘穴3箇所うち1箇所木釘残存。 | マツ属複維管束亜属 | | 1建 |
| 132 | 49・95 | 木製品・板状 | 柾目 | (22.5) ／ (8.5) ／0.55 | 面取り加工。釘穴2箇所。 | － | | 1井戸 |

| No. | 図版No. | 種別・器種 | 木取り | 法量（長／幅／厚）（cm） | 特徴（形態・手法等） | 樹種 | 備考 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 133 | 49・95 | 木製品・板状 | 追柾目 | （16.6）／（12.2）／0.85 | 切欠きをもつ。ケビキ痕あり。釘穴２箇所うち１箇所木釘残存。チョウナ痕あり。 | － | | 1 建 |
| 134 | 49・95 | 木製品・棒状 | 追柾目 | （31.0）／3.0／2.5 | 切欠きをもつ。５箇所の釘穴が並ぶ。 | － | | 1 建 |
| 135 | 49・95 | その他・燃料材 | 丸木 | 59.6／径2.6 | 樹皮あり。片端炭化し、他方は切断される。 | － | | 1 建側が裏 |
| 136 | 49・95 | その他・燃料材 | 丸木 | 43.7／径2.5 | 片端炭化し、他方は切断される。 | － | | 1 建側が裏 |
| 137 | 49・95 | その他・燃料材 | 丸木 | 31.8／径2.3 | 片端炭化し、他方は切断される。 | － | | 1 建側が裏 |

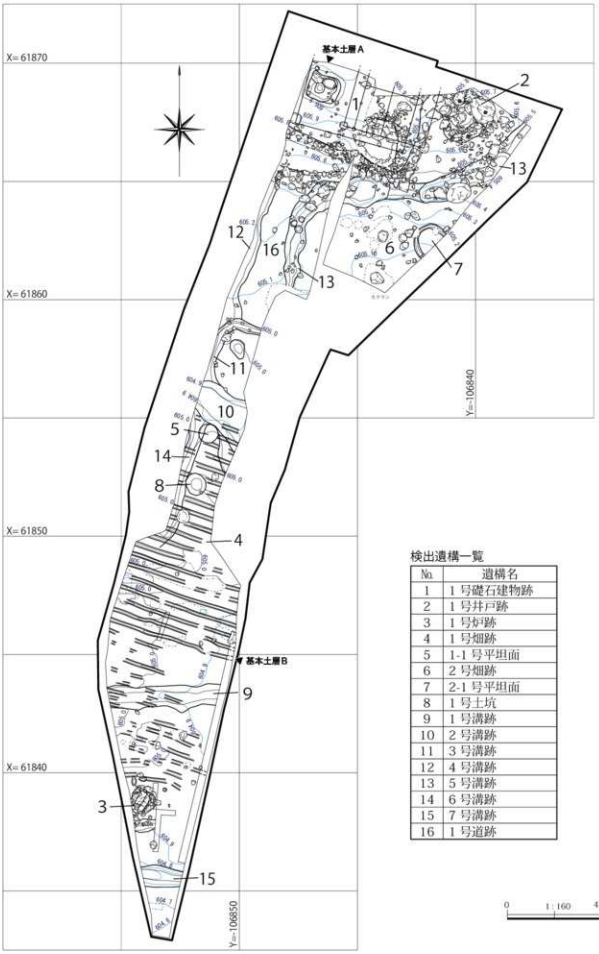
## 金属製品観察表

| No. | 図版No. | 器種 | 法量（長／幅／厚）（cm） | 特徴（形態・手法等） | 材質 | 備考 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 138 | 50・96 | 金属製品・燭台か | （16.0）／10.2／0.5 | 重量95.8g。燭台か。 | 鉄 | 台部ほぼ完存 | 1 建 |
| 139 | 50・96 | 金属製品・釘 | （5.4）／1.1／0.6 | 重量4.4g。片端が曲がる。 | 鉄 | | 1 建 |
| 140 | 50・96 | 金属製品・釘 | ＜5.7＞／2.0／0.3 | 重量5.0g。片端が「の」の字に曲がる。 | 鉄 | | 1 建 |
| 141 | 50・96 | 金属製品・釘 | （5.0）／1.4／0.6 | 重量3.6g。先が曲がっている。破断面腐食。 | 鉄 | | 1 建カマド |
| 142 | 50・96 | 金属製品・蝶板 | （4.6）／（5.0）／0.05 | 重量8.8g。薄い板状。 | 銅 | | 1 建 |
| 143 | 50・96 | 金属製品・鉄塊 | 1.6／1.2／1.0 | 重量3.1g。丸みを帯びた鉄の塊。 | 鉄 | | 1 建 |
| 144 | 50・96 | 金属製品・刀工 | （12.3）／4.1／3.0 | 刃部欠損。 | 鉄・スギ | | 1 井戸 |
| 145 | 50・96 | 金属製品・火打金 | （1.9）／5.3／0.5 | 重量8.0g。山型。持ち手部は欠損。 | 鉄 | 残存率90% | 1 建側が裏 |
| 146 | 51・97 | 金属製品・茶釜か | 口径＜13.2＞／高＜19.3＞ | 重量704g。胴部中央張り出し、口部に耳がつく。 | 鉄 | | 1 建側が裏 |
| | | 金属製品・茶釜蓋 | 径14.5／高2.6 | 重量244g。緩やかな山形の蓋。 | | | |
| 147 | 51・97 | 金属製品・把手 | （11.4）／0.7／0.5 | 重量10.2g。断面方形、片端がL字に曲がる。 | 鉄 | | 1 建 |
| 148 | 51・97 | 金属製品・把手 | （10.6）／0.6／0.5 | 重量5.4g。断面方形。 | 鉄 | | 1 建側が裏 |
| 149 | 51・97 | 金属製品・把手 | （4.4）／0.8／0.4 | 重量4.6g。断面方形。 | 鉄 | | 1 建側が裏 |
| 150 | 51・97 | 金属製品・銭貨 | 径2.5／内輪径2.0／厚0.1 | 重量3.3g。寛永通宝。 | 銅 | 完存 | 1 建 |
| 151 | 51・97 | 金属製品・銭貨 | 径2.2／内輪径1.9／厚0.05 | 重量1.0g。寛永通宝。 | 銅 | 完存 | 1 建側が裏 |
| 152 | 51・97 | 金属製品・銭貨 | 径＜2.2＞／内輪径＜1.8＞／厚0.05 | 重量1.0g。寛永通宝。 | 銅 | 残存率50% | 1 建 |
| 153 | 51・97 | 金属製品・銭貨 | 径2.2／内輪径1.8／厚0.05 | 重量1.1g。寛永通宝。 | 銅 | 完存 | 1 建 |
| 154 | 51・97 | 金属製品・銭貨 | 径2.5／内輪径1.7／厚0.15 | 重量5.8g。二枚が重なっている。 | 銅 | 完存 | 1 建外南西 |
| 155 | 51・97 | 金属製品・銭貨 | 径1.6／内輪径1.5／厚0.1 | 重量0.5g。富士一銭アルミ貨、昭和十七年。 | アルミ | 残存率80% | 表採 |

## 石製品観察表

| № | 図版№ | 器　種 | 法量（長／幅／厚）(cm) | 特　　徴（形態・手法等） | 石　質 | 備　　考 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 156 | 52・98 | 石製品・土臼 | 径＜31.0 ＞／7.5 | 重量 1,590g。供給口・引手穴の一部残存。擦り面は平滑で臼は消滅している。 | 粗面輝石安山岩 | 残存率 25％ | 1 建外 |
| 157 | 52・98 | 石製品・平臼 | 径＜28.0 ＞／12.0 | 重量 5,110g。1 号建物跡の屋外部分の用材に転用。上面に擦臼の痕跡が明瞭に認められる。7 分割か。 | 粗面輝石安山岩 | 残存率 40％ | 1 建 |
| 158 | 52・98 | 石製品・砥石 | (9.0) ／2.7／2.3 | 重量 97g。上部小口面欠損。正面が主要砥面である。両側面・下部小口面には縦位線条痕が残る。 | 砥沢石 | ほぼ完存 | 1 建 |
| 159 | 52・98 | 石製品・火打石 | 4.4／4.4／1.9 | 重量 35.9g。両面の 2 箇所の摩耗が著しい。尖部の残存多い。 | 流紋岩（石英） | 完存 | 1 建 |
| 160 | 52・98 | 石製品・火打石 | 3.1／5.0／3.0 | 重量 43.1g。長い 1 辺と丁字状に摩耗。他の尖部は残存多い。 | 流紋岩（石英） | 完存 | 1 建外 |
| 161 | 52・98 | 石製品・火打石 | 2.5／2.5／2.5 | 重量 17.4g。1 辺は激しく摩耗。尖部の残存多い。 | 流紋岩（石英） | 完存 | 1 建外 |
| 162 | 52・98 | 石製品・火打石 | 2.9／2.7／2.7 | 重量 24.6g。ほぼ全辺に使用痕が認められる。 | 流紋岩（石英） | 完存 | 1 建 |
| 163 | 52・98 | 石製品・火打石 | 2.5／3.2／2.7 | 重量 24.0g。尖部一角を残し、他全辺に使用痕が認められる。 | 流紋岩（石英） | 完存 | 5 溝 |
| 164 | 52・98 | 石製品・火打石 | 2.3／4.1／2.6 | 重量 17.5g。2 辺は激しく摩耗。 | 流紋岩（石英） | 完存 | 5 溝 |
| 165 | 52・98 | 石製品・火打石 | 2.7／2.8／1.9 | 重量 24.6g。ほぼ全辺に使用痕が認められる。 | 流紋岩（石英） | 完存 | 1 建 |
| 166 | 52・98 | 石製品・軽石 | 2.4／5.0／3.5 | 重量 15.3g。黄色味がかった灰色。 | 軽石 | 完存 | 1 建 |
| 167 | 52・98 | 石製品・軽石 | 7.0／8.8／7.2 | 重量 15.2g。黒っぽい灰色。おおすぐ形。 | 軽石 | 完存 | 1 建 |
| 168 | 52・98 | 石製品・軽石 | 3.0／4.5／3.0 | 重量 18.7g。明るい灰色。 | 軽石 | ほぼ完存 | 1 建 |

# 遺構全体図

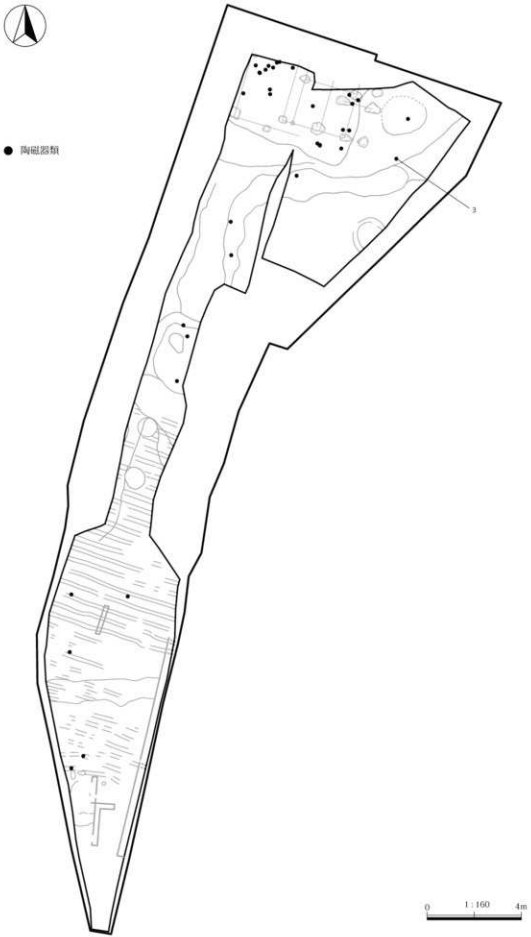



検出遺構一覧

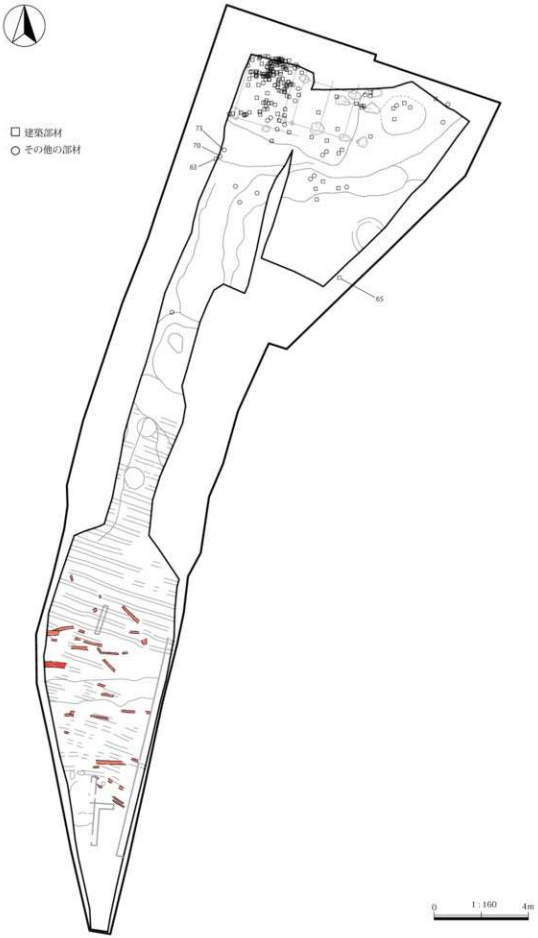
| No. | 遺構名 |
|---|---|
| 1 | 1号礎石建物跡 |
| 2 | 1号井戸跡 |
| 3 | 1号炉跡 |
| 4 | 1号畑跡 |
| 5 | 1-1号平坦面 |
| 6 | 2号畑跡 |
| 7 | 2-1号平坦面 |
| 8 | 1号土坑 |
| 9 | 1号溝跡 |
| 10 | 2号溝跡 |
| 11 | 3号溝跡 |
| 12 | 4号溝跡 |
| 13 | 5号溝跡 |
| 14 | 6号溝跡 |
| 15 | 7号溝跡 |
| 16 | 1号道跡 |

図版 2

遺物分布図 1（陶磁器類）

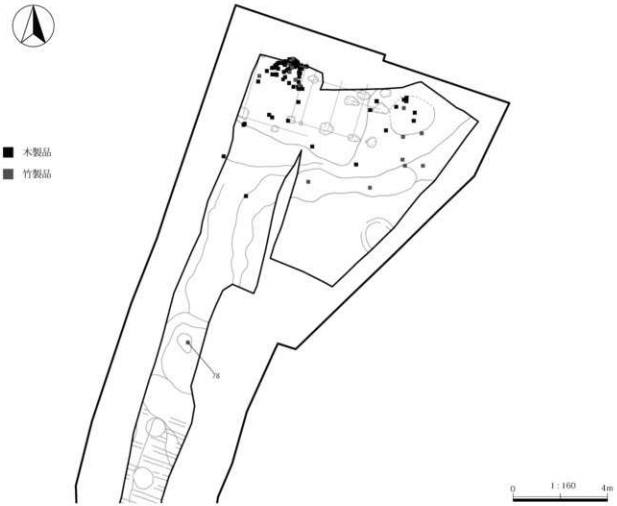


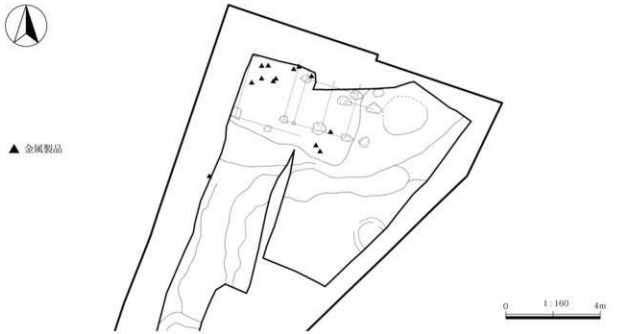
遺物分布図２（建築部材・木製部材）



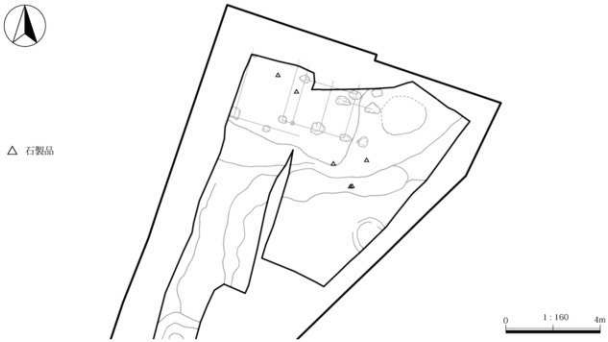
図版 4

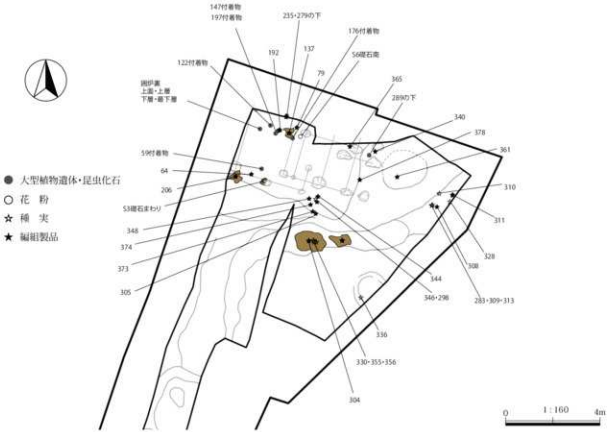
遺物分布図３・４（木製品（部材）・金属製品）



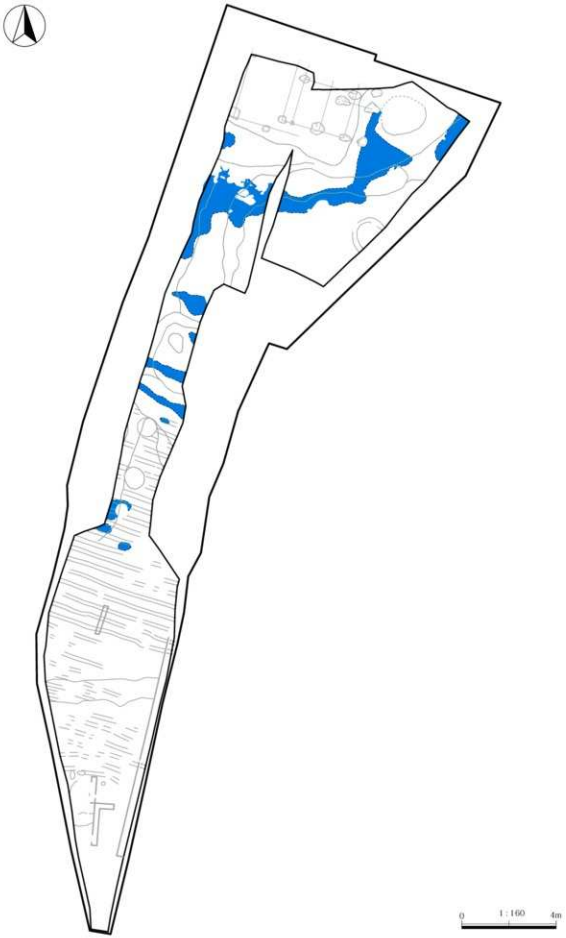



遺物分布図５・６（石製品・植物等遺存体）

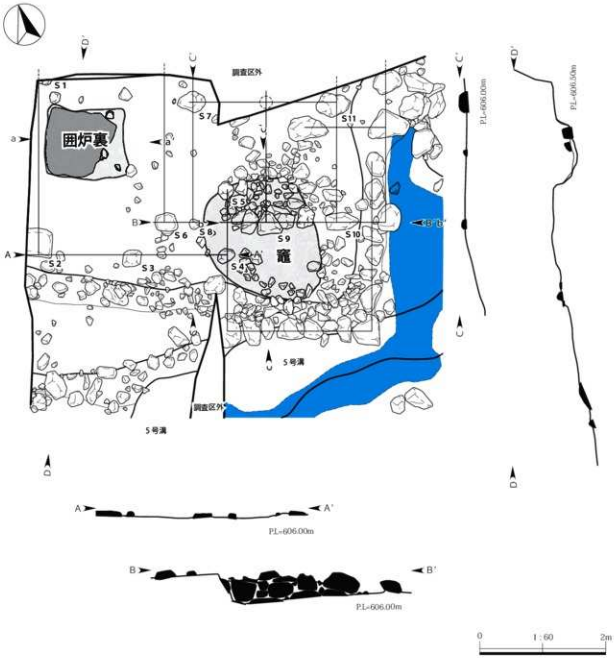


遺物分布図７（浅間Ａ軽石）

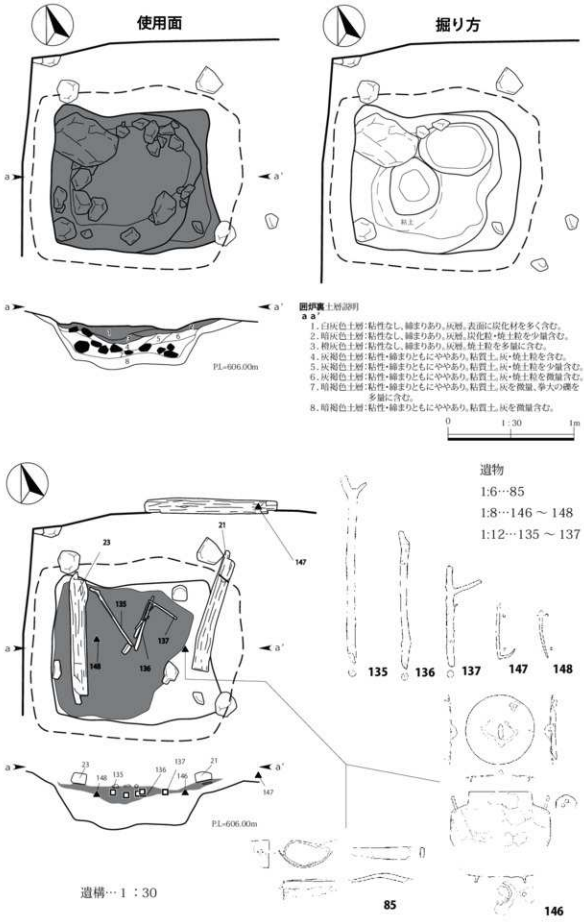


# 1号礎石建物跡実測図

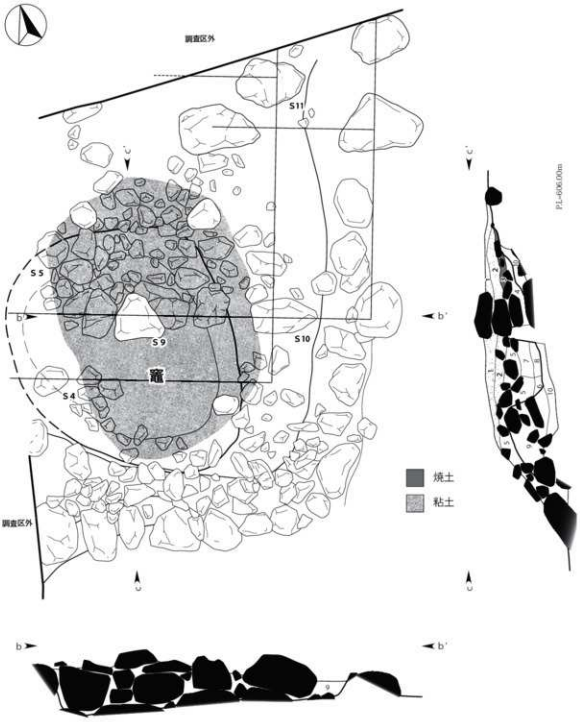

調査区外
S1
S7
S11
囲炉裏
S5
S6
S9
S10
S2
S3
S4
竈
5号溝
調査区外
5号溝
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
P.L=606.00m
P.L=606.50m
P.L=606.00m
P.L=606.00m
0
1:60
2m

図版 8

# 1 号礎石建物跡囲炉裏実測図・遺物出土状況図



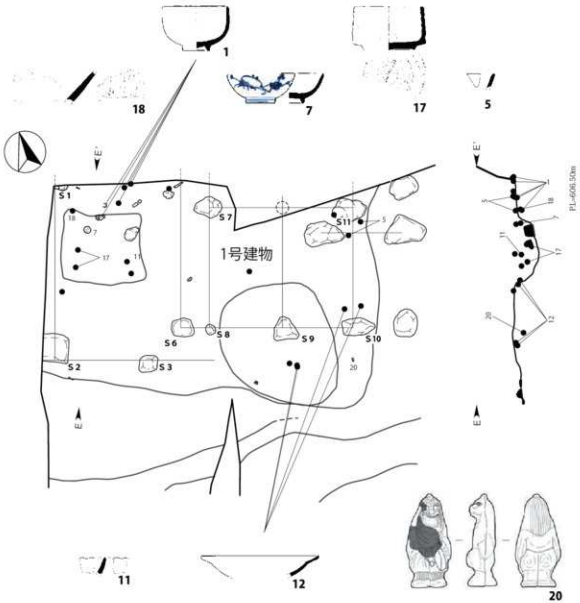
# 1号礎石建物跡竈実測図




竈土層説明
b b'・c c'
1. 灰色土層:粘性なし、締まりあり、遺構築粘土、軽石粒を少量含む。
2. 灰色土層:粘性なし、締まりあり、遺構築粘土、軽石粒を含み、礫を少量含む。
3. 赤褐色土層:粘性なし、締まりややあり、灰・焼土粒を多量に含む。
4. 灰褐色土層:粘性なし、締まりややあり、灰・焼土粒を含む。
5. 灰褐色土層:粘性なし、締まりややなし、灰を少量、焼土粒を含み、礫を多く含む。
6. 灰褐色土層:粘性なし、締まりややなし。
7. 灰褐色土層:粘性なし、締まりややあり、灰・焼土粒を微量含む。
8. 暗褐色土層:粘性なし、締まりややあり、灰を微量含む。
9. 暗褐色土層:粘性なし、締まりややあり、軽石粒・灰を少量含み、礫を多く含む。
10. 灰褐色土層:粘性なし、締まりややあり、灰・軽石粒をやや多く含む。

0 1:30 1m

# 1号礎石建物跡遺物出土状況図1（陶磁器類）



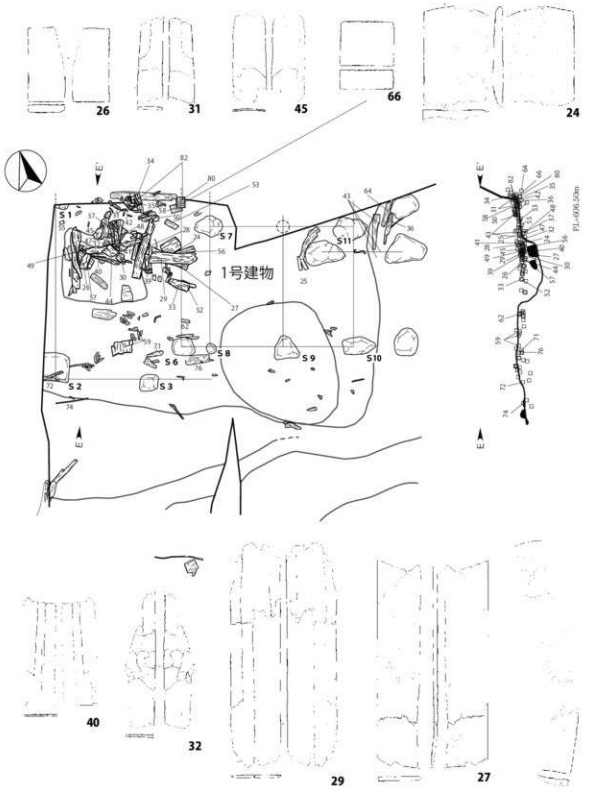

遺構…1:60

遺物

1:6…1・5・7・11・12・17・18

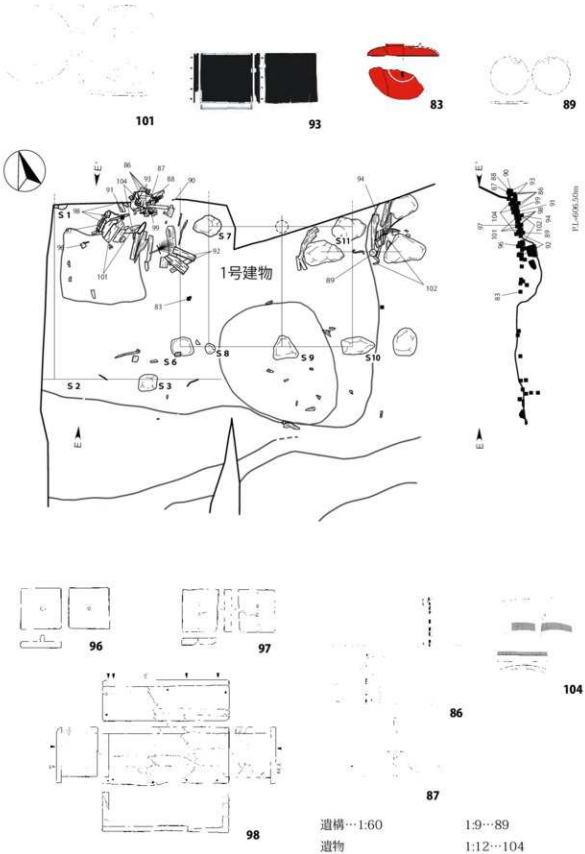
1:2…20

# 1号礎石建物跡遺物出土状況図２（建築部材）



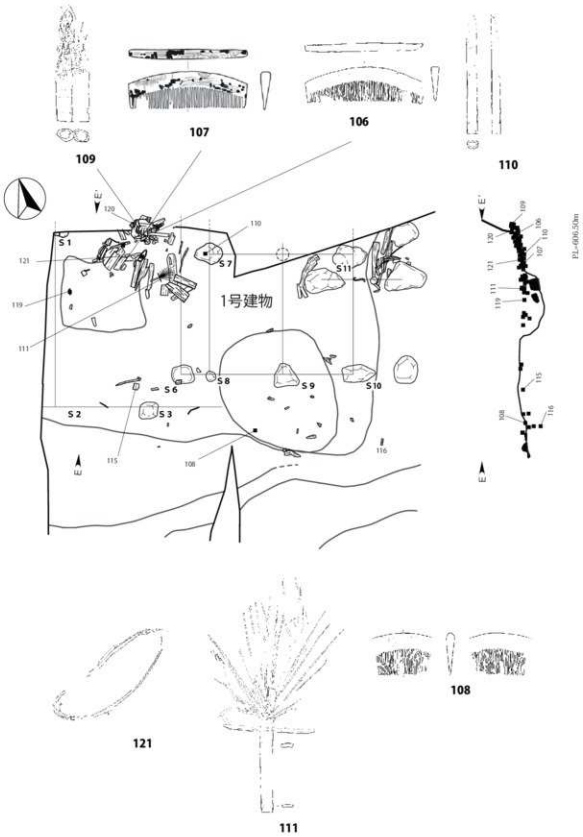

遺構…1:60
遺物…1:12

# 1号礎石建物跡遺物出土状況図３（木製容器類）



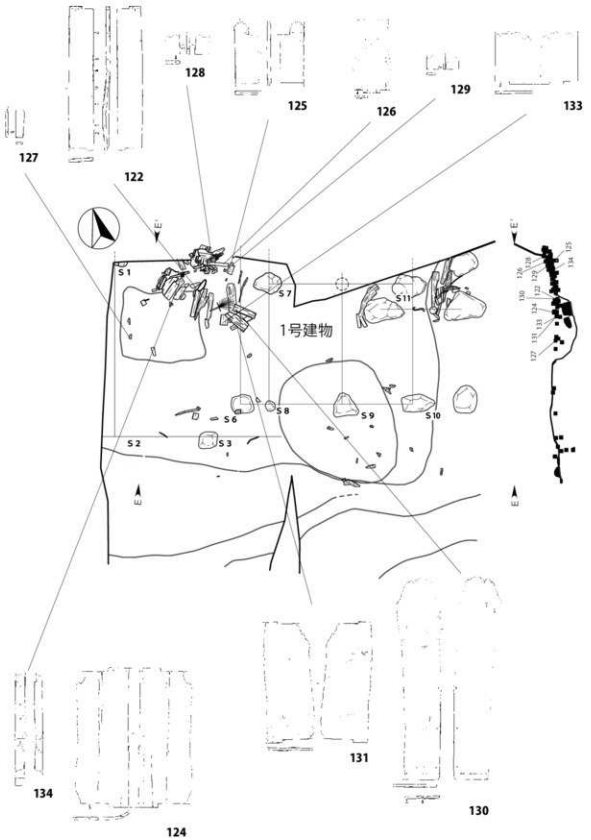

遺構…1:60
遺物
1:6…83・96～98
1:9…89
1:12…104
1:16…86・87・93
1:20…101

# 1号礎石建物跡遺物出土状況図 4（木製道具類）



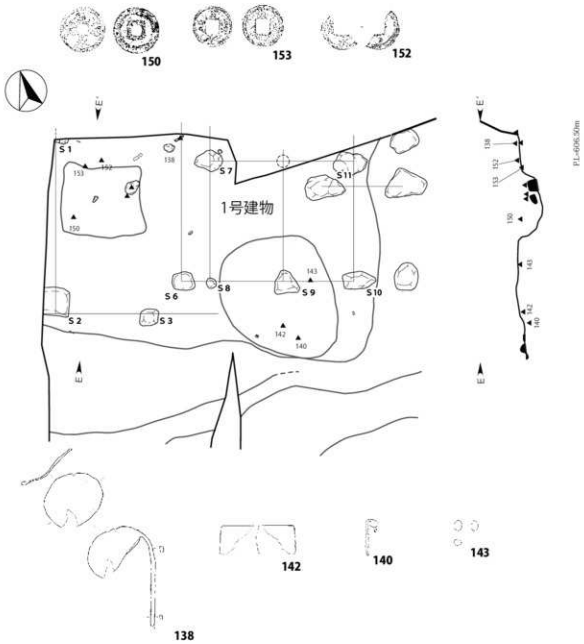

遺構…1:60
遺物…1:6

# 1号礎石建物跡遺物出土状況図５（木製品部材）




遺構…1:60
遺物…1:12

# 1号礎石建物跡遺物出土状況図６（金属製品）



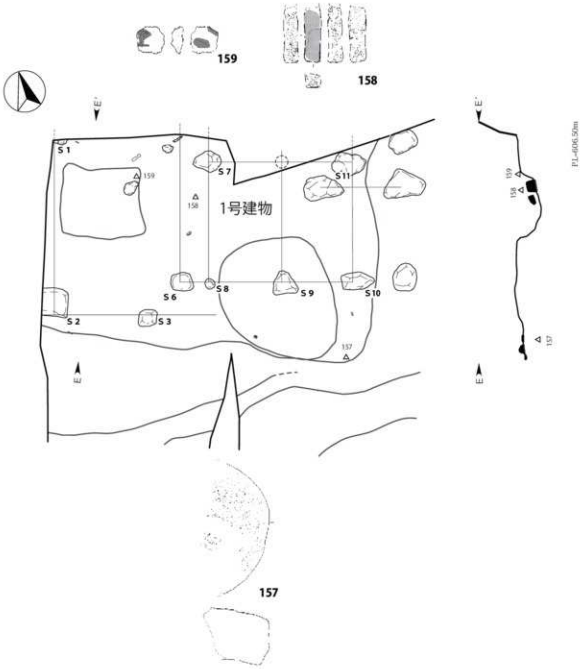

遺構…1:60

遺物

1:2…150・152・153

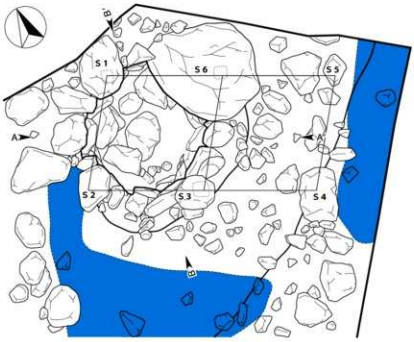
1:6…138・140・142・143

# 1号礎石建物跡遺物出土状況図7（石製品）

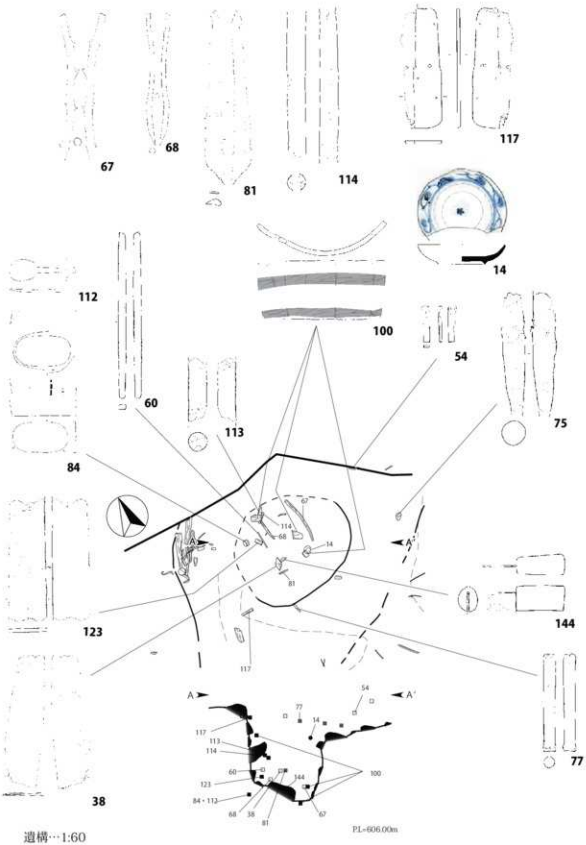



遺構…1:60
遺物
1:6…158・159
1:8…157

# 1号井戸跡実測図



# 1号井戸跡遺物出土状況図




遺構…1:60

遺物

1:6…14・77・81・117・144

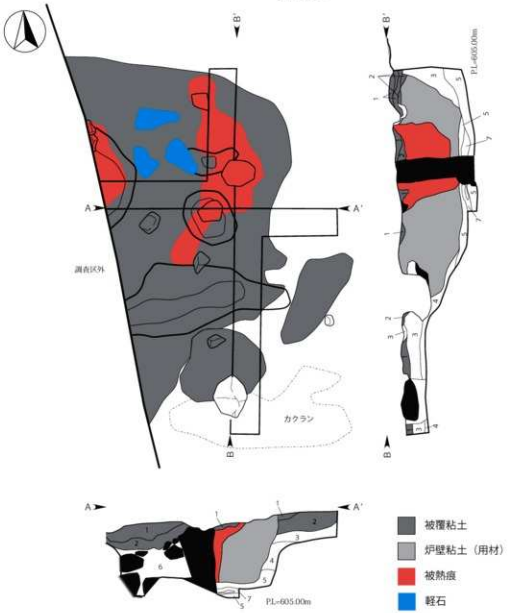
1:10…100

1:12…38・54・60・75・84・112～114・123

1:24…67・68

# 1号炉跡実測図1

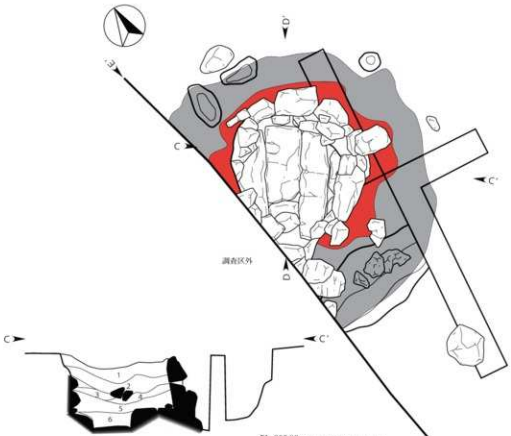
検出状況




**1号炉**土層説明
**ＡＡ' ＢＢ'**
1．暗灰色土層：粘質土、被覆粘土。
2．黄灰色土層：粘質土、被覆粘土。
3．暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒（φ～１cm大）ロームブロック微量含む。
4．明褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒・ロームブロック（φ～１cm大）多く含む。
5．黄褐色土層：砂質土、粘性なし、締まりややなし。
6．灰褐色土層：砂質土、礫多量含む。
7．明褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ロームブロックを含む。

0　1：30　1m

# 1号炉跡実測図 2

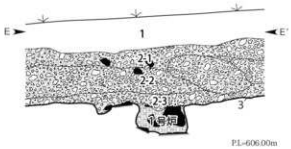



**1号炉跡**土層説明
**C C'**

1．暗灰色土層:粘質土。
2．黄灰色土層:粘質土。
3．ローム(炉壁粘土)
4．灰褐色土層:粘性ややあり,締まりなし。
　　ローム粒・ロームブロック(φ～1cm以下)多く含む。
5．灰褐色土層:粘性ややあり,締まりあり。
　　ローム粒・ロームブロック(φ～1cm以下)含む。
6．灰褐色土層:粘性ややあり,締まりあり。
　　ローム粒・ロームブロック(φ～1cm以下)多く含み,焼土粒を含む。

炉壁粘土(用材)
被熱痕

0　1:30　1m

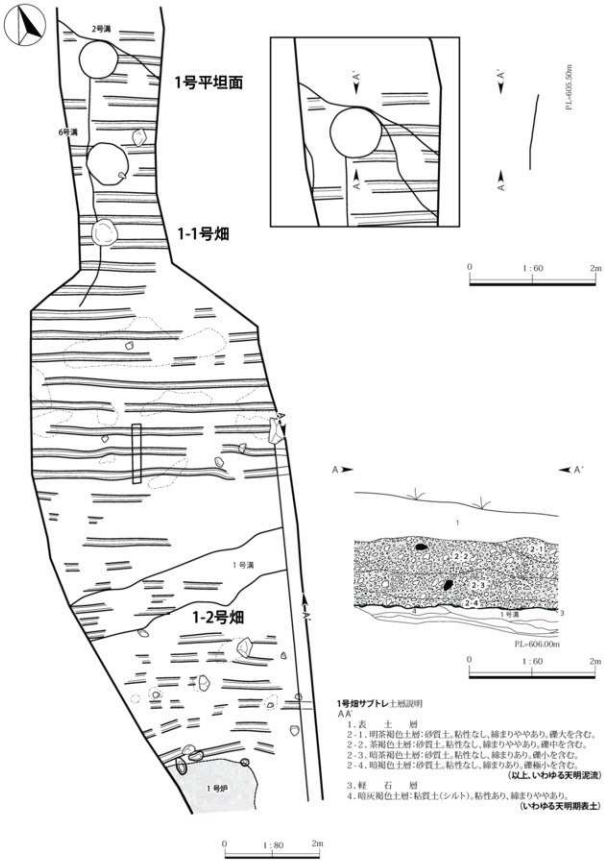



**調査区西壁**土層説明
**E E'**

1．　表　土　層
2-1．明茶褐色土層:砂質土,粘性なし,締まりややあり,礫大を含む。
2-2．茶褐色土層:砂質土,粘性なし,締まりややあり,礫中を含む。
2-3．暗茶褐色土層:砂質土,粘性なし,締まりあり,礫小を含む。
　　**(以上,いわゆる天明泥流)**
3．　軽　石　層

0　1:60　2m

# 1号畑跡実測図




**1号畑サブトレ**土層説明

A A'

1. 表　土　層

2-1. 明茶褐色土層:砂質土,粘性なし,締まりややあり,礫大を含む.

2-2. 茶褐色土層:砂質土,粘性なし,締まりややあり,礫中を含む.

2-3. 暗茶褐色土層:砂質土,粘性なし,締まりあり,礫小を含む.

2-4. 暗褐色土層:砂質土,粘性なし,締まりあり,礫極小を含む.

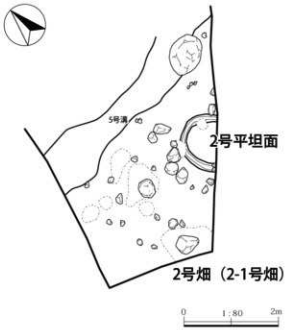
**(以上,いわゆる天明泥流)**

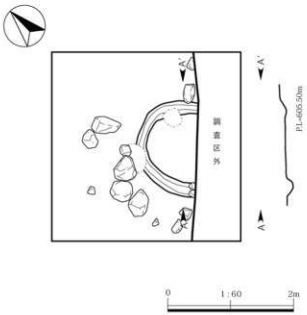
3. 軽　石　層

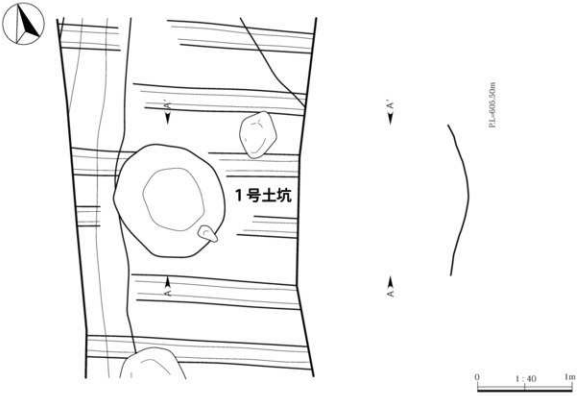
4. 暗灰褐色土層:粘質土(シルト),粘性あり,締まりややあり.

**(いわゆる天明期表土)**

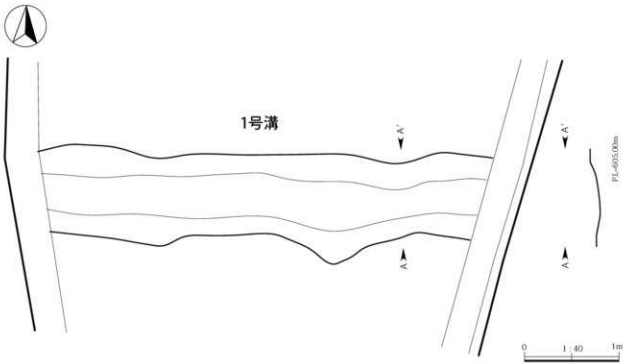
# 2号畑跡・1号土坑跡実測図

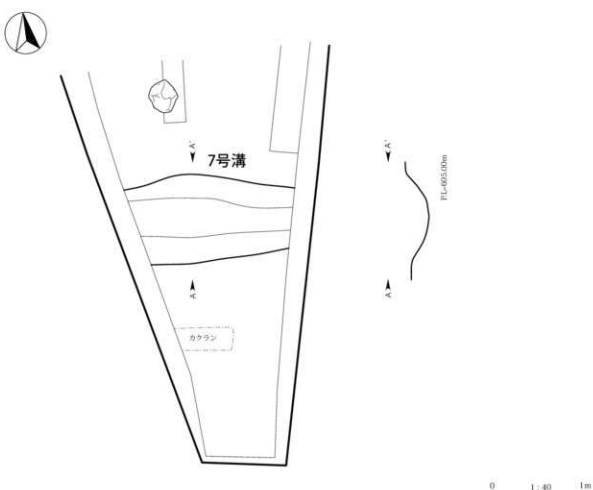


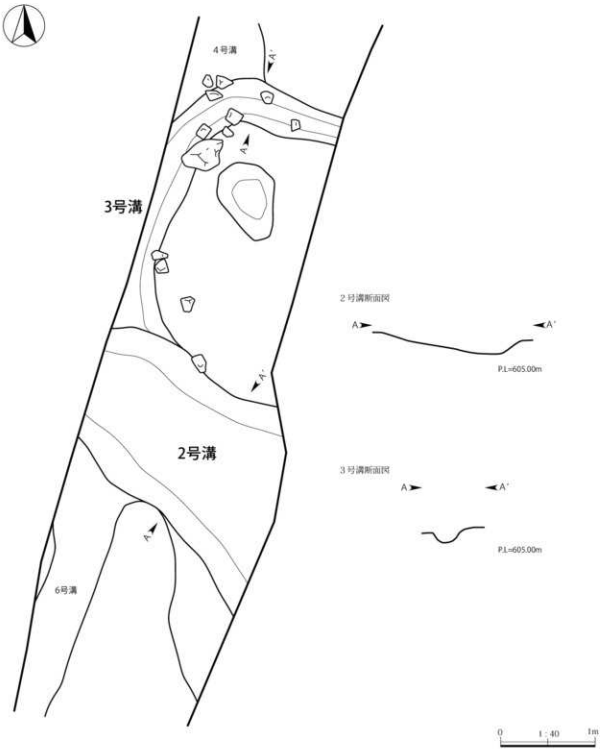



1号溝跡・7号溝跡実測図

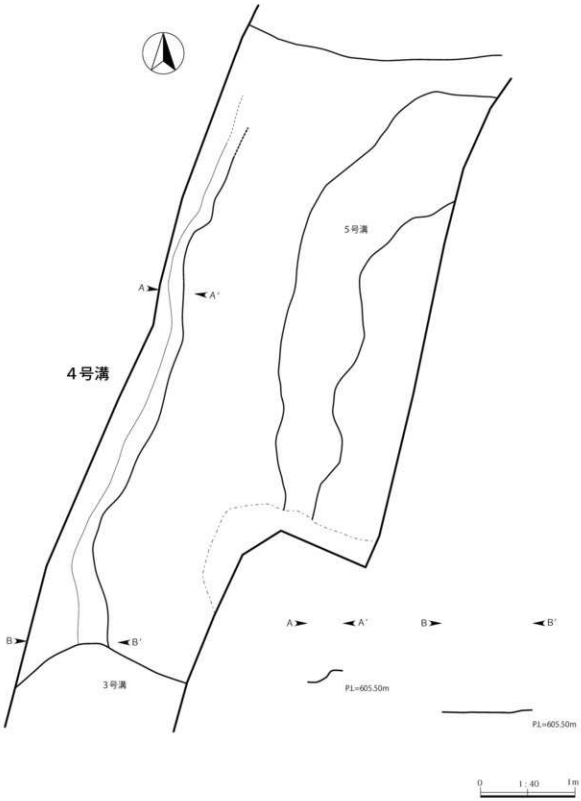


# ２号溝跡・３号溝跡実測図

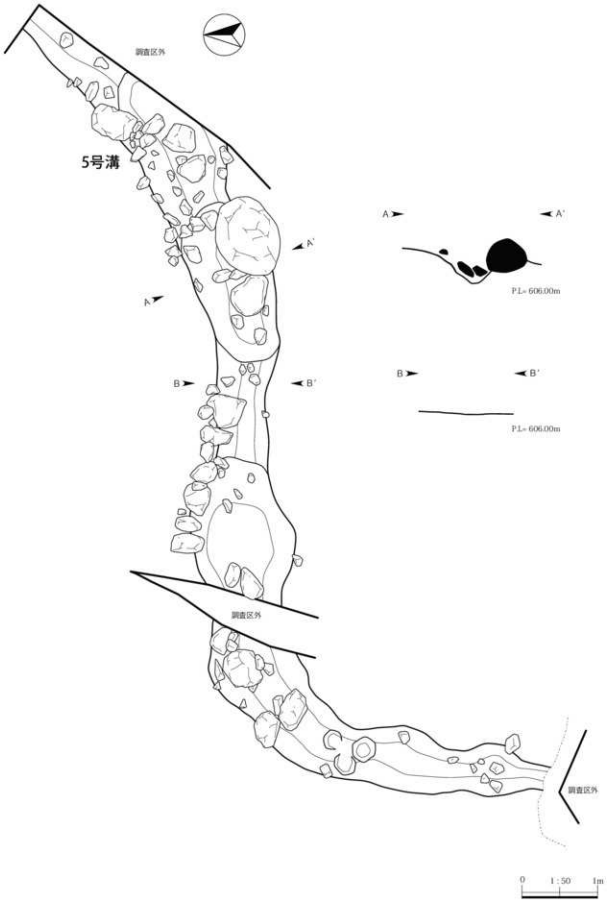


# 4号溝跡実測図

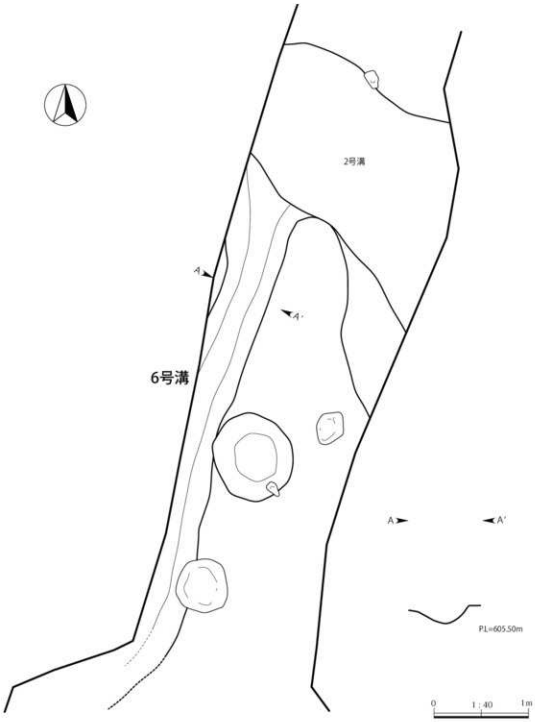


図版 26

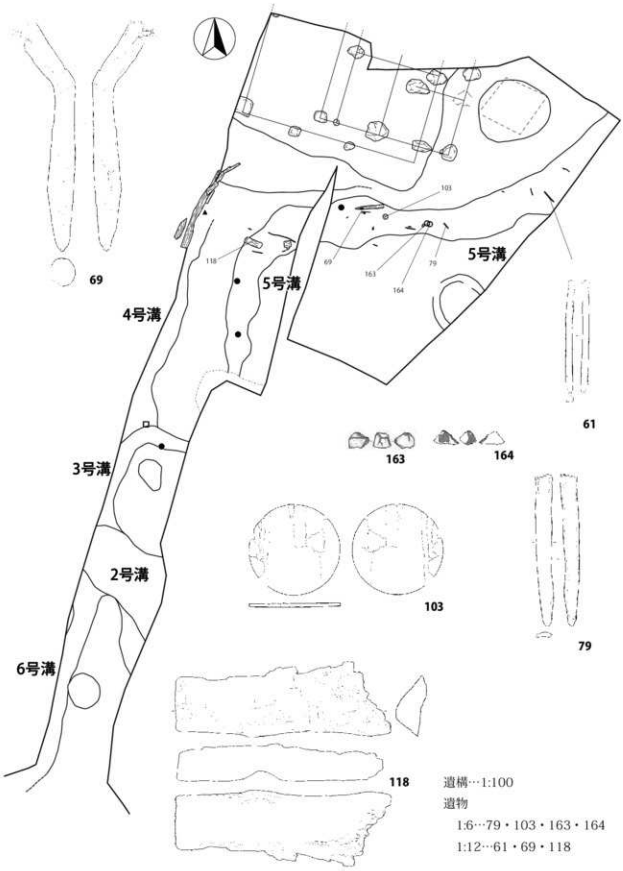
# 5号溝跡実測図



6号溝跡実測図



# 溝状遺構遺物出土状況図



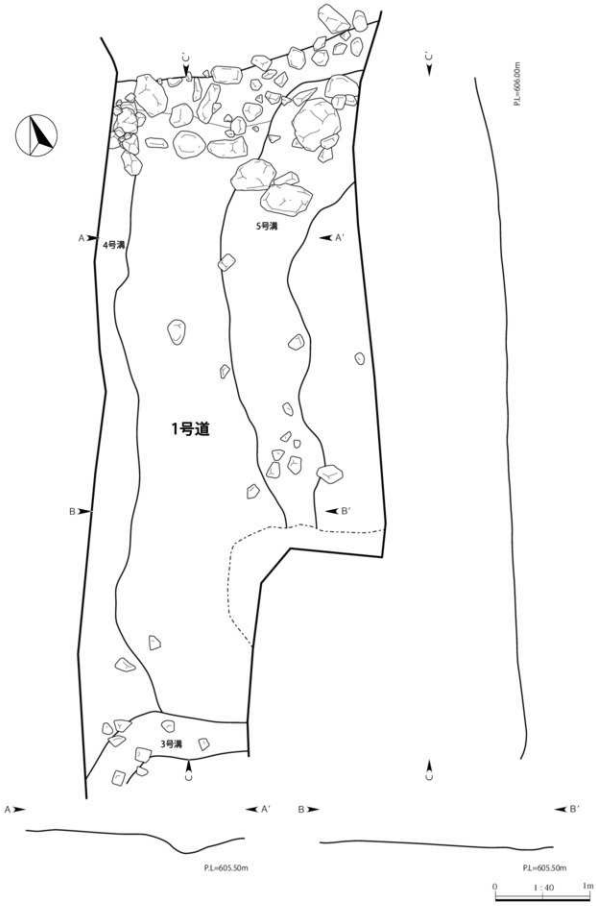

遺構…1:100

遺物

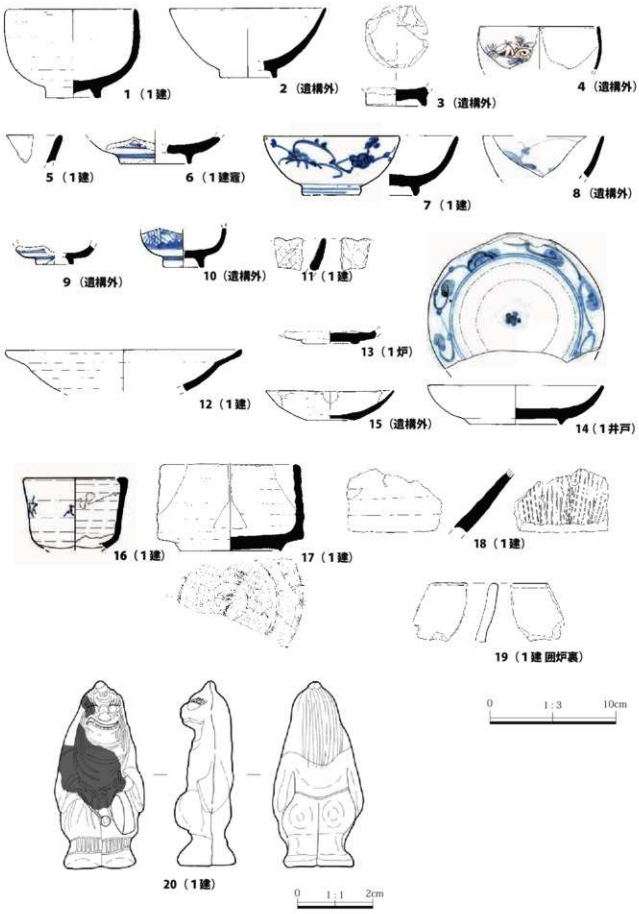
1:6…79・103・163・164

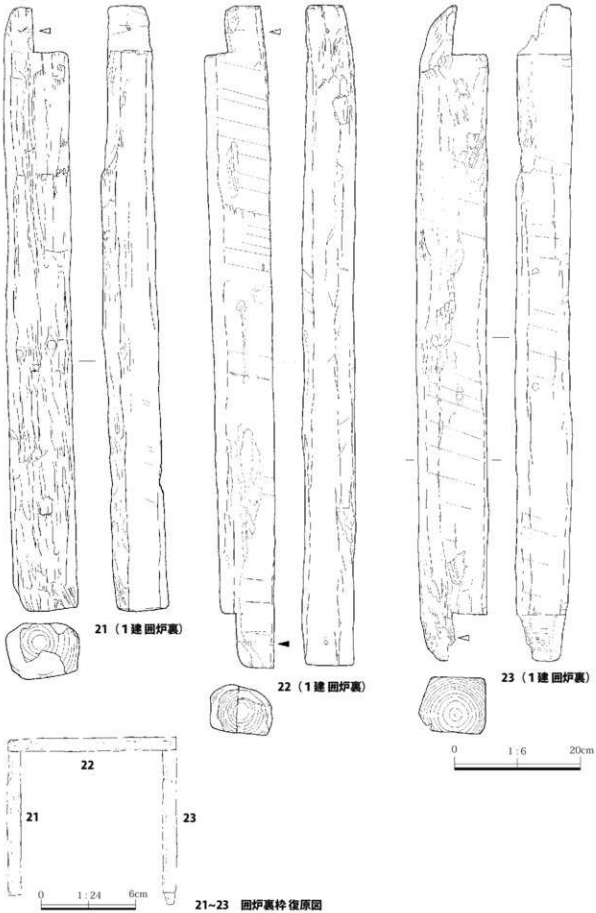
1:12…61・69・118

# 1号道跡実測図


C
C'
P.L=606.00m
A
4号溝
5号溝
A'
1号道
B
B'
3号溝
C
C
A
A'
B
B'
P.L=605.50m
P.L=605.50m
0
1:40
1m

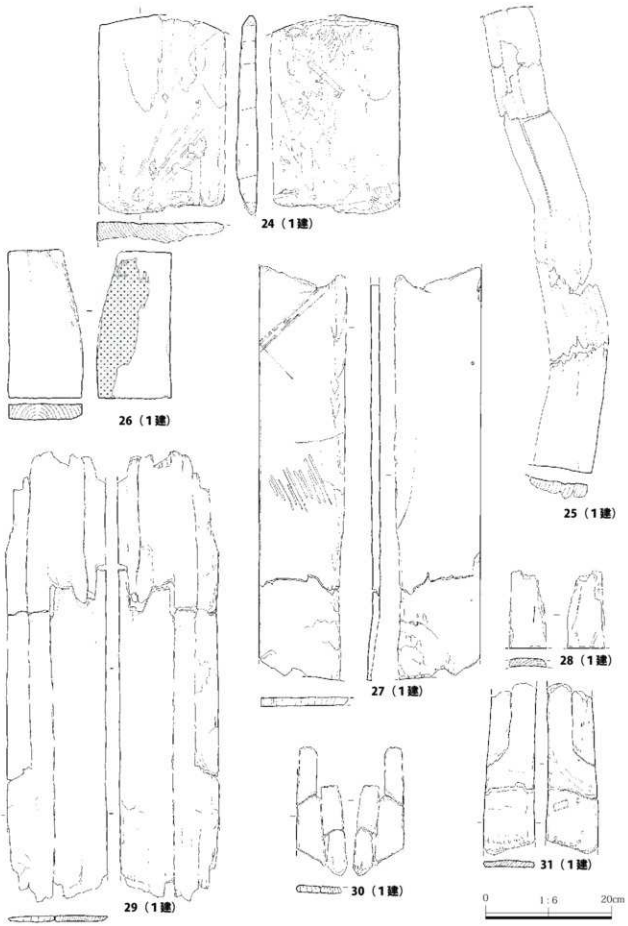
# 陶磁器実測図


1（1建）
2（遺構外）
3（遺構外）
4（遺構外）
5（1建）
6（1建竈）
7（1建）
8（遺構外）
9（遺構外）
10（遺構外）
11（1建）
13（1炉）
12（1建）
15（遺構外）
14（1井戸）
16（1建）
17（1建）
18（1建）
19（1建 囲炉裏）
0
1：3
10cm
20（1建）
0
1：1
2cm

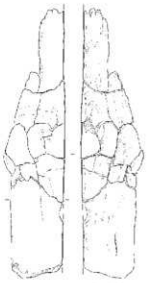


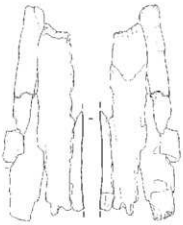

21~23　囲炉裏枠 復原図

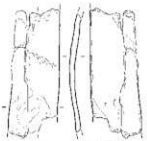
# 建築部材実測図 2（板材①）



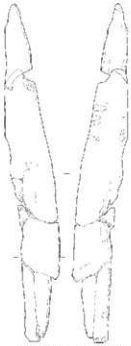
# 建築部材実測図 3（板材②）

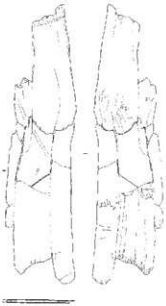

32（1建）

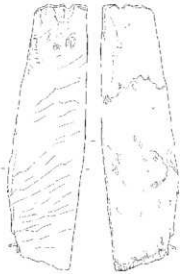

33（1建）

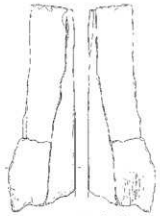

34（1建）

35（1建）


36（1建）


37（1建）


38（井戸）


39（1建）

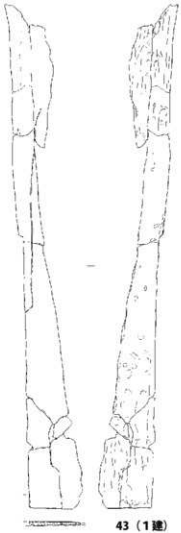
40（1建）

41（1建）

42（1建）

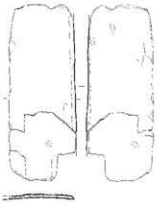
0　1:6　20cm

# 建築部材実測図 4（板材③）

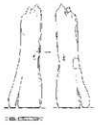


43（1建）

44（1建）



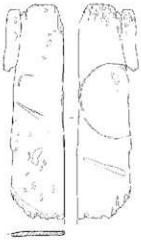
45（1建）



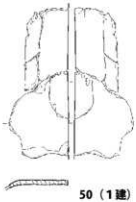
46（1建）

47（1建）

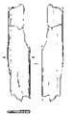
48（1建）



49（1建）

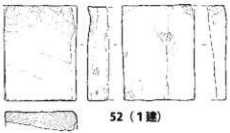


50（1建）

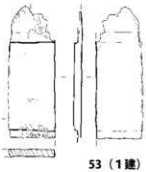


51（1建 囲炉裏）

0 1:6 20cm

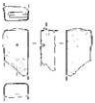


52（1建）

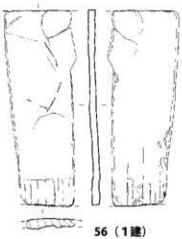


53（1建）

54（1井戸）

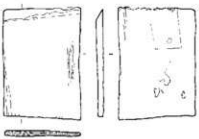


55（1建）

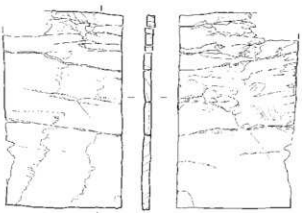


56（1建）

57（1建）



58（1建）



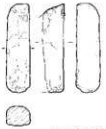
59（1建）

0　1：6　20cm

# 建築部材実測図 6（角材・柱材）

60（1井戸）

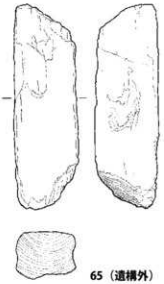
61（5溝）



62（1建）

63（4溝）

64（1建）

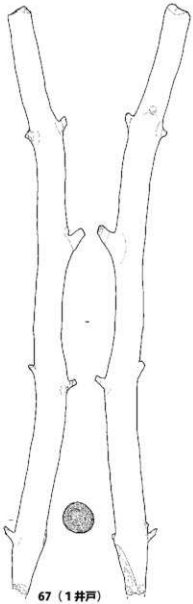


65（遺構外）

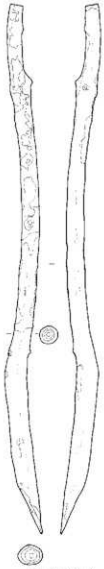
66（1建）

0　1:6　20cm

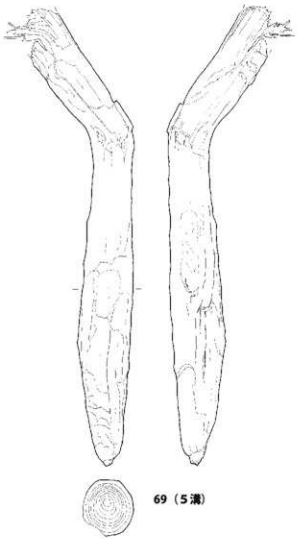
木製部材実測図 1（杭①）



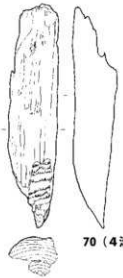
67（1井戸）



68（1井戸）



69（5溝）



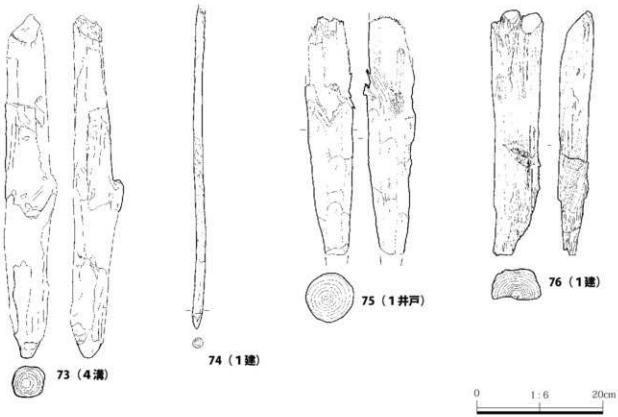
70（4溝）

71（1遺）

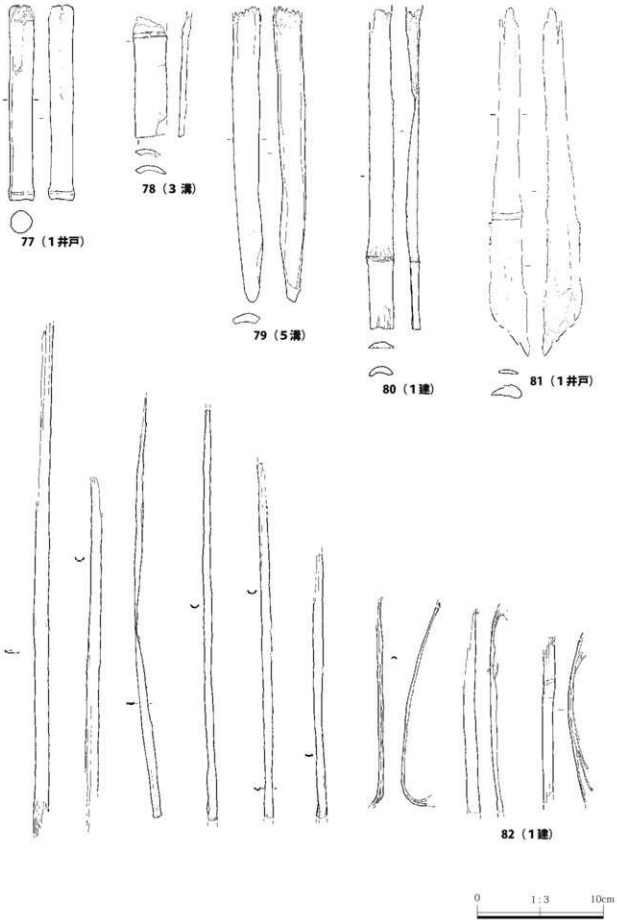
72（1遺）

0　1：6　20cm

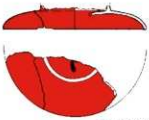
# 木製部材実測図２（杭②）



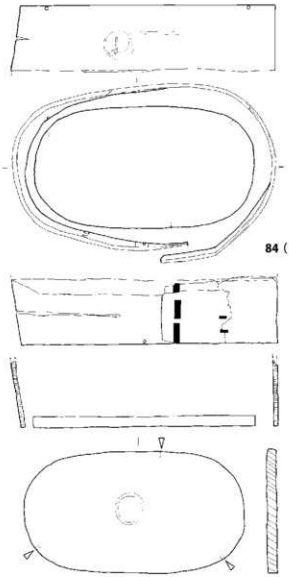
# 木製部材実測図３（竹材）



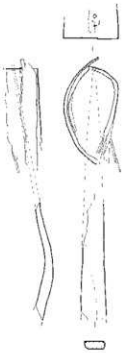
# 木製品実測図１（漆器・曲物①）



83（1建）



84（1井戸）

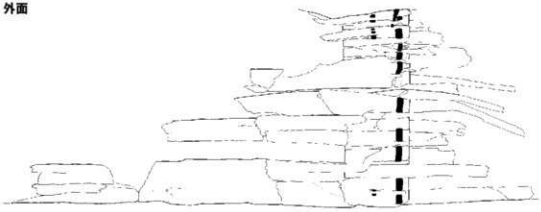


85（1建 囲炉裏）

0　1：3　10cm

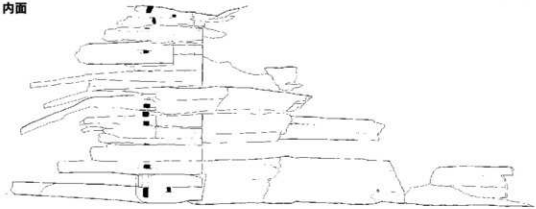
木製品実測図２（曲物②）

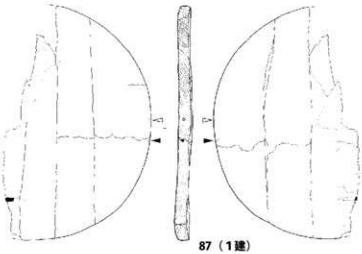
外面



86（1連）

内面



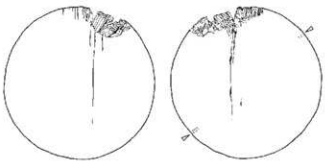


87（1連）

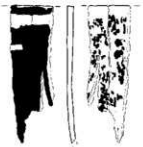
88（1連）

0　1:4　10cm

# 木製品実測図３（曲物③・膳①）

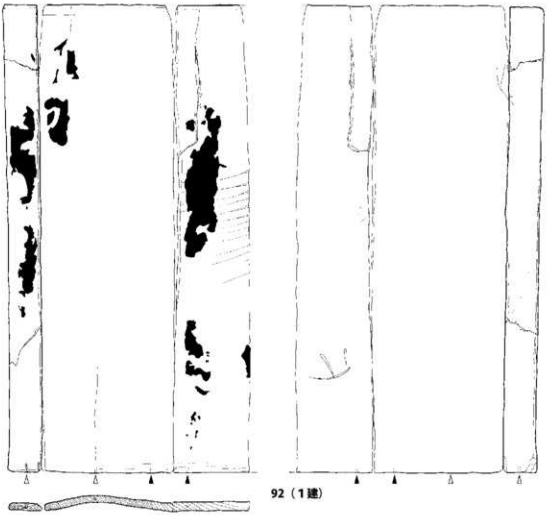


89（1建）



90（1建）

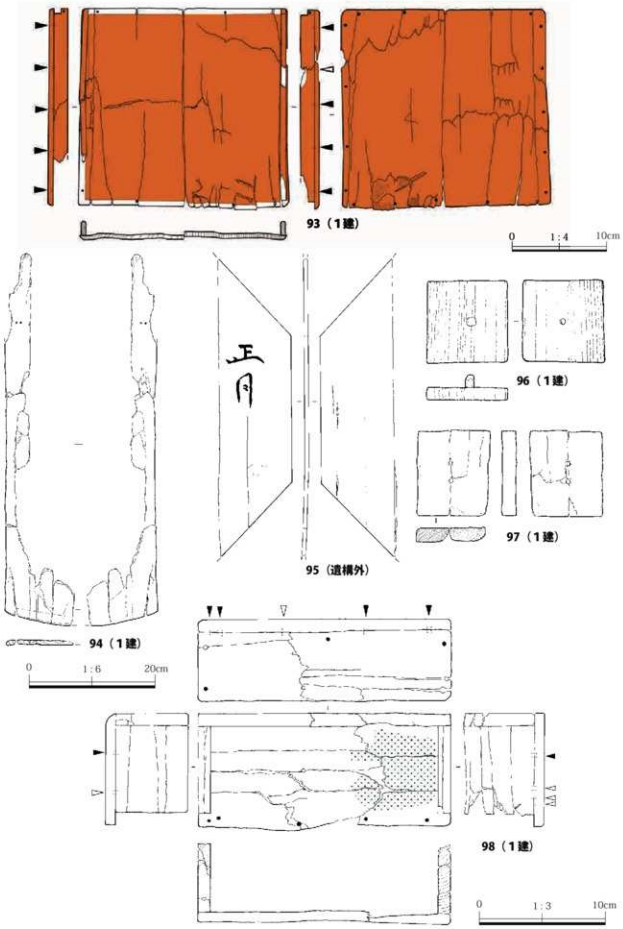
91（1建）



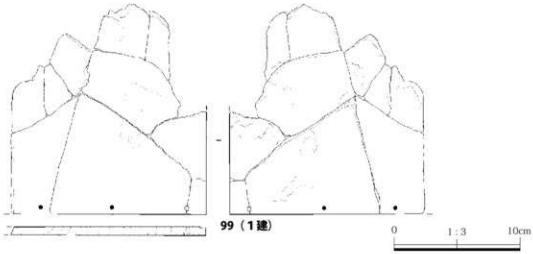
92（1建）

0　1：3　10cm

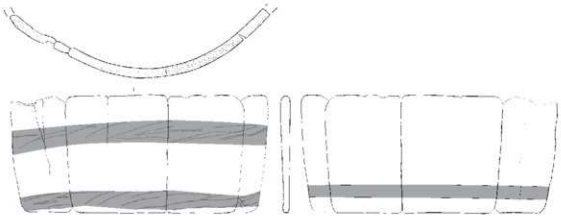
木製品実測図４（膳②・箱物①）



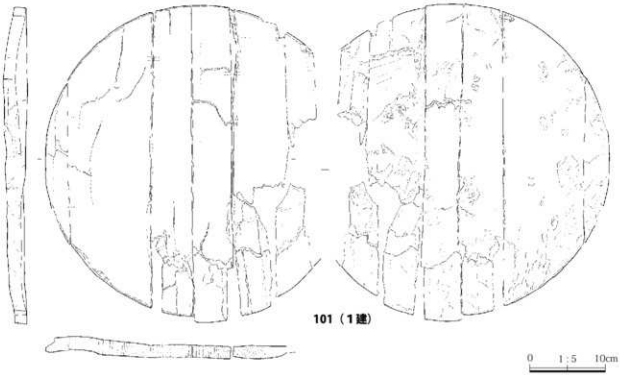
木製品実測図５（箱物②・桶①）




99（１建）

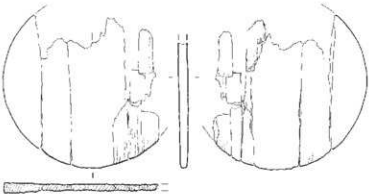


100（１井戸）

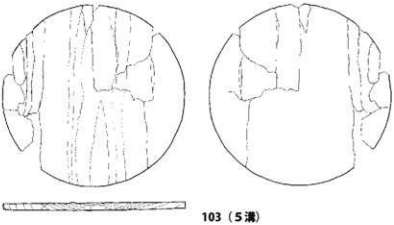



101（１建）

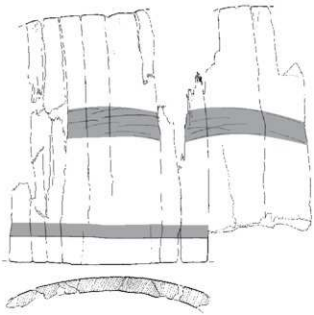
木製品実測図６（桶②）



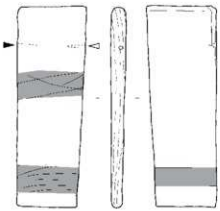
102（１建）



103（５溝）



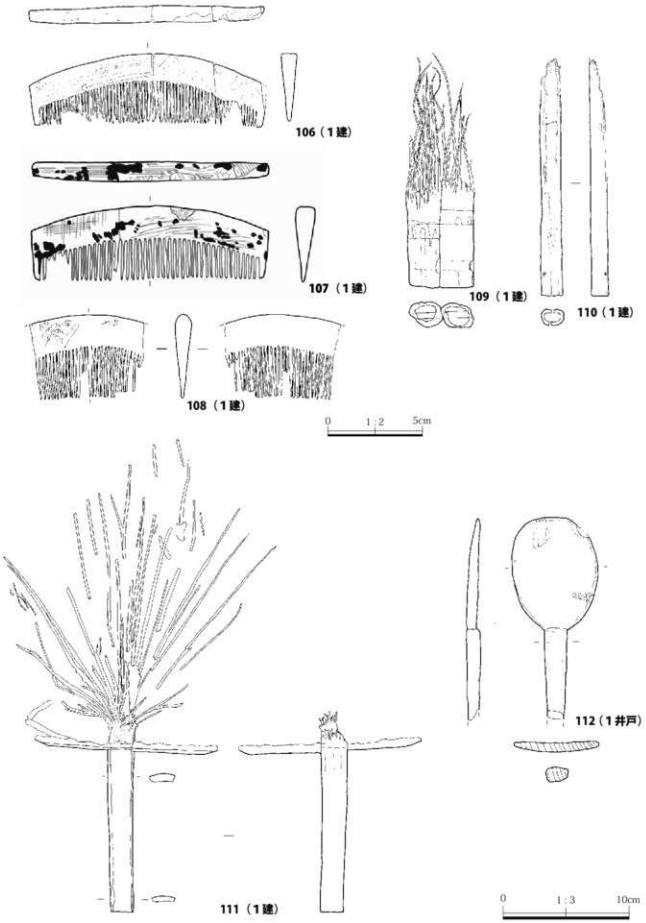
104（１建）



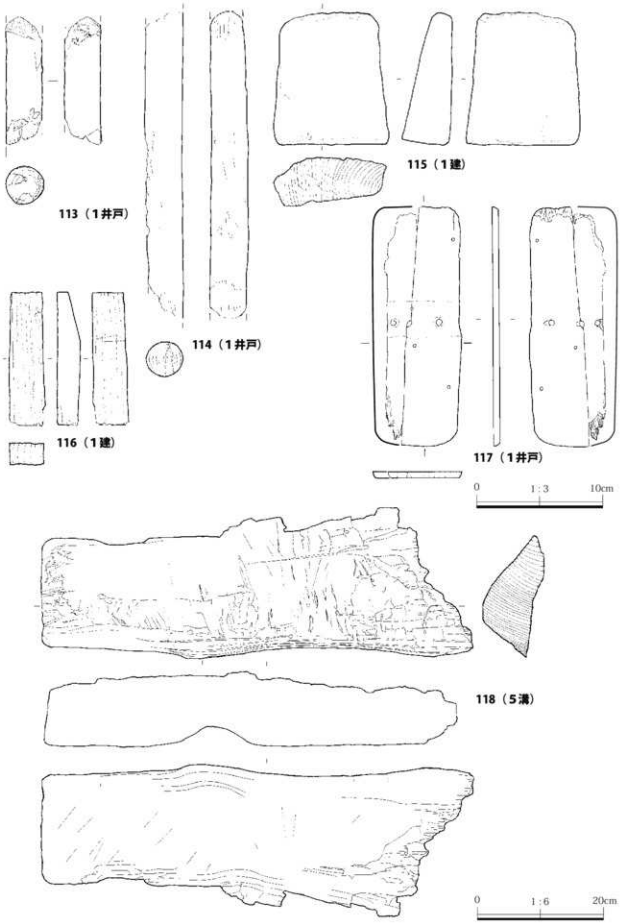
105（１井戸）

0　1：3　10cm

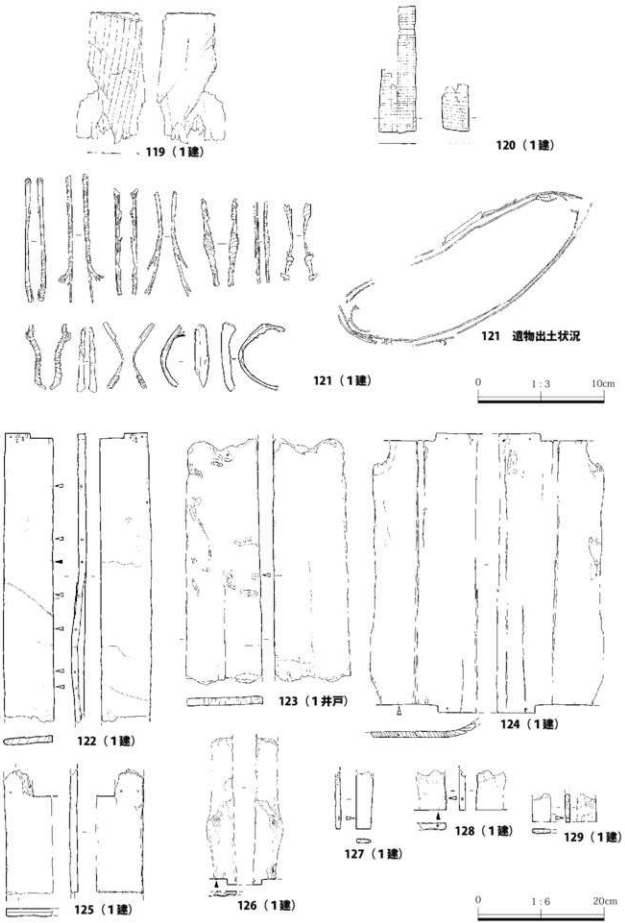
# 木製品実測図７（道具類①）



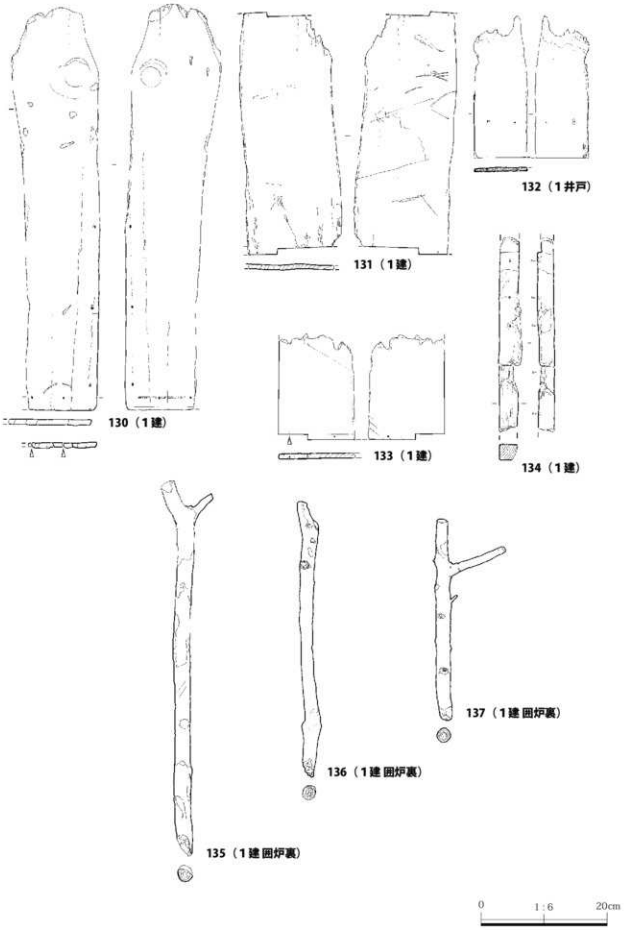
木製品実測図８（道具類②）



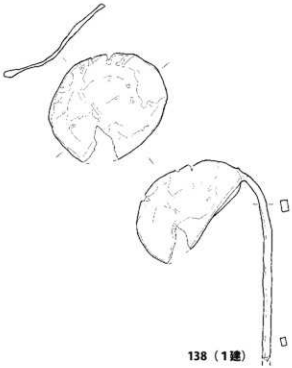
# 木製品実測図９（道具類③・板材①）



木製品実測図 10（板材②・角材・燃料材）



# 金属製品実測図 1

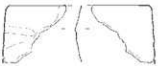


138（1建）

139（1建）

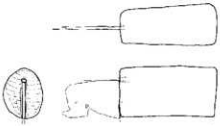
140（1建）

141（1建竈）



142（1建）

143（1建）

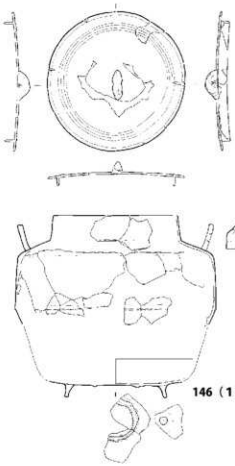


144（1井戸）

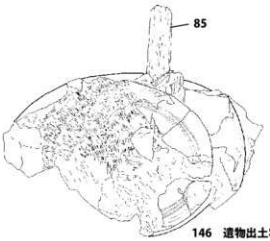
0 1:3 10cm

145（1建囲炉裏）

0 1:2 5cm



146（１建 囲炉裏）




146　遺物出土状況

147（１建 囲炉裏）

148（１建 囲炉裏）

149（１建 囲炉裏）

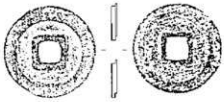
0　1：4　10cm

150（１建）

151（１建 囲炉裏）

152（１建）

153（１建）

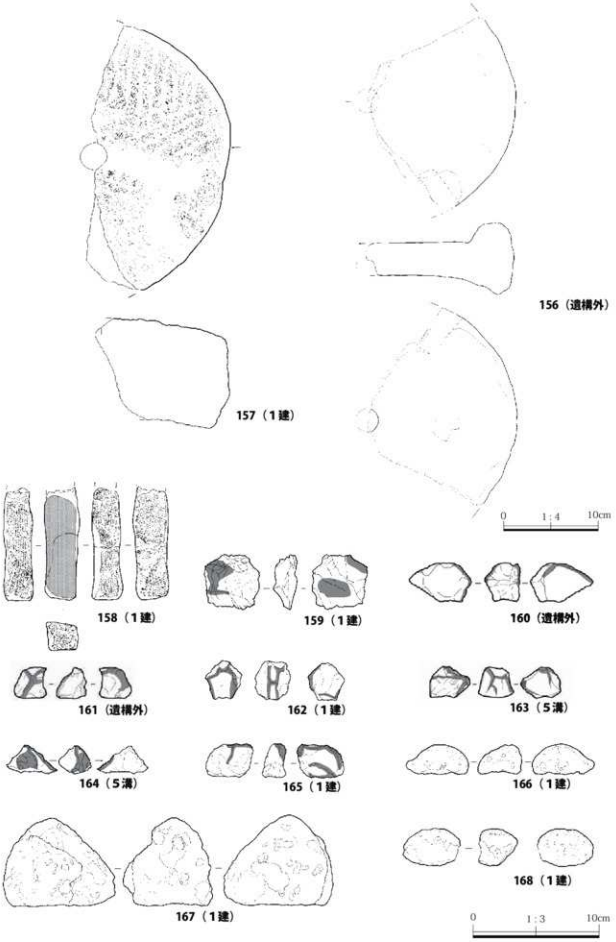


154（遺構外）

155（遺構外）

0　1：1　2cm

# 石製品実測図


156（遺構外）
157（1建）
0 1:4 10cm
158（1建）
159（1建）
160（遺構外）
161（遺構外）
162（1建）
163（5溝）
164（5溝）
165（1建）
166（1建）
167（1建）
168（1建）
0 1:3 10cm

１．向原遺跡Ⅲ①地点（南西から）

２．掘り込み検出状況（北東から）

３．土層（南東から）

４．②地点（北西から）

５．作業風景（北西から）

図版 54　　試掘確認調査２（向原遺跡Ⅲ・長野原字向原）

1．③地点（東から）

2．２トレ（南東から）

3．長野原字向原（南東から）

4．１トレ（南東から）

5．２トレ（南東から）

1．町遺跡１トレ（北から）

2．１トレ土層（東から）

3．２トレ（南東から）

4．２トレ土層（南から）

5．調査前風景（北から）

－調査区１－

1．第１次調査南側調査区全景（北から）

2．第１次調査北側調査区全景（北から）

1．第３次調査調査区全景（南から）

2．基本土層（南西から）

# －１号礎石建物跡１－

1．１号礎石建物跡第１次調査＜ザシキ＞完掘状況（南から）

2．１号礎石建物跡＜ザシキ＞遺物出土状況１面目①（西から）

1．１号礎石建物跡＜ザシキ＞遺物出土状況１面目②（南から）

2．１号礎石建物跡＜ザシキ＞遺物出土状況２面目（南から）

－１号礎石建物跡３－

1. １号礎石建物跡＜ザシキ＞遺物出土状況３面目（南から）

2. １号礎石建物跡＜ザシキ＞遺物出土状況４面目（南から）

1．１号礎石建物跡第３次調査＜ダイドコロ＞（西から）

2．１号礎石建物跡＜ダイドコロ＞遺物出土状況（西から）

# －１号礎石建物跡５－

１．囲炉裏完掘状況（南西から）

２．囲炉裏遺物出土状況（南西から）

３．囲炉裏半截状況（南西から）

４．囲炉裏掘り方（南西から）

５．竈検出状況①（西から）

６．竈検出状況②（西から）

７．竈南側断ち割り状況①（東から）

８．竈南側断ち割り状況②（東から）

1．竈北側断ち割り状況①（東から）

2．竈北側断ち割り状況②（東から）

3．竈東西断ち割り状況（北から）

4．竈火床検出状況（北から）

5．竈掘り方（北から）

6．南側階段状テラス①（西から）

7．南側階段状テラス②（北東から）

8．南側階段状テラス土台検出状況（南東から）

1．遺物出土状況①＜瀬戸美濃系碗（図版 30- 1）＞

2．遺物出土状況②＜肥前染付碗（図版 30-7）＞

3．遺物出土状況③＜獅子人形（図版 30-20）＞

4．遺物出土状況④＜漆器蓋（図版 40-83）＞

5．遺物出土状況⑤＜束・曲物(図版 36-66・41-86・41-87)＞

6．遺物出土状況⑥＜臍（図版 42－90）＞

7．遺物出土状況⑦＜臍（図版 43-93）＞

8．遺物出土状況⑧＜桶底（図版 44-101）＞

1．遺物出土状況⑨＜横櫛（図版 46-106）＞

2．遺物出土状況⑩＜横櫛（図版 46-107）＞

3．遺物出土状況⑪＜横櫛（図版 46-108）＞

4．遺物出土状況⑫＜団扇（図版 46-111）＞

5．遺物出土状況⑬＜タガ（図版 39-82）＞

6．遺物出土状況⑭＜竹籠（図版 48-121）＞

7．遺物出土状況⑮＜銭貨（図版 51-151）＞

8．遺物出土状況⑯＜石臼（図版 52-157）＞

1．遺物出土状況⑰＜砥石（図版 52-158）＞

2．遺物出土状況⑱＜みの？№ 206 ＞

3．遺物出土状況⑲＜むしろ№ 93 付近＞

4．遺物出土状況⑳＜布№ 298 ＞

5．遺物出土状況㉑＜縄№ 365 ＞

6．遺物出土状況㉒＜繊維№ 378 ＞

7．遺物出土状況㉓＜スギ葉№ 159 の下＞

1．遺物出土状況㉘<クリ皮>

2．遺物出土状況㉙<昆虫№ 291 の下>

3．作業風景

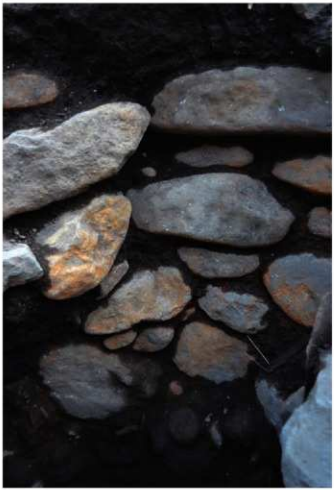
4．事業団小野氏・関氏来跡

5．1号井戸（北東から）

# －１号井戸跡２－

1．1号井戸周辺（南から）

2．1号井戸検出状況（南から）



3．1号井戸石積状況（南から）

4．遺物出土状況①＜肥前染付皿（図版 30-14）＞

5．遺物出土状況②＜メンパ（図版 40-84）＞

6．遺物出土状況③＜擂粉木（図版 47-114）＞

7．遺物出土状況④＜角材（図版 36-60）＞

1．１号炉跡完掘状況①（南西から）

2．１号炉跡完掘状況②（南西から）

3．１号炉跡完掘状況③（北東から）

4．１号炉跡火床部①（北から）

5．１号炉跡火床部②（南東から）

## －１号炉跡２－

1．１号炉跡検出状況（南西から）

2．１号炉跡断ち割り状況（西から）

3．１号炉跡サブトレ南（東から）

4．１号炉跡サブトレ北①（西から）

5．１号炉跡サブトレ北②・西①（南西から）

6．１号炉跡サブトレ西②（東から）

7．１号炉跡サブトレ東（南から）

8．１号炉跡火床部セクション（西から）

1．1-1 号畑跡北側①・2 号溝跡・6 号溝跡（西から）

2．1-1 号畑跡北側②（南から）

3．1-1 号平坦面（南から）

4．木材痕検出状況（西から）

# ― 1 号畑跡 2 ―

1．1-1 号畑跡南側（西から）

2．1-2 号畑跡（西から）

1．2-1 号畑跡①（西から）

2．2-1 号畑跡②（南から）

3．2-1 号平坦面（南から）

4．2-1 号平坦面検出状況（南から）

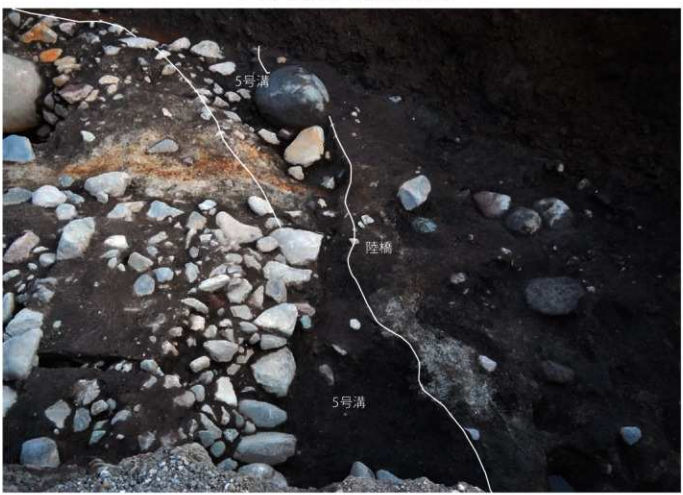
5．1 号土坑（西から）

# ―溝状遺構１―

1．１号溝跡（西から）

2．2号・3号・6号溝跡（西から）

１．４号・５号溝跡・１号道跡（西から）




２．５号溝跡・陸橋＜第３次調査＞（南西から）

# ―溝状遺構３―

1．５号溝跡・陸橋（東から）

2．５号溝跡北東隅（南から）

3．遺物出土状況①＜杭（図版 37-69）＞

4．遺物出土状況②＜桶底（図版 45-103）＞

5．遺物出土状況③＜火打石（図版 52-163・164）＞

6．遺物出土状況④＜布（№ 304-1）＞

7．遺物出土状況⑤＜草（№ 304-2）＞

8．遺物出土状況⑥＜モモ核（№ 283）＞

# ―溝状遺構４・トレンチ・調査風景―

1．７号溝跡（南から）

2．第１次調査南側調査区トレンチ（北から）

3．堆積土層（西から）

4．測量風景（南東から）

5．作業風景（南から）

出土遺物 1（陶磁器）

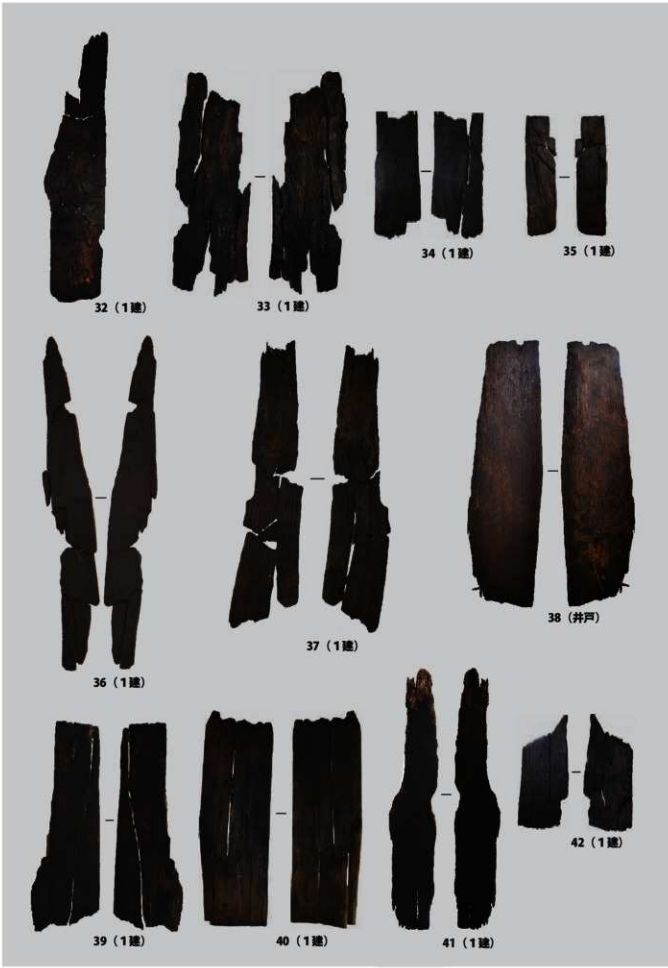
1（1建）
2（遺構外）
3（遺構外）
4（遺構外）
5（1建）
6（1建竈）
7（1建）
8（遺構外）
9（遺構外）
10（遺構外）
11（1建）
12（1建）
13（1炉）
14（1井戸）
15（遺構外）
16（1建）
17（1建）
18（1建）
19（1建囲炉裏）
20（1建）

21（1 建 囲炉裏）

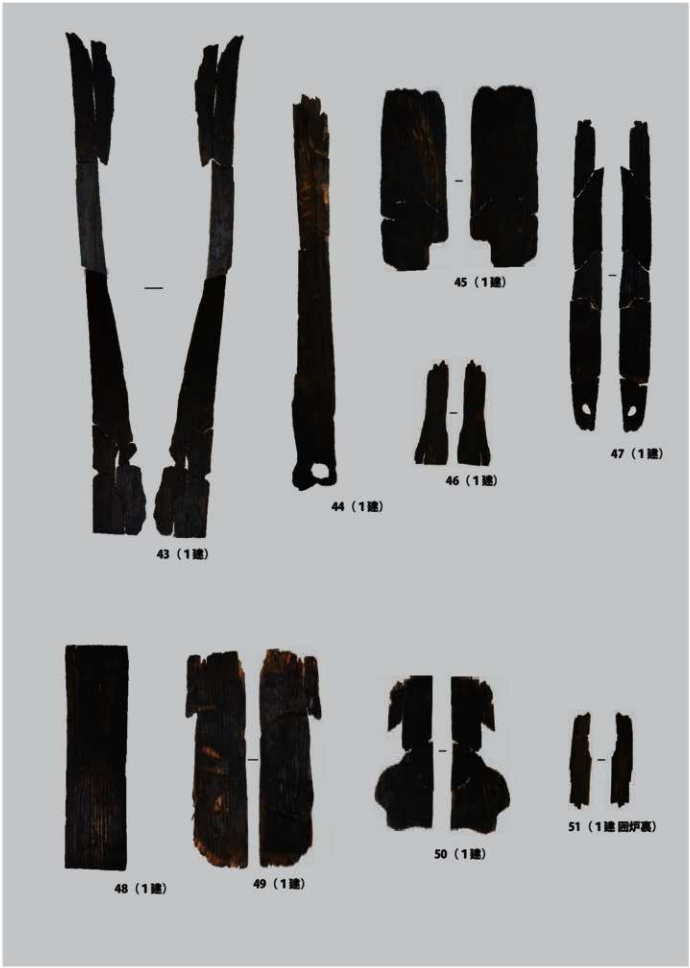
22（1 建 囲炉裏）

23（1 建 囲炉裏）

出土遺物３（建築部材２＜板材①＞）


32（1縮）
33（1縮）
34（1縮）
35（1縮）
36（1縮）
37（1縮）
38（井戸）
39（1縮）
40（1縮）
41（1縮）
42（1縮）

出土遺物５（建築部材４＜板材③＞）



52（1建）

53（1建）

54（1井戸）

55（1建）

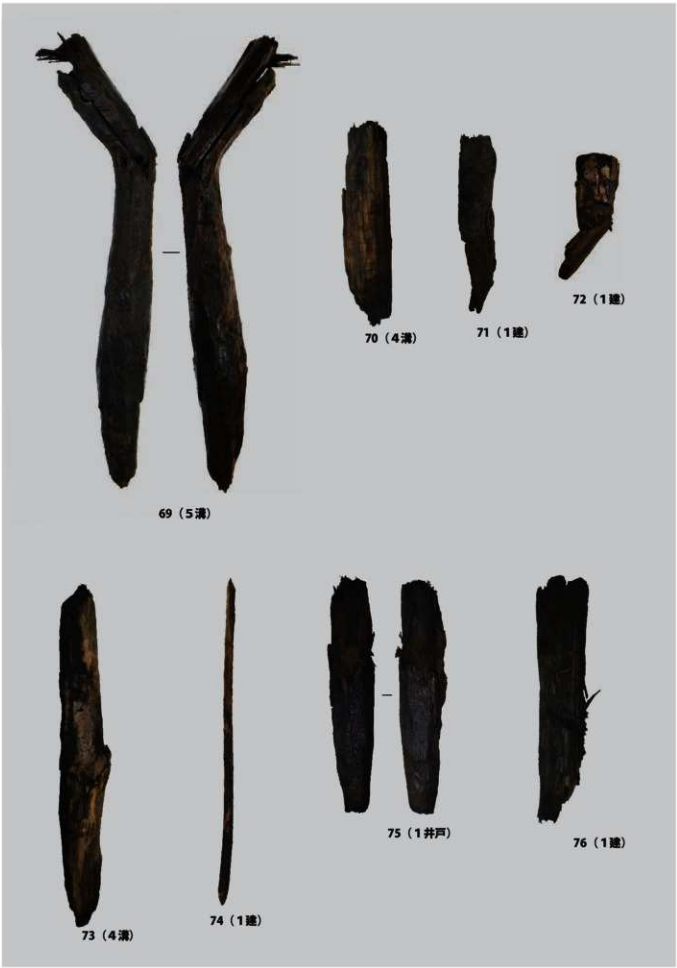
56（1建）

57（1建）

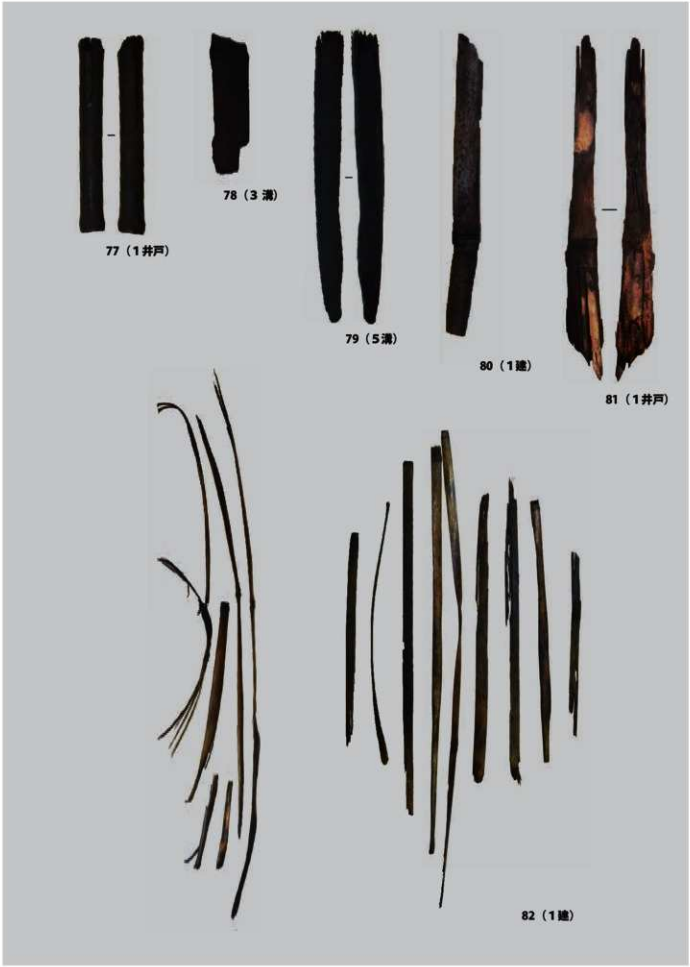
58（1建）

59（1建）

図版 84　出土遺物 7（建築部材 6 <角材・柱材>・木製部材 1 <杭①>）


69（5溝）
70（4溝）
71（1建）
72（1建）
73（4溝）
74（1建）
75（1井戸）
76（1建）

出土遺物９（木製部材３＜竹材＞）



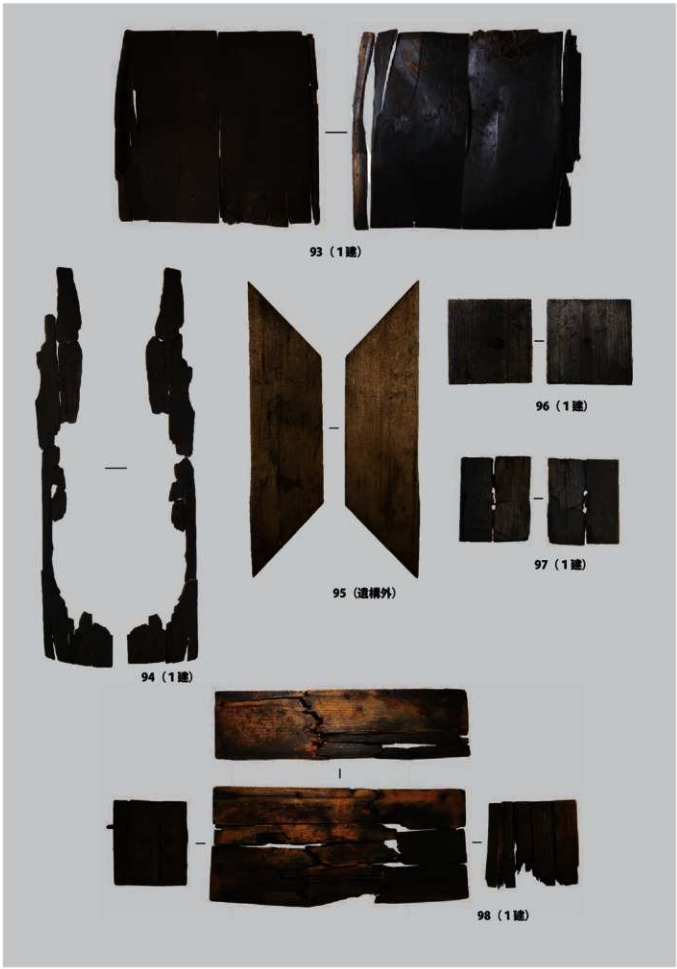
83（1建）
85（1建囲炉裏）
84（1井戸）
86（1建）
87（1建）
88（1建）

89（1縮）

90（1縮）

91（1縮）

92（1縮）

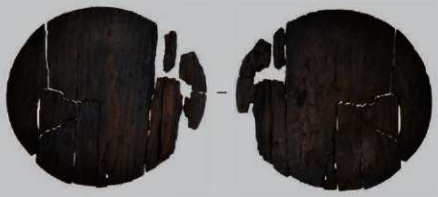

93（1建）
94（1建）
95（遺構外）
96（1建）
97（1建）
98（1建）

99（1遺）

100（1井戸）

101（1遺）

102（1建）



103（5溝）

104（1建）

105（1井戸）

# 出土遺物 15（木製品 6 <道具類①>）

106（1總）

107（1總）

108（1總）

109（1總）

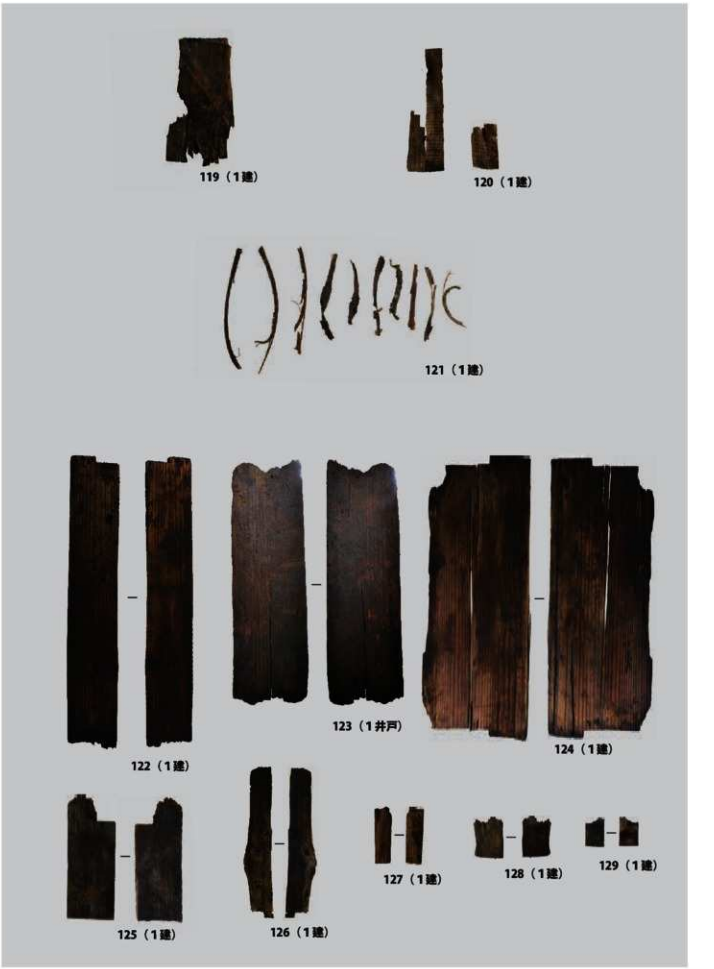
110（1總）

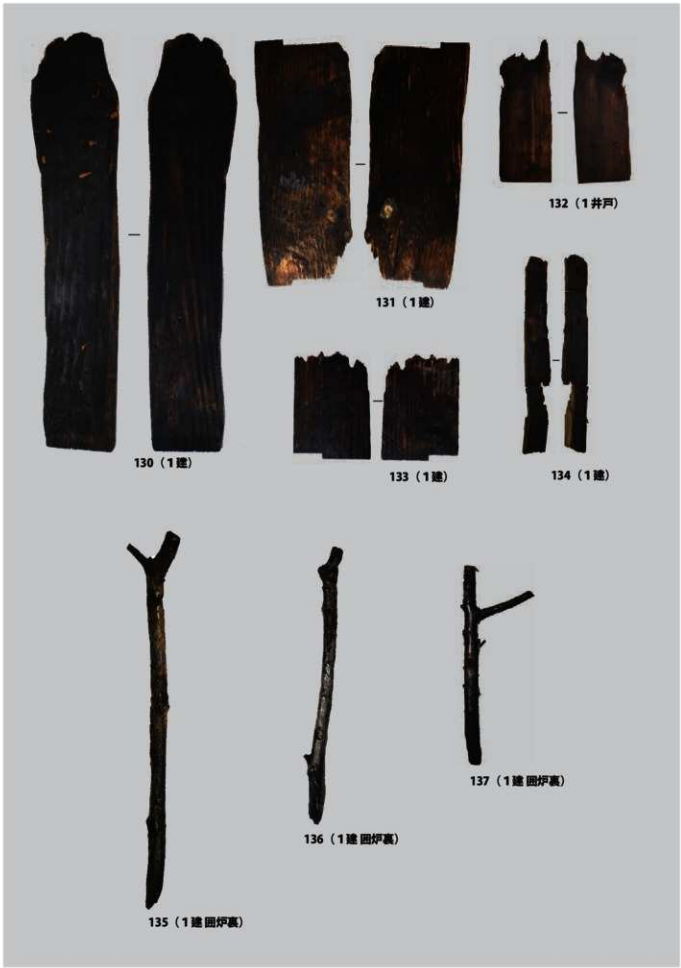
111（1總）

112（1井戸）

113（1井戸）
114（1井戸）
115（1遺）
116（1遺）
117（1井戸）
118（5溝）

図版 94　出土遺物 17（木製品８＜道具類③＞・木製品部材１＜板材①＞）




130（1建）
131（1建）
132（1井戸）
133（1建）
134（1建）
135（1建 囲炉裏）
136（1建 囲炉裏）
137（1建 囲炉裏）

138（1建）

139（1建）

140（1建）

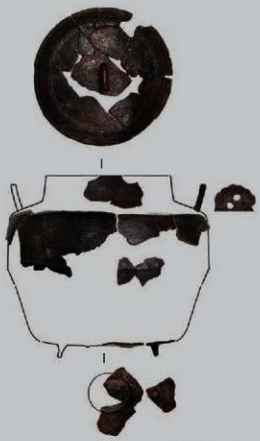
141（1建竈）

142（1建）

143（1建）

144（1井戸）

145（1建 囲炉裏）



146（1建 囲炉裏）

146　遺物出土状況

147（1建 囲炉裏）　148（1建 囲炉裏）

149（1建 囲炉裏）

150（1建）

151（1建 囲炉裏）

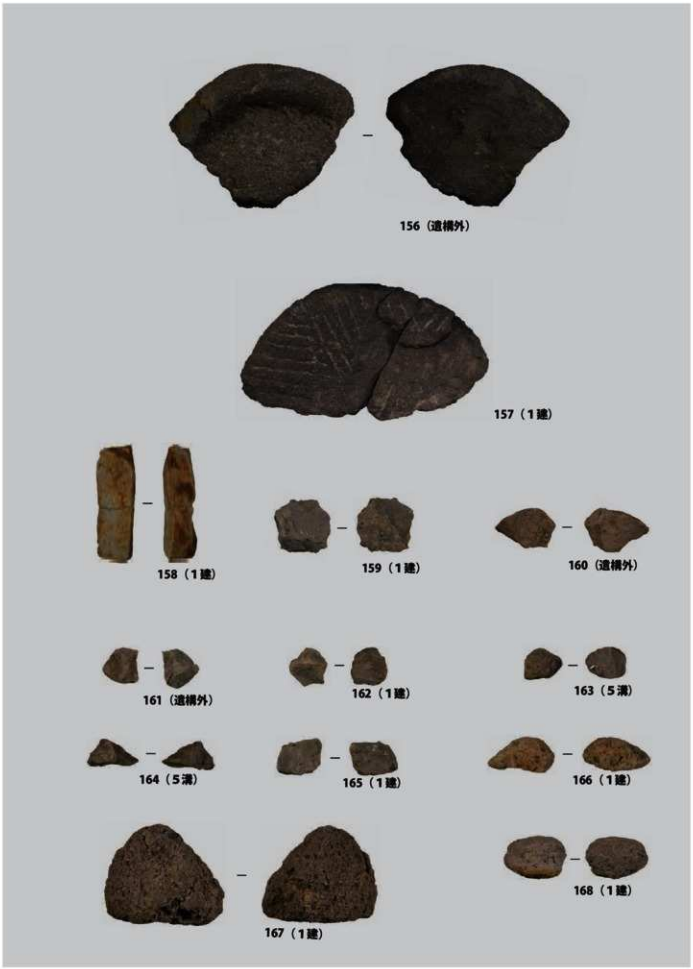
152（1建）

153（1建）

154（遺構外）

155（遺構外）

# 出土遺物 21（石製品）


156（遺構外）
157（1建）
158（1建）
159（1建）
160（遺構外）
161（遺構外）
162（1建）
163（5溝）
164（5溝）
165（1建）
166（1建）
167（1建）
168（1建）

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | ながのはらちくいせきぐん |
| 書　　名 | 長野原地区遺跡群 |
| 副 書 名 | 水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻　　次 | 第２集 |
| シ リ ー ズ 名 | 長野原町埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 第36集 |
| 編 著 者 名 | 富田孝彦・細川剛史 |
| 編 集 機 関 | 長野原町教育委員会 |
| 所　在　地 | 〒377-1392　群馬県吾妻郡長野原町大字長野原 1340-1　℡ 0279-82-4517 |
| 発 行 年 月 日 | 西暦 2019 年３月 28 日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | 所　在　地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北　緯<br>(世界測地系) | 東　経<br>(世界測地系) | 調査期間 | 調査面積<br>(㎡) | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| まちいせき<br>町遺跡 | 群馬県吾妻郡長野原町大字長野原 | 10424 | | 363104 | 1383642 | 20131007<br>～<br>20131112<br>20161112<br>～<br>20161214 | 150 | 町道長野原向原線道路整備事業 |

| 所収遺跡名 | 種　別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 町遺跡 | 集落跡 | 江戸時代 | 礎石建物跡　１軒<br>井戸跡　１基<br>屋外炉跡　１基<br>畑跡　３枚<br>土坑　１基<br>溝状遺構　７条<br>道路状遺構　１条 | 木製遺物（建築部材・木製品）、陶磁器、金属製遺物、石製遺物 | 天明泥流に被災した旧長野原宿の一部を検出。 |

| | |
|---|---|
| 要　　約 | 本遺跡は吾妻川の右岸段丘上に立地する。調査地点の標高は 605m 位である。天明３年（1783）に浅間火山の大爆発により発生した泥流に埋没した旧長野原宿である。調査面積は 150㎡と狭小ではあったが、礎石建物跡１軒、井戸跡１基、屋外炉跡１基、畑跡（単位畑）２枚、土坑１基、溝状遺構７条、道路状遺構１条を検出した。調査地点は宿場のほぼ中央に位置し、建物は旅籠大津屋の一部と考えられる。即ち街道に面した旅籠とその裏庭の一部が検出され、裏庭は東隣の金木屋と共同で使用した井戸、区画溝、道、畑、屋外炉で構成されていたことが明らかとなった。出土遺物は陶磁器、木製遺物（木製部材・木製品・その他）、金属製品（鉄製品・銅製品）、石製品に大きく分類でき、木製遺物がその大部分を占めた。長野原宿は有名な鎌原村に次ぐ 200 名の犠牲者を出したことはあまり知られていないが、壊滅的な被害の一端を垣間見る貴重な調査であった。 |

長野原地区遺跡群
――水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　第２集――
平成31年３月25日　印刷
平成31年３月28日　発行
発行　群馬県吾妻郡長野原町教育委員会
〒377-1392　群馬県吾妻郡長野原町大字長野原1340-1
TEL 0279（82）4517　FAX 0279（82）3115
印刷　朝日印刷工業株式会社